

## は し が き

〈民俗芸能の宝庫〉といわれる岩手県では、人々は歌い踊ることが好きである。盛岡では8月の2日から4日までの3日間、東北五大祭りとさえ言われるようになってきた「さんさ踊り」のパレードが挙行される。太鼓のリズム合わせて夢中に舞い、歯切れ良く奏でる笛の音に合わせて、人々は夏の夜空を優雅かつパワフルな乱舞で飾る。

岩手県の人々は、どうしてこんなに歌い踊るのだろうか。現代社会における多様な音楽文化は、この東北の都市にもしっかりと伝わっているが、今なお昔からの歌や踊りが地域ごとに宝のように大切に伝承されている。民俗芸能研究者の星野紘は、人が唄い踊るのは「面白いからだ」という（『人はなぜ唄い踊るのか』勉誠出版、4頁）。しかし激しい百姓一揆の歴史をもつ岩手県では、面白いという言葉ですまされない人々の切実な願いが地域の民俗芸能に内包されているような気がしてならない。北海道小樽出身の東京在住者で岩手県勤務の筆者にとって、祭りや行事や宗教的な儀式などと結びつきながら、今なお息づいている民俗芸能とそれを精神的な糧として生きる人々の心の有り様を知りたいというのが岩手の民俗芸能研究の出発点であった。

平成14年の新学習指導要領音楽編では、小・中学校共に日本音楽が重視される傾向が見られるようになり、また総合的な学習の時間が創設され、全国的に地域の伝統芸能への関心が注がれるようになった。岩手県では、総合的な学習の時間が創設される以前から、長年、地域を母胎とする民俗芸能の伝承活動が盛んに行われてきている。しかし芸能の盛んな岩手県でさえ、さすがに少子化、過疎化、そして生活の都市化の中で、近年、民俗芸能の伝承者育成に陰りが見られるようになってきている。民俗芸能を通して、地元の文化を継承する子供を育てるといった地域の教育力は次第にその本来の機能を弱め、その結果、民俗芸能の伝承に学校が参画するようになり、学校の役割がクローズアップされるようになってきた。民俗芸能の伝承に学校がかかわることは必至の状況ではあるが、学校の関与が伝承への何らかの影響をもたらすこともまた事実である。

民俗芸能に関するいくつかの問題意識をもちながら、本研究では、主に岩手県の沿岸地域と県北で伝承されている「七つ物」に焦点をおき、民俗芸能と学校教育のかかわりに関する基礎的研究および実践的研究の両者を手がけた。

民俗芸能は、基本の形を尊重しながらも各時代の篩にかけられながら、伝承する人々の手によって、常に新しい生命を吹き込まれて変容するものである。優れた舞い手の誕生は、踊りを一変させるであろうし、中断していた民俗芸能が復活しても、全く昔と同じにはなり得ない。そもそも民俗芸能は、その時代の人々の手によって常に自分たちの呼吸にあった心地よい芸能に変化・成長させながら、次の世代へと伝承していくものである。それ故に、どんなに時代を経ても、現存する民俗芸能自体のエネルギーが弱まることはない。この視点に立つならば、純粋な伝統の継承だけではなく、民俗芸能の音楽的な要素をもとにした創造的な音楽づくり活動の追究も無謀な試みではなく、むしろ民俗芸能の展望を拓く新たな試みの一つとなることを確信している。

## 研究課題名および課題番号

「岩手県の民俗芸能と学校教育～中野七頭舞と剣舞を中心に～」(課題番号: 15530561)

## 研究組織

研究代表者 島崎 篤子

## 研究経費

平成 15 年度	700 千円
平成 16 年度	700 千円
平成 17 年度	500 千円
計	1,900 千円

## 研究発表

### 1. 論文

#### (1) 島崎篤子 「楽器を音の素材として」

CD-ROM 版音楽科教育実践講座刊行会編『SERENO CD-ROM 版音楽科教育実践講座 理論編  
1』株式会社ニチブン、pp.276-283. 2004 年

#### (2) 島崎篤子 「音楽科と総合的な学習とのかかわり」

CD-ROM 版音楽科教育実践講座刊行会編『SERENO CD-ROM 版音楽科教育実践講座 理論編  
2』株式会社ニチブン、pp.228-236. 2004 年

#### (3) 島崎篤子 「アジアを中心とした諸民族の音楽の教材化の意味と方法」

『ONKAN 音楽鑑賞教育』音楽鑑賞教育振興会、pp.23-27. 2005 年

#### (4) 島崎篤子 「創造的音楽学習」

河口道朗監修『音楽教育史論叢 第三巻(下)』開成出版、pp.609-630.、2005 年

#### (5) 島崎篤子 「大学における民俗芸能の継承と発展～岩手県岩泉町の中里七ツ舞に関する教育実践～」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第 5 号』、pp.39-51. 2006 年

### 2. 口頭発表

島崎篤子 「大学における民俗芸能の継承と発展～岩手県岩泉町の中里七ツ舞に関する教育実践～」日本民俗音楽学会第 19 回神戸大会(2005 年 11 月 13 日)、大会プログラム、p. 8.  
(会場: 神戸大学発達科学部音楽棟)

## 目 次

はしがき	1
目 次	3
I. 研究の概要	7
1. 研究の目的	8
2. 研究の意義	9
3. 研究経過と研究方法	10
II. 研究内容	11
1. 民俗芸能の分類と「七つ物」	12
1. 民俗芸能の用語	12
2. 民俗芸能の分類	13
(1) 本田安次の分類	
(2) 西角井正大の分類	
3. 岩手県の芸能と「七つ物」	14
(1) 岩手県の芸能	
(2) 岩手県の「七つ物」	
(3) 「七つ物」と神楽や剣舞	
2. 岩手県の学校教育における民俗芸能と「七つ物」	18
1. 岩手県の学校教育で取り上げている民俗芸能	18
2. 岩手県の学校教育における「七つ物」	23
3. 宮古市立亀岳中学校の田代神楽（田代七ツ踊）	28
3. 黒森神楽と「七つ物」	31
1. 陸中沿岸地域の廻り神楽	31
2. 黒森神楽	32
(1) 黒森神楽の由来	
(2) 黒森神楽の儀礼とシットギ獅子	
(3) 御堂入りと「七つ物」	

4. 小本小学校と四つの「七つ物」	38
1. 小本地区と「七つ物」	38
2. 小本小学校で伝承している「七つ物」	39
(1) 中野七頭舞	
(2) 中里七ツ舞	
(3) 中島七ツ舞	
(4) 大牛内七ツ舞（大牛内分校）	
3. 七頭舞・七ツ舞の役割と踊りの意味	41
(1) 道具と役割	
(2) それぞれの舞の意味	
4. 小本小学校の取り組み	43
(1) 伝承活動のねらいと練習計画	
(2) 衣装や飾り物	
(3) 小本小学校の教師の取り組み	
(4) 教頭・校長の話	
5. インタビューによる子どもの意識	45
6. アンケートによる教師の意識	47
5. 中野七頭舞とその広がり	51
1. 中野七頭舞の由来と伝承史	51
(1) 中野七頭舞の由来	
(2) 中野七頭舞の復活	
(3) 元小本小学校教諭の千田任男	
(4) 七頭舞発表会の歴史	
2. 中野七頭舞の踊りと音楽	56
(1) 中野七頭舞の踊り～練習用ビデオを中心に	
(2) 中野七頭舞の効率的な練習方法	
3. 中野七頭舞の広がり	61
(1) 小本中学校への広がり	
(2) 国立音楽大学の実践～藤田ゼミの取り組み	
6. 中里七ツ舞に関する基礎的研究	77
1. 中里地区における中里七ツ舞の由来と伝承	78
(1) 中里地区と中里七ツ舞	
(2) 中里七ツ舞の伝承史	



2. 中里七ツ舞の保存会組織と練習	80
(1) 中里七ツ舞の保存会組織	
(2) 保存会や小学校における練習	
3. 中里七ツ舞の構成・道具	82
(1) 中里七ツ舞の6種の舞	
(2) 中里七ツ舞の七つの役割	
4. 中里七ツ舞の音楽	85
7. 中里七ツ舞の岩手大学への継承	94
1. 中里七ツ舞の伝統継承型の実践	94
(1) 第1次伝統継承型実践～体験重視	
(2) 第2次伝統継承型の実践～民俗芸能サークル「ばっけ」による中里七ツ舞の継承	
2. 中里交流会館での合宿	99
3. 中里七ツ舞の伝統継承型実践の難しさと成果	103
8. 創造的な音楽学習への活用～素材発展型の学びの追究～	114
1. 岩手大学における素材発展型の実践	115
2. 宮城教育大学における素材発展型の実践	117
9. 「七つ物」と剣舞	122
1. 「七つ物」と剣舞	122
2. 剣舞系の「七つ物」	123
(1) 霜畑念仏剣舞	
(2) 関念仏剣舞	
(3) 菅窪鹿踊・剣舞（田野畑念仏剣舞）	
(4) 田代念仏剣舞	
(5) 牛伏剣舞（七つ踊り）	
10. 宮古西中学校の歌舞劇における牛伏七つ踊り	128
1. 歌舞劇の歩みと総合的な学習	128
2. 歌舞劇の取り組み	130
3. 牛伏剣舞と牛伏七つ踊り	131
11. 学校教育と民俗芸能～研究を振り返って～	137
1. 本研究の成果	137

2. 岩手県の民俗芸能と学校教育について .....	140
3. これからの民俗芸能の学びに向けて .....	141
 Ⅲ. 発表論文等（再録） .....	142
1. 中里七ツ舞に魅せられて＜研究ノート＞ .....	143
『日本民俗音楽学会会報』第 23 号 2005 年 6 月 30 日発行 pp.5-7.	
2. 大学における民俗芸能の継承と発展 .....	145
～岩手県岩泉町の中里七ツ舞に関する教育実践～	
『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』	
第 5 号 pp.39-51.2006 年	
The Passing Down and Development of Folkloric performing Arts in University	
～ Practical Education about <i>Nakasatonanatsumai</i> in Iwaizumi Village, Iwate Prefecture ～	
 おわりに .....	155

\* その他：映像資料（DVD）は提出分のみ添付。

# I. 研究の概要

1. 研究の目的

2. 研究の意義

3. 研究経過と研究方法

## 1. 研究の目的

本研究課題「岩手県の民俗芸能と学校教育～中野七頭舞と剣舞を中心として～」の研究目的は、第一に多くの岩手県の民俗芸能と学校教育との関連を研究の中核におきながら、岩手県の民俗芸能の中から中野七頭舞に代表される神楽系の「七つ物」に焦点を当てると共に、岩手県の代表的な民俗芸能の剣舞にも、「七つ物」もしくは「七つ物」に匹敵する種類の踊りがないか否かを探求することである。第二に岩手県の民俗芸能における「七つ物」の位置づけとその特徴を明らかにし、かつ本研究に関連する民俗芸能についての基礎的な研究および実践的な研究を行う。そして第三には、本研究を振り返ることによって学校教育に民俗芸能を導入する上で重要と思われる視点を提示することである。

上記の研究目的の基に取り組んだ具体的な研究内容は、以下のとおりである。

- ①複数の民俗芸能の分類法を検討しながら、「七つ物」の位置付けを明確にし、かつ岩手県の学校教育における全般的な民俗芸能の取り組み状況および「七つ物」の取り組み状況を探る。
- ②神楽系の「七つ物」の源流とされている黒森神楽についての基礎研究を行うと共に、中野七頭舞を初めとして、小本小学校がかかわっている四つの「七つ物」基礎研究および伝承の場としての小本小学校の現状を把握する。
- ③小本小学校がかかわっている四つの「七つ物」の中から、特に中野七頭舞と中里七ツ舞の二つの「七つ物」に焦点を当てた基礎的な研究を行う。
- ④筆者がかねてから学校教育における民俗芸能の学び方として主張していた伝統継承型と素材発展型の二つ学びについて、中里七ツ舞を研究対象として実践的な研究を行うことにより両者の学びの特性や必要性を明らかにする。
- ⑤伝統継承型の学びを通して、中里七ツ舞の岩手大学への継承や大学内伝承の可能性を追究する。
- ⑥これまで別の芸能として位置づけられてきた七頭舞（七ツ舞）と剣舞だが、舞に使う道具の一部が共通する地域があり、両者を括る「七つ物」の窓から、研究的に新たな意味を発見する。
- ⑦「七つ物」と学校教育に焦点を当てた本研究を振り返って、学校教育における地域の民俗芸能を取り上げる上で必要と思われる視点を明確にする。

以上が本研究の主な研究内容である。実際には、本研究を進める上で、「七つ物」に限らず岩手県の民俗芸能に関する映像資料を全般的に収集する作業が不可欠であった。本報告書には記載しないが、全体的な民俗芸能研究の中で研究対象の「七つ物」を位置づけることにより、改めて「七つ物」の価値を実感し、その特徴を把握することができたように思われる。

平成 14 年からの新学習指導要領の全面实施によって、小・中学校の音楽教育においては日本音楽が重視される傾向が見られるようになってきた。また総合的な学習の時間の創設に伴い、地域の伝統芸能に対する関心がこれまで以上に高まってきている。

<民俗芸能の宝庫>といわれる岩手県では、こうした学校教育の状況とは無関係に、従来から地域を母胎とする民俗芸能の伝承が盛んに行われてきている。しかしながら民俗芸能を尊重する

岩手県においてさえも、民俗芸能を通じて地域ぐるみで子どもを育てるといった地域の教育力は、都市化や小児化の影響等で次第にその機能を弱めてきているようである。したがって近年では地元の民俗芸能の継承のために学校が果たす役割は、次第に大きくなってきているといえよう。その一方、学校の統合や閉鎖に伴って、学校に伝承を任せてきた地域の民俗芸能が消滅せざるを得ないという不幸な状況も起きている。

ところで本研究において、岩手県における数多くの民俗芸能の中から「七つ物」に着目した理由は、次の通りである。

- ①十数年前の国立音楽大学幼児教育科の研究発表会において、初めて学生が中野七頭舞を群舞するのを見て以来、長年にわたって芸能としての優れた価値を認めながら、個人的に強い関心を持ち続けてきた芸能である。
- ②岩手県の一地域に存在している中野七頭舞が全国的な人気を誇る芸能になっているという本芸能の不可思議な魅力の追究と中野七頭舞に匹敵する「七つ物」の存在の有無を探りたかった。
- ③小本小学校において、地域と学校が一体となって育てている「七つ物」に焦点を当てることで、学校教育における民俗芸能の学びのあり方についてのヒントを得ることができると考えた。

## 2. 研究の意義

地域の伝統芸能を音楽の側から調査・検証することは必要不可欠なことである。かつては複数の研究者が積極的に取り組んでいた岩手県の民俗芸能研究は、近年、音楽面の研究を行う者が極めて少ない状況にある。特に「七つ物」に関しては、音楽的側面の研究のみならず、全般的に先行研究といえるものがほとんどみられない。一方、創造的な音楽学習の視点から民俗芸能の音楽的な素材を発展させて音楽づくりに取り組む実践的な研究は、民俗芸能研究における新たな展開を拓くものと考えられる。ここに本研究の学術的な意義と独創性を主張することができる。

コンピュータや携帯電話の驚異的な普及を初めとして、ここ数十年あまりの日本の生活様式や文化状況は、大きな変貌を遂げている。このような変化に岩手県といえども影響を受けないはずはない。どの民俗芸能に焦点を当てたとしても、現代に生きる民俗芸能の諸問題と今後の行方を探る研究対象になり得るであろう。また、本来、民俗芸能とは、時代と共に時代の空気を吸収しながらその姿を変容させながら力強く継承されていくものである。たとえ民俗芸能が現代社会の負の傾向を色濃く反映していたとしても、そのこと自体が民俗芸能の現実の姿として真摯に受け止めなくてはならないであろう。したがって、本研究においては的確に「七つ物」の実態を把握するために、資料研究だけでなくフィールドワークが不可欠であった。

岩手の民俗芸能の研究において、民俗芸能と学校教育とのかかわる研究は積極的に行われているとはいえない。今後、この分野の組織的・継続的な研究が必要と思われる。

本研究が、岩手県の民俗音楽研究や日本の音楽教育にとって、たとえわずかでも現在と未来をつなぐ何らかの意味をもつことを期待したい。

### 3. 研究経過と研究方法

平成 15 年度の第 1 年次は、本研究のサブテーマに名前を挙げた「七つ物」の代表格である中野七頭舞に着目した。中野七頭舞の華麗な所作は、見たものの心をとらえて離さない魅力がある。

中野七頭舞が伝承され続けてきている岩手県岩泉地区にある小本小学校のフィールドワークを中心に研究を進める予定であった。しかし現実には、中野七頭舞保存会会長の協力を得るのが難しい状況があった。これまで多くの研究者が研究対象にしてきており、中野七頭舞保存会会長が負担を感じている様子が見られた。また本研究に取り組む以前に考えていた以上に、中野七頭舞については研究され尽くされている観があった。したがって平成 15 年度は、複数の「七つ物」の継承の場として機能しなければならない使命をもつ小本小学校の実態把握や「七つ物」の源流になった黒森神楽についての研究に取り組んだ。同時に、小本小学校における子どもたちの練習を参観する中で、既に全国的に知られている中野七頭舞を凌駕する勢いで中里七ツ舞を舞う中里地区の子どもたちに感動を覚えた。内側からほとばしり出るエネルギーを保ちつつ品格のある中里七ツ舞を舞う子どもの凛とした姿が、筆者の琴線に触れたのである。

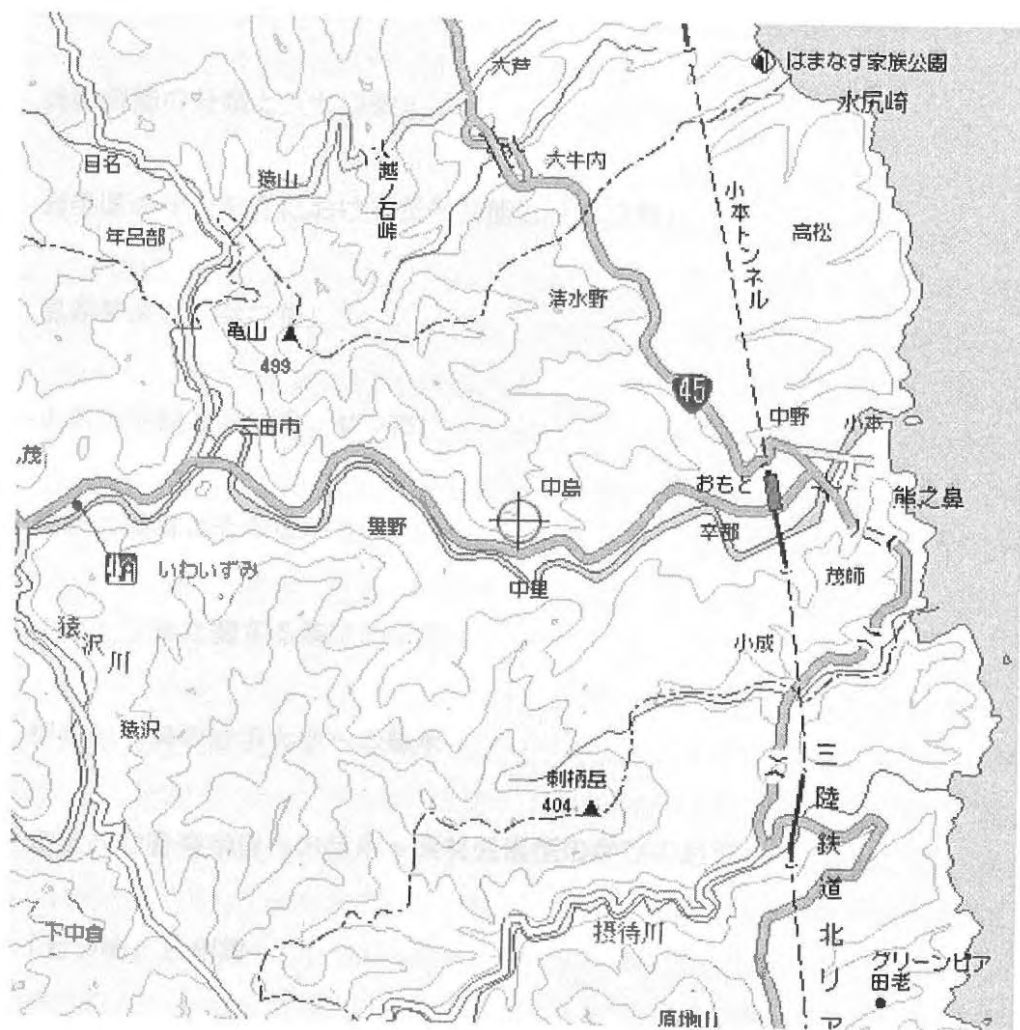
平成 16 年度からは、中里七ツ舞の精神性の高さや踊りの美しさに魅了され、研究の広がり範囲内と判断して、実践的な研究対象として中里七ツ舞を取り上げた。創造的音楽学習の視点からも中里七ツ舞を特徴づけているリズム型を生かした音楽づくりの可能性を探りながら、この分野の教材化についての試案の作成を開始する。中里七ツ舞の全体像を把握し、かつ岩手大学の学生に中里七ツ舞を体験させるために、第 1 年次伝統継承型の実践では中里七ツ舞の会長を岩手大学に招聘し、「道具取り舞」の指導を依頼した。同時に平成 16 年度の研究では、第 1 年次研究の継続として先行研究を中心に黒森神楽などの関連芸能についての基本的な文献の渉猟および実態把握のための情報収集作業を行った。この結果、国立音楽大学の卒業論文や修士論文の中に先行研究と見られるものを発見し、国立音楽大学附属図書館から入手した該当論文および添付映像資料の内容の分析・検討を行った。

平成 17 年度の研究では、5 月から 7 月にかけて、中里七ツ舞保存会会長を岩手大学に講師として招聘した。また学生からの希望によって、平成 17 年の 9 月には中里交流会館において中里七ツ舞の夏合宿および地元の人々との交流会が実現し、岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」が、初めて外部団体として中里七ツ舞を継承することができた。また中里七ツ舞による素材発展型の実践的研究は、岩手大学のみならず、集中講義を担当した宮城教育大学においても行うことができた。これらは民俗芸能研究における新しいの可能性を拓くものと確信している。

本研究の研究方法としては、フィールドワークによる対象芸能の調査、文献による基礎的研究、地域の伝承者や研究者へのインタビュー、岩手県教育委員会の全県レベルの調査データ分析、学校における子どもや教師対象の調査研究、学校教育における民俗芸能の新しい指導の方向を探る実践（義務教育現場を意識した大学での実験授業）などの方法をとった。

本報告書では、3 年間にわたる本研究の成果を 11 項目にまとめて報告することにした。

【岩手県下閉伊郡岩泉町小本付近】



## Ⅱ. 研究内容

1. 民俗芸能の分類と「七つ物」
2. 岩手県の学校教育における民俗芸能と「七つ物」
3. 黒森神楽と「七つ物」
4. 小本小学校と四つの「七つ物」
5. 中野七頭舞とその広がり
6. 中里七ツ舞に関する基礎的研究
7. 中里七ツ舞の岩手大学への継承
8. 創造的な音楽学習への活用～素材発展型の学びの追究～
9. 「七つ物」と剣舞
10. 宮古西中学校の歌舞劇における牛伏七つ踊り
11. 学校教育と民俗芸能 ～研究を振り返って～



## 1. 民俗芸能の分類と「七つ物」

### 1. 民俗芸能の用語

研究テーマの民俗芸能という言葉は、そう歴史的に古い言葉ではない。類似語に郷土芸能、伝統芸能、伝承芸能などがある。

1925（大正 14）年に、東京の明治神宮外苑の日本青年館開設記念行事として、地方の民俗芸能を一堂に集め鑑賞しようとする大会が開催された。この時のタイトルが「郷土舞踊と民謡」であったため、このイベントの継続に伴い、しばらくは地域の民俗芸能には郷土舞踊や民謡という呼称が用いられた<sup>1)</sup>。

1927（昭和 2）年に「民俗芸術の会」が発足し、翌年の 1 月には、本会の機関誌として『民俗芸術』が発刊された。これによってようやく本格的な民俗芸能の研究が行われるようになったといえよう。しかしこの機関誌はわずか 6 年で廃刊となり、会自体も解散してしまう。「民俗芸術の会」の解散後も研究者間の交流が続き、研究成果は蓄積されていった。

第 2 次世界大戦後の 1952（昭和 27 年）年には「民俗芸能の会」が発足し、機関誌『芸能復興』が発刊された。民俗芸能という言葉が最初に使われたのは、この「民俗芸能の会」の発足がこの用語が用いられた最初ではないかといわれている<sup>2)</sup>。現在ではこの民俗芸能という用語は広く使用されているが、その一方で、郷土芸能という用語もまた、戦後から今日にいたるまで使われ続けてきている。因みに、岩手県の盛岡市で毎年開催されている地域の民俗芸能フェスティバルのタイトルは、今でも『もりおか郷土芸能フェスティバル』である。

1992（平成 4）年に、「お祭り法案」といわれている「地域伝統芸能を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の進行に関する法律」が施行されてからは、「地域伝統芸能」という用語も使われるようになってきた。星野紘は、「地域伝統芸能」という言葉は、伝統芸能がもつ地味な味わいを重視するよりも、村おこしや町おこしのために、「むしろイベント向きの華やかさを伴うものに力点が置かれる傾向があるようだ」<sup>3)</sup>との見解を示している。

いずれにしても「民俗芸能」に類する用語は、いまだに整理されているとはいえない。しかし日本社会におけるそれぞれの共同体固有の生活の中で、人々の精神的な支えとして育まれ伝承されてきた芸能は、文化の一分野である。民俗学の対象領域でもあることから「民俗芸能」という用語は、研究者のみならず、一般的な用語としてかなり広く使われているのが実態である。

ところで 1927（昭和 2）年の「民俗芸術の会」発足時が「民俗芸能」という用語の初発ならば、「民俗芸能」の名称が市民権を得て広がり初めてから、まだ約 50 年の歴史しかもっていない。「民俗芸能」の分類についても、共通理解された分類法が確立しているとはいえない。

次項では、「民俗芸能」の分野で優れた業績を挙げ、長年、多くの研究者に影響を与えている本田安次と西角井正大の民俗芸能の分類法をみながら、民俗芸能における研究対象の「七つ物」の位置づけを考えてみたい。

## 2. 民俗芸能の分類

民俗芸能の分類の方法については、多くの研究者が独自の分類法を提示しているが、民俗芸能の分類法において「七つ物」はどのように位置しているのだろうか。

### (1) 本田安次の分類

戦前戦後を通じて、日本や世界の伝統芸能に多大な貢献を成し遂げた本田安次は、何度も民俗芸能の分類を試みながら、時代によって少しずつ変化させている。ここでは本田の近年の著作『日本の伝統芸能』（錦正社）の「はじめに」に記載されている、日本の芸能に関する分類を挙げる。

本書において、民俗芸能は次のように分類されている 4)。

- ・ 神楽      巫女神楽～神憑り系、八乙女系  
             採物神楽～出雲系神楽  
             湯立<sup>ゆたて</sup>神楽～伊勢系神楽  
             獅子神楽～山伏神楽・番<sup>ばん</sup>楽、大神<sup>だいかぐら</sup>楽)
- ・ 田楽      田舞～田遊～田植踊  
             田楽躍～囃し田  
             御田植神事
- ・ 風流      やすらい花  
             太鼓踊・風流獅子舞  
             念仏踊・盆踊  
             小歌踊、綾踊  
             作りもの風流・お練り風流・動物仮装の風流・その他
- ・ 語りもの・祝福芸～来訪神、万歳、平曲、説教、浄瑠璃、幸若舞、題目立など
- ・ 渡来芸・舞台芸～伎楽・舞楽・散楽、延年、能・狂言、人形まわし、歌舞伎

### (2) 西角井正大の分類

西角井は、上記の本田安次の分類を初めとして、複数名の研究者の分類をベースにしながら独自の分類法を示している。西角井の分類とは、すなわち神楽、田楽、風流、獅子舞、祝福芸、人形祝戯、狂言、民謡、語りもの、地舞楽、地延年、地能と地能狂言、地歌舞伎＝地芝居、地狂言、地人形芝居の 14 種の芸能区分である 5)。このうち西角井は民俗芸能の骨格をなすものとして、次の神楽、田楽、風流、獅子舞の 4 芸能を挙げている。

- ・ 神楽＝神座に神を勧請して行う鎮魂の芸能
- ・ 田楽＝耕田・稲作に関する芸能
- ・ 風流＝飾装仮装して御霊の鎮送念仏などを行う芸能
- ・ 獅子舞＝獅子の仮装をする芸能

以上、本田および西角井の民俗芸能分類を見たが、本研究の対象である「七つ物」は限られた

地域にのみ伝承されている芸能のため、両者の分類の中にその名称は見られない。では「七つ物」はこれらの分類のどこに位置づけるのであろうか。

本田や西角井だけではなく、民俗芸能の分類では、盆踊を初めとして種々の踊りを風流に位置づけることが多い。風流とは、仮装などして御霊に鎮魂のために念仏や歌や踊りを捧げるものであるが、もともとは風雅造形化の意匠を表現する言葉だったようである。

平安朝に奢侈を競う宮廷貴族が調度や装束にも風流を凝らすようになり、その世相を反映して祭礼行列の曳きものや練り衆の装束にもみやびた趣向が取り入れられ、中世には祭りの山車、仮装行列、華麗な衣装、採物の踊などを風流または風流踊などと称するようになったという。とりわけ祇園祭や盆踊など怨霊や厄神を鎮める目的の芸能には、華麗な装束の練り衆がお囃子を奏しながら踊り歩くものが多く、それらは風流と呼ばれた。現在、一般的に風流は、平安末以降に風流と呼ばれてきた芸能およびその風流から派生した芸能の総称となっている。

「七つ物」の場合、基本的には7種の採物を持ち、7種の踊りを舞う。もっとも伝承過程で、現在では消えてしまった踊りがあるため、必ずしも全7種類の踊りが残っていない場合もあるが、華麗な採物の踊りであることに違いない。したがって「七つ物」を風流に位置づけることに問題はないと思われる。岩手県の県北および沿岸地域のみに伝承されている「七つ物」は、一般的な分類にはその名称は登場しないが、次に示す岩手県の芸能の分類の中には、「七つ物」が明確に位置づけられている。

### 3. 岩手県の芸能と「七つ物」

#### (1) 岩手県の芸能

岩手県は全国的に一二を争うほど多様な民俗芸能が豊かに息づく地域である。平成 11 年の北上・みちのく芸能まつり実行委員会による岩手県内 58 市町村教育委員会に対する民俗芸能調査では、1269 団体（中断 149 団体を含む）を数え、調査にもれた団体を含むと 1400 団体を超えるのではないかと推測されるほどである。

それぞれの地域で歌や芸能を大切に育もうとする意志と必要性および岩手県の芸能の類い希な豊かな豊かさの要因としては、次のような理由が考えられる。

- ① 様々な芸能を有する地域を包含する広大な大地を有している。
- ② 北の大地に暮らす人々の厳しい歴史や生活の現実による祈りが込められている。
- ③ 近年の少子化や過疎化に向き合いながら地域の結束を高めようとする意志が反映している。
- ④ 子どもたちに地域の文化を継承し、地域の一員として育て上げようとする熱意がある。
- ⑤ 何よりも歌や踊りが好きな人々が暮らし、それを見て育った次の世代が継承していくという自然な伝承システムが今なお残っている。

このような素晴らしい民俗芸能を誇る岩手県にあっても、近年は芸能継承者の不足が大きな問題になっている。これを補うために、それぞれの地域では小・中学校において積極的に地域の民俗芸能が取り上げられており、かつ地域ごとに民俗芸能祭といった民俗芸能の発表の場を設定し

ており、これまた積極的に行われている。

岩手県の民俗芸能の分類としては、北上・みちのく芸能まつり実行委員会が編纂した著書『炎の伝承』<sup>1)</sup>における分類が、これまでの様々な研究成果を反映し、かつ岩手県の独特な芸能を適切に分類していると思われる。

- |                                  |
|----------------------------------|
| A：神楽（山伏神楽・大乘神楽・社風神楽・南部神楽・大神楽他）   |
| B：田植踊（田植踊・えんぶり・田楽他）              |
| C：念佛踊（念佛踊・剣舞）                    |
| D：シシ踊（幕踊系獅子・太鼓系獅子）               |
| E：盆踊・祝福芸（盆踊・祝福芸）                 |
| F：各種の風流芸（虎舞・駒踊・奴子踊・七つ物・その他の風流芸）  |
| G その他の芸能（人形芝居・村歌舞伎・祭り太鼓・和太鼓・外来系） |

ここでは神楽の一演目から新たに生み出された「七つ物」が、明確にFの風流芸の一つとして位置づいている。しかし岩手県にはCの剣舞に含まれる「七つ物」や「七つ物」と呼称しなくてもAの神楽に含まれる同種の踊りも存在する。

したがって「七つ物」は、一概に風流だと断言するのは難しい面があるのは否めない。しかし現代社会においては、神様や仏様に奉納する舞も、その本来の機能に加えて、民俗芸能祭の芸能演目としてより芸能として洗練されている事実があり、本研究においては、やはり「七つ物」を風流に位置づけても差し支えないと考えている。

## (2) 岩手県の「七つ物」

全般的に「七つ物」は、岩手県の北沿岸や県北地方を中心に伝承されている独自の芸能である。現在、岩手県に伝承されている「七つ物」は、(表1)の21団体(中断を含む)である。これらの「七つ物」芸能は、近年、保存会の他にも小・中学校を通じて伝承しているところが少なくないが、学校における伝承については別項で述べることにしたい。

(表1)

地 域		七つ物名
県北地方	九戸郡九戸村	「小倉七つ物」「西山七つ物」
	二戸市	「坂本七つ物」
	二戸郡一戸町	「小鳥谷七ツ踊」「来田七ツ踊」
	二戸郡浄法寺町	「浄法寺七ツ物」

北沿岸地方	宮古市	「田代七ツ踊」「牛伏七ツ踊」
	下閉伊郡岩泉町	「中野七頭舞」「大牛内七ツ舞」「中島七ツ舞」「中里七ツ舞」 「月出七ツ舞」「栃ノ木七ツ舞」
	下閉伊郡田老町	「摂待七つ物」
県央地方	岩手郡葛巻町	「葛巻七ツ物」「下冬部七ツ物」
	岩手郡岩手町	「沼宮内七つ踊り」「高梨七つ踊り」「一方井七つ踊り」
	岩手郡玉山村	「桑畑七ツ踊」

### (3) 「七つ物」と神楽や剣舞

風流芸としての「七つ物」の他に、神楽や念仏剣舞の中にも「七つ物」に類似するものがある。神楽と剣舞では、本来、その性格は異なる。すなわち神楽は神様に奉納するものであり、剣舞は主に盆に先祖供養を行うために舞うものである。しかし舞い踊る踊り手が使う道具や衣装が著しく似通っているものが存在している。「七つ物」を含む神楽の他に、「七つ物」を含む、または「七つ物」と一緒に踊る剣舞が存在している。

#### < 「七つ物」を含む神楽 >

県北地域 : 上斗米月山山伏神楽(二戸市)  
北沿岸地域 : 黒森神楽(上閉伊郡宮古市)  
大宮神楽(下閉伊郡)  
田代神楽(上閉伊郡宮古市)

#### < 「七つ物」を含む、または「七つ物」と一緒に踊る剣舞 >

県北地域 : 霜畑念仏剣舞(九戸郡山形村)  
関念仏剣舞(九戸郡山形村)  
北沿岸地域 : 菅窪剣舞(下閉伊郡田野畑村)  
田代念仏剣舞(下閉伊郡宮古市)  
牛伏念仏剣舞(下閉伊郡宮古市)

したがって研究対象の「七つ物」について、以下に示す独自の分類を行うことにしたい。

- ・神楽系の「七つ物」：神楽に含まれる「七つ物」および風流の「七つ物」
- ・剣舞系の「七つ物」：念仏剣舞に含まれる、あるいは剣舞と一緒に踊られる「七つ物」

【注および参考文献】

- 1) 西角井正大の著書『民俗芸能』、ぎょうせい、1990 年、69 ～ 70 頁）参照。
- 2) 同上、69 頁。
- 3) 全日本郷土芸能協会編『民俗芸能で広がる子どもの世界』（文化庁、13 頁の星野紘によるコラム）を参照のこと。
- 4) 本田安次『日本の伝統芸能』錦正社、1990 年
- 5) 前掲書 1)、74-75 頁。
- 6) 仲井孝二郎他編『民俗芸能辞典』東京堂出版、1981 年、394 頁。
- 7) 『炎の伝承』（北上・みちのく芸能まつり実行委員会、1999 年）では、この分類にしたがって、第 2 部の岩手県の民俗芸能＜芸能種類別編＞が 87 頁にわたって書かれている。

## 2. 岩手県の学校教育における民俗芸能と「七つ物」

### 1. 岩手県の学校教育で取り上げている民俗芸能

岩手県教育委員会では、毎年、岩手県全域の小・中学校を対象に継続的に「地域の伝統芸能・伝統工芸の体験的な活動に対する調査」を実施している<sup>1)</sup>。タイトルでわかるように、本調査は伝統芸能だけでなく伝統工芸も含む総合的な調査である。ここでいう伝統芸能とは民俗芸能と同義である。2005年度の調査結果については、その生データを岩手県教育委員会から入手することができた。教育委員会では、実態調査自体を目的としており、データや結果の分析などを冊子にまとめる予定はないということであった。教育委員会による調査であるため、個人研究では到底得難い岩手県内全域の小・中学校に関する貴重なデータが揃っており、県内の小中学校における民俗芸能に関する取り組みの全体的傾向を見て取ることができる。筆者が改めて同種の調査を実施しても、これほどまでのデータは期待できない。したがって教育委員会の調査データから民俗芸能に関するデータを取り上げて、岩手県の小・中学校における民俗芸能の実施状況を把握することにしたい。

ここでは、教育委員会による2005年度の「地域の伝統芸能・伝統工芸の体験的な活動に対する調査」のうち伝統芸能に関する数量的な調査を「伝統芸能調査1」と呼称する。また教育委員会ではアンケートによる数量的な調査以外に、伝統芸能や伝統工芸を学校教育に位置づけている学校については記入式の調査用紙2に自由に記述することになっている。これを本稿では、「伝統芸能調査2」と呼称する。

この「伝統芸能調査1」の結果を市町村別に一覧表にまとめたものが、(表1)の「岩手県の小学校における民俗芸能」と(表2)「岩手県の中学校における民俗芸能」である。市町村別に「伝統芸能調査1」のデータを一覧表にまとめるに当たり、芸能の項目に若干の変更を加えた。すなわち「伝統芸能調査1」では、「神楽」・「太鼓」・「剣舞」・「鹿踊り」・「民謡」・「その他」の6項目であったが、「その他」の中に多く見られた「さんさ踊り」と「田植え踊り」は、岩手県の代表的な芸能であることから項目として独立させた。

#### (1) 小・中学校における民俗芸能の実施状況

この(表1)(表2)から見えてくるいくつかの傾向について、まとめると次のようなことが見えてくる。

##### ① 小学校の方が中学校よりも積極的に民俗芸能に取り組む傾向が見られる。

小学校は回答校457校のうち64パーセントにあたる293の学校が民俗芸能を実施しており、中学校では205校に対して43パーセントにあたる89校が実施している。全国的なデータは手元にはないが、小・中学校共に、おそらく岩手県では全般的にかなり多くの学校で民俗芸能が実施されているといえよう。しかしやはり高校受験を控えている中学校では、民俗芸能に対する取り組みは小学校ほど積極的になりにくいのがわかる。継続して地域の民俗芸能に取り組みたい子ど

もは、むしろ保存会に加わる傾向が見られる。

②小・中学校に多くの種類の民俗芸能が導入されている。

小学校では回答校 457 校のうち延べ数で 335 の民俗芸能が実施されており、これは全体の学校数に対して 73 パーセントにあたるほどの多様な民俗芸能が実施されている。これに対して中学校は 205 校中、延べ数 126 の民俗芸能が行われており、61 パーセントの民俗芸能実施率である。全般的には中学校でもかなり多くの民俗芸能が実施されており、とりわけ小学校で取り上げている芸能数は驚異的に多いといえよう。

③小・中学校で取り上げる芸能の順位はほとんど変わらない。

実施数の多い芸能から挙げると、小学校では、1 位＝神楽、2 位＝太鼓、3 位＝剣舞、4 位＝さんさ踊り、5 位＝鹿踊り、6 位＝田植え踊り、7 位＝民謡の順番である。中学校では、1 位＝神楽、2 位＝太鼓、3 位＝剣舞、4 位＝鹿踊り、5 位＝さんさ踊り、6 位＝田植え踊り、7 位＝民謡の順番である。小・中学校で、4 位のさんさ踊りと 5 位の鹿踊りが入れ替わっているだけである。また中学校では、6・7 位の田植え踊りと民謡は同数である。

④神楽が多く民謡が少ない。

一般的に考えるならば、学校教育において神事がかわる神楽はそれほど取り上げやすい芸能ではないはずである。しかし岩手県にはその芸術性の高さ故に全国的に知られている早池峰神楽を初めとして、かつて山伏修験者によって伝承された数多くの山伏神楽が地域の芸能として今も伝承されており、その地域性のゆえに学校でも取り上げられているのであろう。

しかし意外なことに、むしろ学校で取り組みやすいと思われる民謡に対する取り組みが少ない。もっともこの場合の民謡は、本格的な発声による民謡への取り組みを基本としているのであり、音楽の授業で、さまざまな地域の民謡を歌うといった程度のことは、本調査に反映されていないようである。

⑤「七つ物」の位置づけが明確ではない。

「伝統芸能調査 1」における芸能の項目は、「神楽」・「太鼓」・「剣舞」・「鹿踊り」・「民謡」・「その他」の 6 項目であった。この調査結果をもとに筆者が作成した（表 1）（表 2）には、新たに「さんさ踊り」と「田植え踊り」の項目を加えたが、県北や沿岸地域という一部の特定地域のみで伝承されている「七つ物」については項目を起こしていない。しかしながら詳細に生データを見ると、本研究の対象である「七つ物」については、二つの位置づけがみられる。すなわち一つは「その他」に位置づけている場合であり、もう一つは神楽系または剣舞系といった「七つ物」の系統別に「神楽」や「剣舞」の中に位置づけている場合である。

したがって「七つ物」については、数量的に分析するよりも、各校が記述式で報告している「伝統芸能調査 2」について後述することにした。

(2) 伝統芸能や工芸を教育課程に位置づけない理由

「伝統芸能調査 1」では、地域の伝統芸能や伝統工芸を教育に位置付けていない学校に対して、次の 7 項目の理由を提示して、その回答を求めている。伝統芸能だけではなく伝統工芸も含めた回答であるが、小・中学校で取り上げない理由の結果は、（表 3）のとおりである。



(表 3) 地域の伝統芸能や伝統工芸を学校教育に位置づけない理由

学校教育に位置づけない理由	小学校	中学校
1. 自分たちの地域に伝統芸能や伝統工芸が存在しない。	46	21
2. 指導者がいない。	18	18
3. 時間的な余裕がない。	55	62
4. 衣装や道具など、必要なものをそろえる金銭的な余裕がない。	22	24
5. 伝統芸能や伝統工芸を学校教育に位置づける必要性をあまり感じない。	19	18
6. 学校教育に位置づけていないが、多くの児童生徒が伝統芸能に関わる団体に所属しており、あえて位置付ける必要がない。	27	23

この6つの理由以外に、「7. その他」の欄に記述されている理由をいくつかを紹介しよう。

a) 各地域にそれぞれの伝統芸能があり、学校で指導することによって偏りが出てしまう。 b) 各地区毎に活動し、指導形態もできている。 c) 伝統芸能が多いため、学校教育に位置づけることが難しい。 d) 位置づけていたことがあるが、指導者が高齢になり活動自体ができなくなってしまった。 e) 中学校で取り組んでおり、小学校で取り組む必要がない。 f) 地域の保存会、公民館が地域の伝統芸能の伝承活動を行っているため。 g) 地域の方に指導していただいた方が地域の活性化につながると判断したため。 h) 地区毎に内容が異なり、学校として絞り込むことが難しい。 i) 生徒にとって必要だが、生徒会活動を重視していることから時間的な余裕がない。 j) 総合的な学習の時間は、本校では進路学習を優先している。                      など
--

上記の理由でわかるように、岩手県の場合、学校で取り上げない理由が民俗芸能への関心が低いからではなく、むしろ民俗芸能の豊かさゆえに、地域ごとの保存会での活動が確立しており、かつ公平な立場を保つために学校が一つの芸能に絞りにくいという他県とは違う特殊な事情があるようである。また高校受験を控えている中学校では、ご多分にもれず進路指導を優先せざるを得ない状況である。これらの理由から時間的制約のある学校で、本来の教育機能を維持しつつ地域の民俗芸能を継承する難しさが推察できる。

(表1) &lt;岩手県の小学校における民俗芸能&gt;

市町村名	学校数	実施校数	神楽	太鼓	剣舞	鹿踊り	民謡	さんさ踊り	田植え踊り	その他	合計
盛岡市	38	24	1	12	2	0	1	14	0	3	33
雫石市	10	10	1	6	0	0	0	5	0	2	14
葛巻町	11	2	1	0	0	0	0	1	0	0	2
岩手町	9	8	0	3	1	0	0	0	1	3	8
西根町	7	6	1	0	1	0	1	0	2	0	5
安代町	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
滝沢村	8	6	1	3	0	0	0	3	1	0	8
松尾村	3	3	0	1	1	0	0	0	1	0	3
玉山村	9	6	1	3	0	0	1	0	0	1	6
紫波町	11	7	1	3	0	0	0	3	2	0	9
矢巾町	4	3	0	0	0	0	0	3	0	0	3
花巻市	12	7	1	0	0	0	0	0	4	1	6
大迫町	4	4	3	0	0	0	0	1	0	0	4
石鳥谷町	4	3	3	0	0	0	0	0	0	0	3
東和町	6	3	0	1	0	0	0	1	1	0	3
北上市	20	13	3	1	8	0	1	0	1	2	16
湯田町	3	2	1	0	1	0	0	0	0	0	2
沢内村	4	4	0	1	0	0	1	3	1	0	6
水沢町	8	7	3	4	2	0	0	0	0	0	9
江刺市	12	12	3	1	3	3	0	0	0	3	13
金ヶ崎町	6	2	1	0	0	0	0	0	1	0	2
前沢町	7	3	2	0	0	0	0	0	0	1	3
胆沢町	4	1	1	0	1	0	0	0	0	0	2
衣川村	4	4	2	1	2	0	0	0	0	1	6
一関市	14	8	8	0	0	1	0	0	0	0	9
花泉町	7	7	2	1	0	0	0	0	0	4	7
平泉町	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大東町	11	9	8	0	0	0	1	0	0	0	9
藤沢町	6	5	4	1	0	0	0	0	1	0	6
千厩町	5	4	2	1	1	0	0	0	1	0	5
東山町	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
室根村	5	3	0	3	0	0	0	0	0	0	3
川崎村	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
大船渡市	14	9	0	2	6	0	1	0	0	6	15
陸前高田市	11	6	0	2	1	0	0	0	0	3	6
住田町	3	3	1	0	0	0	0	0	0	3	4
遠野市	9	7	2	1	0	4	1	0	0	1	9
宮守村	3	2	1	0	0	1	0	0	0	0	2
釜石市	15	7	3	0	0	4	0	0	0	1	8
大槌町	7	4	0	0	0	3	0	0	0	0	3
宮古市	16	8	1	0	1	2	0	1	0	3	8
山田町	9	8	1	1	2	0	0	1	0	4	9
岩泉町	15	12	3	0	1	2	0	2	0	4	12
田老町	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	2
田野畑村	6	3	1	0	1	1	0	0	0	0	3
新里村	4	2	0	1	0	0	0	1	0	0	2
川井村	5	5	0	2	2	0	0	0	0	0	4
久慈市	15	4	0	0	1	0	0	0	0	2	3
普代市	5	3	3	0	0	0	0	0	0	0	3
種市市	8	3	1	0	0	0	0	0	0	2	3
野田村	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1
山形村	8	5	1	2	0	0	0	0	0	4	7
大野村	4	3	0	0	0	0	1	0	0	4	5
二戸市	8	3	2	0	0	1	0	0	0	1	4
軽米町	9	5	1	0	0	0	0	0	0	3	4
九戸村	6	4	3	0	2	0	0	0	0	0	5
浄法寺町	6	2	2	1	0	0	0	0	0	0	3
一戸町	9	4	1	1	0	1	0	0	0	1	4
合 計	457	293	84	59	40	23	10	39	17	63	335

(表2) &lt;岩手県の中学校における民俗芸能&gt;

市町村名	学校数	実施校数	神楽	太鼓	剣舞	鹿踊り	民謡	さんさ踊り	田植え踊り	その他	合計
盛岡市	20	3	0	2	1	0	0	2	1	1	7
雫石市	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
葛巻町	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手町	4	1	1	1	1	1	0	0	0	0	4
西根町	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
安代町	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
滝沢村	6	3	0	0	0	0	0	2	0	1	3
松尾村	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
玉山村	4	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1
紫波町	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
矢巾町	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
花巻市	8	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
大迫町	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
石鳥谷町	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
東和町	2	1	1	0	0	0	0	0	1	0	2
北上市	9	4	0	1	3	0	0	3	0	0	7
湯田町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
沢内村	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
水沢町	3	1	0	1	0	0	0	0	0	1	2
江刺市	4	4	3	0	0	0	0	0	0	1	4
金ヶ崎町	1	1	0	1	1	0	0	0	0	1	3
前沢町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
胆沢町	3	2	0	2	1	0	0	0	0	0	3
衣川村	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
一関市	10	7	6	1	0	0	0	0	0	1	8
花泉町	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1
平泉町	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
大東町	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
藤沢町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
千厩町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東山町	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
室根村	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川崎村	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大船渡市	8	5	2	0	2	1	0	0	0	4	9
陸前高田市	7	5	0	4	1	0	0	0	0	2	7
住田町	2	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
遠野市	8	6	2	1	0	4	1	1	0	1	10
宮守村	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
釜石市	8	3	2	0	0	2	0	0	0	0	4
大槌町	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮古市	9	5	2	3	2	2	1	1	0	1	12
山田町	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
岩泉町	8	5	2	1	1	1	0	0	0	0	5
田老町	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
田野畑村	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1
新里村	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川井村	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久慈市	9	3	0	0	1	0	0	0	0	0	1
普代市	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
種市市	6	3	1	0	0	0	0	0	0	2	3
野田村	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山形村	2	1	0	0	1	0	1	0	0	0	2
大野村	2	2	0	0	0	0	0	0	1	7	8
二戸市	5	4	2	1	0	0	0	0	0	1	4
軽米町	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
九戸村	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浄法寺町	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
一戸町	4	3	1	1	0	0	0	0	0	1	3
合 計	205	89	34	21	15	12	3	10	3	28	126

## 2. 岩手県の学校教育における「七つ物」

前述したように、前項の(1)「小・中学校における民俗芸能の実施状況」の⑤の「七つ物」については、各学校毎に記述式で報告されている「伝統芸能調査2」の中から、「七つ物」を取り上げている学校を特定することができる。〔表4〕は市町村別に整理したものである。但し、16・17番の宮古市立西中学校と宮古市立亀岳中学校については筆者が本表に付加した。

(表4)

岩泉町	1	岩泉町立小本小学校＝「中野七頭舞」「中里七ツ舞」「中島七ツ舞」
	2	岩泉町立小本小学校大牛内分校＝「大牛内七ツ舞」
	3	岩泉町立小本中学校＝「中野七頭舞」
	4	岩泉町立有芸小学校＝「栃ノ木七つ物」
	5	岩泉町立有芸中学校＝「栃ノ木七つ物」
宮古市	6	千徳小学校＝「牛伏剣舞（七つ踊り）」
田老町	7	田老町立第一小学校＝「摂待七つ物」
	8	田老町立第三小学校＝「摂待七つ物」
	9	田老町立第三中学校＝「摂待七つ物」
田野畑村	10	田野畑村立沼袋小学校＝「甲地剣舞（七つ物を含む）」
普代村	11	普代村立黒崎小学校＝神楽「七ツ門」
	12	普代村立普代中学校＝「中野流鶺鴒七頭舞」
二戸市	13	二戸市立福岡中学校＝「七つ物」
一戸町	14	二戸町立小鳥谷小学校＝「小鳥谷七ツ舞」
	15	二戸町立小鳥谷中学校＝「小鳥谷七ツ舞」
＜ 以下、2校は補遺＞		
宮古市	16	宮古市立西中学校＝「牛伏七ツ踊」
	17	宮古市立亀岳中学校＝「田代七ツ踊」

「七つ物」は保存会中心に行われているところが多いが、ここでは「伝統芸能調査2」において上記の各校が報告している主な記述内容を紹介することにしたい。

(表5)

1. 岩泉町立小本小学校 「中野七頭舞」 「中里七ツ舞」 「中島七ツ舞」	<p>【伝統芸能の歴史・特徴】 七頭舞・七ツ舞は神楽の一部で、江戸時代後期に始まったと伝えられている。神々が地上に降りた時、七つの道具を持ち、悪魔を祓いながら進んだ様子や汗を流して原野を開拓する苦しみや豊作の喜びを表現しているとされる。現在では、五穀豊穡・家内安全・大漁などを祈願して踊りつがれている。</p> <p>【学校での歴史】 昭和53年11月に民舞クラブとして中野七頭舞の取り組みが始まり、翌昭和54年2月に地域の人々への練習成果の発表</p>
---	---

	<p>の場として「七頭舞発表会」が開かれ、平成 16 年度で 28 回を数える。その間、平成 7 年度に中島七ツ舞（中島分校統合による）、平成 10 年度に大牛内七ツ舞（大牛内分校）、平成 15 年度より中里七ツ舞（中里小学校統合による）が加わり、現在は 4 種類の踊りが発表されている。また運動会のアトラクションや福祉施設訪問でも披露している。2 月発表会に向けての取り組みは 11 月から始まる。3 地区それぞれに担当職員を配し、昼休み、クラブ（4 年生以上全員七頭舞・七ツ舞クラブ）を中心に練習を進める。基本的には上級生が下級生に伝える形であるが、各地区の保存会の協力も大きい。学校での練習時間に指導依頼する他、中島・中里地区では夜間も保存会で練習を行っている。</p>
<p>2. 岩泉町立小本小学校大牛内分校 「大牛内七ツ舞」</p>	<p>【由来と歴史】大牛内七ツ舞は、神旗を先頭に七つの道具で切り拓いて土地を清め、悪魔を祓いながら進んだ様子を表現した踊りである。今から百数十年前に中里に伝わった踊りを大牛内開拓時代に取り入れて始まった。戦後 20 年間の空白があったが、昭和 50 年に第 9 回岩泉郷土芸能大会に参加するために、小中学生を主体に構成し、現在に至っている。</p> <p>【活動】体育の表現活動、業間活動を中心に練習を行い、運動会や収穫祭で発表を行っている。また 2 月には、七頭舞発表会という本分校合同の行事を設定し、地域の方々に参観してもらっている。</p>
<p>3. 岩泉町立小本中学校 「中野七頭舞」</p>	<p>中野七頭舞の起源は天保時代にさかのぼる。、神楽舞の舞い込みの一部である「シットギジシ」を基に作られ、現在は五穀豊穡、家内安全、大漁祈願のため地区の祭典に奉納されている。勇敢で活発なこの舞は、原野の開拓に汗を流し、カー杯労働に励み、素晴らしい田畑を作り、大豊作を願う逞しい農民のエネルギーと心を表した芸能である。</p> <p>小本小学校と岩泉高校では中野七頭舞が教育活動に位置づけられているが中学校には無かった。しかし平成 16 年度全国中文祭出演を機会に同好会が結成され、地域の保存会に指導を受けた。今後は特別に出演の機会がない場合、本校文化祭（年 1 回）が発表の機会となる。</p>
<p>4. 岩泉町立有芸小学校 「栃ノ木七つ物」</p>	<p>「栃ノ木七ツ舞」は、宮古の黒森神社の流れをくむもので神楽の踊りの一部である。七番の踊りでまであることから「七つ物」と呼ばれている。約 50 年の歴史があり、栃の木地区の「七つ物」保存会で伝承している。小中学校の統合に伴い、小学校は業間、中学校は学活などで、全校をあげて取り組み始めた。現在、小学校では総合的な学習の時間</p>

	<p>に伝承活動として位置づけ、年間 20 時間設定している。そのうち 3 時間は保存会のメンバーから指導を受けている。主な発表の機会は、文化祭とどんぐり苑訪問。</p>
<p>5. 岩泉町立有芸中学校 「栃ノ木七つ物」</p>	<p>* 「栃ノ木七つ物」の説明は、小学校に同じ。</p> <p>総合的な時間の文化・伝統的な内容として位置づけ、全体での取り組みとしては、年間 4 時間設定している。そのうち 3 時間は、保存会に指導を受けている。主な発表の機会は文化祭。父母の方々に協力していただき、着装や道具などを準備していただいている。学校以外では、郷土芸能祭や歳末助け合い活動で発表したことがある。総合的な学習の時間の国際理解コースを選択した者が「七つ物」の歴史を調べて、文化祭で発表したこともある。</p>
<p>6. 千徳小学校 「牛伏剣舞（七つ踊り）」</p>	<p>「七つ踊り」は牛伏地区に伝わる伝統芸能である。平成 3 年度から特別委員会として位置づけ、委員会活動の時間に練習を行ってきた。平成 7 年度からは、4 年生が学級裁量の時間に年間を通して取り組み、5 年生で運動会で発表する形をとった。平成 10 年度からは、特別委員会から「七つ踊り同好会」にして活動を始めた。平成 13 年度から総合的な学習の時間に位置づけて踊り方だけでなく、「七つ踊り」の由来などについても子どもたちが調べ学習を進めている。郷土芸能保存会の方は、踊りやお囃子の指導、お囃子の演奏援助、衣装の借用、着付けの手伝いなどをして下さっている。</p> <p>発表の機会は年 5 回～運動会（5 年）、学習発表会（七つ踊り同好会）、老人ホーム慈苑の「慈苑祭」（七つ踊り同好会）、児童集会での引き継ぎ式（七つ踊り同好会）、6 年生を送る会（4 年生）</p>
<p>7. 田老町立第一小学校 「摂待七つ物」</p>	<p>神楽の一部であるが、田老町では独立した踊りとして伝承されている。無病息災、五穀豊穡を願い、薙刀や太刀、弓など。七つの物をもって、円陣や行列になって踊るものである。18 年前から地域の伝承者を招いて指導を受け、練習を重ねて学習発表会で発表している。</p>
<p>8. 田老町立第三小学校 「摂待七つ物」</p>	<p>【由来】天正 15（1597）年に摂待の地に 200 石を有した久慈忠左衛門が小沼神社を創建し、春の祭日に豊作と地元民の健康を祈って有志により「七つ物」が奉納されるようになった。大阪冬の陣に出陣した郷土兵士たちが戦いの合間に踊って好評を博したとも伝えられている。地元の口伝では、岩泉町小本の山伏が伝えたもので、黒森神楽が源流</p>

	<p>と推測されている。</p> <p>【活動プロフィール】田老町立第三小・中学校には地区全戸加入の PTA と児童・生徒の保護者で構成する保護者会が組織され活動している。学区内には、摂待七つ物保存会が活動しており、各団体が相互に連携協力を進めながら地域ぐるみで郷土芸能の伝承、青少年の健全育成活動を行っている。発表会は地域の連帯感や郷土の文化伝承の大切さを改めて認識する機会となっており、ふるさとの心を伝える郷土芸能への児童生徒の取り組みが町民に感動を与え、地域の活力になっている。</p>
<p>9. 田老町立第三 中学校 「摂待七つ物」</p>	<p>* 【由来】および【活動プロフィール】共、田老町立第三小学校と全く同じ文書が添付されている。上記 8 を参照されたい。</p>
<p>10. 田野畑村立沼袋小学校 「甲地剣舞（七つ物を含む）」</p>	<p>【甲地剣舞の歴史】甲地剣舞は念仏剣舞の一種で新盆や法事の時に精霊を慰めるために舞ったり、祭りの時に演じたりするなど、地域の信仰として伝承された。沼袋小学校では、昭和 46 年から地域の協力を得て甲地剣舞の伝承活動に取り組んでいる。</p> <p>【特徴と発表の機会】「大念仏」「七つ物」「高太刀」「しろまわし」「三十三」「綾踊」の六つの部分からできている。薙刀と扇子をもって踊るのが特徴である。発表の機会は、運動会、地域の行事、田野畑村の郷土芸能フェスティバルなどである。</p>
<p>11. 普代村立黒崎小学校 神楽「七ツ門」</p>	<p>黒崎小学校で行っている神楽は、戦国時代に女子が放った矢が敵に当たり勝利を収めたことから、それを祝って踊ったものが始まりとされている。運動会、学習発表会そして村のお祭りの日に発表の場を設定し、発表に向けて全校児童が練習を行っている。特に「七ツ門」は烏帽子や着物など華やかな衣装を身につける、とても躍動的な舞である。</p>
<p>12. 普代村立普代中学校 「中野流鵜鳥七頭舞」</p>	<p>【演目解説】舞の種類は「道具取り」「横跳ね」「チラシ」「戦い」「ツットウツ」「三足（鳥居掛け）」「道具納め」の七つに分かれており、五穀豊穡、家内安全、大漁を祈願して勇壮に舞う。</p> <p>【由来と伝承活動】普代村内にある鵜鳥神社に昔から伝わる山伏神楽の一種である。鵜鳥神楽を基に、岩泉町小本の中野地区に伝わる神楽を取り入れ、独自に創作した神楽である。神楽舞の一部で、シットギジシ舞を基本にした舞である。二人七組 14 人で、先打ち、谷地払い、薙刀、太刀、杵、小鳥、ササラスリの七つの役柄がある。普代村神楽</p>

	<p>保存会が中心となり有志でお祭りなどで踊っていたものが、中学生も一緒に活動するようになり、そのうち生徒同士で誘い合って昭和 62 年度に普代中学校神楽同好会として組織された。地区中総体終了後、7 月上旬に希望者を募り、同好会を運営している。練習は、普代祭りに向けて 7 月下旬から 9 月下旬までに週 2～3 回行い、10 月から 1 月までは週 1 回、各種依頼に備えて部活動終了後に行っている。主に上級生が下級生に伝承する他に、田野畑村の三上岩富氏や鵜鳥神楽保存会の方から指導を受けている。</p>
<p>13. 二戸市立福岡中学校 「七つ物」</p>	<p>二戸市指定無形文化財。坂本部落に伝わる芸能であり、約 300 年前から受け継がれている。蝦夷征伐に來た坂上田村麻呂の命を受け、文屋綿麻呂がこの地を平定した時に、戦勝を喜び合って踊ったのが始まりとされる。「七つ物」とは、当時、使っていた 7 種類の武装、武具のことで、それらを振りかざしながら円陣をつくって踊る勇壮な踊りである。坂本七ツ舞保存会に講師として来校してもらい、1 学年の総合的な学習の時間の一つの活動として調査や練習に取り組んでいる。調査結果を文化祭で展示するほか、学年の総合的な学習の時間の発表会で踊りを披露している。 注：福岡中学校では、「七つ物」の他に、「深山神社神楽」「ソーラン節」なども実践している。</p>
<p>14. 二戸町立小鳥谷小学校 「小鳥谷七ツ物」</p>	<p>「小鳥谷七ツ物」は、小鳥谷地区の小姓堂に伝わる踊りであり、手に 7 種類の道具をもって踊るので、この名がある。七つ道具は、杵、棒、薙刀、刀、剣、まさかり、弓矢である。人数は、杵 1 人の他は 2 人ずつの計 13 人。他に太鼓 2 人、鉦 2 人、笛 1～2 人、先触れ 1 人という構成になる。保存会会長の話では由来については多説あって明確ではないということである。</p> <p>小鳥谷小学校では、この七ツ物をアレンジして、平成元年から保存会の方々の協力を得て、4～6 年生の児童が練習を行い、運動会で発表したり、地区振興会主催の「藤島の藤祭り」でも発表している。</p> <p>注：二戸町立小鳥谷小学校では、小鳥谷七ツ物と呼称しているが、保存会での名称は、小鳥谷七ツ踊りである。名称は違うが、いずれにしても同じ芸能である。</p>
<p>15. 二戸町立小鳥谷中学校 「小鳥谷七ツ踊」</p>	<p>保存会の方々の協力を得て、地域の伝統芸能「小鳥谷七ツ踊」の伝承活動を行った。保存会の一員として、一戸祭りや藤祭りなどの地域行事に参加し、地域と交流することができた。また平成 15 年度に作成し</p>



た着付けマニュアルを活用し、保存会に頼らず、自分たちで着付けができるようになった。学校において体育祭や生徒祭でも発表している。
---

特に付け加えた 16 番目の宮古市立西中学校の牛伏七ツ踊については、本報告書のⅡの 10 で改めて述べることにする。また 17 番目の宮古市立亀岳中学校は、平成 16 年度から生徒数減少のため廃校になったが、廃校になるまで田代七ツ踊を伝承し続けていた学校である。

この項の最後に宮古市立亀岳中学校の活動を簡単に紹介して起きたい。

### 3. 宮古市立亀岳中学校の田代神楽（田代七ツ踊）

亀岳中学校は、平成 17 年 3 月現在で、1 年生 4 人、2 年生 5 人、3 年生 3 人、計 12 人の 2 学級という生徒数の減少に陥り、さらに将来的に生徒数の減少が予想されるため、生徒同士の人間関係の固定化や課外活動の制約などの状況を回避し、教育環境の向上を求めて、平成 17 年 4 月から約 16 キロ離れた第一中学校に統合された。平成 17 年 3 月 27 日（日）には亀岳中学校の閉校式が行われた。閉校式では、第一部の式典に続いて、第二部では、長年、同校で伝承してきた田代神楽が亀岳中学校生徒によって披露された<sup>3)</sup>。

宮古市立亀岳中学校は、宮古市の北西部の田代地区に位置しており、田代地区の西には岩泉町、新里村に接する亀岳山（標高 1,112m）、峠の神山（標高 1,229m）がそびえており、これらの山々からの田代川とその支流沿いに田代地区が形成されている。教育熱心な地域であり、田代剣舞、田代神楽の郷土芸能伝承にも力を入れてきた。亀岳中学校は、明治 9 年に田代小学校として創立され、明治 31 年には亀岳尋常小学校に改称。戦後の学制改革で名称は変わるが、昭和 23 年に宮古市立亀岳中学校が設置される。昭和 63 年 3 月 郷土芸能（田代念仏剣舞、田代神楽）伝承活動が市長表彰を受ける。平成 12 年 6 月には田代神楽の活動が文化庁ふるさと文化継承活動支援事業実施機関に認定され、また平成 12 年 10 月には田代神楽が「いわてパリ友好祭」にも賛助出演した。まさに熱心に民俗芸能を伝承し続けた亀岳中学校が閉校になり、それと共に田代神楽すなわち田代七ツ踊の伝承は難しくなった。しかし田代地区では地域の若者が力を合わせて地域で指導を続け、田代神楽や田代念仏剣舞の伝統を引き継いでいこうとしている。

田代神楽とは、亀岳中学校で取り組むようになった時に独自に命名したものであり、その源流は、本研究の研究対象の一つである黒森神楽のシットギ獅子の舞い込みの「七つ物」である。幸いにも平成 14 年度の国立音楽大学修士課程音楽教育専攻の浅井希久子が修士論文「亀岳中学校生徒たちによる田代神楽の継承活動」<sup>4)</sup>を VTR の映像付きで残していた。

筆者は、国立音楽大学の附属図書館から本論文を入手すると共に、添付されていた映像も視聴覚ライブラリーで見ることができた。田代神楽（田代七ツ踊）は、後述する中野七頭舞や中里七ツ舞のような華麗さには欠けるが、「七つ物」の動きの多い所作と真剣に道具捌きに取り組む生徒の表情に感動させられる映像であった。

さらに浅井論文から、次の二つの貴重な示唆を得ることが出来た<sup>5)</sup>。

その第一は、昭和 54 年に設立された田代郷土芸能保存会が田代地区に古くから伝わる田代念仏剣舞や神楽を伝承し、小・中学校の生徒に指導したようであるが、この保存会の中心メンバーである上坂良信、田代正一、皆川栄作の 3 人は黒森神楽衆として活躍しているという。つまり沿岸地域の「七つ物」は、ほとんどその源流が黒森神楽といわれているが、亀岳中学校で伝承されていた田代神楽（田代七ツ踊）は、直接、黒森神楽衆から指導を受けていたわけであり、最も原形に近い「七つ物」が舞われているといえよう。

その第二は、中野七頭舞などは黒森神楽のシットギ獅子をアレンジしたものといわれているが、浅井は田代神楽（田代七ツ踊）は黒森神楽の御堂入りを基にしていることが明らかになったと述べていることである。

この御堂入りは次項で述べる黒森神楽による「七つ物」の一つであり、神社の落成式等で踊られる儀礼的な舞いである。2 人 1 組 14 人の先頭に先達が 1 人付き、最後に道化が 1 人か 2 人加わる。この御堂入りの神事の中から基本的な所作を構成し、シットギ獅子や田代神楽が創られたようである。亀岳中学校の田代神楽（田代七ツ踊）では、男子が太刀、女子が扇と錫杖というように道具を 2 種類に限定して舞っていたが、本来の御堂入りでは、このほかに木の棒、長刀、杵、弓矢、手桶、鉞、すりこぎなどをもって舞う。

本研究の具体的な対象である中野七頭舞や中里七ツ舞などの岩泉地区の「七つ物」は、過去に遡るとシットギ獅子よりも以前に存在していた黒森神楽の御堂入りが原点だと考えられる。

まずは次項において沿岸地域の「七つ物」の源流である黒森神楽について述べることにしたい。

(資料) 浅井論文からイラスト付きの田代神楽(田代七ツ踊)総譜の一部

\*なおこの太鼓のリズムと笛の旋律は、神楽系の全ての「七つ物」を特徴づけているものである。

### 田代神楽・1番手

採譜：浅井希久子

笛

太鼓

踊り

ダントン ダコスコダコスコダコスコダントン ダコスコ スコス スニコダントン

ダコスコ スコス スニコダントン ダコスコ スコス スニコダントン ダコスコ スコトコダン

2小節くり返し

#### 【注および参考文献】

- 1) 教育委員会による調査については平成 14 年度版と平成 16 年度版のデータを手に入れているが、本報告書では新しいデータを含む平成 16 年度版によって分析を行う。因みに岩手県文化財愛護協会でも「県内小・中学校と郷土芸能」の調査を継続的に実施しており、筆者はこれらの調査結果も入手している。
- 2) 教育委員会による「伝統芸能調査」は、高い回収率の確かに膨大な資料ではあるが、それでもなお岩手県内の小・中学校に関する 100 パーセントのデータとは言えない。また「伝統芸能調査 2」については自由記述のため詳細に書く学校やほとんど白紙の学校もあり、また他の演目の中に「七つ物」が隠れてしまう場合もあり、県内全ての学校における「七つ物」の伝承活動を取り上げることは難しい。
- 3) インターネットにも亀岳中学校の閉校式の式次第が紹介されているが、式の中で田代神楽や田代念仏剣舞が披露されたようである。
- 4) 浅井希久子修士論文「亀岳中学校生徒たちによる田代神楽の継承活動」平成 14 年度の国立音楽大学修士課程音楽教育専攻、国立音楽大学附属図書館所蔵
- 5) 同上、pp.68-70 参照。

### 3. 黒森神楽と「七つ物」

#### 1. 陸中沿岸地域の廻り神楽

現在の釜石市から久慈市の南にかけての北沿岸地域には多くの山伏神楽が伝えられており、神社のまわりの集落を様々な神楽衆が短期巡行していた。山村地域では、昭和 20 年代頃まではかなり長い巡行をする神楽があったが、現在では昔から長期巡行を行っていた宮古市黒森神社の黒森神楽と普代村鵜取神社の鵜取神楽は、今なお巡行を続行している。

岩手県の神楽は修験者による山伏神楽に分類されているが、黒森神社と鵜鳥神社は、直接的には山伏がかかわっていない俗別当持ちの神社であった。しかし両神社には間接的に修験者が関与していたともいわれている<sup>1)</sup>。

黒森山と鵜取山は三陸沿岸を南北に分けた霊山であり、ここを拠点とする黒森神楽と鵜取神楽は、隔年で南北廻りを交互に分担している廻り神楽（巡行する神楽）である。この地域の神楽衆の中から舞の上手や囃子の上手をスカウトして長い巡業を行う黒森神楽と鵜取神楽には、当然ながら多くの集落から選りすぐりの神楽衆が集まっており、各地域の神楽衆は、この両神楽にスカウトされるのを誇りにしている。

正月から 2 ヶ月以上にもわたる期間を廻り歩くという長期の巡行が行われているのは、現在では陸中沿岸地域のこの両者の神楽だけになってしまった。この二つの神楽も、かつては秋に巡行に出発して年の暮れに一旦それぞれの地域に戻り、小正月頃に再出発して春の農作業が始まる 4 月頃までの約半年間という驚くほど長期間の巡行を行っていた。しかし現在では、神楽衆も平日は勤務がある人ばかりになり、神楽を迎える神楽宿の人も勤務に出ていることが多いため、土・日を中心に廻らざるを得なくなっている<sup>2)</sup>。しかし現在でも 1 月の初めには舞い立ち、2 月末から 3 月初めまで巡行するため、神楽衆にとって 1・2 月は、平日は仕事に勤務して週末に神楽を舞うという大変多忙な強行スケジュールの中で巡行の伝統が続けられているのである。

鵜取神楽と黒森神楽の両神楽はそれぞれの拠点である鵜取神社と黒森神社から出発して、隔年で交互に北廻りと南廻りを担当している。黒森神楽の場合、宮古から久慈あたりまでを北廻り、宮古から大槌辺りまでを南廻りといっている。

筆者は、平成 16 年の 2 月に本研究のフィールドワークのために小本地区に出向いていた時に、宿泊していた小本温泉が神楽宿として北廻りの黒森神楽を迎えるという場面に遭遇することができた（資料参照）。迎える前夜には温泉の脱衣場の床の張り替えが行われ、まさに黒森神社の神様が当地に来て下さることへの感謝を込めた準備が行われていた。この廻り神楽の黒森神楽（三上敏保存会会長）は、2006 年 3 月 15 日に官報告示によって国の重要無形民俗文化財に指定された。しかし近年、経済的負担のかかる神楽宿は次第に減少傾向にあり、廻り神楽の伝統の継続は決して容易なことではないようである。

黒森神楽の神楽衆である田中大喜の説明から、巡行中の神楽衆の一日のスケジュールを追って

みると、およそ次のような流れのようである<sup>3)</sup>。

#### ＜巡行中の一日のスケジュール＞

- ①昼前直前に神楽宿に入り、夕方まで宿周辺の民家を廻って門打ち（権現様をもって集落を廻り家々の安泰を願う祈祷）をする。
- ②3時か4時頃までに神楽宿に戻り、権現様に供えるシットギや神楽で使う幣束を作ったり舞い込みの準備をする。
- ③日が沈み暗くなり始めた頃に舞い込みを行う。  
\* 舞い込みとは権現様が泊まる宿の玄関先で行う最初の儀式である。シットギ獅子舞い込みと普通の舞い込みの2種類がある。
- ④舞い込みの後は宿主との再会を祝福しながら夕食を取るが、この時、神楽衆全員で感謝の気持ちを表す御祝いの歌を歌う。
- ⑤夜の7時頃から11時頃まで夜神楽を行う。  
\* 昔は夜の12時過ぎまで行っていたが、今は神楽宿への配慮から10時か11時頃までで切り上げている。
- ⑥翌朝起床すると、まずは権現様に供えてあるシットギをお洗米（米を水で洗い研いだもの）に取り替えて、権現様にかませる。
- ⑦この後で神楽衆と神楽宿の両者が権現様、神棚、仏壇を拝んでから朝食を取る。この時も神楽衆全員で御祝いを歌う。
- ⑧朝食後は門打ちの続きを行い、この後、宿に戻って舞い立ちの式を行う。この時、権現舞とシャシャ舞を舞う。舞い立ちの時刻は様々である。

神楽系の「七つ物」は、主に黒森神楽の御堂入りや上記③のシットギ獅子舞い込みを基本にして新しく創作されたものである。このシットギについては後述する。

ところで権現とは、天竺の仏が仮に神の姿に現ずるの意味から出た山伏の奉ずる神の汎称であり、山伏神楽では獅子頭を権現様の御神体と崇めているのである<sup>4)</sup>。黒森神楽も鵜取神楽も、それぞれの神社の権現様を神の化身として帯同して巡行する。つまり霊験あらたかな権現様と共にいる神楽衆は、神に仕える者たちとして歓待を受けることができるのである。

## 2. 黒森神楽

### (1) 黒森神楽の由来

宮古市の町並みから北側に位置する黒森山の中腹に黒森神社がある。かつては黒森の山は、その名の通り巨木に被われた薄暗い山だったようである。黒森神社には、古い棟札と獅子頭が残されており、今は現存しないが建久元（1190）年の棟札があったといわれ<sup>5)</sup>、800年以上前に建立された神社であることには間違いのないようである。

黒森神楽の巡行が何時頃から行われていたかについての正確な年月は不明である。権現獅子頭を掲げて祈祷しながら巡行して廻るようになったという記録が見られるのは、江戸時代中期の宝暦や寛政年間頃だと主張するものや<sup>6)</sup>、江戸前期の延宝年間(1680)あるいは寛文年間(1663~1679)までさかのぼるとするものなどがあり、神楽の巡行が開始された時期は特定できていない<sup>7)</sup>。しかしいずれにしても、約300数十年もの長期にわたって廻り神楽の伝統が継承されているのは事実であり、このこと自体に驚がされる。

ところでこの神楽巡行では、神楽の舞を行うこと以上に権現獅子頭を用いて祈祷を行うことが重視されている。黒森神楽の廻り村に関する資料には、「黒森権現別当権現回し」というような表記がなされていて、あくまでも権現廻しが主体であり、神楽は従ということらしい<sup>8)</sup>。

山伏神楽が行われている地方(秋田県、岩手県、青森県の一部)では、獅子頭のことを権現様と呼んで親しんでおり、権現様の呼称は一般化している。権現とは、かりに神様仏様が人間の目に見えるものとして「権に現れ」てきたものであって、神様そのものだという考え方である。したがって村人たちにとって、黒森神社の化身を奉じて、火伏せ、悪魔払いなどの祈祷をして村々を廻ってくれる権現様の威力は大きかった。神の化身である獅子頭は使われなくなっても大切に保存されている。現在、黒森神社には20頭の獅子頭が保存されているが、岩手県に残っている年紀のある最も古い獅子頭の一つが、現在も黒森神社に残されている室町時代の文明17(1485)年の獅子頭である。黒森神社には、これを筆頭に明治27(1894)年までの16頭がご隠居様として保存されており、現役として活躍している獅子頭は6頭である<sup>9)</sup>。

## ② 黒森神楽の儀礼とシットギ獅子

黒森神楽には多くの儀礼があり、「七つ物」の源流となったシットギ獅子も儀礼の一つに位置付いている。ところで権現様によらない儀礼と権現様による儀礼の2種類の儀礼がある<sup>10)</sup>。

### ① 権現様によらない儀礼

- ・「箸刈り」～食事が終わる頃、二人の神楽衆が皆の箸を取り上げ、立ったまま左手に持ったお膳を右手で打ちながら両者が向かい合って舞う。お膳を箸で打ち鳴らすというのは行儀が悪いようだが、これは歴とした儀礼の舞である。
- ・「後家の遊び」～南廻りの時、神楽衆が顔・手・口を清めてから権現様の前に正座して笛・太鼓・鐘にのって歌う。この時、テンポは次第に早くなるが、一人が上の句を歌い、全員で下の句をつける。最後は全員で二拍二礼する。

### ② 権現様による儀礼

- ・「舞い立ち神事」(巡行に先立ち神降ろしをして神社で行う神事)
- ・「舞い込み」(神楽宿に舞い込む時のシットギ獅子や普通舞い込み)
- ・「舞い込み」(神楽宿を立つ時の舞)
- ・「墓獅子および神楽念仏」
- ・「柱固めおよび新宅祝い」
- ・「厄払いおよび身固め」
- ・「門舞」(門打ちに同じ)

「馬屋祈祷」（馬屋祝いに同じ）

「蔵祈祷」（蔵祝いに同じ）

「船祈祷」（船祝い・船おろしに同じ）

「板おこし」（現在中断）

上記の他に事務所や作業場などの祈祷もある。

### ③シットギ獅子

黒森神楽の祈祷を伴う儀礼には、圧倒的に権現様による儀礼の方が多い。神楽宿に舞い込む時のシットギ獅子の中に、黒森神楽の「七つ物」が含まれている。

このシットギ獅子の流れは、次の通りである。

A「寄せ太鼓」（通り太鼓に同じ）：太鼓に合わせて舞い庭に舞い手が集合する。

B「七つ物」：複数の舞い方があり、剣、杵、すりこぎ、しゃもじなどを持ち庭の白を囲んで踊る舞。本来、ヤツハライ、薙刀、太刀、弓と矢、杵、扇と鈴、水汲みなどをもって踊っていたものである。

C「シットギ」：シットギ（米の粉を練ったもの）を白から杵やしゃもじやすりこぎに付け、見物人の額や頬にシットギを付けて回る。お守り（オマブリ）の意味がある。

D「シャシャ舞」：いくつか舞方があるが、権現様を手にする前に踊る舞。舞い手が二人出て、「たたみ扇」（右手にたたみ扇と錫杖をもつ）、「扇取りの舞」「末広」「車扇」（開いた扇と錫杖をもつ）などを舞う。舞の基本に「三足」「入れ違い」「構え」などがある。「三足」は左右の足で爪先・踵・爪先と踏むものでジンバイとかケンバイとかいわれており、その名称の響きから岩手県の人気芸能である剣舞と関係があると推測させられる。また後述する本研究の中心である中野七頭舞や中里七ツ舞にも、動きの激しい重要な舞として三足<sup>みあし</sup>（鳥居がかりともいう）が含まれている。

E「権現舞」：二頭の権現様で二人の舞い手が華麗に舞う。

以上がシットギ獅子舞い込みの流れであるが、もう少し C の「シットギ」について説明しておこう。「シットギ」とは、いわゆる「しとぎ（糰）」のことであり、白米を水にひたして柔らかくしたもので、湿らせた食物の意味であろうといわれている<sup>11)</sup>。

現在では棟上げ祭や冬の初めの山の神祭や祭礼のみに使われるだけである。この「しとぎ（糰）」は「シットギ」と同義である。黒森神楽では、神楽宿に入る時の儀礼に舞い込みがあるが、「シットギ」は権現様の好物と考えられており、シットギ獅子舞い込みでは、見物人の前でシットギを作り、権現舞を舞った後でお供え用のシットギの残りを見物人のおでこや鼻や頬など顔になすり付ける。これは神様が付けてくれる印であり、この印を付けてもらうとその年は元気に過ごすことができると考えられている。筆者が平成 16 年に小本温泉の玄関前で黒森神楽のシットギ獅子舞い込みの取材をした時、神楽衆がビデオを構えている筆者の額にもシットギを塗りつけてくれたのが鮮明に印象に残っている。

シットギ獅子の「七つ物」が神楽衆によって沿岸地域の村々に広がり、それぞれの村で独創的に洗練され風流化したものが、中野七頭舞や中里七ツ舞などの神楽系の「七つ物」である。

### (3) 御堂入りと「七つ物」

2の3「宮古市立亀岳中学校の田代神楽（田代七ツ踊り）」の項で触れたように、亀岳中学校の田代神楽は、黒森神楽のシットギ獅子を基にしたというよりも、黒森神楽の「七つ物」の一つである御堂入りを原型としている舞であった。この御堂入りとはどのような舞なのであろうか。

1996年6月19日に鶴鳥神楽と黒森神楽が「陸中沿岸地方の廻り神楽」として、文化庁より「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定された。これを受けて東北文化財映像研究所（代表：阿部武司）は、1997年から1999年までの3年間にわたって、黒森神楽と鶴鳥神楽の廻り神楽の映像を記録した<sup>12)</sup>。この事業の報告は、第4回民俗芸能研究協議会報告書で発表されているが、これによると記録事業を通して復活できた演目の中に儀礼の御堂入りの名前が挙げられている<sup>13)</sup>。御堂入りは、何と50年以上の年月を経て亀岳中学校全校生徒によって復活をしたということである。

この事業の最終年には報告書の完成を受けて、1998年の10月31日から11月2日に、「鶴鳥神楽・黒森神楽大競演～『陸中沿岸地方の廻り神楽』地域伝承活動事業発表会～」が、変化に富む美しいリアス式陸中海岸の中央に位置する姉ヶ崎にある宿泊施設の休暇村陸中宮古で開催された。同時に、この期間中に後援団体の一つである民俗芸能学会平成10年度大会も開催された。

この競演会のパンフレットには神楽衆名簿の中に「七つ物出演の亀岳中学校の生徒」として亀岳中学校の全校生徒12名の名前が掲載されている<sup>14)</sup>。亀岳中学校の12名は、1998年11月2日に休暇村陸中宮古の玄関前で約1時間にわたって御堂入りを復活・披露したのであった。この当日に、御堂入りの資料としてプリントが配布されている。黒森神楽の「七つ物」に関する貴重な資料であるため、ここに紹介しておく<sup>15)</sup>。

#### ①採り物

谷地払い（木の棒）、長刀、太刀、小鳥（弓矢）、扇・錫杖、手桶（汐汲み、桶担ぎ、花籠）、鉞（まさかり～先達がもつ）、すりこぎ（道化がもつ）

#### ②「七つ物」の種類 \* 黒森神楽の中の「七つ物」を踊る場面を示している。

- ・御堂入り（基本の舞）：神社仏閣の落成式や新築祝いに踊る。
- ・シットギ獅子：神楽宿に舞い込むときに舞う。
- ・弔い：神楽関係者の葬式の時に舞う。この時は杵を使わず、駒使いと道化（爺と婆の2名で泣き男と泣き女になる）が入る。
- ・祭りの神幸：一緒に歩く。
- ・神楽念仏

#### ③御堂入りの神事

- ・一番庭（法立て）
- ・二番庭（道具取り）
- ・三番庭（舞い込み）
- ・四番庭（鳥居がかり）
- ・五番庭（五方の矢）

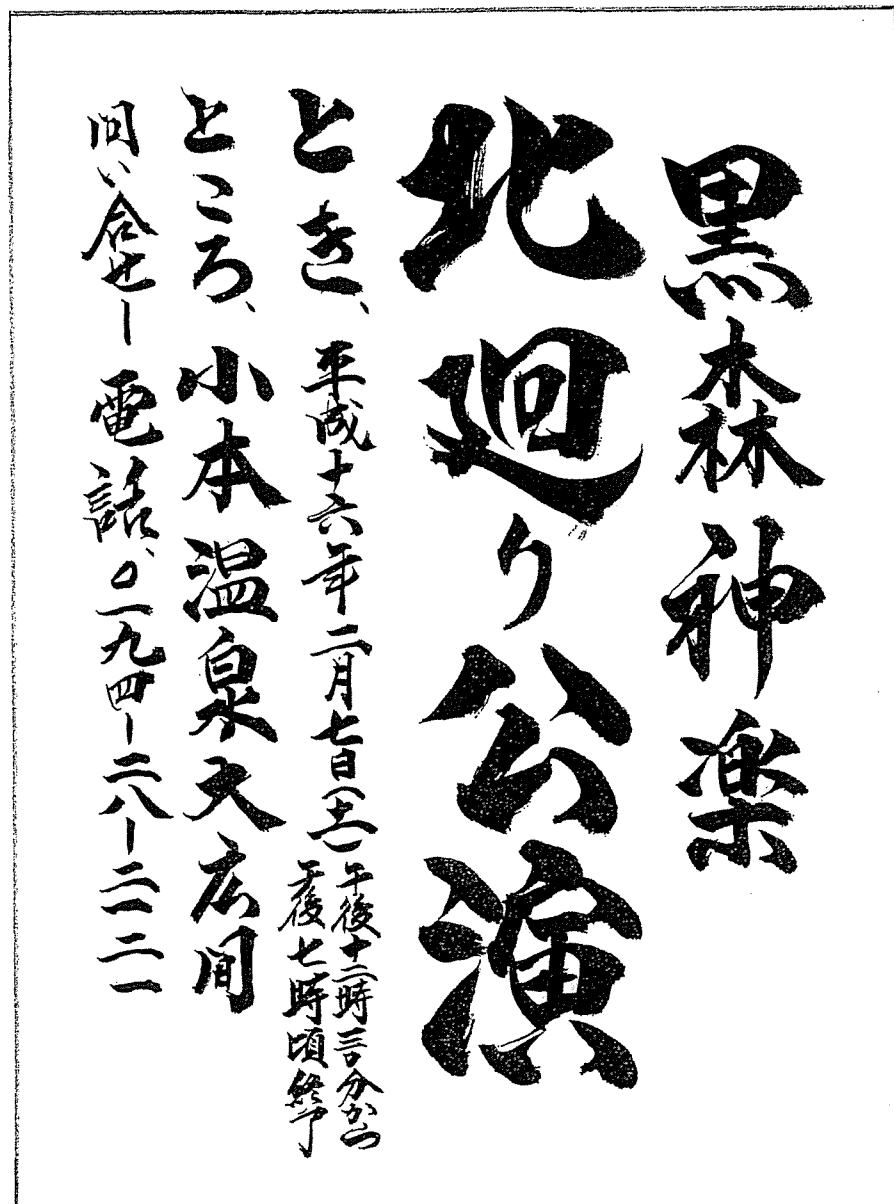


- ・六番庭（舞い込みの後庭）
- ・七番庭（道具納め＊使っていた道具をその家に納める）
- ・鉞（まさかり・先達が持つ）
- ・すりこぎ（道化が持つ）

以上の御堂入りの神事の中でも、一番・二番・五番・七番庭には儀礼的な要素が多く含まれているため、主に三番・四番・六番庭の踊りの所作がシットギ獅子や田代神楽に反映されている。しかし神楽系の「七つ物」では、どこの「七つ物」においても道具取り舞は精神性の高い重要なものとされており、本来、儀礼的な要素が強いものであったからこそ、道具取り舞はそれぞれの「七つ物」を最も特徴づけていると考えられる。

さて本項目の資料として、2004 年 2 月に筆者が本研究のフィールドワークのために宿泊していた小本温泉が神楽宿となって行われた黒森神楽北廻り公演のチラシを掲載しておこう。

（資料）



【註および参考文献】

- 1) 平成 10 年 10 月 31 日と 11 月 1 日に宮古市で開催された「鵜鳥神楽・黒森神楽大競演」のパンフレット（1 頁）参照。
- 2) 盛岡かぐら応援隊『明解！かぐら講座 入門編第一回 黒森神楽編』2002 年、15 頁。この小冊子は、盛岡かぐら応援隊が黒森神楽保存会の田中大喜を講師として、インタビューした内容をそのまま掲載した全 31 頁の小冊子である。
- 3) 同上、16~17 頁参照。
- 4) 仲井幸二郎他『民俗芸能辞典』、東京堂出版、189-190 頁。
- 5) 宮古市教育委員会編『陸中沿岸地方の廻り神楽～鵜鳥神楽・黒森神楽』1999 年、18 頁。
- 6) 宮古市教育委員会『宮古市史 民俗編（下巻）』1994 年、13 頁。
- 7) 宮古市・田老町教育委員会『黒森神楽』1982 年、7 頁。
- 8) 前掲書 6) の 12 頁。
- 9) 前掲書 5) の 18 頁。
- 10) 前掲書 6) の 42~44 頁および 51~52 頁を参照されたい。
- 11) 大塚民俗学会編『日本民俗事典』「しとぎ」の項目（319 頁）参照。
- 12) 筆者は、幸いにも『陸中沿岸地方の廻り神楽の記録 黒森神楽と鵜鳥神楽 周知普及版』を入手することができた。この映像資料には廻り神楽の様子が詳細に描かれている。
- 13) 独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所『第 4 回民俗芸能研究協議会報告書～民俗芸能の記録作成の方法と活用について～』2002 年、7 頁。なお本報告書には阿部武司による事例報告（9~18 頁）および映像記録に関する資料（76~83 頁）が掲載されている。
- 14) 「鵜鳥神楽・黒森神楽大競演～『陸中沿岸地方の廻り神楽』地域伝承活動事業発表会～」23 頁。なおこのパンフレットは全 24 頁の小冊子である。なおこの時の亀岳中学校の生徒による御堂入りの記録映像は阿部武司から入手することができた。
- 15) このプリントは、インターネット（[http://www.asahi-net.or.jp/~kp4h-nrt/nanazumai/sacki\\_bun13.html](http://www.asahi-net.or.jp/~kp4h-nrt/nanazumai/sacki_bun13.html)）で入手することができる。

## 4. 小本小学校と四つの「七つ物」

### 1. 小本地区と「七つ物」

盛岡市から東北に約 55 キロメートル、宮古市からは西北約 25 キロメートル隔てて、下閉伊郡のほぼ中央に位置する町が岩泉町である。明神山や黒森山などいくつかの山があり、西から東に蛇行しながら流れる小本川流域には、耕地や部落が生まれ発達した。

この地域に小本小学校およびその分校である大牛内小学校がある。小本小学校では、地元の保存会の協力を得ながら、1979（昭和 54）年に「第 1 回七頭舞発表会」が行われて以来、現在に至るまで毎年、七頭舞発表会が行われている。この七頭舞発表会には中野七頭舞の他に、大牛内分校の大牛内七ツ舞も参加していた。そして 1997（平成 9）年の「第 20 回七頭舞発表会」からは中島分校が小本小学校に統合され、中島地区で傳承されていた中島七ツ舞も発表会に仲間入りした。また 2003（平成 15）年には中里分校も統合され、中里七ツ舞も発表会に加わるようになった。すなわち小本小学校では、分校も含めると、この 4 種の「七つ物」（七頭舞、七ツ舞）の傳承活動を行っているのである。なかでも小本小学校における中野七頭舞の傳承活動は歴史が古く、1985（昭和 60）年には 1 年生から 6 年生までの七頭舞発表会に関する作文を掲載した手づくりの『20 周年七頭舞記念文集』を小本小学校で発行している。七頭舞発表会は現在に至るまで継続しており、2005（平成 17）年度の発表会は、第 28 回という学校の傳承活動としては立派な校内傳承史を形成してきている。

ところで小本地区近辺には、いくつかの「七つ物」が傳承されている。この地区の「七つ物」には、次のような特徴が認められる。

- ①本来の「七つ物」の踊り以上に勇壮活発で全般的にテンポも早い。
- ②7 種類の踊りがあるが、剣舞のようにテンポを変えない。
- ③お囃子は、太鼓、横笛、当たり鉦で演奏される。（かつて三味線が入ったこともあった。）
- ④踊りの構成は、先打ちは 1 人、谷地払いなど他の 6 役は 2 組で 7 種類の踊りを舞う。
- ⑤神楽系統であるが神楽舞ではなく神歌も念誦しない、また仏教の念仏供養的な面もなく、歌が入らない全く独特なものである<sup>1)</sup>。

中野七頭舞保存会の前会長の山本恒喜によると、小本地区の中島、中里、岸、栃ノ木、猿沢地区に伝わる「七つ物」は、かつて多様な呼称や表記が用いられていた。例えば、七角刀、七づ物、七つもの、七頭毛（七づもう）、七づもん、七ずまい、七づ舞などさまざまであった。しかしあまりにも煩雑であたったため、昭和 51 年に現在の中野七頭舞保存会が結成されるにあたり、踊りに使う 7 種類の道具や 7 種の演目にあやかって、現在の七頭舞（ななづまい）に決定したということである<sup>2)</sup>。

現在、小本小学校で傳承している 4 種の「七つ物」の内、中野七頭舞以外の「七つ物」は全て七ツ舞である。小本小学校では、年に一度の発表会が 4 種の「七つ物」の発表会の場になっても、

第1回から変えることなく七頭舞発表会と呼んでいる。もともと小本小学校で伝承されていた中野七頭舞を代表させているのであろう。これらの4種の七頭舞や七ツ舞に関する由来や演目等について、簡単に述べておきたい。

## 2. 小本小学校で伝承している「七つ物」

前述したように、小本小学校では、中野七頭舞、中里七ツ舞、中島七ツ舞の3種の「七つ物」の他に、小本小学校大牛内分校の大牛内七ツ舞を加えると四つの「七つ物」の伝承活動にかかわっている。これらは全て黒森神楽の系統につながっており、その伝承プロセスは違っていても、全て親戚の舞といえるものである。

「七つ物」は、基本的には使う道具や演目（舞の種類）が七つであるが、既に途絶えてしまった舞もあり、現在では中野七頭舞以外の三つの七ツ舞で伝承されているのは六つの舞である。またこの4種の「七つ物」は、役割や道具や舞の種類に共通しているものが少なくないが、表記を含めて役割や舞の種類や名称が違っている。それぞれの七頭舞・七ツ舞は、長い歳月の中で伝統ある独自のスタイルを築きあげてきており、この4種の「七つ物」を一つに統一することなどは全く考えられないほどに、それぞれが独自の美しさとパワーをもっている。

ここでは四つの「七つ物」の概要を述べたい。なお舞の種類では、「～舞」の「舞」の文字を省略している場合が多いが、ここでは各保存会が使っている標記をそのまま用いることにする。

### (1) 中野七頭舞

小本小学校では、1979（昭和 54）年から学校内で上級生が下級生に教える伝統を創り上げながら中野七頭舞の伝承活動を行ってきた。中里地区や中島地区の小学校が小本小学校に統合された後も、中野地区の児童数が一番多く、かつ中野七頭舞そのものの知名度も高いことから、どうしても中野七頭舞が中心という印象が強い。

中野七頭舞の由来については次項で詳しく述べるが、天保年間（1830~1843）に中野地区に多方面に優れた才能をもつ太夫爺という人が住んでおり、この人物から芸能の伝授を受けて後に神楽太夫と呼ばれたのが中野七頭舞の創始者、工藤喜太郎であった。この喜太郎の孫で学校の教員だった工藤竜山は、昭和 51 年に「神楽太夫 喜太郎略伝」と「中野七頭舞の由来」<sup>3)</sup>を書き残している。これによると喜太郎は自らが創始した七頭舞を「七頭舞（も）う」と呼んでいたという。喜太郎は神楽舞いの一種であるシットギ獅子舞いを基に独自の中野七頭舞を編み出した。

誕生当初は神楽で踊られていたが、時代を経て村の祭典などで奉納されるようになった。現在では毎年、白山神社に舞いを奉納している。勇壮で華やかな中野七頭舞は、五穀豊穰・家内安全・大漁祈願を願って舞われている。

中野七頭舞には、原野を開拓するために精一杯働き豊作を共に喜ぶといった一連の流れがある。

○役割：先打ち・谷地払い・ナギナタ・太刀・キネ・小鳥・ササラスリ

○舞の種類：「道具取り」「横跳ね」「チラシ」「戦い」「ツットウツ」「三足（鳥居がかり）舞」「道具納め」

## (2) 中里七ツ舞

中里七ツ舞も中野七頭舞同様に天保年間（1830~1843）から岩泉町中里地区に伝わる七ツ舞で、黒森神楽で家々に舞い込むときの先払い芸能から風流化したものである。太刀や薙刀など7種の道具や武具をもって神の道案内をする様子を表現しており、五穀豊穡・家内安全・大漁などを祈る勇壮かつ優雅な舞いである。当時、中里神楽の継承者で神楽太夫と呼ばれた武田新九郎がこの踊りを創始した。昭和15年頃まで加藤円之丞によって50年以上も継承されたが、その後は次第に下火になり、平成に入ってから武田由起子が保存会の会長として地元の小・中学生によって中里七ツ舞の復活伝承を試み、現在は統合された小本小学校と地元の保存会で小・中学生を中心に伝承されている。

○役割：先打ち・谷地払い・薙刀・太刀・杵・おかめ・ひょっとこ

○舞の種類：「道具取り舞」「横ばね」「組ちらし」「ちらし」「鳥居がかり」「五方の矢」「道具納め」

## (3) 中島七ツ舞

中島七ツ舞もまた、神楽舞から創られたものである。神代の初めに神々が高間の原に降りて、七つの道具をもちながら、御神体が進む道を払い清め、悪霊や邪気を取り除きながら前進した様子を表現した踊りで儀式的な面が多い。今から約180~200年前の文化文政年間（1804~1829）の頃から絶えることなく続いてきたといわれており、4種の「七つ物」の中では一番古い歴史をもつと考えられている。岸に住んでいた武田敏雄の父親が山伏であり中島七ツ舞を広めたが、岸七ツ舞は途絶えている。年越しの夜には鼻筋にシットギを付けて踊るが、これは「ハナサカセ」の意味である。人が亡くなった時には、平服でその家の庭先で舞って魂を供養したという<sup>4)</sup>。

○役割：先打ち・谷地払い・なぎなた・太刀・杵・鳥

○舞の種類：「道具取り舞」「横ばね舞」「鳥居がかり舞」「ちらし舞」「組ちらし舞」「道具納め舞」

## (4) 大牛内七ツ舞

大牛内七ツ舞は、大牛内開拓時代に中里から入植した中里七ツ舞の創始者である武田新九郎が、大牛内の青年たちに教えた舞であり、岸神楽の「八つ祓舞」の末流ともいわれている。五穀豊穡・家内安全・大漁などを祈願して舞われてきたものである。

戦後、一時、20数年間にわたって途絶えたことがあるが、1975（昭和50）年第9回岩泉町郷土芸能大会に小中学生を中心とした舞い手に編成して参加を果たして以来、現在に至るまで伝承されている。天孫降臨に際してニニギノミコトなどの多くの神々は供奉して高天原に下った時に神旗を先頭に七つ道具で大地を切り開き、悪魔を払いながら進んだ様子が舞で描かれている。

○役割：先打ち・谷地払い・薙刀・太刀・杵・鳥・おかめ・ひょっとこ

○舞の種類：「道具取り舞」「横ばね」「鳥居がかりちらし」「組ちらし」「五方の矢」「道具納め」

これらの「七つ物」は、いずれも太鼓、鉦、笛の伴奏で踊るが、舞い手は太鼓のリズムを捉えて所作を覚えるため、音楽的には太鼓が最も重要な役割を担う。極言するならば、太鼓さえしっかりリズムを刻んでいれば、正確に舞うことが可能な舞なのである。

(表1) 4つの七頭舞の舞い手と舞の種類一覧表

	中野七頭舞	中里七ツ舞	大牛内七ツ舞	中島七ツ舞
役割・道具	先打ち 谷地払い 薙刀 太刀 キネ 小鳥 ササラスリ	先打ち 谷地払い 薙刀 太刀 杵 扇子 おかめ ひょっとこ	先打ち 谷地払い 薙刀 太刀 杵 鳥 おかめ ひょっとこ	先打ち 谷地払い 薙刀 太刀 杵 鳥
舞の種類	「道具取り」 「横跳ね」 「ちらし」 「戦い」 「ツットウツ」 「三足（鳥居がかり）」 「道具納め」	「道具取り舞」 「横ばね」 「組ちらし」 「ちらし」 「鳥居がかり（全体三足）」 「道具納め舞」	「道具取り舞」 「横ばね」 「鳥居がかりちらし」 「組ちらし」 「五方の矢」 「道具納め」	「道具取り舞」 「横ばね舞」 「鳥居がかり舞」 「ちらし舞」 「組ちらし舞」 「道具納め舞」

### 3. 七頭舞・七ツ舞の役割と踊りの意味

小本小学校に伝承されている4種の七頭舞・七ツ舞は、全体的に＜開拓の様子＞を踊りで表現しており、7種の役割と道具および各踊りには、それぞれの意味が込められている。4種の七頭舞・七ツ舞で多少ニュアンスが多少違って、基本的に各道具にはそれぞれ同じような役割をもっている。記念文集『第20回七頭舞発表会のしおり』（小本小学校編）<sup>5)</sup>と20周年記念誌『日本の大地に舞う』（中野七頭舞保存会編）<sup>6)</sup>をもとにしながら、役割と道具および各踊りの意味についてまとめておきたい。

#### (1) 役割と道具の意味

①先打ち：神に捧げる御幣束のようなものを棒の先端につけた道具

先頭に立って、荒野をかき分け、前に進む。

②谷地払い：先打ちより長い壕で両端に飾りが付いた道具

先打ちの指示に続いて、左右の木の枝や草を払いながら、荒れ地を改良する。

③薙刀：柄の両端に飾りを付けた薙刀

木立を切り倒し、獣を追う払うよう力強い動きを行う。

④太刀：文字通り刀で、柄のところに飾りが付けたもの。

みんなの田畑が荒らされないように太刀をもって見張りをする。

⑤杵：もちつきの杵を踊り用に洗練した道具

道を固める、または豊作となり餅つきのお祝いをするように回す。

⑥小鳥：右手に弓と左手に扇

弓で点からの悪魔を射り、また豊作の喜びを扇で表す。

⑦ササラスリ：中野七頭舞は面を頭の横につけて櫛と扇をもつ。

⑧ひょとこ：中里七ツ舞、中島七ツ舞

なお中里七ツ舞や中島七ツ舞では、みんなを慰め、疲れを取るように面白おかしく踊る。

## (2)それぞれ舞の意味

七頭舞・七ツ舞にはいくつかの踊りがあるが、それぞれが区切って踊られるのではなく、短い区切りはあっても、全体的には一連の繋がりをなして流麗に舞われる。各踊りは、次に示すような意味をもっており、舞い手はこれを理解して自らの動きに反映させている。

### ①「道具取り舞」

七頭舞を踊る時、神社に奉納されている七つの道具を下ろし、境内で踊る舞である。

### ②「横跳ね」

全ての始まりを意味しており、開拓するための人材を揃えるという意味ももたせている。このため先打ちを先頭にして舞うが、太鼓は仲間が揃うまでリズムを打ち続けながら待つ。

### ③「ちらし」

踊りと踊りの間に入れるもので、疲労回復や呼吸調整のための動作である。実際には決して楽な動きではなく、次の踊りのための心の準備のためのものとする。ちらし舞では前項で述べた各道具の特徴が際立って見られる。

### ④「戦い」（「組ちらし」）

田畑を開拓する際に妨げになる物や獣などとの戦いを意味する踊りである。この他、戦いの舞の中には、チームを乱すものや自分自身の怠け心に対する戦いも意味しているといわれている。

### ⑤「ツットウツ」

「ツットウツ」は中野七頭舞のみで踊られており、中野七頭舞の中で最も体を使う難しい部分とされている。汗を流しながらみんなで労働を行っている様子を表しており、この踊りの不思議な呼称は、太鼓の口唱歌から由来している。

### ⑥「三足（鳥居がかり）」

「三足」または「鳥居がかり」といわれている最後の舞は、神社の鳥居の前で踊る舞であり、神様に豊作の感謝を表すものである。一人で2回ずつ踊るが、向かい合ってリズムカルに踊る。

### ⑦「道具納め舞」

「道具取り舞」と同じ踊りで、踊り終えてから再び神社に道具を納める時に踊るもの。通常の公演では省略されることの方が多いようである。

#### 4. 小本小学校の取り組み

小本小学校は、教職員数 12 名、学級数 6、児童数 87（2005 年現在）の学校である。1979（昭和 54）年の「第 1 回七頭舞発表会」以来続いている発表会は、平成 17（2004）年度で第 28 回を迎えた。つまり 28 年間にわたって、地域の人々と連携しながら七頭舞発表会を継続してきたのであり、公立小学校としては大変な努力を重ねながら学内伝承という伝統を創り上げてきている。

小本小学校における「七つ物」の取り組みについては、吉田敏子校長および鈴木司一教頭から伺った話をまとめて報告したい。

##### (I) 伝承活動のねらいと練習計画

小本小学校では、長年、次のようなねらいのもとで「七つ物」に取り組んできている。

地域の伝統芸能である七頭舞・七ツ舞を上学年から下学年へと伝承することにより、郷土理解と郷土愛を培うとともに、2 月の発表会へ向けて踊りを覚え、質の向上を図る。

毎年、2 月の七頭舞発表会に向けて、11 月から 2 月までの月・水・金の昼休み（13:00～13:25）とクラブの時間および総合的な学習の時間に、3 種の七頭舞・七ツ舞の練習時間を均等に割り振って練習を行っている。練習場所は、体育館、音楽室、図書室の 3 カ所を当てているが、音楽室も図書室もさほど広くはないため、練習の仕方を工夫して踊りに取り組んでいる。

小本小学校では総合的な学習の時間を「浜っ子タイム」と名付けており、「ものとのかかわり」・「人とのかかわり」・「こととのかかわり」を柱にさまざまな活動を行っているが、七頭舞・七ツ舞の取り組みは、「浜っ子タイム」の「こととのかかわり」に位置づけられている。4 年生以上の総合的な学習の時間のテーマは次のようなものである。

##### < 総合的な学習の時間（「浜っ子タイム」） >

「こととのかかわり」	4 年生	「受け継ごう地域の伝統芸能」
	5 年生	「磨こう地域の伝統芸能」
	6 年生	「伝えよう地域の伝統芸能」

小本小学校が 28 年間にわたって伝承し続けてきた中野七頭舞については、上学年が 4 年生に教えて、4 年生から七頭舞発表会にデビューすることになっている。まさに総合的な学習の「受け継ごう地域の伝統芸能」というテーマが生きているといえよう。しかし統合によって小本小学校で伝承活動を担うことになった中里七ツ舞や中島七ツ舞は、中里地区や中島地区の子どもたち全員が参加しなければ七ツ舞の形態は維持できないため、七頭舞発表会には、中里地区と中島地区の低・中学年の子どもたちも参加している。したがって「受け継ごう地域の伝統芸能」の志は低学年の時期から実質的に受け継がれることになる。特に子どもの減少が著しい中里七ツ舞も、近隣の宮本地区や岸地区の子どもを巻き込んで、何とか学内伝承を続けている状態である。



## (2) 衣装や飾り物

小本地区の中野七頭舞の場合は、先打ち、薙刀につける和紙の飾りは子どもたちと保護者で作る。七頭舞発表会の分は保護者の時に保護者が作るが、運動会の時には、子どもたちも親たちと一緒に道具の飾りを製作している。この道具飾りは、色・大きさ・順番・切る方向などが決まっている。因みに中野七頭舞の場合は、内側から外側に向けて「金・銀・黄・白・赤・緑色」というように色の順番が決められている。

烏帽子については、4年生になると自然に烏帽子をつけたいという希望が強くなるので、その気持ちを尊重して冬休み前に作り方を指導しておき、冬休み中に子ども自身の手で作るよう促している。

中里七ツ舞や中島七ツ舞の場合は、人数も少ないので、飾りは保存会で作っている。

## (3) 小本小学校の教師の取り組み

小本小学校の先生たちは、全員で三つの地域のどこかを担当して練習に立ち会っているが、一つの地域に偏らないように、何年かで担当地域を交替するようにローテーションを組んで担当するという工夫を行っている。

小本小学校の先生方も校内研究会で踊りの練習を行っているが、校内研究会では校内で踊れる先生が講師となって教師も舞の練習に奮闘している。また保存会の人々が来校して指導して下さる時には、教師も子どもたちと一緒に踊りを覚える努力をしている。

大牛内分校の場合は、全教職員が5名、3学級で児童数16人の小規模校であるが、現在、太鼓をたたける教師もいるし、全員の教師が大牛内七ツ舞を踊ることができるということである。

七頭舞発表会のプログラム（冊子）については、毎年、踊りの解説などを印刷する前に4種の七頭舞七ツ舞の会長さんに目を通してもらい、齟齬のないように心がけているということである。

## (4) 教頭・校長の話

鈴木教頭と吉田校長に、3種類の七頭舞を継承しているメリット・デメリットについて伺ったところ、以下のような回答を得ることができた。

### ① 鈴木教頭の話

#### <良い点>

- ・舞が違って、お互いに見合い、学び合い、舞に向かう心構えや気持ちを高め合っている。
- ・七頭舞発表会では4種の舞が見られるので地域の方々は大変楽しみにしており、保護者の方々は協力を惜しまない。着付けはご父兄（母親）が行い、本番では子供の化粧もしてくれる。
- ・教育課程に位置づけることによって、教師間の共通理解が得られ、同一步調で教育活動を行うことができる。

#### <難しい点>

- ・地域による人数のバランスの悪さがあって、舞が成立しなくなるのが問題である。先打ち以外の6組が2人ずつなので踊りに13名必要なのが大変である。
- ・今年は中野地区の子供が減ったため、例年、学年別に発表していた中野七頭舞が5・6年合同の形になった。今後もこのような形になっていく可能性がある。

## ②吉田校長の話～七頭舞・七ツ舞を取り上げる意図

- ・地域を愛する子どもを育てたい。子どもも地域の良いところを知らなければならない。
- ・子どもたち同士で教え合うことを学ばせたい。
- ・この取り組みで先生方の気持ちが一つになることを期待したい。

両者共に民俗芸能の伝承活動を教育活動の柱に据えて、教師間の連帯意識の向上も期待していることがわかる。果たして小本小学校の先生方はどのような気持ちで、この三つの七頭舞・七ツ舞の伝承活動に関わっているのかについては、後でアンケートの結果から探ってみよう。

## 5. インタビューによる子どもの意識

地区毎に違う七頭舞・七ツ舞を伝承している子どもの意識を探るために、4地域の子どもを対象とするアンケート調査を小本小学校に依頼した。しかしながら地域差が出ると問題であるという校長と教頭の慎重な判断から、アンケートではなく子どもへの直接インタビューが実現した。子どものアンケートの実施を拒んだ事実から、3種の七頭舞・七ツ舞を伝承している小本小学校の複雑な事情が伺える。教育課程に位置づけながら、日々の伝承活動を長年にわたり継続していくには、学校側にも慎重にならざるを得ない苦労があることを容易に推察できる。

平成16年度七頭舞発表会の前日、2005年2月2日（水）の午後3時から50分間のクラブの時間に最後の練習が行われた。大牛内分校の子供たちは練習に参加していなかったが、この練習の終了後に、小本小学校側が中野七頭舞、中里七ツ舞、中島七ツ舞を伝承しているそれぞれの地域の6名の子どもたちを音楽室に集合させて、インタビューの機会を設定してくれた。

この時の子どもへのインタビューの内容や子どもの反応は、以下のようなものであった。

☆日時：2005年2月2日（水）

☆場所：小本小学校音楽室

☆学年：3年生（1名）、4年生（4名）、5年生（5名）、6年生（8名） 全18名

### (1) 踊りについての気持ち（踊りへの好悪）

A：すき（17名） B：何にも思わない（1名） C：つまらない（0名）

#### <好きな理由>

- ・リズムが良い。（5年生）
- ・踊ると達成感がある。（6年生）
- ・踊り終わった後に拍手がもらえてうれしい。（6年生）
- ・見て下さる方々に喜んでもらいたい。（6年生）

### (2) 練習について

#### ①練習する時の気分

A：楽しい（18名） B：何にも思わない（0名） C：つまらない（0名）

#### ②踊りで大変なこと

- ・腰を下ろすのと目線を合わせるのが大変だ。（中野4年生）

・ 道具を見ながら横を揃えるのが大変だ。(中里 5 年生)

③練習への取り組み

A : 興味をもって積極的に練習している (17 名)

B : 何にも思わないで練習している (1 名)

C : いやだけど仕方なく練習している (0 名)

(3) 先生や保存会の人や上の学年の人ではだれに一番教わりたいですか。

A : 保存会の人 (18 名)    B : 学校の先生 (0 名)    C : 踊っている仲間 (0 名)

<保存会の人に習いたい理由>

- ・ 悪いところを指摘してくれる。(中野 4 年生)
- ・ わかりにくいところをはっきりさせることができる。(中里 5 年生)
- ・ お客さんが上手いといってくれる。(中里 5 年生)

<先生や仲間に習う良さ>

- ・ 先生は腰が高くなるなどと踊りのアドバイスをしてくれる。(中野 4 年生)
- ・ 先生はいろいろな意見を言ってくれる。(中野 6 年生)
- ・ 保存会的人是少ししか学校に来ないので、先生は必要だ。(中野 6 年生)
- ・ 仲間に教えてもらう時は、気軽にお話できる。(中野 6 年生)
- ・ 踊る時に持つ道具が同じ人から教えてもらえる。(中野 6 年生)

(4) 踊りに対する「あなたのめあて」はなんですか。

- ・ みんなで声を掛け合って、保存会の人を手本にし、保存会の人に認められたい。(中野 4 年生)
- ・ 腰を下げて大きく踊る。(中野 4 年生)
- ・ 腰を下ろして目線もしっかりしたい。(中野 5 年生)
- ・ 道具の回し方をきれいにできるようになりたい。(中野 5 年生)
- ・ 一つ一つを大切に、見ている人も踊ってみたいくなるように踊りたい。(中野 6 年生)
- ・ 腰を下げてしっかりと踊りたい。(中野 4 年生)
- ・ 腰を下げて、腕もしっかりして格好いいといわれるように踊りたい。(中里 3 年生)
- ・ 目標の人(先輩)にたどりつけるようにがんばりたい。(中里 5 年生)
- ・ 腰を下げて大きく踊る。(中里 6 年生)
- ・ 太鼓の音を良く聴いて踊りたい。(中里 6 年生)
- ・ 見た人がすごいと思ってくれるように踊りたい。(中里 6 年生)
- ・ 間違えないように、また踊りやすいように踊りに合わせて太鼓をたく。(中里 6 年生)
- ・ 最後まで腰を下げて踊りたい。(中島 4 年生)
- ・ 足をもっと大きく開く。(中島 5 年生)
- ・ 道具を見て、腰を下ろして踊る。(中島 5 年生)
- ・ 腰を下ろして大きく踊る。(中島 6 年生)
- ・ 道具をきれいに回せるようにしたい。(中島 6 年生)
- ・ 腕を上げて下に降りないようにしたい。(中島 6 年生)

(5) 自分の地域の七頭舞・七ツ舞をいつまで踊っていたいか。

A : 大人になっても踊っていたい。(13 名)

B : 中学生位まで踊っていたい。(5 名)

(6) 他の地域の七頭舞・七ツ舞を見て、どう思いますか。

A : 良いと思う (18 名)    B : 良さはわからない (0 名)    C : 良いと思わない (0 名)

<良いと思う理由>

- ・ 踊り方は違うけれども、どの踊りも見ていておもしろい。

- ・腰の下ろし方など踊り方の技術を学びあえる。
- ・踊りに対する心構えが学べる。

(6) 自分たちの踊りで、ぜひ見てもらいたいところ

- ・斬り合いの部分でみんなが斬り合うところ（中野4年生）
- ・一つ一つが決まったり、かけ声を掛け合うところ（中野6年生）
- ・最後の全体三足でみんなが揃うところ（中里6年生）
- ・道具取り舞を見てほしい（中里6年生）
- ・組ちらしの2人交互になるところ（中島4年生）
- ・横バネの踊り（中島5年生）

(7) 学校で七頭舞を学んで良かったこと \*ここからは中野七頭舞のみの回答8)

- ・4年生になって踊りを学んでから伝統を伝えることの大切さがわかった。自分たちが伝えることで次につながっていくのがすごいと思う。（中野4年生）
- ・七頭舞の他に空手をやっていて、踊りを習ってから空手で腰も下りるようになった。（中野4年生）
- ・4年生になって、七頭舞を踊れて良かった。学校にこの踊りが伝承されていることを誇りに思う。ずっと伝えていきたい。（中野6年生）

## 6. アンケートによる教師の意識

小本小学校の教師の意識については、小本小学校と大牛内分校の全教諭を対象に実施したアンケート調査の結果から捉えることができる。

○実施時期：2005年2月

○実施方法：吉田敏子校長および鈴木一司教頭先生を通じて依頼した。

○対象者：小本小学校全教諭7名、大牛内小学校全教諭4名 計11名

(1) 七頭舞・七ツ舞への具体的な取り組みと自分の意識について答えて下さい。

- A：興味をもって積極的に取り組んでいる（8名）
- B：特に何も考えないで取り組んでいる（2名）
- C：仕事として割り切って取り組んでいる（1名）

(2) 小本小学校で七頭舞・七ツ舞にかかわったことによる変化の有無を答えて下さい。

- A：以前よりも民俗芸能への関心は高まった（8名）

- ・七頭舞とかかわることでその素晴らしさにふれ、伝統芸能のよさを実感した。
- ・七ツ舞が生活と密着しているため。
- ・由来を知ることによって見方が変わった。
- ・音楽的な内容や歴史的背景といったものへの関心というよりは、民俗芸能祭に行って、いろいろな芸能を鑑賞したいと思うようになったので関心が高まった。

B：何も変わらない（3名）

- ・特に他の民俗芸能への関心が高まったということはない。
- ・以前から民俗芸能に強い関心があったが、学校内で取り組むことの困難さを感じることも多く、悩みもあるため。

C：民俗芸能への関心が低下した（0名）

(3) 学校で地域の民俗芸能を取り上げる長所と短所についての意見を書いて下さい。

<長所>

- ・伝統を繋ぐという意識が子どもたちに芽生え、学ぶ意味がもてる。
- ・地域の方々との関わりが深まる。教えてもらうことと共に、見てもらい喜んでもらうことも大切な触れあいと考える。
- ・地域のつながりが自然にできる。
- ・地域の方との触れ合いがあったり、伝統を引き継いでいくということには意義がある。
- ・地域での上級生と下級生の結びつきが強まる。
- ・児童が地域の人々や歴史に興味・関心をもち、尊敬の念を抱く。自分たちの活動に誇りをもっている。学校で取り組むことで、学校への地域の信頼が高まる。
- ・子どもに地域に対する郷土愛が育つ。七頭舞・七ツ舞を通して地域とのつながりができる。
- ・地域への愛着深まる。
- ・地域の皆さんと関わるができる。芸能に関わって地域の歴史や文化に触れることができる。
- ・郷土の文化に触れたり先人の思いを理解したりすることにつながる（国際理解）、表現力の育成につながる。人や文化とのかかわりを深めることができる（コミュニケーション能力）
- ・児童全員でまとまって活動できるので意識が高まりやすい。

<短所>

- ・練習時間の設定には工夫が必要である。
- ・地域にしっかり入って練習等に参加したいという思いはあるが、現実にはなかなかそうはいかず、苦しい時がある。
- ・練習時間の取り方など教育課程への位置づけが難しい。1年生から取り組んでいるので低学年の負担が大きい。
- ・年間計画に偏りが出ること。
- ・教育課程への位置づけをしっかりと行う必要がある。
- ・目指すものが高くと小さい子どもたちには負担となり、学習に支障が生じる。
- ・保存会との連携（日程調整、指導内容や方針等）が難しい。
- ・本校の場合、多様すぎて対応が難しい（教師の配置、授業での練習のさせ方等）。
- ・指導が十分できない。やはり外部（保存会の方など）の協力が必要。

(4) 地域の民俗芸能に対する教師の望ましい関わり方についての考えを書いて下さい。

- ・芸能の素晴らしさを感じながら関わるのが大切であり、こちらもたくさん教わっている。
- ・芸能に関心をもち、子どもたちと一緒に教わることも大切と考える。
- ・地域の伝統を守る活動であると同時に、学校教育としてのねらいや意義を明確にして指導に臨む。

- ・引っぱっていくというより、練習中は環境を整えてあげるというポジション。総合的な学習等で調べ学習を行うと、また違ってくると思う。
- ・好意的に関わる。
- ・地域の実態に応じて、臨機応変に関わる。
- ・地域の方々とのコミュニケーションを大切に、芸能に対する考え方を理解する。保存会との連携を図る。
- ・地域の方々と一体と鳴って関わるのが望ましいと思うが・・・。
- ・「伝承する」ということへの意識を高める。異学年・同学年の人間関係につとめるなど学校教育ですべきことを明確にし、その達成に寄与することが望ましいと考える。各種芸能祭への参加や踊りの指導については、できれば保存会に委ねていきたい。

(5) 子供はどんな意識で七頭舞・七ツ舞に取り組んでいると思いますか。

- ・踊りに誇りをもっている。
- ・踊りへのあこがれをもっている。
- ・下級生に伝えるという意識がある。
- ・自分たちが踊れるようになることが小本小学校の伝統。
- ・想像しているより「大好き」な子が多く、伝統を守ろうという意識をもっている。
- ・七頭舞にあこがれている子が多いと思うが、中には踊りが得意じゃない子もいてそれぞれだと思う。
- ・地域によって低学年が参加しているが、低学年ほど意識の個人差が大きいように感じる。高学年になるにつれて意識は高まっているようであるが。
- ・誇りをもって取り組んでいる。踊ることが大好きである。学年が上がるにつれて、その思いが強まっている。
- ・先輩へのあこがれをもち、ほこりをもって取り組んでいる
- ・自分たちの誇り的な意識をもって取り組んでいる。
- ・低学年の子どもたちにとっては理解するのが難しく、楽しいと感じるまで、結構時間がかかる。
- ・伝統ある取り組みなので誇りをもっていると考え。意欲的な子どもたちが多いと考える。その一方で、取り組みがあるから仕方なくやっている子どもや目的意識が明確でなくただ踊っている様子の子どもも見られる。
- ・楽しんでいる子が多いと思う。(踊れるようになった喜びを感じている)

(6) その他（\*学校としての民俗芸能の位置づけ・展望・課題など、自由に書いて下さい。）

- ・学校の思いというよりも、地域そして親の思いの強さを感じる。そういう思いを学校としては、いかにくみ取っていくか・・・。
- ・この踊りには、道具によって格（ランク）付けがあり、どの子をどの道具に配置するか毎年悩む。個人的には学校教育であるので、高学年を上ランクの道具にすべきと考えるが技量がついていかないと見ている方々から不満の声が上がることもある。ねらいをしっかりと私たちがとらえて活動していく
- ・子どもの数が減ってきており、活動に支障が出る地域が考えられる。

以上、5の「インタビューに見る子どもの意識」と6の「アンケートによる教師の意識」にはさほど大きな「ずれ」はない。しかし学校という制約の多い体制の中で、三つの七頭舞・七ツ舞

を公平に扱いながら、質的にも高い伝承を継続する難しさや精神的なストレスは、教師側のアンケート結果から明確に読み取ることができる。民俗芸能の伝承という高邁な理想とは裏腹に、やはり現実的な対応は、決して容易なものではないのであろう。

一方、子どもたちは自らが伝承している芸能に誇りと自信をもちながらも、決して他の地域の七頭舞・七ツ舞を否定することなく、むしろ学び合おうとする姿勢が貫かれている。これはひとえに筆者が依頼したアンケートに対しても慎重な姿勢をみせた小本小学校の教師たちの真剣な教育姿勢がもたらした優れた教育効果であると判断できる。

また中野七頭舞については、上学年が4年生を指導するという、いわば学内伝承が伝統として成立しており、しかもきわめて理想的な形でそれが営まれている優れた事例として小本小学校の七頭舞発表会への取り組みを讃えることができるであろう。統合後もそれぞれの地域の芸能を尊重して、学校側が無理に一つの七頭舞に統一しなかった見識を高く評価したい。現実にはお互いの芸能が刺激となって、年々、小本小学校の七頭舞・七ツ舞は洗練されてきているようにも思える。今後もこの優れた校内伝承活動を伝統として継続することを期待したい。

#### 【注および参考文献】

- 1) 小本地区近辺「七つ物」に関する、宗教的な要素を越えたこの特徴については、『岩泉地方史＜下巻＞』（関口喜多路編著、岩泉教育委員会発行、1980年、533頁）にも、筆者と同様の主張が見られる。
- 2) 岩泉町立小本小学校『平成9年20周年七頭舞記念文集』に転載された中野七頭舞保存会会長山本恒喜が岩泉民間伝承研究会編「85 いわいずみふるさとノート」（昭和60年）に寄稿した文章よりその1頁。
- 3) 中野七頭舞保存会20周年記念誌『日本の大地に舞う』pp.78~85
- 4) 中島七ツ舞については、文献等の資料がほとんどないため現保存会会長の三浦英幸（太鼓奏者）に伺ったものである。
- 5) 小本小学校編の七頭舞20周年記念文集『第20回七頭舞発表会のしおり』（1998年）に収録された1983年の「第5回民舞クラブ七頭舞発表会」における手書き12頁にわたる「踊りの解説」参照。
- 6) 前掲3)の書。83頁参照。
- 7) 何度も小本小学校を訪問しているが、2004年には菊池柳子校長から吉田敏子校長に代わっており、本稿では、主に2005年2月2日に訪問した際の吉田敏子校長および鈴木司一教頭の話を中心に小本小学校における七頭舞の取り組みについて報告する。
- 8) 中島七ツ舞と中里七ツ舞の子どもたちはバスの時間が来て下校したため、中野七頭舞の子どもみの回答となった。

## 5. 中野七頭舞とその広がり

### 1. 中野七頭舞の由来と伝承略史

#### (1) 中野七頭舞の由来

中野七頭舞の由来については前項の「小本小学校と四つの『七つ物』」でも簡単に触れた。ここではもう少し詳細な中野七頭舞の伝承史を見ていきたい<sup>1)</sup>。

中野七頭舞の由来をたどるならば、天保年間（1830 ～ 1843 年）に中野地区に住んでいた太夫爺という人に遡る。この太夫爺の名前はわからないが、当時、太夫爺というのは、人形の彫刻や、人形芝居や台本・脚本の執筆など演劇関係の仕事をする一種の俳優だったようである。名前が伝わっていないこの太夫爺から、天保7年生まれ、の芸能好きな工藤喜太郎という人が、神楽歌や舞などの芸能を伝授してもらった。太夫爺が老衰してからも、喜太郎は爺の枕元で口述する神楽歌などを学び、全ての神楽を太夫爺から学び、免許皆伝された。太夫爺は老衰のため中野で終世し、太夫爺亡き後に、工藤喜太郎は中野の神楽愛好家を募って神楽を教え、神楽巡行を創始した。喜太郎70歳の頃には36人の弟子がいたようであるが、80歳くらいまで神楽巡行を続け、84歳で逝去している。この工藤喜太郎が、神楽巡行で神楽宿に入る前に舞う舞い込みのシットギジシをもとに創作したのが中野七頭舞である。喜太郎の弟子は中野地区に多いが、隣部落の岸・中里・中島にもおり、さらに田老・田代・末前・ハツ石など多数の他の町村にまで広がった。

中野の地で盛んに踊られていた中野七頭舞であったが、時代の変化と共に喜太郎が独自に編み出した中野七頭舞は、次第に低迷の一路をたどり、いつしか村祭りですら踊ることがなくなった。

しかし1976（昭和51）年に中野七頭舞保存会が結成され、この年の村祭りに復活する。この復活劇の立役者が、前保存会会長の山本恒喜である。

#### (2) 中野七頭舞の復活

中野七頭舞の前保存会会長の山本恒喜は、中野七頭舞の復活のまでのことを、『85 いわいずみふるさとノート』（岩手民間伝承研究会編、1985年）に綴っている<sup>2)</sup>。また中野七頭舞の20周年を記念して製作されたビデオ『中野七頭舞の20周年』<sup>3)</sup>にも、中野七頭舞の歴史が盛り込まれている。これらを要約すると中野七頭舞復活までの軌跡をたどることができる。

山本恒喜の動向を中心に箇条書きにしておこう。

- ・山本は17歳1961（昭和36）年に、村の春に白山神社のお祭りで、初めて中野七頭舞を踊った。この年は6年ぶりに中野七頭舞が神社で踊られた。
- ・1961年から1963（昭和38）年頃までは、年1回の村祭り、隣村の祭り、龍泉洞の祭りに中野七頭舞が出演した。一時はそれまでにない程のヒットぶりだったが、この後は下降線をたどり、昭和40年代には、村祭りからも中野七頭舞の姿消えた。
- ・山本は、若い頃、村で「神楽バカ」といわれるほどの神楽や七頭舞の達人、加藤末子<sup>よてきちじい</sup>吉爺に1年間だけ直接指導を受けたことがあるが、相当に厳しいものだったようである。山本は、「練



習中に末子吉爺が来ると、口やかましく注意されるので、皆踊りをやめて家に帰ったり、酒の力をかりて小バカにした」<sup>4)</sup>と当時の雰囲気回想している。それでも山本は末子吉爺の踊りが忘れられなかった。加藤末子吉爺は、1907（明治 40）年生まれで、彼の父親の加藤熊吉もまた中野神楽の笛の名人だった。加藤熊吉の近親者には中里七ツ舞を起こした武田新九郎など後世に名を残した神楽の名人がいたようだ。

- ・ 1976（昭和 51）年の村祭り再度、中野七頭舞は復活した。この時期は三陸鉄道の着工が行われ、大漁豊作で祭りは盛り上がった。この復活時には、山本恒喜が踊りの経験者の中で最年長になっており、中野七頭舞の保存会の会員は大部分が新人だったようである。この機会を、山本は、目に焼きついているあの末子吉爺の踊りが実現できる絶好のチャンスだと喜んだ。
- ・ 1976（昭和 51）年に現在の保存会の育ての親である千田任男先生が小本小学校に転任してきた。この年の 8 月には千田先生の紹介で、初めて「北上みちのく芸能祭り」に参加し、この後も中野七頭舞は連続 6 年間出演した。
- ・ 山本は子どもたちに中野七頭舞を教えた感想についても書いているが、それによると最初は子どもには簡単な部分だけの指導を行う予定だったようである。実際に指導してみると、「大人との違いは踊りの順序を覚えるのが半分以下の時間しか要さないこと、一度覚えたら 1 週間後の練習でも間違いなく踊る子ども達の能力のすばらしさにただ唖然とするばかりでした」<sup>5)</sup>と子どもの吸収力の素晴らしさをたたえている。

山本は平成 8 年の 20 周年記念を機に阿部一雄に保存会会長の座を譲り渡し、現在は保存会の顧問として中野七頭舞の発展に努めている<sup>6)</sup>。

### (3) 元小本小学校教師の千田任男

千田任男は、小本小学校に中野七頭舞を導入した張本人である。千田本人の言から導入の意図や真意に迫りたい<sup>7)</sup>。

1977（昭和 52）年に千田が小本小学校に赴任した時、小本小の子どもは、自分の意思を表現することができない元気のない様子だったので、何とか子どもに活力を与えたいと考えた。

千田は、赴任した 1977 年に中野白山神社祭典で中野七頭舞に接し、その囃子と踊りに見せられ、何とか自分の在任中に教育（体育）に取り入れてみたいと考えた。そこで千田は中野七頭舞の保存会会長だった山本恒喜に学校で取り上げたいという希望を話し、山本の協力を取り付けた。

1978（昭和 53）年には、千田先生の努力で小本小学校に民舞クラブが発足した。募集したところ、当時六つあったクラブの中で最高の 21 人の希望者があったという。中野七頭舞は小本小学校のクラブとして発足当初から人気があったようである。

千田は、地域の郷土の踊りが岩手の踊りとして、また日本の踊りとして発展し得るという確信をもっていたようである。郷土の踊りが日本の踊りとして耐えうるか否かの検討が必要だと考えていた千田は、郷土の踊りについて広がりのある捉え方をしていた。すなわち千田が捉えた中野七頭舞の特徴とは、次のようなものであった<sup>8)</sup>。

①リズムが明確である。

②動きが大きく日本の踊りとして豊かな特性をもっている。

③ナンバの動きと腰を下ろした体さばきがある。

④七頭舞の由来が先祖が郷土の原野を開拓する努力を取り入れた一連の流れの踊りである。

いずれにしても小本小学校に導入したことは、中野七頭舞の発展にとって後継者の育成の面から考えても千田任男の功績は大きい。また千田の申し入れを山本が快諾しなければ、今日の中野七頭舞の隆盛を見ることができなかったことを思うと、山本の功績もまた多大であった。

#### (4) 七頭舞発表会の歴史

中野七頭舞保存会の 20 周年記念誌『日本の大地に舞う中野七頭舞』（1996 年まで）や小本小学校の『20 周年七頭舞記念文集』に掲載された「七頭舞発表会 20 年史」（1998 年まで）を基に主な活動を拾いながら、小本小・中学校や中野七頭舞保存会の活動を一覧表にまとめておく 9)。

(表 1) 中野七頭舞活動史

\* = 保存会（中・高校生の愛護少年団）の活動

○ = 小本小学校、小本中学校、岩泉高等学校

1976（昭和 51）年	* 中野七頭舞保存会の発足 * 第 10 回岩泉町郷土芸能祭小本大会に出演（以後、継続）
1977（昭和 52）年	* 4 月中野白山神社祭り奉納（以後、毎年） * 龍泉洞祭りに出演（以後、継続）
1978（昭和 53）年	* 7 月中野七頭舞口拍子作成 * 北上みちのく芸能まつり初出演 ○ 11 月 小本小学校民舞クラブ結成 部員 21 名
1979（昭和 54）年	○ 2 月 第 1 回七頭舞発表会、9 月運動会で披露する。（以後、継続）
1980（昭和 55）年	○ 2 月 第 2 回七頭舞発表会、 * 6 月中野バイパス（国道 455） 開通式祝賀会出演
1981（昭和 56）年	○ 2 月 第 3 回七頭舞発表会 * 小中七頭舞愛護少年団を結成して活動開始 * 第 15 回岩泉郷土芸能祭で 10 団体が町無形民俗文化財に指定 * 東京民舞研七頭舞講習会（於小本婦人の家）（以後、継続）
1982（昭和 57）年	○ 2 月 第 4 回七頭舞発表会 * 田野畑村西和野地区お祭りにて奉納 * 6 月小本漁村センター落成式に出演
1983（昭和 58）年	○ 2 月 第 5 回七頭舞発表会 * 9 月 & 12 月宮城教育大学「ビッキー」七頭舞講習会（以後、継続）
1984（昭和 59）年	○ 2 月 第 6 回七頭舞発表会 * 4 月三陸鉄道開業記念式典・開業式に出演 * 8 月七頭舞講習会（東京菊の会、宮城教育大学、東京民舞研参加）

1985（昭和 60）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 9 月第 1 回南部牛追唄岩手県大会アトラクション出演</li> <li>○ 2 月第 7 回七頭舞発表会</li> <li>* 国立歴史民俗博物館のこけら落としとして愛護少年団が北日本の代表として出演</li> <li>* 6 月「わらび座」七頭舞講習会</li> <li>* 7 月東京民舞研七頭舞講習会（以後、継続）</li> <li>* 9 月岩手県郷土芸能祭出演（宮古市民会館）</li> </ul>
1986（昭和 61）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 2 月第 8 回七頭舞発表会</li> <li>* 第 20 回郷土芸能祭や第 1 回国民文化祭に愛護少年団が出演</li> <li>* 7 月宮古夏祭り出演</li> <li>* 9 月第 1 回南部牛追唄全国大会アトラクション出演</li> </ul>
1987（昭和 62）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 1 月岩泉町成人式でアトラクション出演</li> <li>○ 2 月第 9 回七頭舞発表会</li> <li>* 7 月第 1 回岩手のこころ・伝統芸能の誘い出演（県民会館）</li> <li>* 「鼓童」七頭舞講習会</li> </ul>
1988（昭和 63）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 2 月第 10 回七頭舞発表会</li> <li>* 愛護少年団 NHK チャリティーショー出演</li> </ul>
1989（平成元）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 2 月第 11 回七頭舞発表会</li> <li>* 4 月姫神コンサート「姫神風土記」出演（中野サンプラザ）</li> <li>* 6 月東京民舞研 20 周年記念に友情出演（東京）</li> <li>* 11 月岩泉町文化功労団体賞受賞（中野七頭舞保存会）</li> </ul>
1990（平成 2）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 2 月第 12 回七頭舞発表会</li> <li>○ 8 月発見、国立劇場の夏に第 1 回優秀校として岩泉高校郷土芸能同好会出演</li> <li>* 10 月 NHK「日本出合いのたび」TV 録画取材</li> </ul>
1991（平成 3）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 1 月 NHK 新春特集「大地に踊る」に出演</li> <li>○ 2 月第 13 回七頭舞発表会</li> <li>* 3 月自由ヶ森学園七頭舞講習会（以後、継続）</li> <li>* 第 4 回全国健康福祉祭岩手大会開会式出演</li> <li>* 11 月第 5 回日本民俗音楽研究大会に出演（町民会館）</li> </ul>
1992（平成 4）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 2 月第 14 回七頭舞発表会</li> <li>* 2 月「荒馬座」七頭舞講習会（東京都内）</li> <li>* 9 月三陸博「釜石会場」に出演</li> <li>* 9 月アジア太平洋「歌と踊りの祭典」に出演（国立劇場）</li> </ul>
1993（平成 5）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 2 月第 15 回七頭舞発表会</li> <li>* 2 月アルペンスキー世界選手権大会開会式出演</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 7月NHKBSみちのくスペシャル平泉黄金100年「いま蘇るみちのく の炎」に出演（平泉）</li> <li>* 7月毎年開催する東京民舞研七頭舞講習会、過去最高の190名参加。</li> <li>* 11月「札幌民舞研」の七頭舞講習会</li> </ul>
1994（平成6）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第16回七頭舞発表会</li> <li>* 8月三陸鉄道開業10周年フェスティバル出演</li> </ul>
1995（平成7）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第17回七頭舞発表会</li> <li>* 6月小本中学校新校舎落成記念祝賀会に出演</li> <li>○8月全国高等学校総合文化祭に岩泉高等学校郷土芸能同好会出演</li> </ul>
1996（平成8）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第18回七頭舞発表会（中島七ツ舞が加わる）</li> <li>* 6月第4回地域伝統芸能全国フェスティバル出演</li> <li>* 7月保存会結成20周年記念公演、20周年記念ビデオ『日本の大地に 舞う中野七頭舞』が製作される。</li> <li>* 9月宮沢賢治童話村フェスティバル出演</li> <li>* 10月全国太鼓フェスティバル出演（陸前高田市）</li> </ul>
1997（平成9）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第19回七頭舞発表会</li> <li>* 3月保存会結成20周年記念記念誌『日本の大地に舞う中野七頭舞』 出版</li> <li>* 第17回全国豊かな海づくり大会出演（大槌）</li> </ul>
1998（平成10）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第20回七頭舞発表会（大牛内分校、中野七頭舞保存会も出演）</li> <li>○テレビ岩手「いわてっこばんざい」やIBCテレビ岩手などで放映</li> <li>○七頭舞20周年記念講演会（講師：山本恒喜）</li> </ul>
1999（平成11）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第21回七頭舞発表会</li> </ul>
2000（平成12）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第22回七頭舞発表会</li> <li>6月東洋英和女学院初等部との交流会で七頭舞・七ツ舞の披露</li> <li>○8月岩泉郷土芸能祭（小本会場）5・6年生発表</li> </ul>
2001（平成13）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第23回七頭舞発表会</li> <li>○5月運動会で5・6年生発表</li> <li>○11月5・6年生が百楽苑訪問</li> <li>* 12月中野七頭舞保存会岩手日報文化賞受賞 （記念祝賀会に小本小学校の6年生が出演）</li> </ul>
2002（平成14）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第24回七頭舞発表会</li> <li>○岩泉高等学校郷土芸能同好会が全国高等学校総合文化祭神奈川大会の 郷土芸能分門に岩手県代表として出場</li> </ul>
2003（平成15）年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2月第25回七頭舞発表会</li> <li>○第1回岩手県中学校総合文化祭（県民ホール）に小中学校生徒による</li> </ul>

	中野七頭舞が参加
2004（平成 16）年	○ 2 月第 26 回七頭舞発表会（中里七ツ舞が加わる） ○ 小本中学校に中野七頭舞同好会結成。 ○ 12 月第 4 回全国中学校総合文化祭（ゆい心フェスタ 2004）に岩手県代表で小本中学校の中野七頭舞出演
2005（平成 17）年	○ 2 月第 27 回七頭舞発表会
2006（平成 18）年	○ 2 月第 28 回七頭舞発表会 * 現在も神社への奉納、各種講習会、多数の依頼公演などが続いている。

## 2. 中野七頭舞の踊りと音楽

中野七頭舞活動史で明らかなように、中野七頭舞は、全国に多くのファンをもち、東京民舞研、宮城教育大学民俗芸能サークル「ビッキーの会」、「東京菊の会」、「わらび座」、「鼓童」自由ヶ森学園、「荒馬座」、「札幌民舞研」など全国の民俗芸能のプロ集団から学校まで幅広い中野七頭舞愛好者が講習会を受けるため小本を訪れる。この他にも東京民舞研の講習会の時期に、さまざまなグループが一緒に参加しており、現会長の阿部一雄の話によると、小本小学校を会場に行われている 7 月の中野七頭舞講習会では 100 名を下ることはないという。

宮城教育大学民俗芸能サークル「ビッキーの会」は、長年、別の時期に小本地区で七頭舞合宿を継続している。

中野七頭舞講習会が初めて開催されたのは、1981（昭和 56）年に小本婦人の家で行われた東京民舞研七頭舞講習会であった。爾来、これまでに 20 年以上もの間、中野七頭舞愛好者のために小本地区では保存会を中心に講習会が開催され続けている。一つ地域に多くの団体が毎年集い、25 年間にわたって講習会が継続されているというのは希有なことである。しかしそれは同時に、中野七頭舞が合理的な指導方法を確立していく歴史でもあったといえよう。

1996（平成 8）年に中野七頭舞保存会は結成 20 周年を迎えた。この時いろいろなイベントの一環として、20 周年記念ビデオ『日本の大地に舞う中野七頭舞』がアサヒプロダクションによって 7 月に制作された。このビデオは記念行事用に制作された限定発売品のため、既に絶版になっていたが、幸いにもアサヒプロダクションの代表取締役阿部武司から入手することができた。

このビデオが制作されたのは、1981 年の初講習会から 15 年目の 1996 年である。この間の中野七頭舞の指導法の確立はめざましいものがあったことが、このビデオから推察できる。

本ビデオは、第 1 部のドキュメント編（90 分）と第 2 部の稽古編（120 分）からできている。後者の稽古編は、さらに踊り稽古編、囃子稽古編、装束と着付けの三つの構成になっている。

きわめて合理的で良く工夫されている第 2 部の稽古編の全内容を紹介したい。

### (1) 中野七頭舞の踊り～練習用ビデオを中心に

20 周年記念ビデオ『日本の大地に舞う中野七頭舞』10) の第 2 部の稽古編の内容に多少の説明

を加えながら紹介する。これに先だって中野七頭舞の七つの役割を思い出しておこう。七つの役割とは、先打ち、谷地払い、薙刀、太刀、杵、小鳥、ササラスリの七役である。ビデオでは、このうち小鳥と薙刀および先打ちの所作が代表として取り上げられ、きわめて良いアングルで刻銘に記録されている。

#### <Ⅰ：踊り稽古編>

・先打ち：阿部一雄、薙刀：石黒保幸、小鳥：石黒智美

##### ①小鳥と薙刀「道具取り舞」(2分52秒)

「道具取り舞」は神様から道具をいただく神聖な舞である。それぞれの「七つ物」で、最も独自の特徴が出るのがこの「道具取り舞」である。初めは道具を持たずに舞い、道具をいただいてから再度舞う。中野七頭舞の場合は、道具をいただく時に道具に向かって手を合わせて祈る所作が印象的である。

##### ②薙刀の「横跳」から「ちらし」へ(2分)

「横跳」は、全ての始まりであり、かつみんなで心を合わせて農作業に励む様子でもある。「ちらし」は農作業の合間に呼吸や体制を整えることを意味しており、実際に踊りの中でも呼吸や踊りの体制を整えるために各踊りの間にたびたび挿入されている。この「横跳」や「ちらし」の多くの所作は、中里七ツ舞とも共通している。そもそも「ちらし」は、ほとんどの「七つ物」に共通する躍動的な動きである。

##### ③小鳥の「横跳」から「ちらし」へ(2分)

②と同様に小鳥の「横跳」と「ちらし」も他の七ツ舞と共通する振りである。

##### ④薙刀と小鳥の「横跳」から「ちらし」へ(1分52秒)

本来、「横跳」も「ちらし」も輪踊りで全員で舞うので、この両者が一緒に舞う様子が見られることは練習映像としては効果的である。

##### ⑤薙刀と小鳥の「戦い」から「ツットウツ」へ(1分18秒)

「戦い」は、中野七頭舞では「斬り合い」ともいい、前半は農作物を外的から守る意味があり、後半は内輪もめを止めチームワークを守るといような意味合いの舞になっている。「戦い」と「戦い」の間を「ちらし」でつなぎ、実際の映像は「ツットウツ」に入る手前までになっている。

##### ⑥「ツットウツ」から後の「戦い」へ(2分35秒)

「ツットウツ」は、秋の収穫の忙しさを表しており、中野七頭舞にしかない最も激しい独特の踊りである。前のめりに倒れそうになりながら回転する戯け狂ったような舞は、まさに中野七頭舞の名前を全国的レベルにしたと思われる極めて印象的な舞である。初めて見る者は、たいていこの「ツットウツ」で度肝を抜かされる。

##### ⑦薙刀と小鳥の「三足(鳥居がかり)」(1分40秒)

「三足」は、「三足踏み」や「鳥居がかり」などの呼称もある。豊作を祝って神に感謝の気持ちを表すために神社の鳥居の前で、二人一組で向かい合って踊る。中野七頭舞では、やはり片足で前のめりになる独特の所作が入る。

##### ⑧薙刀と小鳥の「道具納め舞」(2分30秒)

借りた道具を神様にお返しする意味がある。「道具取り舞」とは反対に、初めに道具を持って踊り、道具を置いてからまた舞い納める。中野七頭舞では、「道具取り舞」と「道具納め舞」のいずれでもゆっくりとした回転時に、体が後ろに回った瞬間に顔の向きを変えるという美しく機敏な動きが特徴的かつ印象的である。

⑨先打ちの「横跳」から「三足」へ（7分50秒）

現中野七頭舞保存会会長の阿部一雄が、最も重要な先打ちの舞を「横跳」から「三足」まで続けて舞う。

⑩いっちゃん（阿部一雄）の「横跳」から「三足」まで

～上手になるアドバイス（7分50秒）～

阿部一雄は中野七頭舞の踊りについて、以下のようなアドバイスをを行っている。

1. 四股を踏むように両足を横にしっかり開いて。背筋を伸ばした構えにする。  
中野七頭舞は全てこの構えで踊る。
2. 足は全て大きく動かす。
3. 腕も肩の付け根から全て大きく動かす。腕は肩の高さから下がらないようにする。  
\*実際の映像では、肩の高さよりも高い位置にもっていつている。
4. 「ツットウツ」では回転する時に、足を回転方向にではなく、まっすぐ前に出す。  
\*「ツットウツ」や「三足」では、足元ではなく常に道具を見て舞う。

踊りに対するこれらのポイントは、全ての「七つ物」にも応用できるポイントである。おそらく長年の講習会経験から把握できた重要なポイントであろう。

<Ⅱ：中野七頭舞のすべて～囃子稽古編>

・太鼓：山本恒樹、笛：佐伯裕則、手平鐘（鉦）：阿部宏行

①太鼓・笛・鉦 三拍子の「通り」（1分58秒）

太鼓は片面のみ使って、前会長の山本恒喜が担当。鉦は笛の旋律とほとんど同じリズムで演奏する。

②太鼓・笛・鉦 三拍子の「道具取り舞」（3分48秒）

これも太鼓は片面のみ使う。

③太鼓・笛・鉦 三拍子の「横跳」から「三足」（7分50秒）

ここから太鼓は両面を使う。鉦はここからほとんど太鼓のリズムと同じ。

④太鼓の「通り」（2分36秒）

太鼓だけズーム・インして太鼓の鼓面とばち捌きが確実に把握できるように配慮された映像がある。太鼓の主な奏法は、皮打ち・止める・杵打ちの三つである。

⑤太鼓の「道具取り舞」（4分15秒）

太鼓は右肩から斜めに肩ひもをかけて左脇腹に太鼓を固定する。片面打ちで、左手は太鼓の上

部から鼓面の上部を打ち、右手は横から鼓面の中央を打つ。

⑥太鼓「横跳」から「三足」（8分7秒）

画面を立て割って、両面鼓面と太鼓のばち捌きが良くわかるように工夫された映像である。

⑦笛の「通り」（2分）

手が画面一杯に拡大されて、笛のフィンガーリングなどが良くわかるように工夫された映像である。太鼓と鉦は小さく鳴っているなかで笛の音が明確に聴こえるようになっている。

⑧笛の「道具取り舞」（4分17秒）

⑨笛の「横跳」から「三足」（8分30秒）

⑩鉦の「通り」（2分）

手が拡大されて、奏法が良くわかる。

⑪鉦の「道具取り舞」（4分20秒）

⑫鉦の「横跳」から「三足」（8分30秒）

<Ⅲ：「中野七頭舞」～装束と着付け>

まずは写真のように、中野七頭舞で使う道具が次々と映し出される。

A：中野七頭舞の衣装

①テッコウ（手っ甲）とタビ（足袋）

②ハダジュバン（肌襦袢）

胴の部分は白で袖の部分が美しい柄模様になっている。

③ナガジュバン（長襦袢）

後で袴の外に出すので、きれいな花柄模様の柄が使われている。

④マタツキハカマ（股付袴）

黒に白ストライプの柄。しかし柄は舞う団体によって違う。

⑤シゴキ（別名 へこ帯）

飾りになる青と赤の美しい帯。

⑥コシオビ（腰帯）

黄色で中に3本オレンジの縦縞が入っている。

⑦ショイオビ（背帯）

黒い帯で、激しい踊りなので、この帯が重要になる。

⑧ワラジ（草鞋）とエボシ（烏帽子）とハチマキ

中野七頭舞の烏帽子には美しい柄があり、これを白いハチマキでしっかり止める。

B：中野七頭舞の着付け

①タビをはく。

②テッコウを付ける。

中指に紐をかけて、手首を紐で巻いて固定する。

③ハダジュバンを着る。



左右を間違えないように気をつけて、付けひもを背中で結ぶ。

④ナガジュバンを着る。

左右を間違えないように気をつけて、腰ひもを前で結ぶ。短めに着るのがポイントである。

⑤ハカマをはく。

ここからは現保存会会長の阿部一雄が次のような注意事項を示しながら実際に着付けを行う。

- ・袴の裾があまり長くならないように気を付ける。
- ・床から手を一杯に広げた位、裾が上がっていなければならない。
- ・袴は前側から後ろに紐をまわして前で紐を結ぶ。
- ・袴の後ろ側の紐も前に持ってきて前側の結んだ紐の下に結ぶ。

⑥コシオビを付ける。

腰に巻いて前で蝶結びをして、形を整える。

⑦長襦袢の袖を脱いで垂らす。

⑧シゴキを肩からかける。

青色のシゴキは左肩からかけて右の長襦袢の袖の下を通す。赤色のシゴキは右肩から反対側を通して袖を固定する。

⑨ショイ帯を付ける。

この付け方が最も難しい。最終的に中野七頭舞の文字が後ろに見えるように形を整えて結ぶ。激しい踊りなのでこのショイ帯でしっかりと衣装を固定する。体の大きさに合わせて、帯の付け方にも工夫を凝らし、崩れないように工夫している。

⑩烏帽子をかぶる。

真っ直ぐになるようにかぶり、ハチマキを後頭部で結ぶ。烏帽子の紐は唇の下を通してあごの下で結ぶ。

⑪ワラジをはく。

⑫長襦袢の裾を袴の両サイドから出すし、最後に全体の形を整える。

(2) 中野七頭舞の効率的な練習方法

前項でビデオ内容を紹介しながら中野七頭舞の特徴について述べてきた。タイトルどおりこのビデオで中野七頭舞の全てがわかると同時に、練習も可能である。しかし実際に踊った体験のない者にとっては、この映像をいくら見ても中野七頭舞の全体の構成を把握することは難しいと思われる。やはり実際に太鼓に合わせて、休みなく連続して舞う7演目の踊りを直接指導を受けながら練習する体験なしに、ビデオだけからこの難しい舞を正確に把握することは不可能に近いであろう。こうした優れた練習用映像があるにもかかわらず、相変わらず中野七頭舞の夏の講習会が常に100名を越える理由はここにあると思われる。

筆者自身、初めてこの練習映像を見たときには、どうしても舞の全体像を把握することはできず、したがってどこで舞の種類が変わったのかということさえも把握できなかった。簡単な解説でも書けるようになるまでには、それなりの期間を要した。中野七頭舞の全体像が見えてくると、この映像の効率的な練習法には驚かされた。多くのファンを満足させようと工夫を重ねた結果、

こうした効率的な練習方法が編み出されたのである。しかしながら踊りの正確さと練習の効率化と引き替えに、踊りが画一化される可能性のあるこうした取り組みに疑問をもつ声もある。

20 年前に初めて中野七頭舞に出会った経験のある和光鶴川小学校の岡田洋一は、数年前の七頭舞保存会 20 周年記念イベントでの現地の踊りが、かつての踊りと違うように感じたという。2002 年の夏にこの疑問を解くべく中野七頭舞の講習会に参加した。岡田は次のようにレポートしている 11)。

「私が七頭舞を覚え始めた時には今のようにひとつひとつの動きを分解して丁寧に指導されませんでした。むしろ恒喜さんや一雄さんの動きを見ながら、どうしたら同じ動きに近づけるようになるのだろうかと保存会の人たちの動きを必死に追いかけたものです。ですから 1 年や 2 年ではおどれるようにはなりませんでした。(中略) 今、2～3 日で輪踊りが通して踊れるようになっていることで、その合理的な指導法の確立に目を見はるものがあります。それはそれで歓迎されるべきなのですが、そうした流れの中で保存会の踊り雰囲気も変わってきたのかなと感じたのです」

これは極めて重要な指摘である。効率的であることは悪いことではないが、民俗芸能の学びの場合、効率を求めることと反比例して何かが欠落していくような気がしてならないのである。

### 3. 中野七頭舞の広がり

#### (1) 小本中学校への広がり

中野七頭舞は小本小学校と岩泉高等学校では、長年にわたって伝承されてきている。これまで蚊帳の外にあった小本中学校に、2004 年に菊池良子新校長の元で初めて中野七頭舞同好会が発足した。同好会発足以前にも、小本中学校は 2002 年 11 月 26 日(火)に初めて開催された第 1 回岩手県中学校総合文化祭(於岩手県民会館)に中野七頭舞で出演している。この時には、幼い頃から小本小学校で中野七頭舞を踊っていた愛護少年団(中野七頭舞保存会の小・中学生グループ)の中学生を中心に、小学生も加えて出演していた。筆者は会場で生徒の引率できていた知り合いの小本中学校音楽教師から、総合的な学習の時間に中野七頭舞と大牛内七頭舞について調べている愛護少年団の二人の生徒の共同研究レポートを見せてもらった。これによると 2002(平成 14)年の 5 月から 10 月までの中野七頭舞の活動状況は次のようなものだった。

- ・平成 14 年 5 月 3 日：中野のお祭り
- ・平成 14 年 5 月 5 日：龍泉洞のお祭り
- ・平成 14 年 6 月 30 日：盛岡ビッグハウスでの公演
- ・平成 14 年 7 月 20 日：ふれあいランド IBC テレビ「まい土！平徳商店」生中継
- ・平成 14 年 8 月 4 日：北海道苫小牧公演
- ・平成 14 年 8 月 8・9 日：北上みちのく芸能祭り
- ・平成 14 年 8 月 7～12 日：高校文化祭神奈川大会(高校生のみ)
- ・平成 14 年 8 月 18 日：岩泉郷土芸能祭

- ・平成 14 年 9 月 22 日：秋田鹿角公演
- ・平成 14 年 10 月 12 日：茨城日立市公演
- ・平成 14 年 10 月 20 日：小本鮭祭り
- ・平成 14 年 10 月 27 日：京都祭り（中学生はこの文化祭のため未参加）

このレポートに記載されていたのは 5 月から 10 月までの半年間のみの記録であるが、11 月以降も含めると中野七頭舞は、大小取り混ぜて年間 15 回以上もの公演を行っており、この状況は現在もさほど変わりはない。小中高校生が活動する踊りの団体としては、かなり公演回数が多いといえるであろう。

二人の生徒のレポートのテーマは、「故郷の伝統を学び、自分を知る～自分が踊り続ける意義～」で、このテーマ設定理由の欄には、「幼い頃から踊り続けているために、自分たちが踊っている七頭舞、七ツ舞について知らないままでした。その他の芸能についてもよく知りません。今回の学習で、伝統芸術を知ること、私たちが踊り続ける意義について知る機会にしたいと思いました」<sup>12)</sup>とある。おそらく「幼い頃から踊り続けている」が故に、かえって身近すぎて調べたり考えたりする必要性を感じることなく過ごしてきたものと思われる。中学生が、総合的な学習の時間の取り組みで、単に舞い手としてではなく自らの知的な好奇心を開花させ、踊り続ける意味を己に問い直したかったのだろう。レポートの内容自体は、インターネットの情報の域を越えるものではないが、自らのアイデンティティを追究する契機となったという意味で総合的な学習の時間の意義を認識させられた出来事であった。

中野七頭舞は、2004（平成 16）年 11 月 26 日の第 4 回岩手県中学校総合文化祭にも出演している。この時は、小本中学校菊池良子新校長が決断して小本中学校に発足した中野七頭舞同好会が七頭舞を踊っている。第 4 回の文化祭の当日および電話取材で菊池校長から伺った小本中学校の状況を、簡単にまとめておく<sup>13)</sup>。

#### ①中野七頭舞を取り上げた理由と取り上げ方

2004 年に新校長の下で中野七頭舞同好会が結成した理由は、以下のようなことである。

前校長（現在、花巻の前田小学校校長の伊藤晴二氏）が、岩手県中学校文化連盟を通して第 4 回全国中学校文化祭への出場を立候補していた。2004 年 3 月にこれが岩手県に認められ、岩手県の中学校の代表として小本中学校が全国大会に出向くことになった。学校代表ということになると保存会すなわち愛護少年団で出場することはできない。学校にはいろいろな地区から生徒が登校してきており、全員が中野七頭舞に取り組んでいるわけではない。大牛内七ツ舞や中島七ツ舞や中里七ツ舞を舞う生徒もいる。したがって中野七頭舞を強制的に取り上げることはできない。しかしながら教育課程の中で実施するのも難しいということから、同好会の形で取り組むことにしたという。つまり小本中学校の中野七頭舞同好会は、第 4 回全国中学校文化祭への出場するための対策として発足せざるを得なかったのである。このため同好会組織や練習体制を整えることから始めて、全てのことを 2004 年 4 月に着任したばかりの菊池新校長が前任の校長から引き継いで実施することとなったわけである。これまで小本小学校で三つの七頭舞が伝承されており、また岩泉高校にも中野七頭舞の伝承活動が行われているが、小本中学校だけが民俗芸能に取り組ん

でいなかった。小本中学校としては、教育的な一貫性という意味でも、中野七頭舞同好会を発足させて民俗芸能をつなげたいという意識もあったと菊池校長はいう。

#### ②同好会組織および練習・指導体制

中野七頭舞同好会には、愛護少年団のメンバーを中心に組織されているが、それ以外にも同好会への参加希望者が加わっている。小本小学校では、小本地区の4年生以上の子どもたち全員が中野七頭舞を踊った経験があるので、同好会のメンバーに全くの初めて踊る生徒はいない。

中野七頭舞同好会の練習は、11月19日の岩手県中学校文化連盟での発表と12月11・12日の第4回全国中学校文化祭（2004年度の全国大会会場は沖縄）に出場するまでは、夏休み中と大会に近づいた頃に、毎週、火曜日と木曜日の放課後午後7時からに同好会の練習を行った。但し、3年生については、既に受験勉強のため部活にも同好会にも参加していない。

同好会の指導には中野七頭舞保存会会長の阿部一男がほぼ一人で行っているが、どうしても指導のために来校できない時には、保存会の高校生が代理で中学生の指導に来ている。

#### ③謝金

全国大会のお祝い金から些少の額を会長さんに渡したが、中野七頭舞保存会会長の阿部一男さんは、一応、受け取ってから来年の同好会の活動のためにと小本中学校に返金している。おそらく保存会の会長としては、小本中学校に同好会が発足したことで地域における小学校から高等学校までの一貫した中野七頭舞体制ができ、指導する労力を越えて喜ばしいことだったと思われる。しかし保存会の貢献に学校が無報酬で甘えることについては、かねてから疑問に思っている。

#### ④中野七頭舞同好会の今後の展望

中野七頭舞同好会の生徒の中でも愛護少年団のメンバーは、多くの生徒はそのまま保存会のメンバーとしてずっと踊り続けるだろうということであった。

愛護少年団のメンバーは、土曜日や日曜日には遠くまで公演に出かけている。菊池校長によると、全国大会出場後の中野七頭舞同好会は、今後、同校の文化祭などの学校行事に発表することになるようである。

#### ⑤小本中学校の状況を考える

小本中学校に中野七頭舞の同好会が発足したことは、確かに喜ばしいことであろう。しかしこの同好会発足は、生徒の側からのエネルギーから発足したものではなく、前校長が岩手県の中文連に全国大会への出場を立候補し、これが認められたために急遽発足した、いわば付け焼き刃の同好会である。愛護少年団以外の中学生も参加しているこの同好会が、全国大会以降もエネルギーを持ち続けられるか否かは疑問である。

また小本中学校には、中島七ツ舞、中里七ツ舞、大牛内七ツ舞を伝承している生徒たちも学んでいる。小本中学校に中野七頭舞同好会のみ発足したことが、彼らの目にどのように映り、どのような気持ちを抱いているのであろうか。学校という体制が、地域との関係で根本的に抱える複雑な問題をここでもまた痛感させられる。

小本中学校に誕生した中野七頭舞同好会は、生徒の主体性を育てながら、ゆっくりと時間をかけて醸成していった欲しいものである。

## (2) 国立音楽大学の実践～藤田ゼミの取り組み

前述したように、一地域の一つの踊りということでは、中野七頭舞は全国的な広がりをもつ珍しい舞である。全国的な広がりといっても、踊りのプロ集団から小学校から大学にいたる幅広い層が中野七頭舞を踊っている。とりわけ驚かされたのは、国立音楽大学幼児教育科の藤田芙美子教授のゼミにおける取り組みである。

前述したように筆者が中野七頭舞に関心をもったのは、十数年前から国立音楽大学で毎年実施している「幼教 Day」での学生が舞う中野七頭舞であった。舞台の上で繰り広げられるエネルギーで美しい舞に感動し、公演後に出演学生に依頼して中野七頭舞の太鼓の唱歌譜（資料1）を入手した。しかし踊りの現場に立ち会っていない筆者には、唱歌譜を見ても理解することができなかった。これがわかるようになるのにはかなりの期間を要した。

数ある七頭舞継承グループの中で、藤田ゼミの取り組みを取り上げるのは、大学における極めて特異な教育実践であるとの判断からであり、また次項で報告する筆者が実践した岩手大学における中里七ツ舞の伝統継承型の実践の契機となったものだからである。

藤田芙美子は既に国立音楽大学を退官し、現在は名古屋教育大学に勤務しているが、1991（平成3）年度の国立音楽大学教育音楽学科幼児教育専攻の藤田ゼミ卒業生南知子が、卒業研究として、「音大生による日本音楽の学習～岩手県の芸能中野七頭舞に取り組んで～」を書き残していた。筆者は、マイクロフッシュで保存されている南の卒業研究論文を国立音楽大学図書館から入手し、この論文に添付されていた全13巻の全てのビデオについても目を通した。

以下、南の卒業研究論文を手がかりにしながら、藤田ゼミの学生たちの取り組みの様子や概要を追ってみよう<sup>14)</sup>。

将来幼稚園の先生や音楽教育にたずさわる学生たちのに日本の民俗芸能を経験する場をつくりたいと考えた藤田は、1988年から毎年、自分のゼミすなわち藤田ゼミのメンバーの出身地に伝わる民俗芸能を取り上げ、「幼教 Day」の舞台に乘せるという内容のゼミを開講した。藤田ゼミの授業の正式名称は、教育音楽学特殊研究である。中野七頭舞に取り組む前にこの授業で取り組んだものには、富山県のこきりこ節、埼玉県の秩父音頭などがある。

藤田の言によると、国立音楽大学幼児教育専攻の学生たちが初めて小本の中野七頭舞講習会に参加したのは、1990（平成2）年のことである。この時、ちょうど藤田ゼミの学生の中に、宮古出身の学生がおり、その学生の父親が宮古の教育委員会勤務だったこともあり、学生の父親の紹介で中野七頭舞保存会と接触できたという。小本の七頭舞講習会に参加した4人のゼミ生を中心に9月からゼミのメンバー全員が中野七頭舞に取り組み、12月に音大の小ホールで開催された「幼教 DAY」で藤田ゼミの学生は中野七頭舞を披露した。それ以来、毎年、藤田ゼミでは藤田が国立音大を退官するまで中野七頭舞に取り組んだのである<sup>15)</sup>。

南の論文は、藤田ゼミの学生による中野七頭舞の2年目の取り組みの様子を参与観察法と質問紙法によって克明に記録したものである。1991（平成3）年ということと中野七頭舞の保存会自体も保存会結成16年目を迎え、北上のみちのく芸能祭りを初めとして、あちこちの芸能祭りに引っ張りだこで、かつNHKの取材が入るほど有名になっており、最も活気

を呈していた時期である。

1991 年の教育音楽学特殊研究（藤田ゼミ）履修者は 20 名であった。夏休み前までの前期の授業時間には、学生たちはビデオによって踊りの練習を行っていたが、4 人の学生が中野七頭舞講習会に参加した後の後期の授業時間では、リーダーが設定されて講習会参加者の 4 人を中心に全員の練習が展開されるようになった。

中野七頭舞の練習期間である 9 月 13 日から 12 月の本番までの 22 日間について、南知子の卒業研究論文から練習風景部分を要約しながら、国立音大の学生が自主的に中野七頭舞を習得していくプロセスを見ていきたい 16)。

① 9 月 13 日（金）

まずは夏に小本で行われる中野七頭舞講習会に参加した 4 人の学生がゼミの仲間に踊ってみせる。この第 1 回の時に藤田先生からの提案でこの 4 人の中からリーダーを選出した。全員で口唱歌に合わせて横跳のステップの練習を行い、横跳までを習得した。

② 9 月 20 日（金）

リーダーが、本番の衣装、道具を持って練習するのは 11 月以降、囃子方も一緒に練習すること、11 月に合宿を行うこと等をメンバーに提案した。中野七頭舞愛護少年団の中野七頭舞のビデオを鑑賞する。舞い方の学生は自主的に短パンと T シャツに着替え、円になってちらし舞いの練習を行う。ステップのみを練習し、次に手の動きを練習し、最後に手足と一緒に動かす。授業の前半のリーダーのかけ声は「1・2・3・4」だったが、後半は「さんはい、ダンド、ツット、ツットコダン」と口唱歌を唱えていた。この段階では、リーダーは「大体の形がわかればよい」と説明していた。

③ 9 月 27 日（金）

踊りの進み具合によって、能力別に二つのグループに分かれて練習する。遅れた方は、小本の合宿に参加した者が指導し、進んだ方は新しい次の部分の練習に入った。この時、指導者側の学生は口唱歌を唱えながら指導を行ったが、次第に他の学生も口唱歌を唱えるようになった。この日は全員がツットウツまで習得した。

④ 10 月 4 日（金）

舞い手と囃子方の役割分担が発表される。指導者を中心にツットウツまで踊りを通す。この時の繰り返し練習の中で、口唱歌を唱えながら舞う学生が出てくる。また指導者が手本を示す時には他の学生もその振りを模倣しながら動き、ゆっくり踊ってほしいというような要望も口に出すようになる。わからない部分は相談しながら踊ったり、講習会参加学生の意見が食い違ふと全員で中野七頭舞のビデオで確かめたりする様子がみられる。

⑤ 10 月 8 日（火）

午前 9 時より学生が自主的に計画した補講が行われた。連絡不足で参加者が少なく、リーダーも参加していなかった。ツットウツまでを練習して、構成の話し合いになる。この頃には、口唱歌は全部唱えられないが、リーダーを見なくても踊れる学生が出てくる。

⑥ 10月11日（金）

メンバーに苦手なところを中心に練習する。口唱歌は唱えながら踊る方がよいという話が出て、できる学生は意識的に口唱歌を唱えて踊るようになる。この頃から、どうしたら格好良く踊れるのという舞いの研究が見られるようになり、互いに批評し合いながら練習するようになる。リーダーから中野七頭舞の連絡が配布された

⑦ 10月15日（火）

午前9時から補講には前回と同じようなメンバーが集まる。見ているときは大きく口唱歌を唱えていても、踊ると声が小さくなってしまう。指導した学生は、細かい手の動きや目線などを注意し始める。学生間で互いの踊りに注意が向けられるようになった。

⑧ 10月18日（金）

体育館で授業時間に練習を行う。リーダーから合宿についての説明があり、各係（道具・衣装・照明）からも報告があった。衣装担当から衣装のデザイン画が示され、リーダーからは練習日程表が配布された。この頃には、個人や役割毎に練習する姿がみられるようになる。ほぼ全員が口唱歌を唱えることができるようになった。また笛方から舞い方に要望が出されたり、リーダーからは技術的なことだけでなく、舞の意味を踏まえながら踊ろうというような呼びかけがなされるようになった。

⑨ 10月25日（金）

相撲や剣道でつま先で深く腰を下ろして股を開き上体をただした姿勢のことを蹲踞（そんきょ）というが、中野七頭舞の基本姿勢であるこの蹲踞についてリーダーが説明する。この間、囃子方はそれぞれの楽器を個人練習する。切り合いの説明で講習会参加学生の意見が食い違い、練習が中断する。蹲踞の練習や通し練習を行う。学生は自分の役割に適した舞い方に興味を持ち始めている。金曜日は、午後4時10分の授業終業時刻に終わらない時は教室を移動して午後6時頃まで練習を行うことが多い。

⑩ 11月5日（火）& 6日（水）

武蔵野青年の家における1泊2日の合宿。ほぼ全員の学生が参加し、太鼓や摺鉦は大学から借り、笛は各自が持参して囃子方も一緒に合宿を行う。5日は、夜遅くまで練習が続けられ、全体の構成に順点を置いた練習になった。夜中に自主練習する学生もいた。6日には、昨年、中野七頭舞を踊った藤田ゼミの先輩が合宿に訪れ、途中から一緒に踊り出した。

⑪ 11月8日（金）

学生が集まり始めると、自主的に三足の練習が始まった。体育館にモップで小ホールの広さを予想して、その中で通して踊る。太鼓が間違えても口唱歌でつないで流れが止まることはなかった。主に囃子方による音楽と踊りを合わせる練習を行う。衣装担当者から衣装の作り方のプリントが配布される。

⑫ 11月12日（火）

火曜日の補講の時間は、ほとんど同じメンバーでリーダーもいない時があり、まとまりがなく個人練習になってしまう。腕の回し方や杵の回し方などの細かい研究が中心になった。

この日は一度も通して踊らなかった。

⑬ 11月14日（木）・18日（月）・19日（火）・21日（木）

この4日間は、午前9時より道具や衣装作りを行う。衣装担当は、新聞紙で袴の型紙を作り、店で布を購入し、1人分のサイズに裁断した布を学生に配布した。自宅生でミシンのある学生がミシンのない仲間の仮縫いした袴をミシンで本縫いしてきた。

⑭ 11月22日（金）

この授業の前の時間が休講のため、約2週間かけて作った衣装を合わせた。そのため練習の始まりが遅れ、リーダーが練習の呼びかけををしても全体で踊る雰囲気にならなかった。体育館で小ホールのステージを予想して練習しても、「疲れた」「ばてた」の声が聞かれた。

⑮ 11月26日（火）

舞い手が全員集まったことを喜び合う。構成の確認をして通して踊るが、構成の勘違いで止まってしまったり、舞がわからなくなる人もいた。

⑯ 11月29日（金）

全員衣装を付け、本番通りの流れで練習する。何度も中断しながら踊り位置の確認を行ったため、舞の通し練習は1回だけだった。

⑰ 11月30日（土）& 12月1日（日）

この2日間はほとんどの学生が集まり3号館で衣装を付けて舞の練習を行う。藤田先生から中野七頭舞は見せるための踊りではなく、地元の人々の神に捧げる祈りであるという話があった。藤田先生に細かい動きを指摘されて学生たちは真剣に練習した。練習後、何人かの学生が本番で舞台に飾るすすきを取りに行った。

以上が南論文から筆者が要約した本番前日までの練習風景である。1991（平成3）年度の国立音楽大学の「幼教 Day」は、最終練習日の翌日の12月2日（月）だった。当日の午前のリハーサルの時間に学科試験が重なるメンバーもいて人数が揃わなかったようだが、午後のリハーサルには全員が衣装をつけてステージ練習ができたようである。本番の様子は国立音楽大学の視聴覚室で本論文添付のビデオで見ることができたが、音大生独自の中野七頭舞を見事に舞う姿が映し出されていて、ビデオにもかかわらず筆者は深い感動を覚えた。

南は自身の論文の最後に次のように述べている。

「すでにあるものをただ演ずるのではなく、舞を基にして自分たちで考え、作り挙げたものを演ずる。それも1人ではなく、学生全員で一つのものを作り上げることで、その民俗芸能に対して真剣に、夢中になっていった。（中略）学生達にとっては中野七頭舞の学習でも、結果的には日本の民俗芸能を学習したことと同じ事になっていた。」

南論文から見える国立音楽大学藤田ゼミの中野七頭舞の取り組みについて、最後に筆者の見方を提示したい。

#### ①学生自身が創り上げた国立音大中野七頭舞

南の最後の言葉からもわかるように、全て学生自身が本物をお手本に試行錯誤しながら自分た



ちで構成を工夫を加味して創り上げたことは、学ぶプロセスを含めて創造的で素晴らしい取り組みであった。しかし中野七頭舞保存会では、精神性の高い道具取り舞や道具納め舞は保存会のメンバーだけが踊っている。南論文からわかるように精神性の面で道具取り舞を省略しているのが、きわめて残念であった。

## ②すべて学生の手づくり

踊りの面だけではなく、リーダーを中心に学生自身による道具や衣装の製作が行われたことは驚くべきことである。七頭舞の道具は、既に述べたように先打ち用や谷地払い用の長い棒、薙刀、太刀、杵や弓など、手作りするのはかなり難しい道具ばかりである。また衣装も普通の盆踊りなどとは違って袴、襦袢、帯など全て手作りせざるをえない状況である。特に袴の用意まで学生が自主的に行ったことは刮目に値する。

## ③学生の意識変革

国立音大生は、そもそも西洋音楽を中心に学んでいる集団である。他の学生たちがピアノ、声楽、管楽器、弦楽器、打楽器などさまざまな西洋楽器の習得を目指してしのぎを削っている中で、結果的にこの舞に参加した学生たちに中野七頭舞のみではなく民俗芸能全般への関心を喚起するという大きな意識変革をもたらしたと思われる。

## ④音楽面の研究

南論文には、音大生らしく笛と太鼓の手書きの楽譜とその口唱歌を書き入れた中野七頭舞の楽譜が資料が添付されている（資料2）。残念なことにマイクロフッシュの画面の傷で読みにくい楽譜になってしまっている。中野七頭舞の楽譜については、保存会 20 周年記念誌の巻末に掲載されたものを、（資料3）として転載する。南の楽譜と記念誌に掲載された笛の楽譜には相違が見られるが、笛は基本的には演奏者による即興部分が含まれており、演奏者によって違うのがあたりまえと考えられる。むしろ楽譜化することで、メロディーが固定されるというマイナス面が出てくるのは否めない。

最初に述べたように筆者の中野七頭舞との最初の出会いは「幼教 Day」で藤田ゼミの学生が舞う七頭舞であった。生き生きとした学生たちの姿を目の当たりにして、それ以来、最近までは中野七頭舞への憧憬が途絶えたことはなかった。本研究のテーマに中野七頭舞を明記したのも、この時の感動体験がその要因であった。

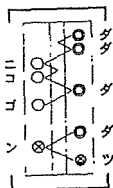
次項では、中野七頭舞研究から拓げて主な研究対象に取り上げた中里七ツ舞に関する基礎的な研究内容について報告する。

(資料1) 中野七頭舞太鼓譜

\* この太鼓の唱歌譜は保存会 20 周年記念誌『日本の大地に舞う中野七頭舞』(121-124 頁)に掲載されている。

# 資料編

道具取り

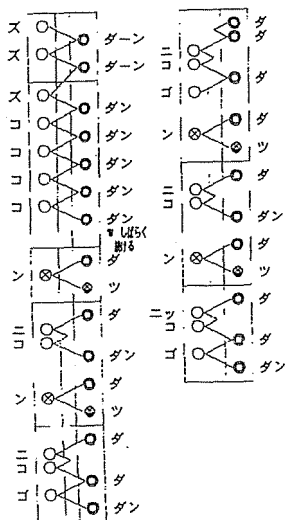


- : 独く打つ
- : 普通に打つ
- ⊙: 下をたたく
- ⊗: 跳ね返らずに打つ
- ⊕: 跳ね返らずに下を打つ

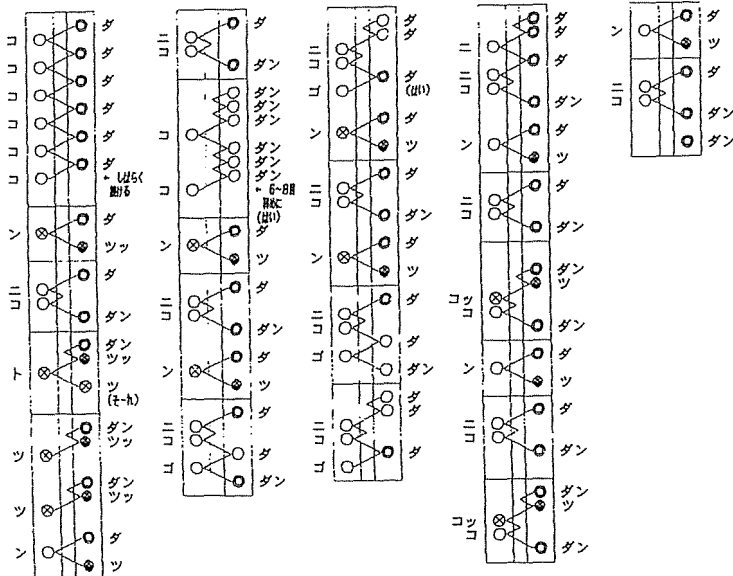
この太鼓譜は、地元保存会による礼賛(94年11月)の講習会の会場で保存会会長の山本恒喜さんが声に出した唱歌を記録し、それを基に作成したものである。  
山本恒喜さんの太鼓の叩き方にできるだけ忠実になるように書いたつもりであるが、特に『遊び太鼓』の部分は山本さん自身もその時によって変化するとおっしゃっている、必ずしも実際はこのとおりではない。  
絵に学習用として、バターンを太鼓譜として起こしたが、実際には笛とのやり取りや、踊り手との呼吸とで変化しますし、一番と二番へのつなぎとしての遊び太鼓は全く違うものです。  
また、このような太鼓譜だけでは実際の強弱や微妙なリズムなどは伝わりませんので、あくまで参考にして、直接習うことで習得することが重要であることを付記しておく。  
原稿: 星野 康  
校訂: 星野 康  
監修: 安藤 徹

【中野七頭舞太鼓譜】

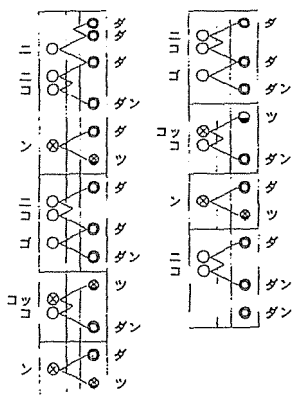
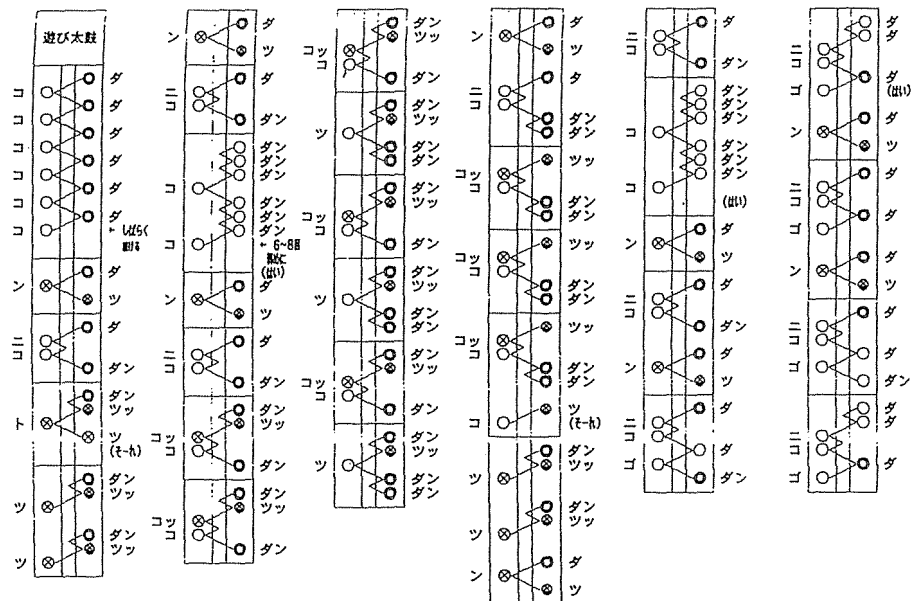
《遊び太鼓》

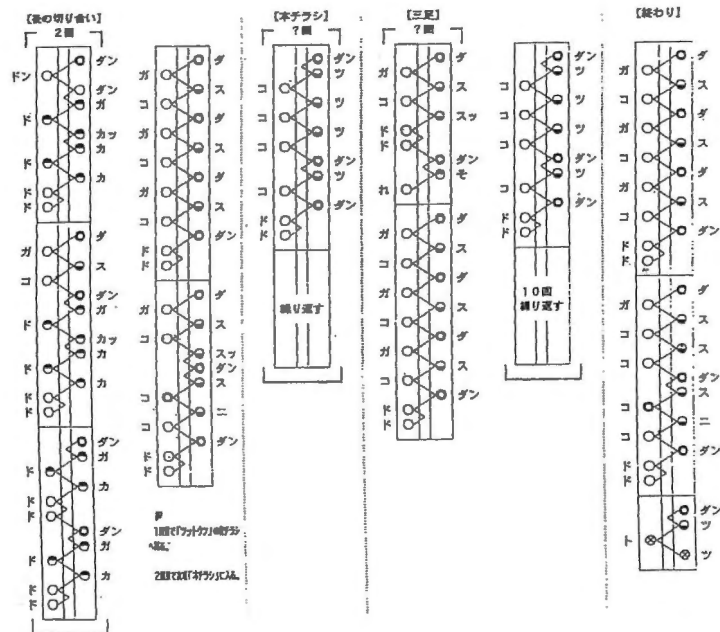


【一 番】



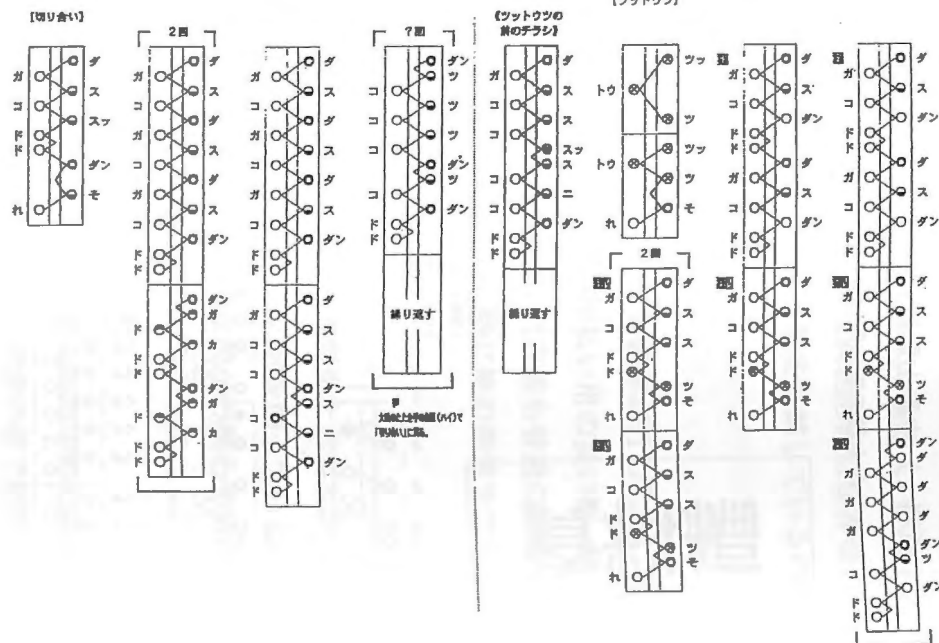
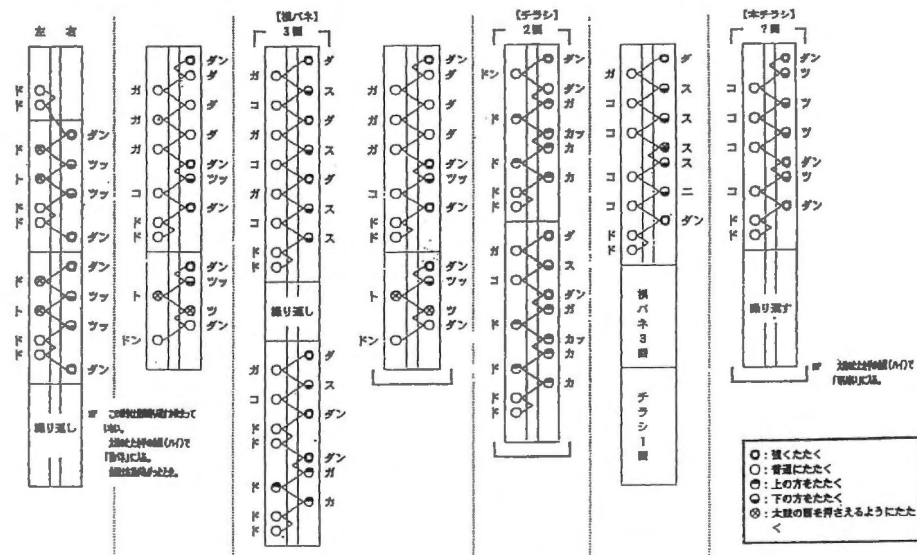
《二 番》





1回で「ワカ」の形  
2回で「ワカ」の形

# 【中野と頭鼻】太鼓譜



1993年改訂版  
札幌民俗舞踊教育研究会  
（青木・港・安藤）  
・2度目の「ツットウツ」～「後の切り合い」  
がおわったら「三足」へ進む。  
・舞形変化があるので、かなり長い間  
「本テラシ」を続ける。  
・1991年1月、現地「小樽」で行なわれ  
た新舞踊会の資料です。保存会会長の  
山本重雄さんが、これから太鼓を始める人の  
ために作ったものです。  
・現地では、左右のバチを打つリズムが  
特異で、左は若干左手で打てる独特の  
リズムで打たれている。  
1994年改訂版  
西の星民舞の会  
（岡田）  
・札幌民俗舞踊教育研究会で作成された  
太鼓譜を一部構成（横バネからテラシ）を  
変えてワープロ化してみました。

(資料 2) 南知子の卒業研究論文に掲載されている中野七頭舞譜

\* マイクロフィッシュからのコピーのため汚れが多い。なお楽譜上の×は南自身が記入したものである。

[illegible]





⑤  
テラシのバターン

\*この笛の楽譜は  
記念誌『日本の大  
地に舞う中野七頭  
舞』（125-126 頁）  
に掲載されている。

2 1 0 5 4 4 5 0 5 2 1 2 2 4 5 0 5 0 5  
5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5  
『ハイ』 忘れり出す。

2 4 2 4 2 4 4 5 2 1 2 1 2 4 5 0 0 1  
5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5  
【後/ハの】

5 5 0 1 5 5 0 1 5 0 0 1 5 5 0 1 5 5 0 1 5 0 0 1  
2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2

2 4 2 5 4 5 0 1 0 4 4 4 2 4 2 4 2 4 4 5 2 1  
5  
2 1 2 4 5 0 0 1 2 2 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5  
【前/ハの】

5 5 0 1 5 5 0 1 5 0 0 1 5 5 0 1 5 5 0 1 5 0 0 1  
2 2

2 4 2 5 4 5 0 1 0 4 4 4 2 4 2 4 2 4 4 5 2 1  
5  
2 1 2 4 5 0 0 1 2 2 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5

【切り合い】

2 4 4 4 5 0 1 0 4 4 4 5 5 0 1 5 5 0 1 5 5 0 1 5  
5  
2 4 2 5 4 5 0 1 5 4 4 4 5 5 0 1 5 5 0 1 5 5 0 1 5  
5  
2 4 2 5 4 5 0 1 0 4 4 4 5 5 0 1 5 5 0 1 5 5 0 1 5  
5  
2 4 4 4 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5  
2 4 4 4 5 0 1 5 5 0 1 2 1 4 4 4 5 0 1 5 5 0 1 2  
5  
4 4 4 2 1 5 5 0 1 2 1 4 4 4 5 0 1 5 5 0 1 2  
5  
2 4 4 4 5 0 1 0 5 0 1 2 1 4 4 4 5 0 1 5 5 0 1 2  
5  
4 4 4 2 1 0 5 0 1 2 1 4 4 4 5 0 1 0 5 0 1 2  
5  
【後の切り合い】

2 4 4 4 5 0 0 1 2 1 4 4 4 5 0 0 1 2 1 4 4 4 5 0 0 1 2  
5  
1 4 4 4 5 0 1 0 4 4 4 2 4 4 5 0 1 5 5 0 1 2 1 4 4 4 5 0 1 2  
2 5  
1 4 4 4 5 0 1 5 0 0 1 2 1 4 4 4 5 0 1 0 4 4 4 2 5 5 5 5  
2 5  
5 5 0 1 5 5 0 1 0 4 4 4 2 4 4 5 0 1 1 4 4 4 2 2 5 5  
2  
2 4 4 4 5 0 1 5 5 0 1 2 1 4 4 4 5 0 1 5 5 0 1 2  
5  
4 4 4 2 1 5 5 0 1 2 1 4 4 4 5 0 1 5 5 0 1 2 2 5 5  
5  
【ワットツワ】に変わる。

4 4 4 5 0 1 0 4 4 4 5

[illegible]



【注および参考文献】

- 1) 中野七頭舞の由来については、中野七頭舞保存会の 20 周年記念誌『日本の大地に舞う中野七頭舞～さらなる躍進を目指して』（78~85 頁）に創始者の孫、工藤竜山による詳しい紹介が掲載されている。
- 2) 岩泉町立小本小学校『平成 9 年 20 周年七頭舞記念文集』に転載された中野七頭舞保存会会長 山本恒喜が岩泉民間伝承研究会編「85 いわいずみ ふるさとノート」（昭和 60 年）に寄稿した 11 頁にわたる文章には復活の様子が書かれている。
- 3) ビデオ『中野七頭舞の 20 周年』は、中野七頭舞の 20 周年記念イベントに呼応してアサヒプロダクツによって製作されたもので、第 1 部ドキュメント編（90 分）と第 2 部稽古編（120）の部分からなる優れた記録および練習ビデオである。
- 4) 前掲 2) の山本の文章、4 頁。
- 5) 前掲 2) の山本の文章、9 頁。
- 6) 前掲 1) の 20 周年記念誌の巻末に掲載された中野七頭舞保存会会員名簿には、平成 8 年 8 月 1 日付けで、新会長として阿部一雄の名前が明記されている。
- 7) 前掲 2) の『平成 9 年 20 周年七頭舞記念文集』に転載された元小本小学校教諭の千田任男が岩泉民間伝承研究会編「85 いわいずみ ふるさとノート」（昭和 60 年）に寄稿した文、「郷土芸能『七頭舞』に取り組んで～クラブ活動から教材化へ」（全 6 頁の文）に、当時の千田の気持ちが読み取れる。
- 8) 同上、8 頁。
- 9) 『日本の大地に舞う中野七頭舞』については、巻末の年表の中から重要な事項を抜粋した。小本小学校の『20 周年七頭舞記念文集』には小本小学校の取り組みだけが記載されている。
- 10) 20 周年記念ビデオ『日本の大地に舞う中野七頭舞』の企画・著作は中野七頭舞保存会で製作・著作は（有）アサヒプロダクツである。
- 11) 岡田洋一「2002 年夏、民舞を学びなおす旅」東京民族舞踊教育研究会のホームページ（<http://www2s.biblobe.ne.jp/~minbuken/2006> 年 1 月現在）に掲載、7 頁。
- 12) 三浦真由美・佐々木愛香のレポート「故郷の伝統を学び、自分を知る。～自分が踊り続ける意義～」1 頁。なおこのレポートは、A 4 用紙 11 枚の頁の記入のないもので、インターネットの情報と中野七頭舞会長の阿部一雄と 2002 年の中野七頭舞講習会参加者へのインタビューをまとめたものである。
- 13) 小本中学校の状況については、2005 年 1 月 27（木）小本中学校の菊池良子校長への直接および電話取材による。
- 14) 南知子卒業研究「音大生による日本音楽の学習～岩手県の芸能中野七頭舞に取り組んで～」は、国立音楽大学においてマイクロフッシュで保存されている。
- 15) 藤田ゼミで中野七頭舞に取り組み始めた頃のいきさつは、前掲 1) の書（27 頁）に藤田自身が中野七頭舞 20 周年に向けて寄稿した短い祝辞に書かれている。
- 16) 前掲 14) の論文、13~28 頁。

## 6. 中里七ツ舞に関する基礎研究

中里七ツ舞については、「小本小学校と四つの『七つ物』」の項において簡単に触れた。本研究は、当初、中野七頭舞に焦点を当てていたが、研究の進捗の中で、本研究の大きな柱の一つである実践的研究の対象としては、次のような理由から中里七ツ舞が適切であると判断した。

①中野七頭舞に関する研究が進んでおり、新たな研究成果が求めにくい。

中野七頭舞は、すでに岩泉の中野地区以外にも全国的に多くの団体に継承されており、民俗芸能とは思えないほど効率的な踊りの指導方法が確立している。また前項で述べたように国立音楽大学の藤田ゼミが関係したことから、お囃子のリズムやメロディーの楽譜化といった音楽面の研究も進んでおり、今後、新たな研究的発見を求めるのは難しいと思われた。

さらにこれまで多くの研究者や団体からの協力を求められてきた中野七頭舞保存会会長の阿部一雄は、個人的な研究への協力に対しては消極的な姿勢を示した。多数の個人や団体からの問い合わせや講習会参加および各地の大学からのフィールドワークの依頼などが多く、阿部にとって研究協力という形の外部との接触はむしろマイナス要因に感じられるようになったのではないかと推測できる。阿部会長の心情を尊重して研究協力への依頼を控えることにした。

②中里七ツ舞の魅力に惹かれ、かつ保存会会長の協力が得られた。

小本小学校における取材時に中野七頭舞に匹敵すると思われる中里七ツ舞に出会い、筆者はこの舞に強い関心を抱いた。一度も外部に継承されることなく、中里の小さな集落で宝のように守られてきた美しい中里七ツ舞とそれを懸命に舞う子どもたちの真剣な表情と真摯な姿が印象深く心に浸透すると共に、その躍動的な中里七ツ舞の魅力に惹かれたのである。幸いにも農業に携わりながらも宮古高等学校で書道の非常勤講師を勤める中里七ツ舞保存会の武田由紀子会長は、岩手大学教育学部書道科の出身者であったため、岩手大学所属の筆者に対しても協力的な姿勢を示してくれた。実践的な研究においては、保存会会長の協力が不可欠であり、研究推進のための現実的な可能性から考えても、中里七ツ舞研究が最も研究対象として適切であった。

③中里七ツ舞と黒森神楽の関係の深さを感じさせられた。

中里七ツ舞を創始した武田新九郎は後に大牛内七ツ舞も創始しているが、この両者の舞には「五方の矢」が含まれている。「五方の矢」とは、黒森神楽において神社仏閣の落成式や新築祝いで舞う儀式色の強い御堂入りという舞に含まれている演目である。この御堂入りの基本的な所作がシットギ獅子に反映され、シットギ獅子経由で中野七頭舞が誕生したことを考えると、中里七ツ舞は黒森神楽の御堂入りから直接影響を受けた舞ではないかと思われた。残念なことに中里七ツ舞の「五方の矢」は現在伝承されておらず、今は詳細な伝承史を知る者もいないため、このことを立証する術はないが、黒森神楽を想起させる神聖な中里七ツ舞に研究意欲をかき立てられた。

このような三つの理由から、本研究のサブテーマを拡げた研究内容になった。しかし中里七ツ舞に焦点を当てることで、中野七頭舞から「七つ物」研究へと研究範囲が広がり、結果的に本研究のねらいの一つであった剣舞系の「七つ物」研究にもつなげることができた。

## 1. 中里地区における中里七ツ舞の由来と伝承

中里七ツ舞は、岩手県の北沿岸や県北地域で伝承されている民俗芸能「七つ物」の一つである。

地域の教育力の低下や総合的な学習の学校教育への導入によって、学校が地域の民俗芸能の伝承に関与するケースが増えている。しかし少子化による廃校や学校統合によって、それまで学校で伝承していた芸能が中断したり、統合先の学校で伝承せざるを得なくなるという実態が見られる。2003 年に少子化のため廃校になった中里小学校もそのような学校の一つである。しかし幸いにも中里小学校で伝承していた中里地区の中里七ツ舞は途絶えることなく、今では海の幸に恵まれた美しい陸中海岸国立公園に面した小本地区にある小本小学校において伝承されている。

### (1) 中里地区と中里七ツ舞

中里地区は、現在、主に武田と竹花の 2 つの苗字の一族からなる集落である。小本川の下流の平坦地に古くから開けた集落の一つであり、今ものどかな田園風景が広がる 46 戸の小さな集落である。主な産業は稲作中心の農業や林業で、ダイコンやニンジンなどの野菜や椎茸栽培、酪農も行われている。採石場、土木建設会社、運送会社、水産加工場などの事業所、役場や農業協同組合などもあり、地域住民の多くは勤めに出ている。

このような中里地区だが、その昔の歴史を繙いてみると、南部藩とのつながりが深かったようである。中里の本名は小笠原であるが、中里は南部家の四天王の 1 人であり、代々普代格の家柄であった。1591（天正 19）年に太閤秀吉の奥州仕置きの九戸政美討伐に当たり南部信直方として参戦し、功績をあげて信直の地方支配者配置転換の際に中里村 88 石 3 斗の知行を与えられ、当時の慣例に則って小笠原から村名の中里を名乗るようになった。中里は正吉中里嘉兵衛から正規中里半兵衛と続いていくが、南部家と中里家は家臣関係から血縁関係に転ずることになる。すなわち少年期を中島と中野の間にあった越廻り館で過ごしたという 26 代南部信直の子どもの 27 代信濃守利直に中里の正吉の長女が御妾となり八戸藩初代直房君を産んでいる。また正吉の長男正規の三女は南部三十代信濃守行信公の御妾になり八弥君を産んでいる<sup>1)</sup>。したがって南部藩と縁戚関係にあった中里地区は、この地域の他の部落に比べて知行面で恵まれていたようである。しかし 1814（文化 11）年には、中里村他二村の地頭、中里治右衛門の法外な課税と領内の百姓の取り扱いを不服として、竹花斎太率いる中里・中島・摂待の三村 98 人が地頭の排斥と新蔵地編入を盛岡藩に直訴するという百姓一揆も起きている。結果的に一揆は成功し、訴願要求は百パーセント受け入れられたが、一揆の首謀者である斎太は田名辺牛滝に追放になり、老齢や服役中の労苦や帰途の旅疲れなどが重なって 1816（文化 13）年に死去している<sup>2)</sup>。

中里地区の歴史の一端を垣間見てきたが、近年は若者が中里地区外に出て行くようになり、次第に地域住民の高齢化が進んでいる。老人が増える一方で中里地区の子どもは減少し、中里小学校はとうとう 2003（平成 15）年に廃校になり、小本地区の小本小学校に統合されてしまった。

このとき中里小学校で伝承されていた中里七ツ舞は、すでに統合されていた中島七ツ舞や小本小学校分校の大牛内七ツ舞と共に、小本小学校においても中野七頭舞に吸収されることなく、中里地区の子どもたちによって伝承されることになった。しかしながら近年の中里地区の児童減の

ため、統合前から中里七ツ舞に参加していた近隣の宮本地区と日向地区の児童が一緒になって、何とか中里七ツ舞に必要な人数を確保しているという厳しい現状がある。

小本小学校が中野七頭舞に一本化しない道を選択し、また中野七頭舞の阿部一雄会長がそれぞれの地区で伝承してきた「七つ物」を尊重し、中野七頭舞への統合を避けたのは民俗芸能研究の見地から見ると優れた見識であった。学校統合に伴って、多くの学校で伝承していた芸能が消滅している実態を考えると、学校として取り組みの煩雑さや困難な問題が予想できても、あえて全ての地区の七ツ舞の伝承を決意した小本小学校の勇気ある決断に敬意を表したい。

## (2) 中里七ツ舞の伝承史 3)

中里七ツ舞は、岩泉町で既に全国的に知られている中野七頭舞と同様、天保年間（1830~1843）から岩泉町中里地区に伝わる七ツ舞で、中里神楽の継承者で神楽太夫と呼ばれた武田新九郎が創始した踊りである。黒森神楽の家々に舞い込むときの先払い芸能が風流化したものと考えられているが、筆者は前述したように黒森神楽の御堂入りが基になった舞ではないかと推察している。

神楽の踊り上手が岸（中里の隣の部落）に住んでいた頃、修験者から習った踊りを教えたいと最初に岸の人々に声をかけたが、岸の人びとはあまり関心を示さなかった。そこで中島地区に声をかけたところ、中島地区の人びとが踊りに関心を示したので踊りを教えたところ、その踊りの評判が大変良かった。その評判を聞きつけた岸の地区の人々も踊りを習いたいと申し出た。その中島や岸の人たち踊りを教えた人の師匠が中野にいて中野七頭舞を教えたという話が残っている。中島の隣の中里地区にいた武田新九郎は踊り上手な人で、中里地区で中里七ツ舞を創始した。新九郎は大牛内地区に入植してから大牛内七ツ舞も創始している。この新九郎の舞は岸神楽流「八つ祓い舞」の末流だといわれている。したがって小本川流域の隣接地域の七ツ舞の中では、中島と岸の七ツ舞が古いようである。中野七頭舞は中島七ツ舞より後に創始されたようだが、今のところ真相は不明である。中里七ツ舞と大牛内七ツ舞は、所作は違っても師匠が新九郎という兄弟舞である。中里地区では、ちょうどこの中里七ツ舞ができた時、飢饉のため食べることに苦労していた時であった。この中里七ツ舞を踊るようになって何故か5年間は豊作が続いた。村人はこれに励まされ、きっと中里七ツ舞の御利益だと考えて100年近くも踊り続けたといわれている。

その後、どのような変遷があったかは定かではないが、今から30年位前には中里青年会でこの舞を踊っていた。この頃、25歳だった武田由起子はお祭りのアトラクションで初めて中里七ツ舞を見て取り付かれた。青年会による七ツ舞の伝承が途絶えてからしばらくして中里小学校の千田次郎校長が中里小学校で中里七ツ舞を復活させた。この時、太鼓は竹花実（猿沢の人）と武田久志の二人が中心となって指導し、踊りは加藤格造が指導した。この格造の父親が中里七ツ舞の指導者だったため、格造も若い頃は、中里七ツ舞の踊り上手が舞う先打ちを踊っていた。またこの格造の奥さんの父親が武田新九郎、すなわち中里七ツ舞の創始者だった。しかし中里小学校での復活は千田校長在任期間の3年間程度にすぎなかった。その後、少なくとも十数年のブランクがあり、今から18年前の1988（昭和63）年に現会長の武田由起子が再復活を果たした。

復活に当たって、武田由起子は竹花市右衛門の息子が家に所蔵していた中里七ツ舞のビデオ（ベーター版）を擦り切れるほど見て踊りを覚え、かつ不明な部分については伝承者竹花実の娘であ

る竹花千秋から教わった。

武田会長が再復活に取り組み始めた頃、中野の元保存会会長の山本恒喜と竹花実<sup>ゆづ</sup>に太鼓を学んだ子どもの太鼓奏者、工藤（現在、27 歳）雄<sup>ゆう</sup>が中里七ツ舞の太鼓をたたいていた。もともと中野七頭舞の太鼓奏者だった工藤の太鼓は竹花実の太鼓とは違って、中野七頭舞の影響を受けてテンポが速かった。工藤の太鼓を契機に、中里七ツ舞も昔よりもテンポが早くなり、現在ではかなり早いテンポで踊っている。

武田会長はビデオで所作を起こし、わからない部分を竹花千秋（36 歳位で結婚して、現在は八戸に住んでいる）に教わった。ほぼ踊りの形が整った後、青年会の踊りを教えていた加藤格造に踊りの振りのチェックを依頼したという。またこの後、復活のために太鼓奏者の竹花実にも踊りを見てもらい、中里七ツ舞の伝承者であるという許可を得ることができた。さらに中野七頭舞の石黒幸雄（当時、郵便局長）から、中里七ツ舞の腰を深く下ろす独特の舞い方のアイデアを得た。こうして現会長の武田由起子を中心とした仲間の努力が実り、1988 年に中里七ツ舞は見事に復活を遂げたのである。

## 2. 中里七ツ舞の保存会組織と練習

### (1) 中里七ツ舞保存会組織

中里七ツ舞の保存会は、会長の武田由紀子（53 歳）を中心に、副会長の竹花瑠璃子（49 歳）、を初めとして、理事は保存会の中心的メンバーの武田悦子（54 歳）、武田亜由美（36 歳）両氏の他 2 名、これに武田悦子が監事を兼任している。音楽は太鼓奏者が 9 名、鉦奏者が 9 名、笛が 2 名、踊り手が 44 名の名簿がある。

この人数から想像すると結構大きな組織構成のように思われるが、実際には、太鼓をたたける人、踊れる人という意味で、役員も音楽も踊りも名前が重複している。つまり 小・中・高等学校の生徒と大人で総勢 40~50 人位はいるようだが、実際に積極的に舞う活動をしているのは小学生だけであり、現在、青年部は存在していないため、民俗芸能祭などに出演の機会があった時に中学生以上の都合のつく若者が小学生と一緒に参加している。

名簿に載っていても既に中里地区から離れている者もあり、実動部隊の小学生は、年々減少傾向にあり、現在ではまだ踊りを覚え切れていない 1・2 年生を含めても小学生はたったの 7 名しかいない。したがって、本来、中里七ツ舞は七つの道具のうち先打ち以外は 2 名で分担する舞いであるが、人数不足のため、いくつかの道具は 1 名で担当せざるを得ない状況になってきている。年々、高齢化が進むに伴って少子化が進んできており、中里地区の子どもだけでは踊れなくなっており、近隣の宮本地区と日向地区の子どもが中里地区の保存会に加わって、何とか保存会は外部の公演依頼も受け付けている。しかし今後もなかなか子ども人口の増加が期待できる状況ではないため、継承者不足から中里七ツ舞の伝承活動に以前よりも不安と陰りが感じられるのは否めない事実である。

武田会長から入手した中里七ツ舞の名簿一覧を示しておこう 4)。

＜中里七ツ舞郷土芸能保存会名簿（2005 年 10 月現在）＞ \*（ ）内の数字は年齢

- ・会長：武田由起子（53）                      ・副会長：竹花瑠利子（49）
- ・理事：武田悦子（54）、武田あゆみ（36）、工藤富喜子（52）、武田さおり（41）
- ・監事：武田悦子（54）
- ・太鼓：工藤雄宇（27）、武田大樹（24）、武田勝磨（21）、武田和樹（17）、加藤奨悟（14）  
    昆野翔太（14）、加藤宏希（12）、昆野遊大（8）
- ・鉦： 加藤格造（80代）、加藤トミ（80代）、竹花瑠利子、武田浩美（52）、佐々木富士子  
    （46）、加藤由美子（31）、昆野ゆかり（36）、穂高イキ子（45）、昆野妙（31）
- ・笛： 武田かなえ（17）、昆野未来（11）\* 畠山安夫（黒森神楽の笛奏者）
- ・踊り：竹花一枝（55）、工藤富喜子（52）、武田すが子（30）、関弘康（30）、三沢真由美  
    （28）、竹花百代（28）、竹花淳（27）、工藤雄宇、加藤久義（26）、武田大樹（25）、  
    関友弘（24）、加藤たけのぶ（22）、昆野栄寿（22）、竹花奈々江（21）、武田勝磨（21）、  
    竹花元宏（21）、竹花幸弘（20）、竹花英朗（19）、工藤雅人（18）、加藤宏栄（18）、  
    加藤一篤（18）、武田かなえ（17）、武田和樹、武田美穂（16）、加藤智美（16）、武  
    田梨沙（15）、武田恭典（14）、穂高滉一（14）、昆野翔太（14）、加藤奨悟、武田昌  
    幸（14）、斉藤舞（14）、昆野魁人（13）、加藤遙（12）、昆野未来、小成裕季（12）、  
    佐々木裕夏（10）、穂高晴美（9）、竹花秋奈（8）、昆野遊大、三上宏美（無記入、）  
    武田さえ子（無記入）
- ・着付け：竹花あさ子、佐々木富士子、竹花瑠利子、穂高カツ子、武田悦子、小成タキ子、  
    武田さおり、加藤由美子、加藤裕子、加藤アイ子、武田あゆみ、武田由紀子、  
    昆野ゆかり、加藤照美、穂高イキ子
- ・顧問：竹花光平

## （2）保存会や小本小学校における練習

### ①中里七ツ舞保存会

中里地区に交流会館ができてから、中里七ツ舞の練習はもっぱら交流会館で行われてるようになった。中里七ツ舞保存会では、通常夜の7時から8時、または7時半から8時半の約1時間を週複数回行っている。また夏休みの時期には、プールの帰りに毎日練習できるように週6日間の練習日を設定している。

現在、中里保存会には中里地区を初めとして、宮本・日向の2地区の子どもが全員が加わっており、岩泉の芸能祭（8月）、氏神である八幡様の祭り（9月）、小本小学校の運動会（5月）や七頭舞発表会（2月）で踊るのを楽しみにしている。この他にも宮古芸能祭を初めとして他地域の芸能祭などに出演する時には、毎晩、集中的に練習を行うことにしているようである。

### ②小本小学校での練習

小本小学校での練習は、前述したように、11月頃から2月の七頭舞発表会に向けて、月・水・金の昼休み（13：00～13：25）、各学年の「浜っ子タイム」（総合的な学習）、クラブ活動の時間（15：00～15：50）を活用して行われている。

大牛内分校は別として、3地域3種類の七頭舞や七ツ舞は均等に練習できるように、学校側が配慮してくれる中で、児童数の少ない中里七ツ舞は全学年体制で練習に取り組む。中里七ツ舞保存会のメンバーは、武田会長を中心に来校できる時間に学校に出向いて子どもたちの練習を指導している。保存会の人々が指導に来ない時でも、上級生が中心になって下級生に踊りを教えており、保存会の練習時とはまた違う、学内伝承という学校ならではの良さが見受けられる。

### 3. 中里七ツ舞の構成・道具

#### (1) 中里七ツ舞の6種の舞

中里七ツ舞には7種類の踊りがある。すなわち「道具取り舞」「横ばね」「組ちらし」「ちらし」「鳥居がかり」「五方の矢」「道具納め」の七つである。しかし一度途絶えて、2度目の復活を果たした時には、既に「五方の矢」を覚えている者がいなかったため、前述したように途絶えてしまった。現在では「五方の矢」を除く六つの舞が伝承されている。六つの舞は、小さな区切りはあるもの、踊りと踊りの間を「ちらし」で舞いつなぐため、全体的には一連のつながりをなして止まることなく流麗に舞われる。つまり舞い始めたら最後まで続けて舞うため、体力的にかなり厳しい舞であり、子どもか若者でない限り踊り切るのは大変である。

中里七ツ舞の六つの踊りには、次に示すような意味がある。

##### ①「道具取り舞」

最初に神社に奉納されている七つの道具をいただき、境内で踊る舞である。1回目は道具を持たずに踊り、2回目はそれぞれの道具を持って踊る。中里七ツ舞では、最も精神性が高い舞であり、「道具取り舞」の練習に一番時間をかけている。この道具取り舞の手の動きにも、黒森神楽の御堂入りの一番庭、二番庭の舞に共通する所作を発見することができる。

##### ②「ちらし」

舞台に入場する時や踊りと踊りの間に入れるもので、疲労回復や呼吸調整のための動作である。実際には決して楽な動きではなく、むしろ次の踊りのための心の準備の舞と考えられる。ちらし舞の足運びは神楽系の「七つ物」に共通しており、7種の道具さばきが際立つ舞である。

##### ③「横跳ね」

全ての始まりを意味しており、開拓するための人材を描えるという意味がある。このため先打ちを先頭に仲間が揃うまで待ってから舞い始める。3回繰り返して、「ちらし」を挟んでまた3回繰り返す。

##### ④「組ちらし」

他の七ツ舞では「戦い」となっている場合もあり、田畑を開拓する際に妨げになる物や獣などとの戦いを意味する踊りである。この他、戦いの舞には、チームを乱すものや自分自身の怠け心に対する戦いの意味もあるといわれている。

##### ⑤「鳥居がかり」から「全体三足」

他の七頭舞や七ツ舞では「三足」といわれているこの最後の舞は、神社の鳥居の前で踊る舞で、

神様に豊作の感謝を表すものである。ほぼ「道具取り舞」と同じだが、より派手な動きに人々は魅せられ、通常はここで大きな拍手がもらえるという。

先打ちがソロで踊った後は、二人ずつ向かい合ってリズムカルに踊るが、二人ずつの踊りに続けて全員が一斉に同じ振りで舞う。これを「全体三足」と呼んでいるが、中里七ツ舞で最も迫力のある場面である。

#### ⑦「道具納め舞」

基本的には「道具取り舞」と同じ所作であり、七ツ舞を踊り終えてから再び神社に道具を納める時に舞うものである。通常の公演では省略されることの方が多い。省略した場合は、中里七ツ舞では、「全体三足」の後に続いて「ちらし」を舞いながらステージを去り、舞台のそでに消える前に一人一人が大変丁寧にお辞儀をする。これがまた非常に美しく中里七ツ舞の神聖なイメージを高めていると思われる。

#### (2)中里七ツ舞の七つの役割

さて中里七ツ舞には、他の「七つ物」同様に七つの役割があり、舞い手をもつ道具は異なり、各道具にはそれぞれの意味がある。

##### ①「先打ち」：神に捧げる御幣束のようなものを棒の先端につけた道具

先頭に立って、荒野をかき分け、方向を決断して進む方向を指し示しながら前に進む。

##### ②「谷地払い」：先打ちより長い棒で両端に飾りが付いた道具。先打ちの指示に続いて、獣や悪霊を払い、みんなが歩きやすくなるように道を整えながら進む。

##### ③「薙刀」：柄の両端に飾りが付いた薙刀。木立を切り倒し、獣を追う払う力強い動きで舞う。

##### ④「太刀」：文字通り刀で、柄のところに飾りを付けたもの。田畑が荒らされないように太刀をもって見張りを行う。

##### ⑤「杵」：餅つきの杵を踊り用に洗練させた道具。餅をついて行路の無事をお祝いする。または豊作のお祝いに餅つきをするように回す。

##### ⑥「扇子」：他の七頭舞・七ツ舞では「小鳥」ともいう。右手に弓、左手に紫の扇をもつ。この扇の色は各七ツ舞で違う。鳥を弓で射り、ご馳走をつくって豊作の喜びを分かち合って祝う。

##### ⑦「おかめ」と「ひょとこ」：「おかめ」は、右手に扇、左手にへら（篋）をもって舞う。頭の左側に面をつける。しっかりとひょとこをリードする妻の役目を表現する。「ひょとこ」は、右手に扇、左手に稲をもって舞う。頭の左側にひょとこの面をつける。みんなに笑いを振りまきながら人々の心を慰め、疲れを癒して心が一つになるように面白おかしく踊る。

中里七ツ舞には、以上のような役割があり、それぞれに違う道具をもって華麗に舞う。薙刀、太刀、杵、扇子は道具自体が役割の名称になっており、舞い手は自分の役割を認識しながら、自分の道具捌きを極めていく。それぞれに違う個性があるからこそ個々の舞が浮き彫りになり、見ていて楽しめる舞なのである。

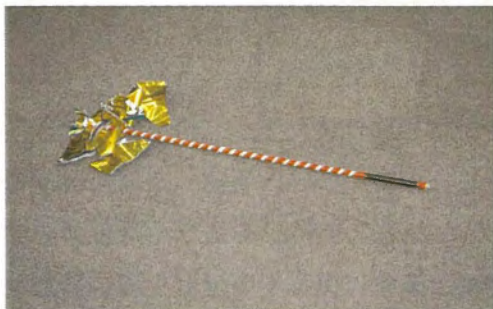
（資料1）として中里七ツ舞の道具の写真を挙げておく。「先打ち」「谷地払い」「薙刀」「杵」には紙飾りが付されている。中里七ツ舞に限らず、七頭舞・七ツ舞の踊りは激しいため、道具の紙飾りは常に作り替えなければならない。



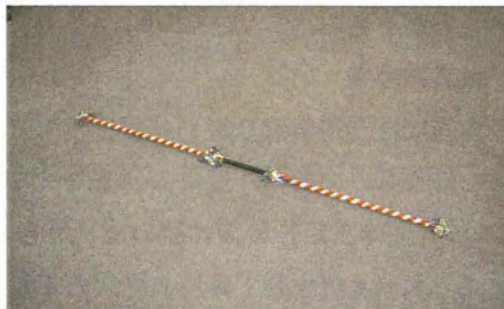
(資料1)

中里セツ舞の道具

先打ち



谷地払い



薙刀



太刀



杵



扇子



おかめ



ひょっとこ



#### 4. 中里七ツ舞の音楽

中里七ツ舞の音楽は、何と言っても太鼓が中心であり、太鼓さえあれば踊ることができる。鉦は太鼓と同じリズムを鳴らしている。通常、踊りの振りとメロディーが密接な関係をもっているケースが多いが、中里七ツ舞では笛は飾りの意味しかもたない。中里七頭舞の笛は、<sup>ひぶえ</sup>悲笛といって女性が泣くような感じだったといわれており、七ツ舞の情感を醸し出す上で重要な役割を担っていたと推測できる。中里地区では、復活後も笛の奏者が育たず、笛については公演のたびに黒森神楽の笛奏者に依頼して即興演奏で自由に吹いてもらっている。通常は太鼓のみで練習しているため、舞い手は公演時に初めて聴く笛の即興演奏を自分の耳から消して、太鼓の音に全神経を集中しながら、踊り上手の先打ちに合わせて舞い進む。

太鼓奏者は、踊りの進行係でもある。常に踊りの様子を見ながら、踊り手が次の舞の準備ができるまで「ちらし」を続け、当意即妙に次の踊りに移行していく。したがって太鼓奏者と踊り手のリーダー的な役割りの先打ちの阿吽の呼吸によって、六つの踊りが進行していく。先打ちが重要視されるのは、即興性を秘めた舞においても自滅することのない強い精神力が必要とされるからである。中里七ツ舞では踊りの展開に太鼓奏者の判断が大きくかかっているのである。

しかしこれほど重要な太鼓のリズムにもかかわらず、中里七ツ舞には、通常、民俗芸能には必ずあるはずの太鼓のリズムの口唱歌が存在しない。口唱歌無しで太鼓のリズムを把握するには、見よう見真似で一人一人の太鼓奏者が自分なりの覚え方をしていたわけである。すなわち中里七ツ舞のお囃子の特徴を挙げると、以下の通りである。

- ・太鼓の口唱歌がなくそれぞれ独自の方法で模倣しながら伝承してきている。
- ・笛は伝承されず、黒森神楽の笛奏者の即興演奏で行われている。
- ・鉦には独自のリズムはなく、全て太鼓と同じリズムを奏でている。

したがって本研究では、一番重要な太鼓リズム譜を作成するために、以下の方法を試みた。

- ①平成 15 年のビデオ撮影時に小学生だった穂高淳（現在中 1）の太鼓演奏を手がかりにする。
- ②穂高淳に太鼓のリズムを自分で考えている言葉で表してもらう。
- ③中野七頭舞の元会長山本恒喜が作成した中里七ツ舞の唱歌を頼りに全体構成を把握する。

（\*なおこの唱歌は、武田会長以下、中里の保存会の人々には解読できない。）

- ④一部分のみ唱える武田の踊りの唱歌と穂高淳の創作唱歌を基に中里七ツ舞らしい唱歌を創る。

この結果、穂高のリズム言葉の中から「ダントカ」「タッタカタ」という西洋音楽的唱歌と共に中里七ツ舞らしい唱歌が把握できた。これと太鼓演奏のビデオおよび山本恒喜作成の口唱歌の三者を突き合わせることで太鼓譜を作成し、踊りと合わせながらこれに修正を加えた。最終的には 2005 年 9 月の夏合宿時に中里地区に出向き、実際に筆者が太鼓演奏をしながら中里七ツ舞の太鼓奏者穂高淳の指導を受けることによって口唱歌と楽譜の完成をみた。

民俗芸能では、西洋式の楽譜を使うことは問題視されがちであるが、楽曲および中里七ツ舞の全体構成を分析的に把握するためには、楽譜が絶対的に必要であった。また楽譜化により今後は太鼓リズムの消滅を避けられる可能性があり、まさに本研究の最も大きな成果の一つである。

## 道具取り舞い

島崎篤子採譜

-86-

22

ダン ツツ ト ダン ツツ ト ダン ダン ツツ ト ダン ダン ツツ ト ダン ダント ダン ツツ ト ダン ダット

26

ダン ツツ ト ダン ダット ダン ツツ ト ダン ダット ダン ツツ ト ダン ツツ ト ダン ダ ダ -ント ダント ダン

30

ダ ダ -ント ダント ダント ダ ダ -ント ダント ダン ツツ ト ダン ツツ ト ダン ダ ダ -ント ダント ダン

34

ダ ダ -ント ダント ダント ダ ダ -ント ダント ダン ダン ツツ ト ダン ツツ ト ダン ダ ダント ダント

38

ダン ツツ ト ダン ダント ダン ツツ ト ダン ツツ ト ダン ダ ダ -ント ダント ダン ツツ ト ダン ダント

42

ダン ツツ ト ダン ツツ ト ダン ツツ ト ダン ダント ダン ツツ ト ダン ツツ ト ダント カット ト ダン

## ちらしと横跳ね

\*「カッ!」と太鼓の杵をたたいて、踊りの始まりを舞い手に伝える。

島崎篤子採譜

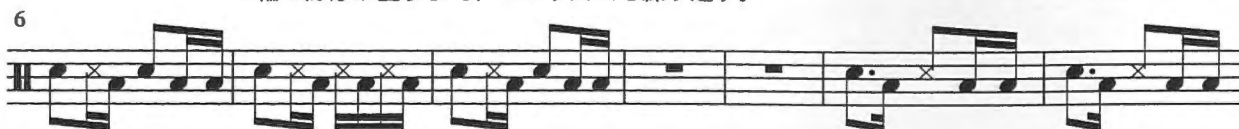
「本ちらし」



ダンツコツコツコ ダンツコダントド ダンツコツコツコ ダンツコダントド ダンツコツコツコ

\* 輪の隊形が整うまで、このリズムを繰り返す。

\* 「はい!」=太鼓のリーダー



ダンツコダントド ダンツコツコツコ ダンツコダントド

ダンカットド ダンカットド

「それ!」=全員



ダドンコダドンコ ダドンコダドンコ ダンカットド ダンカットド

「横跳ね(1)」



ダガスコダガスコ ダガスコダントド ダガスコダガスコ ダガスコダントド ダガスコダントド

\* 3回目に「よいこらさっさ!」の掛け声



ダントカットド ダンツコツコツコ ダンツコダントド ダンカットド ダンカットド



ダンドンダンカド カッカドカドド ダドンコダンカド カッカドカドド ダンドンダンカド



カッカドカドド ダドンコダンカド カッカドカドド ダガスコスコダン スコダントド



## ちらしと横跳ね（２）

「横跳ね（２）」

島崎篤子採譜

\* 3 回繰り返す。



ダ ガ ス コ ダ ガ ス コ    ダ ガ ス コ ダ ン ト    ダ ガ ス コ ダ ガ ス コ    ダ ガ ス コ ダ ン ト    ダ ガ ス コ ダ ン ト

\* 3 回目「ヨイコラサッサー!」の掛け声



ダ ン ト    カ ッ ト    ト    ダ ン ツ コ ツ コ ツ コ    ダ ン ツ コ ダ ン ト    ト    ダ ン    カ ッ ト    ト    ダ ン    カ ッ ト    ト

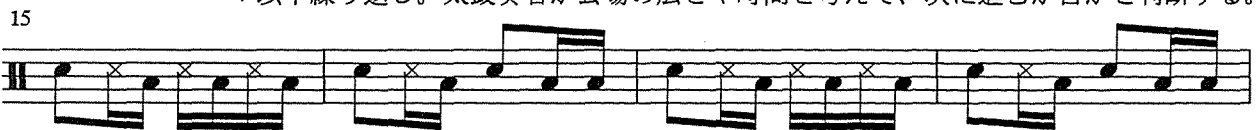
「ちらし」



ダ ン ド ン    ダ ン    カ ト    カ    カ ト    カ ト    ト    ダ    ダ ン    コ    ダ ン    カ ト    カ    カ ト    カ ト    ト

「本ちらし」

\* 以下繰り返し。太鼓奏者が会場の広さや時間を考えて、次に進むか否かを判断する。



ダ ン    ツ    コ    ツ    コ    ツ    コ    ダ ン    ツ    コ    ダ ン ト    ト    ダ ン    ツ    コ    ツ    コ    ツ    コ    ダ ン    ツ    コ    ダ ン ト    ト

\* 「組ちらし」に入るまで適当に繰り返す。



ダ ン ツ コ ツ コ ツ コ    ダ ン ツ コ ダ ン ト    ト

ダ ガ ス コ ダ ン ト    ト    ダ ン    カ ッ ト    ト    ダ ン    カ ッ ト    ト

## ちらしと組ちらし

島崎篤子採譜

「本ちらし」



\* 「組ちらし」の態勢が整うまで繰り返す。

\* 「はい！」＝太鼓のリーダー

5

5

ダ'ンツ コ ツ コ ツ コ    ダ'ンツ コ ダ'ンド'ド'

ダ'ン カ ヲ ト'ド'    ダ'ン カ ヲ ト'ド'

「組ちらし」

\*「組ちらし」は「後ちらし」を挟んで2～3回繰り返し、3回目にコーダへ

15

11 

15

15

ダン ドン ダン ガ ト カッ カド カド ト ダ ダン コ ダン カド カッ カド カド ト

19

19

ダ カ スコ ダ カ スコ

「後ちらし」

\*体勢が整うまで「後ちらし」を適当に繰り返す。

23

23

\* 体勢が整つまで「倭らし」を適当に繰り返す。

ダン ス コ ス コ ス コ ス コ ス コ ダン ド' ド'

\*太鼓のリーダーが「はい!」と合図して「組ちらし」に戻る。

\*体勢が整うまで適当に繰り返して「鳥居がかり」へ

27

27



タ<sup>・</sup> ン カッ ト<sup>・</sup> ト<sup>・</sup> タ<sup>・</sup> ン カッ ト<sup>・</sup> ト<sup>・</sup> タ<sup>・</sup>ン ツ コ ツ コ ツ コ タ<sup>・</sup>ン ツ コ タ<sup>・</sup>ン ト<sup>・</sup> ト<sup>・</sup>

*D.S. al Coda*

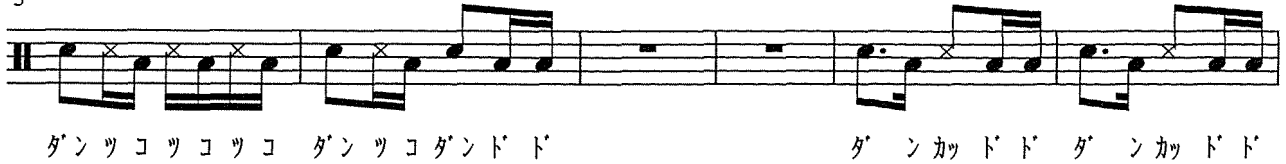
# ちらしから鳥居がかり

島崎篤子採譜

「本ちらし」



5 \*体勢が整うまで「ちらし」を繰り返す。 \*体勢が整ったら、太鼓奏者の「はい!」の合図で「鳥居がかり」へ



「鳥居がかり」

11 \*「ソレ!」=全員 \*ここから24小節を全員が踊り終わるまで何度も繰り返す。



\*人数分繰り返したら、「全体三足」に進む。





## 全体三足と退場

「全体三足」

\*全員で「鳥居がかり」を舞う。

島崎篤子採譜



\*「全体三足」を舞ってから最後の二小節で一旦打ち止め。



27 \*太鼓奏者が「カッ！」と粋打ちで合図してから退場を始める。全員が退場するまで繰り返す。



「打ち止め」

\*太鼓奏者は全員が退場したら、「ハイ！」の合図で打ち止めに入る。おかめは最後の音まで礼を続ける。



【注および参考文献】

- 1) 中里氏と南部藩の関係については、岩泉教育委員会『岩泉地方史＜下巻＞』（熊谷印刷、1980年、77-80頁）に詳しい。また中里氏系図は、岩泉教育委員会『岩泉地方史＜上巻＞』（熊谷印刷、1980年、234頁）に掲載されている。中里の初代を正徳とする記述もあるが、中里村の年表などでは正吉になっている。
- 2) この中里一揆については、前掲書『岩泉地方史＜下巻＞』82-94頁参照。なお竹花斎太は菩薩として中里の正徳寺境内に祀られている。中里七ツ舞会長武田由起子の話によると、斎太の家は武田会長のご主人の母方の実家だという。実際に中里七ツ舞が始まるのは、天保年間（1830~1843）であるから、1816（文化 13）年に死去した斎太が生きた時代とは 20 年近くのずれがあるが、武田会長は中里七ツ舞に斎太の思いを吹き込みたいと考えているようである。
- 3) 中里七ツ舞の伝承史は、2004 年 1 月 29 日に筆者が武田会長にインタビューした内容をまとめたものである。
- 4) この「中里七ツ舞郷土芸能保存会名簿」は、武田由紀子会長が、2005 年 10 月に筆者に手書きで書いてくれたものである。

## 7. 中里七ツ舞の岩手大学への継承

学校教育における民俗芸能の学び方について、かねてから伝統継承型と素材発展型の二つのタイプがあると主張してきた<sup>1)</sup>。この二つのタイプの学び方は、換言すれば二つのタイプの指導方法とみることもできる。それぞれについて簡単に説明しておこう。

伝統継承型とは、保存会やその芸能の担い手や関係者の協力を得て、伝承されている芸能をできるだけ忠実に継承する学びである。通常、学校教育で地域の民俗芸能を取り上げる際には、この伝統継承型の学習を行う。しかしながら限られた教育課程の中では、確実な芸能の継承を行うには、学校と同時に地域の保存会での練習が並行して行われていることが望ましい。つまり学校内伝承が行われるまでに定着しなければ、一時的な体験学習に終わってしまうケースが少なくない。もちろん民俗芸能の学習に関する一時的な体験学習であっても、伝統継承型の学びは参加型体験を促す積極的な学びであり、学習効果や教育的意義を見い出すことができる。

一方、素材発展型の場合は、その芸能を特徴づけている要素（リズム、メロディー、楽器、舞いなど）を基に独自に音楽をつくるという創造的な学びである。これについては、民俗芸能の正当な伝承の追求だけに価値を求める立場からは認めにくいものかも知れない。しかし伝統継承型でも一時的な体験学習で終わる場合が少なくないことを考えると、素材発展型の創造的な音楽づくりの活動の中で、本物のリズムやメロディーを新しい文脈の中で再生させる活動は、児童・生徒の創造的な発想を引き出すという教育的な観点から、その意義を発見することができる。

本報告書では、2004 年末から 2005 年にかけて筆者が試行錯誤しながら試みたこの二つの実践について述べる。素材発展型の実践については、次項に譲ることにして、本項では 2 回にわたって実施した伝統継承型の実践について報告する。

### 1. 中里七ツ舞の伝承継承型の実践

伝統継承型の実践では、中里七ツ舞の武田由起子会長に、中里七ツ舞を岩手大学の学生たちへの直接指導を依頼した。その結果、2004 年 12 月から 1 月までの体験重視の第 1 次伝統継承型実践と、2005 年 5 月から 7 月および 9 月の合宿までの第 2 次伝統継承型の二つの実践的研究を行うことができた。まずは第 1 次伝統継承型実践から報告したい。

前述したように、中里七ツ舞には、「道具取り舞」、「ちらし」、「横ばね」、「組ちらし」、「鳥居がかり（全体三足）」、「道具納め舞」の六つの舞がある。

武田会長は、中里七ツ舞では「道具取り舞」が命であり、難しい舞ではあるが、何とか「道具取り舞」を学ばせたいと主張した。かつて外部の人間が一度も踊れたことがないという中里七ツ舞の「道具取り舞」である。踊りの経験のない学生たちが 2・3 回の練習で踊れるようになることは初めから考えられない無謀な計画であった。しかし、武田会長の熱意に打たれて「道具取り舞」に挑戦したものである。

### (1) 第 1 次伝統継承型実践（体験重視）

中里七ツ舞の武田由起子会長は、筆者の勤務校である岩手大学に出向き、冬休みを挟んだ 2004 年 12 月から 1 月までの 2 ヶ月間に、3 回にわたって岩手大学の学生に中里七ツ舞の指導を行った。岩泉の中里地区から盛岡の岩手大学までは車で約 2 時間半から 3 時間という遠距離である。それにもかかわらず武田会長は、約束した日程を 1 日も休むことなく来校し、熱意をもって中里七ツ舞に指導にあたった。

この授業の参加学生は「保育内容（音楽）」の履修者 13 名であり<sup>2)</sup>、このうち音楽科の学生は 3 名のみで、残りの 10 名は他科の学生である。これに岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」のメンバー数名が有志として加わった。有志参加の「ばっけ」のメンバーは参加できる時に自由に参加する形を取っていたが、週 2 日間のサークル練習日がある「ばっけ」の場合は、授業における中里七ツ舞の練習に参加したメンバーが中里七ツ舞に関心のある仲間に教えるという形で、授業以外でも自主練習を行っていたため、一般学生より舞の習得は早かった。

#### ①第 1 回目（2004 年 12 月 10 日）

- ・ 武田会長による中里七ツ舞の由来と特徴および実物による中里七ツ舞の道具の説明
- ・ 道具を持たない「道具取り舞」前半の練習

踊りの未経験者集団のため、最初のステップからなかなか飲み込めなかった。また武田会長も普段は習慣で踊っている舞いを初めて地域外で指導することもあるとあって、ターンの方向なども指導中に混乱する場面があり、その都度、中里七ツ舞保存会の子どもたちの踊りをビデオで確認しながら練習を続行した。時折生じる混乱の中で、みんなで考え合うのも民俗芸能らしい優れた学びの有り様だと思われた。

#### ②第 2 回目（2005 年 1 月 21 日）

- ・ 道具を持たない「道具取り舞」前半の練習

この日に問題になったのは、練習のために貸していただいていたビデオに映っている岩泉民俗芸能祭で舞う子どもの踊りと会長さんの踊りに若干の相違が見られたことである。その理由は、後で明確になった。すなわち「道具取り舞」とほとんど振りが共通している「鳥居がかり」の中の跳ねるステップが舞いに慣れた子どもたちによって「道具取り舞」に自然に取り込まれていたという事実が明白になった。武田会長も、一緒にビデオを見ながらこのことに初めて気づいたようであったが、結局、本来の基本のステップとは違っていても許容範囲との結論を下した。

#### ③第 3 回目（2005 年 1 月 28 日）

平成 16 年度の最後の練習日だった。道具をもつまでは進まなかったが、参加者のほとんどがおぼろげに道具取り舞の所作を把握した。しかし参加学生の中で、踊ることに慣れている民俗芸能サークル「ばっけ」のメンバー数名は、「道具取り舞」をほぼ完全に踊れるようになっていた。

ここまでの状態で、平成 16 年度の体験重視の第 1 次伝統継承型実践は終了した。予想していたこととはいえ、ここで止めては中途半端であり、取り組んだ筆者自身の納得がなかった。平成 17 年度前期に何らかの形で、会長さんの指導を受けるというインフォメーションを流して第 1 次伝承継承型実践を終えた。すなわち第 1 次伝統継承型実践においては、実践のねらいとし

ていたのは、上手く踊れるようになることよりも幼稚園の教諭免許を取得のために「保育内容（音楽）」を履修している学生に、地域の民俗芸能体験をさせることであった。初めは戸惑っていた学生も、授業の意図がわかると積極的に練習するようになっていった。この時の学生に対して実施したアンケートの結果は、（資料 2）に示したとおりである。学生の回答から民俗芸能への関心が高まった様子がうかがえる。この体験重視の実践は確かに意味のあることといえよう。しかし伝統継承型実践では、学内伝承の可能性を拓く努力をすべきだと思われた。したがって次に報告する第 2 次伝承継承では本格的な伝統継承を目的として取り組んだ実践である。

## （2）第 2 次伝承継承型実践～民俗芸能サークル「ばっけ」による中里七ツ舞の伝統継承

第 2 次伝承継承型実践は、学内伝承の可能性を追求するために取り組んだものである。

○時期と回数：平成 17 年度 5 月から 7 月の 3 ヶ月間に大学院授業の後半 30 分と昼休み時間を活用した全 7 回。但し、全て自由参加の変則的な形態にした。

○対象学生：「ばっけ」の有志を中心とする。踊り好きの音楽科教育のゼミ生 2 名と音楽科の大学院生の有志も加わった。

○ねらい：民俗芸能サークル「ばっけ」によって中里七ツ舞を継承して岩手大学内で伝承できるようにする。

### ①第 1 回目（2005 年 5 月 10 日）

道具をもたない「道具取り舞」を舞う。音楽科のゼミ生や大学院生は見よう見まねでついて行くのがやっとだったが、ばっけの有志は、昨年度のメンバーを中心に既に「道具取り舞」を練習していた。この舞を武田会長に確認してもらう。

しかし第 2 次からは太鼓のリズムの追求が必要となった。何故ならば、中里七ツ舞においては、何よりも太鼓が大切であり、太鼓奏者の判断で途中の舞いの繰り返し回数も決定されるからである。笛や当たり鉦が加わっていたとしても、舞い手はひたすら太鼓のリズムと合図のみを聴き取って舞うという。

しかしこの太鼓のリズムの追求は容易なものではなかった。その理由は、中里七ツ舞の太鼓奏者は自分でビデオや先輩の叩いているのを模倣して演奏できるようになった 2・3 名だけであり、しかも彼らは通常どこの保存会でもある太鼓の口唱歌をもっていなかったからである。しかも会長さん自身は踊り手であり、やはり太鼓の口唱歌や正確なリズムを指導することはできないということであった。こうした状態の芸能において中里七ツ舞のリズムを正確にとらえるのは、結構、困難な作業であった。

### ②第 2 回目（2005 年 5 月 27 日）

中里地区に依頼していた中里七ツ舞の道具が完成した。それぞれの道具への関心は広がったが、この時間では、まずは会長さんが練習用に作成してくれた約 40 センチメートルの棒をもって、「道具取り舞」の練習を行った。

### ③第 3 回目（2005 年 6 月 3 日）

- ・各道具の回転のさせ方の練習
- ・ちらしの基本ステップの練習

・「鳥居がかり」の練習

④第4回目（2005年6月10日） \*太鼓譜が不完全で踊りと合わなかった。

・「鳥居がかり」の練習～全体三足

・「横跳ね」の練習

⑤第5回目（2005年6月17日） \*太鼓譜はほぼ完成した。

・「組ちらし」の練習

・全体の通し練習

会長は「組ちらし」の演目を省略するのはどうかと言ったが、筆者は指導してほしいと依頼して指導が続行された。

⑥第6回目（2005年7月1日） \*太鼓譜の精度が上がって、ほぼ太鼓で踊れる位に完成した。

・全体の通し練習

・筆者の他に音楽科の大学院生が採譜した太鼓楽譜を見ながらたたいた。音楽科の学生が「道具取り舞い」の採譜楽譜を使い、その他の演目は中野七頭舞の一部をリコーダーで演奏していた。

⑦第7回目（2005年7月8日）

・「鳥居がかり」と「組ちらし」の練習と通し練習

\*ここから太鼓にばっけのメンバーで太鼓希望者が一緒に演奏に加わった。

⑧第8回目（2005年7月15日）

・衣装の着付け（資料1の写真参照）、お面の付け方、中里七ツ舞の通し練習

農・工・人社・教育の全4学部の学生が参加している民俗芸能サークル「ばっけ」では、現在、三本柳さんさ踊り、大森御神楽、沢目獅子踊り、ソーラン節、おてもやん、寺崎はね子踊りの6種類の芸能を伝承している。しかし第1次実践で中里七ツ舞に関心をもったメンバーが核になり、実際の練習には、常に10名近くのメンバーが参加した。最終的には、中里七ツ舞の踊り担当9名とお囃子（太鼓、鉦、笛）が5名の14名という規模の中里七ツ舞伝承者が誕生した<sup>3)</sup>。中里七ツ舞のメンバーは以下のとおりである。

< 中里七ツ舞グループのメンバー >

・先打ち：藤沢望美（農学部、2年）

・谷地払い：扇久保勝也（人文社会学部、2年）、佐久間由樹（人文社会学部、2年）

・薙刀：西山枝理（工学部、2年）

・太刀：花井みゆき（人文社会学部、2年）

・杵：田村愛子（農学部、2年）

・扇子：赤石彩織（教育学部、2年）

・おかめ：黒須晶（教育学部、2年）

・ひょとこ：木村美喜（農学部、3年）

・太鼓：堀江幸生（農学部、3年）、鈴木萌（教育学部、2年）

・鉦：山口和恵（人文社会学部、2年）

・笛：鈴木利香（教育学部、2年）、小野かほる（農学部、2年）



(資料1)

## 中里七ツ舞の着付け



●足袋と草履を付けてから襦袢を着る



●長襦袢を腰に  
巻いたら、袴  
をはく



●兵児帯は襦袢と  
長襦袢の袖の下  
を通す



●兵児帯を結ぶ



●緑の帯を巻いてから黒帯を巻く  
これが難しい！



● 手っ甲と烏帽子を付けて完成！



●後ろ姿～兵児帯の長さが揃っている

「ばっけ」中里七ツ舞グループは、9月に中里交流会館にて合宿を行い、音楽や踊りを確かなものにすることができた。この成果は、10月22日の学園祭、および11月6日の定期公演で結実した。次項では、学生の希望で実現した中里交流会館での合宿について報告しよう。

## 2. 中里交流会館での合宿

大学における中里七ツ舞の練習が終わりに近づいた7月初旬に、「ばっけ」中里七ツ舞グループの側から中野七ツ舞合宿に対する強い希望が出された。武田会長から、中里地区にある中里交流会館を合宿会場に提供してくれるという申し出があり、2005年9月22日から25日の4日間の七ツ舞合宿が実現した。筆者は行きの太鼓の運搬を引き受け、2日目の学生と中里地区の人々との交流会まで参加した。「ばっけ」中里グループは全員参加している。

合宿の日程は、以下のとおりであった。

### ① 2005年9月22日（木）

- ・ 9:00 盛岡駅集合、お土産購入（岩手川、洋菓子）
- ・ 9:40 盛岡発のバス乗車（岩泉三本松行き 2,530 円）
- ・ 12:10 岩泉三本松着、昼食
- ・ 12:27 岩泉三本松発、バス乗車（小本行き 500 円）
- ・ 12:50 中里向着、中里交流会館着
- ・ 14:00 練習開始
  - ・ 着付けの指導（会長、武田悦子、武田あゆみの3人による）をビデオ撮影
  - ・ 通し練習を見て指導してもらう
- ・ 17:00 買い出し組とお風呂組に分かれて行動する
  - 買い出し組（中里地区の人が貸してくれた車で約20分のスーパーへ）
  - お風呂組（車で約30分の小本温泉へ）\*差し入れ＝島崎からの入浴券10枚
- ・ 19:00 夕食（カレー、味噌汁）\*差し入れ＝会長からのお米
- ・ 20:00 穂高淳（中里七ツ舞の太鼓奏者）の指導を受けて太鼓の楽譜と演奏を完成させた。  
この他、笛の即興演奏について筆者が簡単な旋律のアドバイスをを行った。この活動は、21:30頃まで続いた。  
\*筆者の合宿参加は主にこの太鼓譜の完成を目的としていた。
- ・ 21:00 お囃子以外の人たちは衣装作成（襦袢の衿、袖、烏帽子、手甲など）
- ・ 24:00 全員就寝

### ② 2005年9月23日（金）

- ・ 6:00 お囃子組起床、朝食準備 \*差し入れ＝会長から小松菜、ラディッシュ
- ・ 7:00 朝食（おにぎり、味噌汁、ゆで卵）
- ・ 8:00 中里の子どもたちが集合、衣装に着替える。  
「ばっけ」も交流会の準備



中里の地域に交流会の宣伝カーが走り、地元の方々が集まる。

- ・ 9 : 15 交流会開始  
「ばっけ」は三本柳さんさ、大森御神楽、現時点での中里七ツ舞を踊る。  
保存会の子どもたちの七ツ舞を見る。  
練習：子どもたちから各道具毎に指導を受ける。  
\*差し入れ＝中里の人たちからお花、松茸（32本）、小本温泉からみかん
- ・ 12 : 00 交流会終了後、昼食（焼きうどん、焼きそば、みかん）  
\*交流会終了後に筆者は盛岡に戻った。
- ・ 13 : 00 午後は会長と武田悦子の指導で衣装づくりと道具の直し方を教わる。
- ・ 19 : 00 会長の娘さんによる先打ちの指導  
他のメンバーは夕食準備と小本温泉行きに分かれる。
- ・ 20 : 00 夕食（トマトチキンカレー、夕顔、キュウリ）
- ・ 21 : 00 衣装作成
- ・ 24 : 00 全員就寝

③ 2005 年 9 月 24 日（土）

- ・ 7 : 00 お囃子組起床、朝食準備
- ・ 7 : 30 朝食（おにぎり、味噌汁、卵焼き、夕顔、ラディッシュの塩漬け）
- ・ 9 : 00 練習開始 会長と武田悦子の 2 人による指導
  - ・ 交流会で撮影したビデオを見て研究
  - ・ 道具取り舞の練習（回転の仕方、足の踏み出し方など）
  - ・ 中野七頭舞のお囃子（笛）が来てくれて指導を受ける。
- ・ 12 : 30 昼食（塩ラーメン、味噌ラーメン、夕顔、わかめ）  
扇久保勝也（谷地払い）が先に帰る。会長が小本駅に送ってくれた。
- ・ 14 : 00 練習開始 \*交流会の時の先打ち（美穂ちゃん）が来て指導してくれる。
  - ・ 鳥居がかりの練習（腕の曲げ伸ばし、目線など）
  - ・ ちらし舞
- ・ 17 : 00 夕食準備と小本温泉行きに分かれる。
- ・ 19 : 00 夕食（焼いた松茸、野菜カレー、夕顔、キュウリ）
- ・ 21 : 00 衣装作成
- ・ 24 : 00 全員就寝

③ 2005 年 9 月 25 日（日）

- ・ 7 : 00 お囃子組起床、朝食準備
- ・ 7 : 30 朝食（ご飯、松茸のお吸い物、卵焼き、夕顔）
- ・ 9 : 00 練習開始 会長と武田悦子の 2 人による指導
  - ・ 中島七ツ舞のお囃子（笛）が来てくれて指導を受ける。
  - ・ 交流会での谷地払い（魁人君）が来て、通し練習に加わる。

- ・ビデオを見て研究、道具取り舞の練習、ちらい舞の入り方（目線、首振り）
- ・お昼頃 片付け、掃除 \*会長から羊羹とゼリーをいただく。  
会長や中里地区の人が龍泉洞まで学生を送ってくれた。
- ・14:00 龍泉洞着 \*会長さん達にお礼を言って別れる。  
昼食、龍泉洞見学、山葡萄アイスを食べる。
- ・16:00 盛岡行きのバスに乗車（2,590 円）
- ・18:00 盛岡駅にて解散

筆者がぬけた9月23日の午後からの活動については、「ばっけ」の学生からの報告によって把握することができた。これらの日程からもわかるように、踊りの上手い保存会の若者や子どもが学生のために練習につきあってくれ、また中里七ツ舞には笛の奏者がいないため、会長が中野七頭舞や中島七ツ舞の笛奏者を交流会館に招き、学生の即興演奏の指導を依頼してくれている。また中里地区の人々からの差し入れや車の手配など中里保存会による献身的な協力を得ることができて、「ばっけ」の学生たちは中里地区の人々の心の温かさを確実に受け止めて合宿を終えている。この中里地区での合宿体験後は、学生の踊りに一層真剣さと美しさが加わり、中里の人々の心を受け止めた学生たちにとっては、中里七ツ舞がかけがいのないものになっていった。

民俗芸能サークル「ばっけ」の学生が活動できるのは、3年生の定期公演（11月）までである。定期公演を終えると3年生は卒業論文を仕上げるために、サークルの中心的な活動から外れるシステムになっている。「ばっけ」の中里七ツ舞グループは、2005年10月22日（土）の岩手大学学園祭（不来方際）という公の場で初めて中里七ツ舞を踊った。そして11月6日（日）には平成17年度の「ばっけ」の定期公演において、見事な中里七ツ舞を見せてくれたのである。

筆者が実施した「ばっけ」の中里グループへのアンケート結果については、（資料3）に提示する。このアンケートの回答を見ると、「ばっけ」内で今後も中里七ツ舞が伝承され続けるであろうという期待がもてる。

筆者は今後の学内伝承のために後輩に記録を残すように指導した。「ばっけ」の学生が作成した着付けのイラスト（資料4）および学生がノートに書いた道具や衣装の作り方（資料5）は、今後の取り組みにとって貴重な資料であるため、これを本報告書に掲載しておきたい。

## 岩手大学&中里地区での練習や交流会の写真



●中里地区を流れる美しい小本川



●岩手大学における伝統継承型第2次実践の様子



●中里地区の人々との交流会



●交流会で「ばっけ」の舞を見る子どもたち



●交流会での「ばっけ」と子どもたちの集合写真



●小本川付近には美しい田園地帯が広がる

### 3. 中里七ツ舞の伝統継承型実践の難しさと成果

体験重視の第1次伝統継承型実践と本格的な継承を追究する第2次伝統継承型実践について述べた。中里七ツ舞の伝統継承型実践では、いくつか克服しなければならない問題に直面したが、それをくぐり抜けた後に大きな成果を得ることができた。3点にまとめておこう。

#### ①全体の構成と唱歌のない太鼓の把握

前述したように、何よりも中里七ツ舞で最も重要で、かつ最も把握するのが困難な課題が、太鼓の伝承であった。しかし考えられる全ての方法を駆使して、結果的には、現在の中里七ツ舞の太鼓奏者のリズムを把握することができた。もちろん微妙なアクセントの付け方などは、まだ不十分ではあるが、中里七ツ舞の太鼓奏者の中でも、微妙な点では相違が見られる。それは個性の範囲とも考えられるものである。型の中に光る個性があってこそ生きた民俗芸能なのであろう。中学生になった中里七ツ舞保存会の太鼓奏者穂高淳が、「結局、中里七ツ舞が踊れるように叩ければそれでいいんです」と大人びた様子で断言したのが印象的であった。

#### ②本物の衣装や道具の調達と学生の意識

本格的な継承を志す場合、衣装、それぞれの役割の道具、おかめやひょっとこの面、中里七ツ舞用の太鼓、鉦など、本物を入手する必要がある。道具や面や楽器については、地元の人々の協力を得て本物を揃えることができた。しかし舞うと美しく裾が揺れる中里七ツ舞の袴以外の烏帽子や衣装は、学生自身が慣れない手つきで、一針一針合宿で教わったとおりに作り上げた。学生たちが自分の衣装を自分で作るプロセスは、彼らの舞に対する情熱が強化されていくプロセスであり、また伝統の重さを認識させられるプロセスでもあった。

#### ③非合理的な型の学び体験の良さ

夏期講習会を開くほど指導法が確立している中野七頭舞とは違って、初めて外部で指導する武田会長は、経験的に体に染みこんでいる中里七ツ舞の分析的な説明や太鼓と舞の合わせ方の説明は当然不慣れであった。その結果、合理的な学びではなく、ゆるやかに時間が流れる練習過程となった。時には練習中に混乱を来すこともあったが、保存会の子どもの舞のビデオを見ながら会長、学生、筆者の三者で話し合いながら練習するプロセスは、中断した芸能を復活させた人々と類似の追体験ができたように思われた。時間をかけて模倣する学び体験自体が、民俗芸能の本来の学びの有り様といえよう。まさに「わざの習得において厳密な意味での順序性や段階性はない」<sup>4)</sup>ということを実感させられた。

中里地区は少子化が進み、地域での伝承が今後どう変化していくのか全く予測できない状況である。本研究によって、岩手県の美しい中里七ツ舞が、地元の岩手大学で生き続ける可能性が生まれたことは何よりも大きな研究成果といえよう。今後、末永く岩手大学内伝承が続くことを祈念している。

2005 年 1 月 28 日実施

回答者： 中社 2・生涯 3・音中 4・小音 4 (3)・小学 4・小教 2 & 4・小国 2 & 4 (2)  
・中美 2・小音 2 (2)・芸文音 4                      合計 17 名

— <あなたの地域の民俗芸能の体験> —

さんさ踊り (幼小の運動会) (3)。岩手県西根竹の子舞町 (地域で練習、学芸会で発表)。神楽 (村のセンターで練習、学習発表会で発表)。ソーラン節 (クラスで練習、小学校の運動会)

### 1. 授業で中里七ツ舞の踊りの練習に取り組んだ意識

A：興味をもって積極的に取り組んだ (14 人)

ビデオを見て音楽のリズムに関心をもった。子供たちの踊りが素晴らしいと思った。実際に触れられるチャンスと思い興味をもって取り組んだ。民俗芸能は音楽教育に有意義と考えていたので自分が体験できてうれしい。もともとカッコいい踊りと思っていた。踊りを研究しながら学ぶことが楽しかった。民俗芸能に取り組むのは初めての体験だったので、興味をそそられた (5)。踊ってみたら楽しかった。

B：特に何も考えないで取り組んだ (3 人)

初めは目的があったわけではなく取り組んでいた。初めはこの授業でやる理由がわからなかった。難しさが先に立ってしまい、それほど積極的にはなれなかったように思う。

C：嫌だけど授業だから仕方なく取り組んだ (0 人)

### 2. 中里七ツ舞に取り組んだ気分

A：楽しかった (17 名)

初めて神楽系統の踊りに触れて新鮮だった。踊りは苦手だが、ゆっくりと繰り返し進むので楽しかった。もっと触れてみたい。難しかったが踊れるようになった時はうれしかった。体を動かすことが好き。少しでも踊れると嬉しかった。多くの人と同じことに取り組むのが楽しかった。伝統芸能ではあるが、初めて経験して新鮮だった。踊ることに慣れてなくて初めは難しく感じたが、だんだん自分でも踊れる喜びやみんなと一緒に踊る楽しさを味わえた。奥が深く回を重ねるにつれ想いが深まった。踊る体験がなかったので、体を動かすことと音楽のリズムに合わせることが心地よかった。みんなで練習することが楽しかった。中里七ツ舞自体がおもしろかった。

B：何にも思わなかった (0 人)

C：つまらなかった (0 人)

### 3. 地域の民俗芸能への関心

A：七ツ舞踊る前よりも民俗芸能への関心は高まった (16 名)

早池峰神楽も見てみたくなった。見るよりも実際に踊る方がずっと難しいことを実感した。他の七ツ舞も見てみたい。民俗芸能は遠い存在のような気がしていたが自分で体験して身近に感じる事が出来た。自分の地域の獅子舞と関連づけて考えることが出来た。その民俗芸能の背景にも関心が向く。自分の生まれ

育った地域にも何かの芸能があるかも知れないと思った。踊りの動作に意味がある事を知り、他の芸能も知りたいと思うようになった。見るだけと実際に体験するのは違い、経験して難しさなどわかった。経験がなかったので民俗芸能に全くと言っていいほど関心がなかったが、少しずつ踊れるようになり踊りの意義もわかってきた。自分の県について知らないことが多かったことに気がついた。見て伝わるものもあるが実際に踊ると味わいが深くなった。武田会長が踊っているときの真剣な顔を見て、この芸能は軽い気持ちで取り組めないと思った。他の岩手の民俗芸能にも触れてみたいと思った。

B：何も変わらない（1人）

他を知らないので何ともいえない。

C：民俗芸能への関心が低下した（0人）

#### 4. 民俗芸能を幼稚園や学校で取り上げることに関する意見

地域の芸能に取り組むことにより地域を見直すきっかけになる。幼少の頃に触れる方が良い。岩手には私たちの知らない素晴らしい民俗芸能があると思うので、伝承していけたら良いと思う。子供は何にでも興味をもつので、いろいろな民俗芸能に触れた方が良い。学校で取り上げることによって多くの子供が触れることが出来る。地域社会への関心を高めることができる。伝承を考えるのなら小学校の方がよい。幼児には難しいような気がする。安易に取り上げないで、教育的な意図をもち、地域の理解や協力を得て扱うとよい。自分の地域に愛着をもつ（2）。子供の成長のうえで大切にしたい。民俗芸能に触れることで子供は近所の人たちと交流を図ることができるし、郷土に対する想いも育つ。民俗芸能の経験のない地域で取り上げれば、私が体験したように楽しさや喜びなどがわかって良い。子供にとって良い刺激になり、将来、伝承してみようという気持ちの芽になり得る。現在の教育課程では時間の確保は難しいとは思いますが、地元で伝わる芸能を知ることで地元への愛着も深まる。地域の踊りは精神面にも影響を受けるのでとても重要だと思う。

#### 5. 授業で中里七ツ舞を踊った感想を自由に書いてください。

踊りは覚えられなかったが実際に教えてもらって良かった。音楽が入ると本当にすごいと思った。ビデオの子供たちは本当にかっこいいと思った。音楽が入ると違った緊張感に包まれて本格的な感じがする。自分の動きはまだまだだがみんなで悩みながら踊るのが楽しいと思える。最初はついていけず不安だったが気がついたら楽しみながら覚えようとしている自分がいた。会長さんから直接教えていただく貴重な体験ができた。踊るのは難しい、こういうことにはある程度慣れが必要だと思った。滅多にできない素敵な体験ができてありがたい、機会があったらまた七ツ舞を踊ってみたい。今後もぜひ続けてほしいと思う。少し難しかったが、全く知らなかったので体験できたことが楽しかった。どうせやるならもっときちんと覚えたい。難しかったが楽しく、踊りをもっとやってみたいと思った。七ツ舞の衣装の意味についても詳しく知りたい。前から民俗芸能には関心があったが、私の地域は男の人の踊りだったので、今回七ツ舞に触れることが出来て楽しかった。まだまだ踊れないが、始めたときより流れがわかってきて良かった。初めは難しかったが、お囃子をつけたりしてだんだん本物に近づいていくのがとても楽しかった。うまくは踊れないけれど、中里七ツ舞を踊る貴重な体験ができて本当に良かった。我々ごときが踊って良いものかとも思ったが、ばっけの人たちと深めていけたのも良かった。楽しかったが、同時に口伝えでテキストのない民俗芸能を伝えていく難しさを感じた。雪の中、来て下さった武田会長に感謝します。一つ一つの動きに意味があり想いがあることを知り、踊る重さを感じとれたので、あまり踊れるようにはならなかったが、良い体験ができた。



・対象：岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」の中里チーム ・実施日：2005年10月20日

- A：何故、「中里七ツ舞」を踊ろう（お囃子をしよう）と思いましたか。  
 B：「中里七ツ舞」にはどんな魅力があると思いますか。  
 C：中里地区での合宿で何を学び・何を感じ取りましたか。  
 D：「中里七ツ舞」の伝承に関して、今後どのように「ばっけ」がかかわるべきだと思いますか。  
 E：あなたは今、どんな気持ちで「中里七ツ舞」にかかわっていますか。

先打ち	<p>A 1年の頃に講義に出席し、その後毎回講義に参加して楽しくなり踊っていて今に至る。</p> <p>B 一人ひとりの個性が出せる。メリハリのつくところとしなやかに踊るところが区分されていて美しい流れになっている。中里の自然を表しているようだ。</p> <p>C 中里地区の豊かな自然と地区の方々のつながりの温かさ。</p> <p>D サークルとしては1演目として大切に踊りついでいきたいと思う。</p> <p>E 踊るのはとても楽しいが、先打ちという大事な役割に自分の踊りがついていけないのではないかと不安になる。</p>
谷地払い1	<p>A 1年生の時に中野七頭舞を見たのがきっかけで中里七ツ舞のビデオを見てかっこいいと思った。とにかく踊りたいから！</p> <p>B とても衣装が映えるし、踊っていて楽しいこと。</p> <p>C 自分たちの不安に思っていた箇所正しい踊り方。中里地区の自然。</p> <p>D 毎年保存会に行き、とにかく「ばっけ」で踊り続けていく。</p> <p>E 1年生への引継ぎなどどうなっていくかが不安。今は楽しくてしょうがない！！</p>
谷地払い2	<p>A 講義に行った友人に魅力を語られて踊ろうと思った。</p> <p>B どの道具も遜色なく踊れるし躍動感がある。隊形が変化する面白さや礼儀正しい終わり方。</p> <p>C 地元で息づいている民俗芸能の力強さを感じた。地域社会の人の輪というコミュニケーションがあるからこそ生まれる強さだと思う。</p> <p>D 保存会の方と連絡を取り合っ、ばっけの後輩にきちんと伝えていけば良いと思う。</p> <p>E 今年初めてばっけで取り組んだ踊りなので、発表が楽しみだ。</p>
薙刀	<p>A 以前から中野七頭舞に興味があったが、ビデオを見て中里七ツ舞の柔軟な踊りに惹かれた。</p> <p>B 中里地区の雰囲気を感じ、引き込まれる何かがあると思った。山の中の小さな集落でこのような踊りが育まれてきたのは素晴らしいことだと思う。</p> <p>C 中里地区の人たちの七ツ舞に込める想いの強さを感じた。子供が減っていく中で、「ばっけ」で七ツ舞を踊る重大さを感じた。</p> <p>D 踊りとしてだけでなく、中里地区の伝統文化と地元の人たちと暮らしや自然も伝えていきたい。</p> <p>E ばっけで薙刀は私一人なので、今年は「見せる」より「魅せる」踊りをしていきたい。</p>
太刀	<p>A 最初から講義を受けていた人たちに魅力を語られ、心をひかれた。</p> <p>B それぞれの道具に特徴があり、それを生かして踊ること。</p> <p>C 地区ごとの七ツ舞の特色を守っていこうとする気概。</p> <p>D 保存会とできるだけ連絡を取り、迷惑でなければ合宿させてもらう。</p> <p>E その土地で伝承されるのが伝統芸能なので、保存会と密接につながり、別のものとして「ばっけ」内で伝えていければいい。真の伝承は「ばっけ」内では行えないのではないかな？</p>
杵	<p>A 中野七頭舞とは違う素敵な動きに魅力を感じた。一種の一目惚れに近い。</p> <p>B 全体の美しさや個々の魅力という個性が輝いていて、見ていて飽きない。</p> <p>C 地区内の結束の強さ、踊りに対する熱意とプライドといった形ではないものを感じ取った。</p> <p>D 保存会と交流をもちつつ、踊り手を増やし、多くの場で踊って中里七ツ舞を知ってもらおう。</p> <p>E 大学では杵を踊れるのは私しかないというプライドと責任を感じる。誰が抜けても中里七ツ舞は成り立たない。全体で一つだという意識をもっている。</p>

扇子	<p>A 北上の「みちのく芸能祭り」で七頭舞を見てファンになり、今回はが非でも踊りたかった。</p> <p>B 独特な足さばきや聴き取るのが難しいほどの軽快なお囃子など、踊りつがれてきた感動。</p> <p>C 地元の人々の人柄の良さ、温かさ。この町の伝統を伝承していきたいと思った。</p> <p>D 「ばっけ」が中里の人々にお世話になったことを忘れずに、しっかり伝える思いを一人一人もつべきだ。</p> <p>E とても楽しい。ありがたい気持ちで一杯です。</p>
おかめ	<p>A もともと中野七頭舞が大好きで踊りたかったところ、授業での練習の話があった。</p> <p>B 軽快なお囃子と躍動感のある踊り</p> <p>C ビデオを見ているだけではわからないことが多い。やはり本物を見ることは大切だ。</p> <p>D とりあえず私が「ばっけ」にいる間は、無くさせない。</p> <p>E 踊れることが幸せ！</p>
ひょつ とこ	<p>A 講義に出たりビデオを見たりして踊りの魅力に取り付かれ、本気でやってみたいと思った。</p> <p>B 道具が違い、それぞれの踊りに特徴がある。見て泣きそうになった踊り中里が初めてだ。</p> <p>C 踊りの細かい部分を学べた、精神的には七ツ舞を踊る子供の時分の道具への誇りと愛情。地域の人々の七ツ舞への熱い思い。よそ者の私達に本気で踊りを教えてくれた心の温かさ。</p> <p>D よそ者が伝承はできないが、「ばっけ」としてひたすら踊り続けていく。保存会にも毎年行って、もっと七ツ舞を踊っていくべきで、これは当たり前のこと。</p> <p>E 私は11月に引退だが、中里七ツ舞一期生として踊りきりたい。ただ素直に好きだから踊る。</p>
太鼓 1	<p>A 1年の時に見た中野七頭舞のリズムに惹かれたが、中里の話があり中野とは違う趣に惚れた。</p> <p>B 今までサークルになかった軽快な調子や華やかさに魅力を感じる。</p> <p>C 実際の太鼓打ちの方に教えていただき、大きなものを得られた。人々の温かさを感じた。</p> <p>D 責任をもって「ばっけ」内で伝承し、今後も保存会の方に監督していただきたい。</p> <p>E 今まで口唱歌と実際に打って教えてもらったので、楽譜から太鼓を学ぶのは、少し戸惑いがあったが、先生の楽譜は大きな助けになった。今年で引退なので、後輩が中里に関わって行きやすい環境つくりたい。後輩に恥じない太鼓を打って手本になればいいと考えている。</p>
太鼓 2	<p>A お囃子がしたいと思った時に、丁度、中里が入ってきた。また一人では大変な太鼓だから。</p> <p>B 今までの「ばっけ」には無い、軽快さ。</p> <p>C 本物の太鼓を学んだ。保存会の方々の情熱と優しさ。</p> <p>D 「ばっけ」としては続けていきたい。自分が学んだことは後輩に伝えていきたい。</p> <p>E 太鼓をたたいている時はすごく楽しい。関わる事が出来て良かったと思っている。。</p>
鉦	<p>A 中里七ツ舞の華やかさが大好きで、このお囃子が大好きだから。</p> <p>B 華やかさや踊りの衣装や派手さ。</p> <p>C 地元の人々の温かさや自然の豊かさ。子供たちのキラキラある元気な踊り。</p> <p>D 中里地区の人々との交流を絶やさずに、保存会にできるだけ近い形で伝承していく。</p> <p>E 楽しくて踊りを見ながら笑顔で鉦を鳴らしている。</p>
篠笛 1	<p>A お祭りのようなお囃子で心も体も動き出すような楽しさがあるので思い吹いてみたかった。</p> <p>B 激しさと静けさ、凜とした雰囲気。それぞれの道具の特徴が表れているところ。鳥居がかりから全体三足につながるところが鳥肌が立つほど好きだ。</p> <p>C 奥深い森や山を切り開いて生きる力が中里地区にはあった。七ツ舞はそれが凝縮したもの。</p> <p>D 中里の笛の音を追求し興味をもつ人には一緒に学び、輪を広げていきたい。</p> <p>E 中里七ツ舞に感じる生命力の一つになりたい。</p>
篠笛 2	<p>A 「ばっけ」に取り入れやすい条件がそろっていた。</p> <p>B 列や輪など踊りの隊形が変わっていくところ。</p> <p>C 保存会の人々の思い</p> <p>D 「ばっけ」としては、「ばっけ」の一演目としてかかわっていく。</p> <p>E 何とか七ツ舞の笛を形にしたい。保存会の方々へのお礼の気持ちを込めて吹いている。</p>



## 中里七ツ舞衣装

① 先打ち〜ト島

・裾袂・長襦袢・腰紐・兵子帯2本・黒帯・手甲・烏帽子・ハチマキ

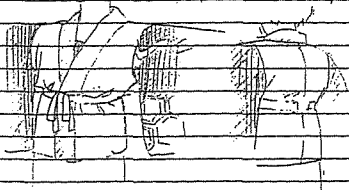
② おかめ・ト島

・巾着・赤糸2本・手ぬい・お面

〜着付け〜

① 裾袂を着まわす

★正体・タコハ一番初めに!!

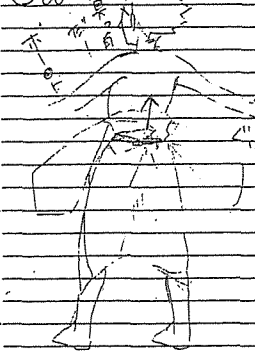
★下に着るのは袖無し  
のものをタコハトッポ?  
下は短パン?★背中の中の中心を合わせる  
のを合わせるには

② 長襦袢を腰にあわせる

★長襦袢の袖の下を縫って腰紐と  
あわせる

左と右合わせ

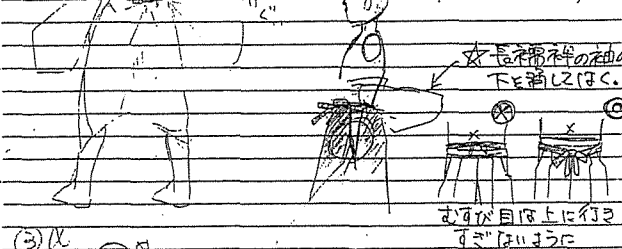
② A



★背中の中の中心を合わせます

★中心を引っぱり合わせ  
するとタコハの裏あたりまで  
合わせます

③ ハカマをほきます

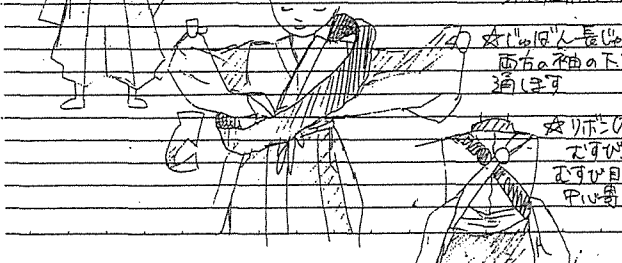
★長襦袢の袖の  
下を縫ってほく★裾が目上に行き  
ずきないように

③ B

★ハカマの横から  
長襦袢の裾を引っぱり、引き出す

★左右の裾はそろえる!!

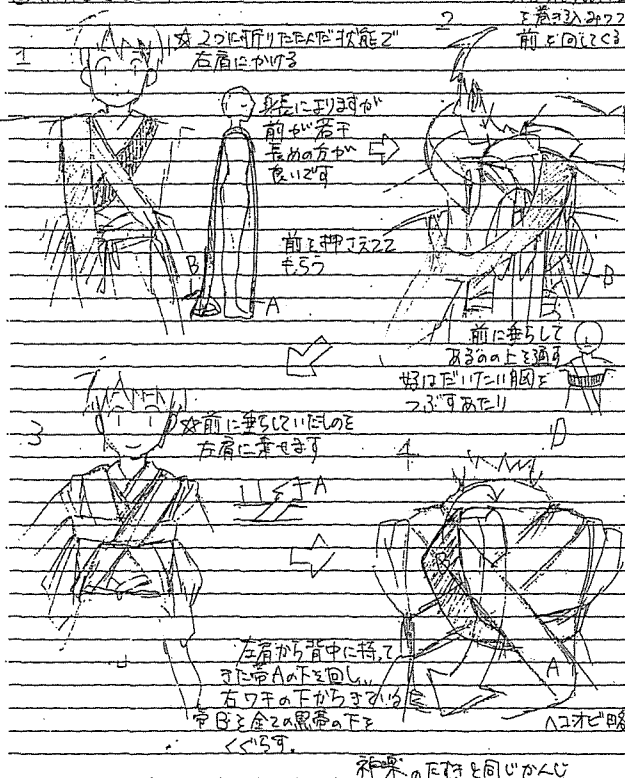
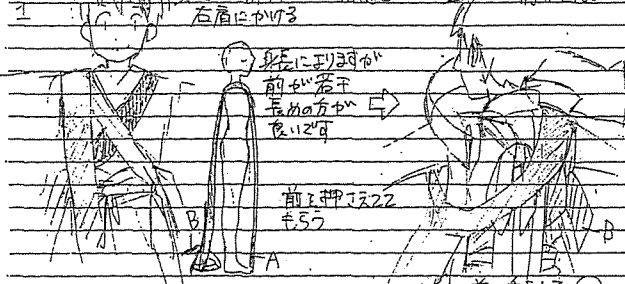
④ 兵子帯をすくわす

★右を左寄る? (右  
次に右肩(右側))★左の裾は人長は  
両方の袖の下に  
通します★リボン  
の結び  
目  
の  
中  
心  
を  
あ  
わ  
せ  
て  
お  
け  
る

No.

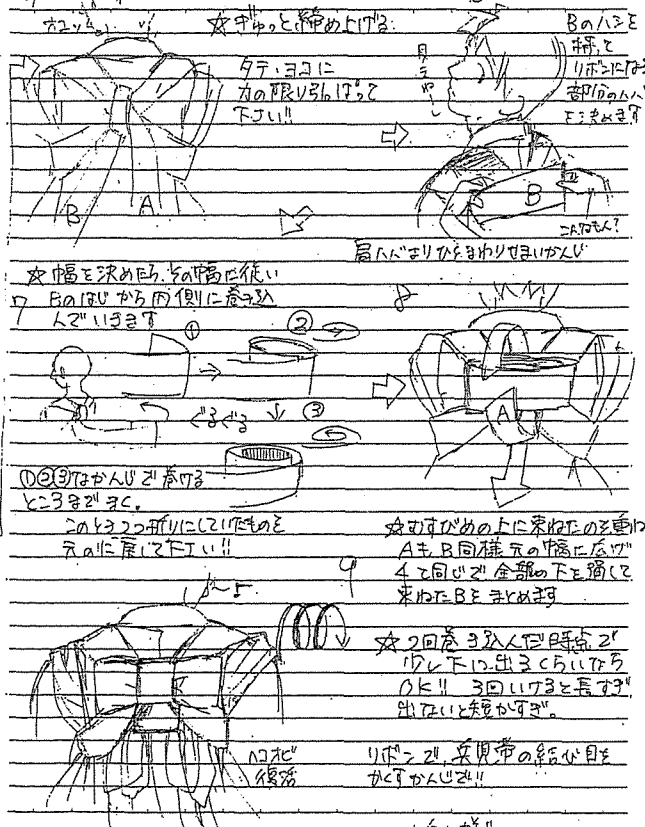
Date.

⑤ 黒帯をきく

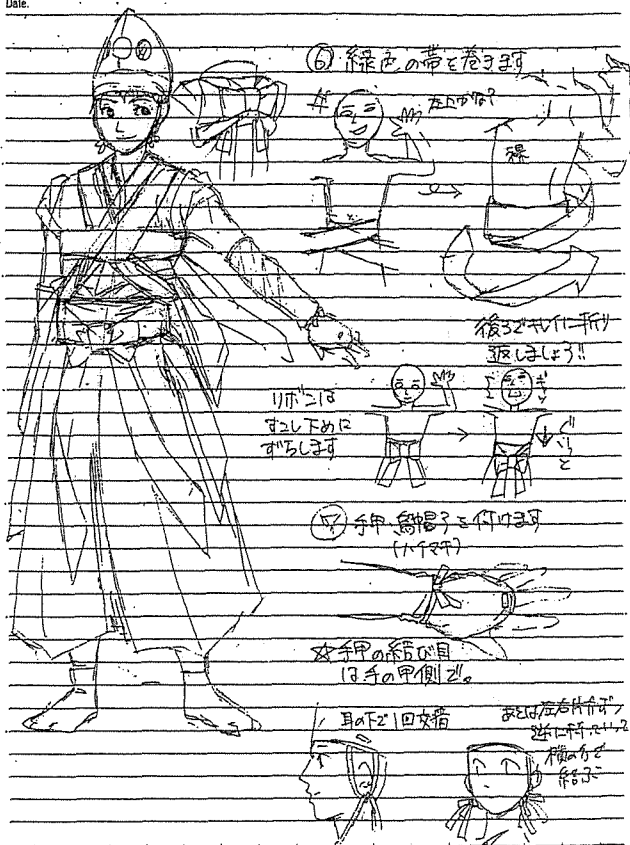
★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★2つに折りたたんで  
右肩にかける★肩にかけると  
前が若干  
長めの方が  
良いです★前と後ろは  
そろえる★前に垂らして  
後ろの上を通す★前に垂らして  
後ろの上を通す★前に垂らして  
後ろの上を通す★前に垂らして  
後ろの上を通す★前に垂らして  
後ろの上を通す★前に垂らして  
後ろの上を通す

No.

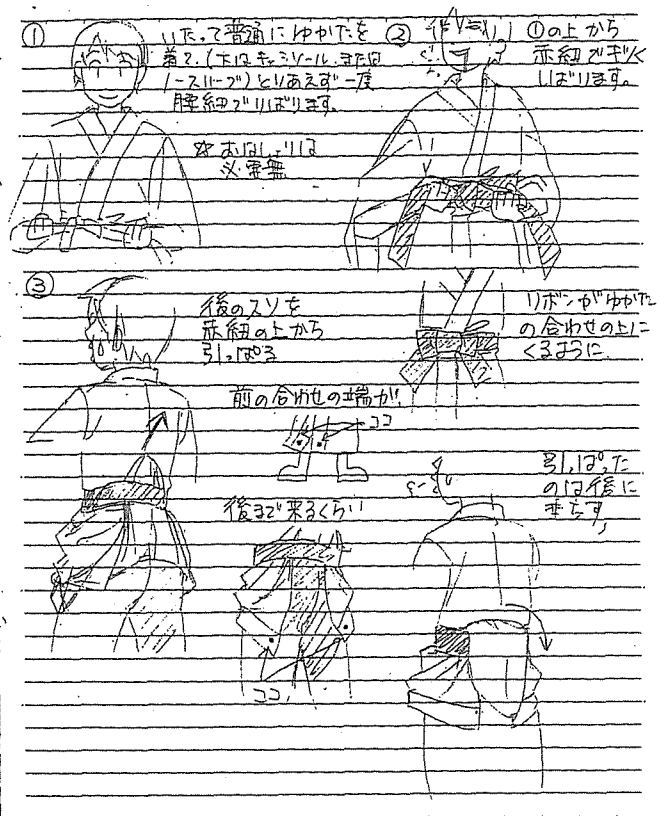
Date.

★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる★黒帯の袖  
と合わせ、  
前と後ろに  
合わせる

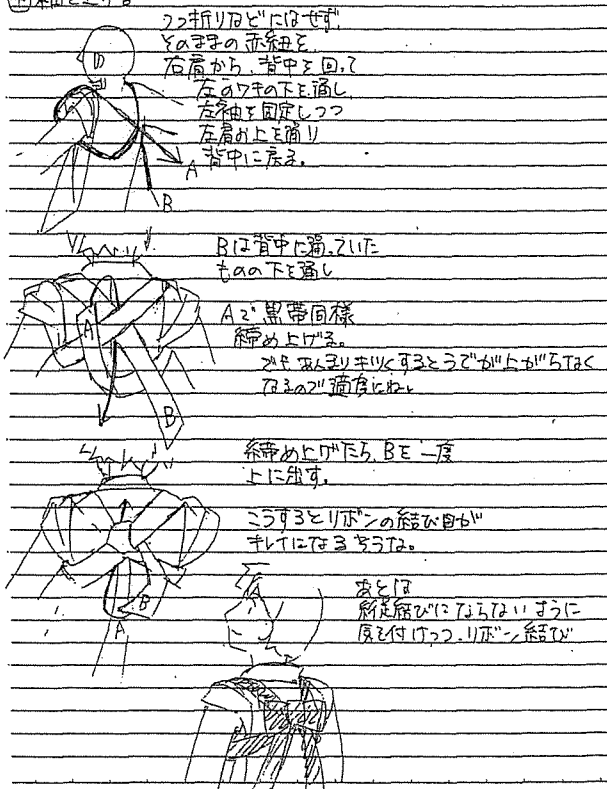
Date.



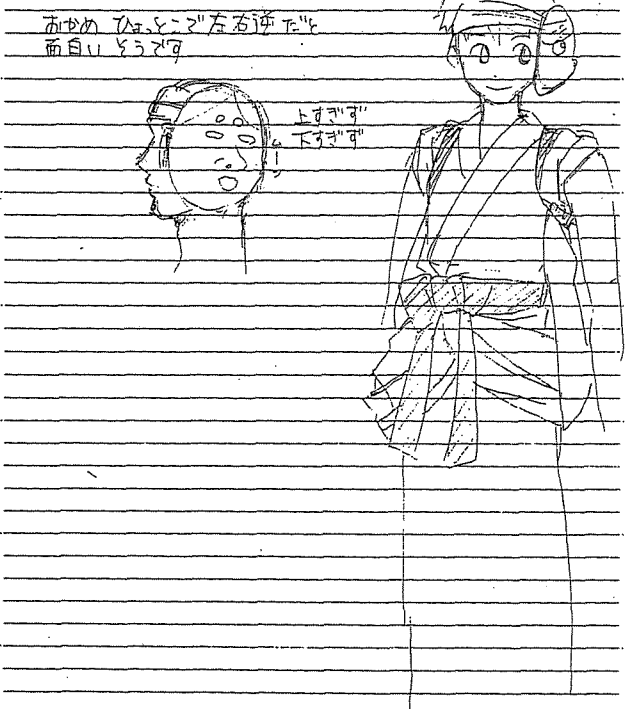
Date.



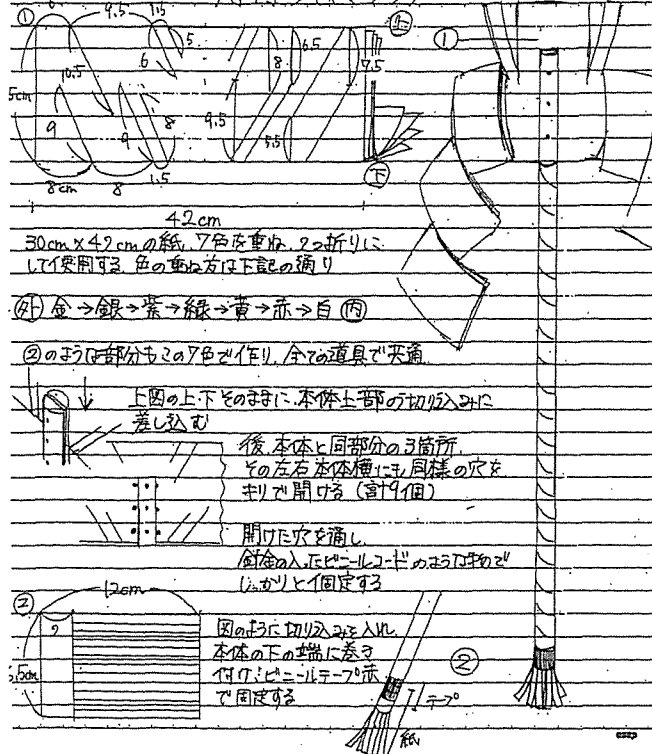
## ④ 袖を上げる



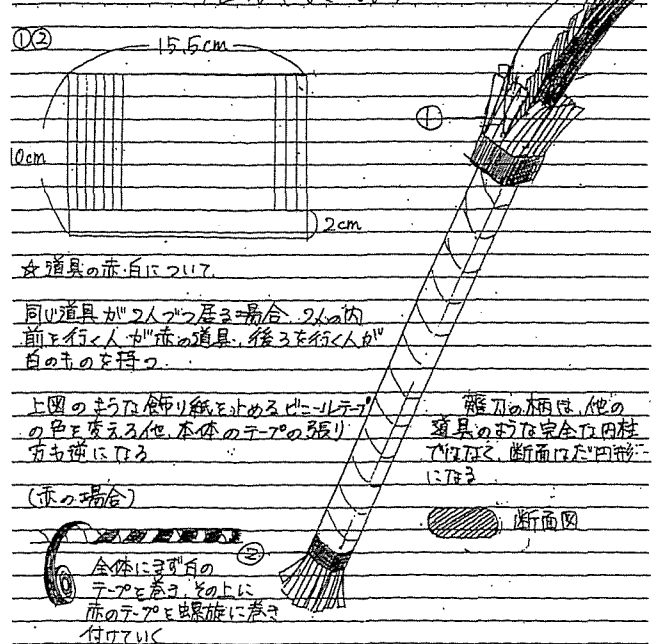
## ⑤ 手ぬぐい、お面を付ける



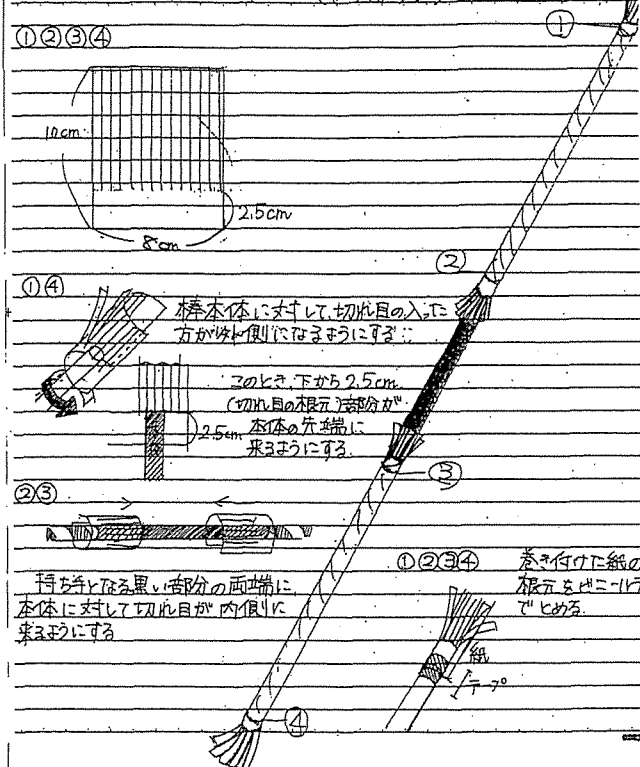
先打ち(さきうち)



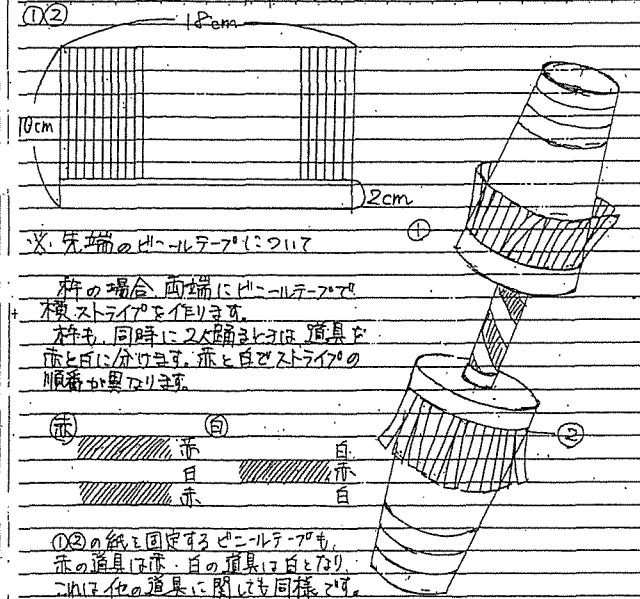
薙刀 (なぎなた)



谷地払い (やちばらい)

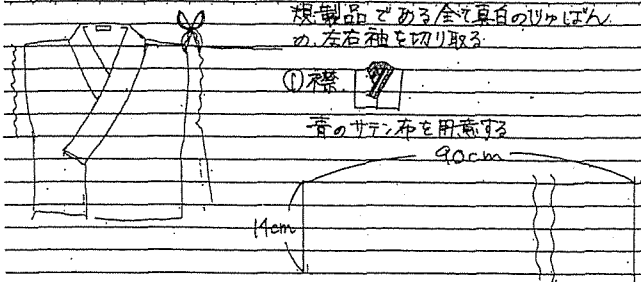


杆 (312)



# 衣装の作り方

## リボン



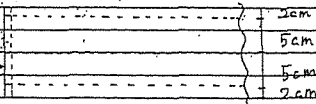
模製品である全て真白のリボン  
の左右袖を切り取る

①襟

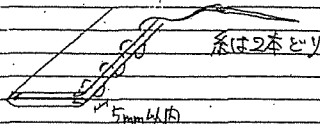
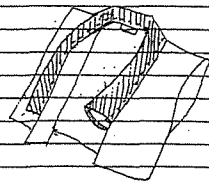
青のサテン布を用意する

模製のリボンの襟の幅(5cm)に合わせて折り目を付ける

※端はほつれを防ぐため  
折れ目を内側に数センチ  
折り込んでおく



本体の襟と重ね、なるべく外側を5mm以下の幅の波めい

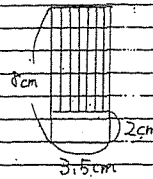


糸は2本どり

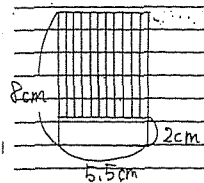
5mm以内

## 弓矢

①矢端



②③面端



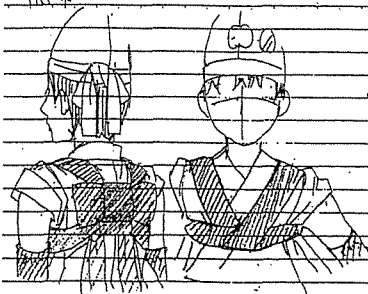
弦の部分が両端

少し長めに出ているので  
その部分に表を付ける

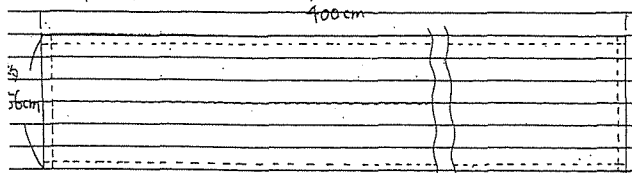
弦の部分でかかるとは  
長めにセーラーテープでとめる

## 結束

## 黒帯

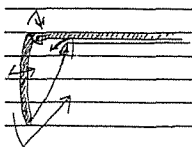


わきの下を通し、胴を一周して  
リボンの袖を上げ、背にリボン  
の形でまとめます



縦の端を1cm以内の幅で  
折り込んで半分にする

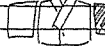
合わせ部分を縫い合わせ  
ミシンで縫い合わせます



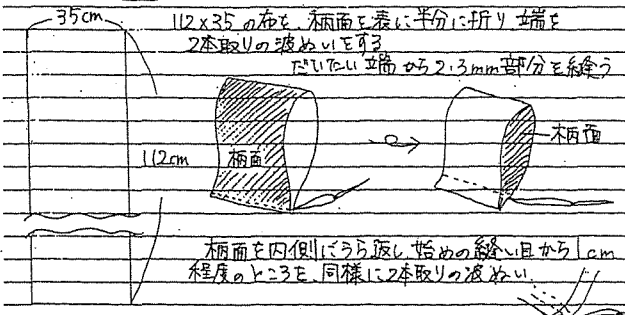
完成時の  
長さは4m  
幅は26~30cm  
が理想的です

## リボン

②袖



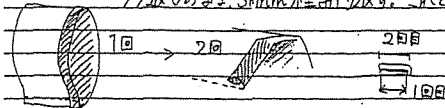
布は赤系の暖色。矢打の2柄目には質で  
少し差をつけて下す



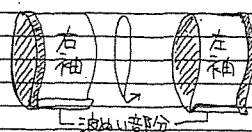
柄面を内側にうら返し、始めの縫い目から1cm  
程度のところを、同様に2本取りの波めい

袖口を作る

うら返しのミシン、3mm程折り返す、これを2回繰り返す



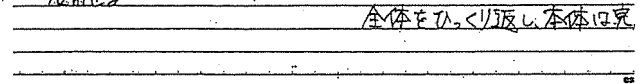
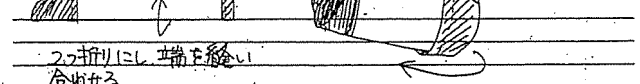
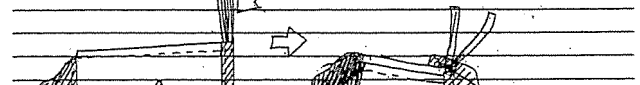
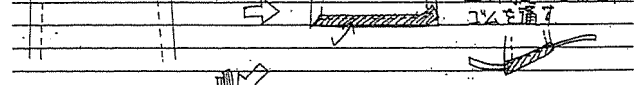
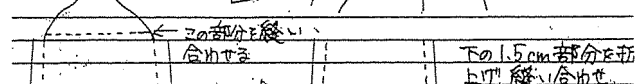
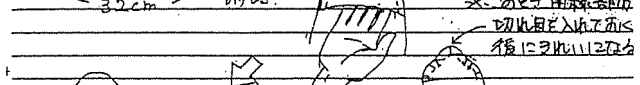
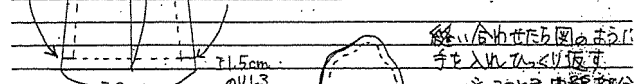
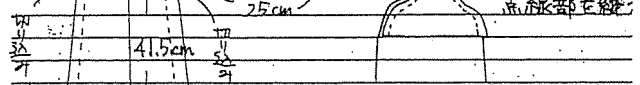
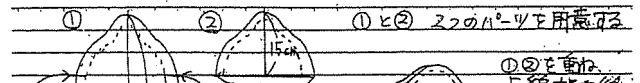
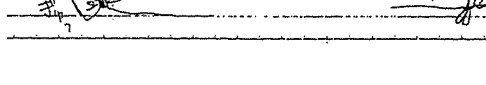
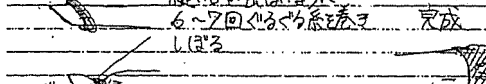
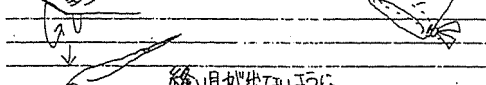
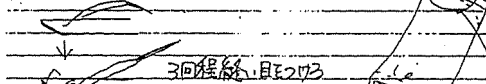
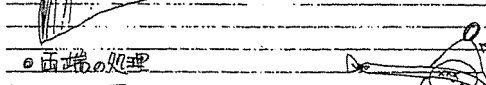
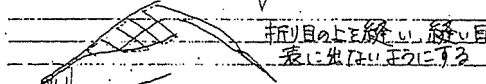
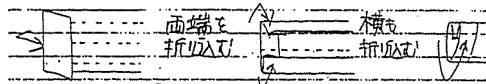
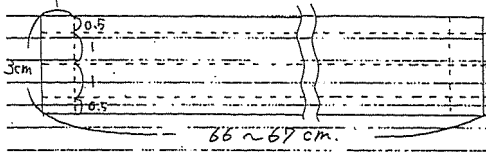
※波めいを縫った部分の処理は左右を気にする



着た時め前方に向いて  
折り、そのミシン部分のミシン  
2回折り返す

# 手甲の組

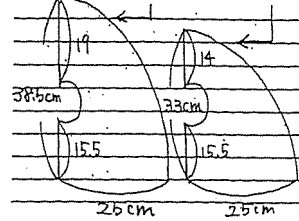
15.7cmの袖と同じ布



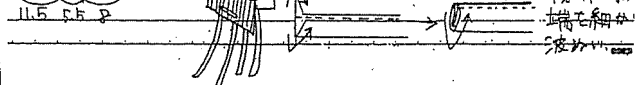
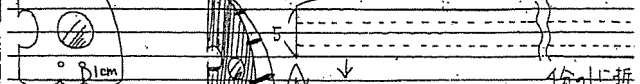
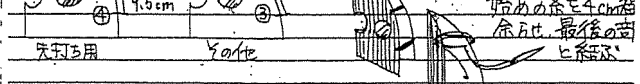
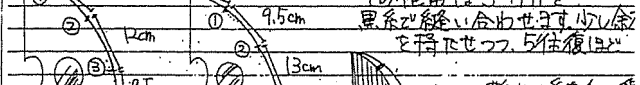
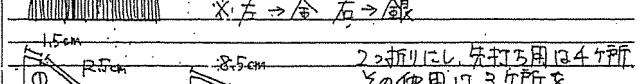
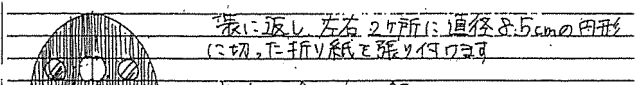
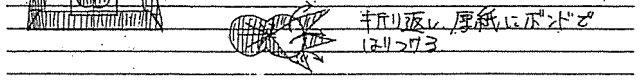
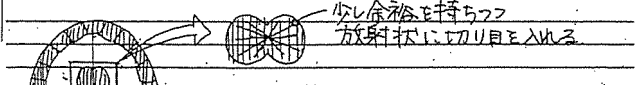
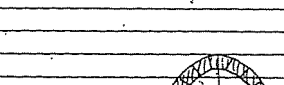
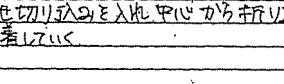
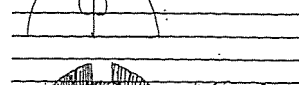
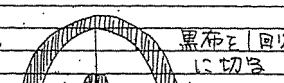
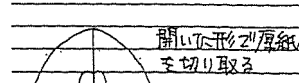
# 鳥帽子

先打ち用

その他道具用



鳥帽子は先打ち用かやや  
他の道具用より長めであり  
弓矢の物なので形が異なる  
(後に図解)



【注および参考文献】

- 1) 学校における民俗芸能の学習の仕方として筆者が主張している伝統継承型と素材発展型とは、筆者の造語である。この用語を筆者が使った初発は、拙稿『『さんさ踊り』とその指導法に関する一考察』（岩手大学教育学部研究年報第 60 巻第 2 号、2001）においてである。
- 2) 外部講師による通常と違う授業内容を 3 時間分入れることについては、本実践のねらいを示し、学生の同意を得てから本実践に取り組んだものである。
- 3) 民俗芸能サークル「ばっけ」は、現在、約 60 名の部員が参加しているサークルであるが、演目毎に主要メンバーがグループ化されている。したがって全員必修の踊りになっている「三本柳さんさ踊り」と「大森御神楽」および短い民謡踊り以外は、選択で「沢目獅子踊りグループ」と「中里七ツ舞」グループに別れて取り組むことになった。
- 4) 生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会、1987 年、162 頁。

## 8. 創造的な音楽学習への活用～素材発展型の学びの追究～

前項では、学校教育における民俗芸能の学び方には、筆者がかねてから主張してきた伝統継承型と素材発展型の二つの学びのうち、中里七ツ舞の伝統継承型の学びに関する岩手大学における実践的研究について述べた。ここでは後者の素材発展型の学びについて述べる。

民俗芸能の学習における素材発展型とは、その芸能を特徴づけている要素（リズム、メロディ、楽器、舞いなど）をもとに音楽をつくるという創造的な学びである。これについては、正当な伝承の追求だけに価値を求める立場からは認めにくいものかも知れない。しかし学校教育においては、伝統継承型でも一時的な体験学習で終わらざるを得ないことが少なくない。一時的な体験学習であっても、それなりの学習効果は期待できる。また初めから取り組みの難しさを理由に、全く民俗芸能に取り組まないよりは、一時的な体験学習であっても価値ある教育活動であることに違いない。しかし学校の音楽教育という面から民俗芸能の学習を組み込むには、対象とする民俗芸能を特徴づけている音楽的な要素（素材）を発展させる学びのあり方も、音楽のおよび教育的価値があると考えられる。

素材発展型の取り組みに価値を認める主な理由をあげておこう。

①指導者、時間、費用を克服して民俗芸能に関心をもたせることができる。

学校には、指導者、時間、費用など様々な制約がある。したがって学校としてはひたすら保存会の協力を頼って伝承活動を行わざるを得ない。長期にわたって保存会の協力を得られるのは、学内伝承が期待できる場合である。そもそも保存会だから協力してくれるのは当たり前だというような甘えの姿勢や傲慢な考えをもつべきではない。特に学内伝承までは考えていないが、一時的に体験させたいというような場合は、保存会との関係を大切にしながら、学校側のねらいや計画に理解を得る努力が必要になる。このような制約の多い学校で、予算も指導者も得られなくとも、なお子どもに民俗芸能に関心をもたせることができるのが、子ども自身が対象芸能の基本的な音楽要素を創造的に再生させる活動を行う素材発展型の学びなのである。

②音楽づくりは学習指導要領で重要な分野として位置づいており、かつ楽しい学習である。

創造的な音楽づくり、すなわち自由な発想による即興的な表現や創作活動は、平成元年に小・中学校の第6次学習指導要領に導入されて以来、音素材の多様性が認識されるのに伴って、多様な音楽づくりの活動が行われるようになってきたものである。平成10年改訂の現行の学習指導要領において、一層、強調された分野であり<sup>1)</sup>、音楽づくりは指導者も子どもや学生も、自らの発想を生かして誰もが楽しく取り組める価値ある学びである。

③文化的な視点を加味した民俗芸能を素材とする音楽づくりは、他の学習活動についても文化としての音楽教育を捉える重要性を認識させてくれる。

音楽は本来単独で存在するものではなく、文化的、社会的、歴史的、宗教的な背景など、さまざまな関係の中で存在している。民俗芸能を対象とする音楽づくりの体験は、いやおうなしに音楽が本来あるべき様々にかかわっている分野への開眼につながる。同時に、民俗芸能だけではな

く他の学習活動についても文化的、社会的、歴史的、宗教的な背景などを捉えて学ぶこと、すなわち文化としての音楽教育の視点をもつことの大切さを認識させてくれるのである。

本項目では、以上のような素材発展型の学びの価値を確信しつつ、研究対象である中里七ツ舞を特徴づけている音楽的な要素である二つのリズム・パターンをもとに、筆者の勤務校である岩手大学および平成 17 年度の 8 月に集中講義に出向いた宮城教育大学における素材発展型の学びに関する実践を報告する。

## 1. 岩手大学における素材発展型の実践

筆者が岩手大学で担当している「合奏」の授業では、2 単位時間（180 分）の中でグループ毎に経験創作によってオリジナルの太鼓音楽づくりに取り組む活動を設定している。通常の合奏における楽譜の再現を越える創造的な活動として本授業のシラバスに位置づけているものである。

音楽科の学生は、幼い頃から西洋音楽の技術の獲得のために、大変な努力を重ねて入学してきた学生たちである。岩手県を初めとして東北地域の学生が多いわりには小・中学校での民俗芸能体験はほとんどなく、あったとしても伝統継承型学習による体験学習レベルの経験しかない学生がほとんどである。

したがって太鼓音楽づくりに先立ち、「おはやしゲーム」<sup>2)</sup>という筆者のオリジナルの音楽遊びを通して、日本の大太鼓、締太鼓、当たり鉦の奏法と即興的なアンサンブルを体験させる。こうした「仕込み」の段階を経てから、学生たちは全く自由に 2 部ないし 3 部構成の太鼓音楽を創り上げる<sup>3)</sup>。平成 17 年度については、こうした太鼓音楽づくりに中里七ツ舞の二つのリズム型の活用を条件に入れて素材発展型の教育実践を試みた。

民俗芸能による素材発展型といっても、さまざまなタイプの活動が考えられる。例えば、代替楽器を使ってできる範囲で本物のお囃子に近づける活動、太鼓のパートに自由な旋律やリズムをつくって重ねる活動、特徴的なリズムをテーマにしてロンド形式の音楽をつくる活動、特徴的なリズムを生かした自由な音楽づくりの活動など、一つの素材からいろいろな活動を展開することが可能である。

今回の中里七ツ舞による素材発展型の実践では、「道具取り舞」（アのリズム）と「ちらし」（イのリズム）の特徴的なアとイの二つのリズム（譜例参照）を必ず入れて太鼓音楽づくりを行うという課題を設定した。神楽系の「七つ物」は、全般的にテンポの変化が少ないのだが、「道具取り舞」は次に続く「ちらし」のテンポよりは遅いテンポでありながら、実にノリの良い特徴的なアのリズムパターンをもっている。

素材発展型の実践において、中里七ツ舞にとって最も重要な舞とされている「道具取り舞」のリズムを取り上げる意味は大きい。一方、イの「ちらし」のリズムは、全ての「七つ物」に共通するリズムであり、「七つ物」を最も特徴づけているリズム型である。両者共に短いリズムフレーズではあるが、中里七ツ舞の最も典型的で重要な音楽的要素の一つである。

「合奏」の授業では、履修者 16 名を A B 二つのグループに編成し、まずは中里七ツ舞につい



て説明すると共に中里地区の子どもたちが華麗に舞う中里七ツ舞をVTRで鑑賞し、その後、グループごとに全体構成や楽器の組み合わせや分担を決めて太鼓音楽づくりに取り組んだ。

素材発展型の太鼓音楽づくりにおける唯一の条件は、アとイのリズム型をどんな音素材の組み合わせでも良いから必ず入れるということである。

#### 「道具取り舞」のリズム



#### 「ちらし」のリズム



太鼓音楽づくりの活動で誕生した各グループの作品は次のようなものであった。

#### ○Aグループ：曲名「琉球太鼓」（7名）

鉦とササラによる前奏から締太鼓・大太鼓・笛（2人）・鈴・テンブルブロック・ウチワ太鼓による自由なリズムに笛のメロディーとトーンチャイムが重なるⅠの部分に続いて、Ⅱの部分が笛で沖縄音階によって沖縄風の美しいメロディーを奏でる。その中でバス木琴・クラベス・コンガ・鈴がそのメロディーを引き立てる、ⅢでまたⅠのメロディーに戻って「ヤッ！」のかけ声で終わる。

#### ○Bグループ：曲名「太鼓サンバ」（8名）

最初に「ヨーッ！」のかけ声を合図に大太鼓・締太鼓・当たり鉦・鈴・笛・木琴が次々と加わり日本風の音楽ができあがる。締太鼓がイのリズムを打ち始めるとこれにラテン楽器や笛・木琴などが加わりサンバの名曲「サンバレレ」を演奏し、テンポが早くなり盛り上がったところで、一斉に「オパー！」と叫ぶ。続いて締太鼓がアのリズムを奏でると、何事もなかったかのようにⅠのメロディーが再現される。

AとBのグループの作品の中で中里七ツ舞のアとイの二つリズムがどのように活用されたかについては、次の（表1）に示す。

説明のための最初の講義や音楽遊びを含めて2単位時間で創り上げた太鼓音楽としては、ABグループ共に面白い作品を創り上げることができたが、特にBグループが中里七ツ舞のイのリズムとサンバのリズムを重ね、これが効果的なうねりを創出したことには驚かされた。

(表1) 岩手大学における素材発展型の例

\*三部構成 (Ⅰ～Ⅲ) ア＝「道具取り舞」のリズム イ＝「ちらし」のリズム

Aグループ：7名 曲名「琉球太鼓」(Ⅱの部分が沖縄風)	
ア	Ⅰの部分で締太鼓が杵打ちを使ってアを表現し、大太鼓が1拍目に打ち込み、リズムを明確にする。鈴、テンブルブロック、ウチワ太鼓、縦笛が創ったリズムや旋律を重ねる。
イ	Ⅲの部分に大太鼓が杵打ちを使ってイを表現する。他の楽器はⅠ同様に即興で重ねる。
Bグループ：8名 曲名「太鼓サンバレレ」(Ⅱの部分がサンバのリズム＋イのリズム)	
ア	Ⅰの部分で締太鼓がアを表現し、これに大太鼓、当たり鉦、鈴、木琴、縦笛が加わる。またⅡからⅢへのつながりも締太鼓でアのリズム。そのまま楽器が加わりⅢの部分に入る。
イ	Ⅱに入るつながりの部分から締太鼓が早いテンポでイを鳴らし、これにマラカス、アゴゴ、縦笛、フロアータム、木琴が加わり、サンバを演奏する。

## 2. 宮城教育大学における素材発展型の実践

筆者は2004年と2005年の夏に、宮城教育大学の音楽科教育学の集中講義を担当した。宮城教育大学は体育科で多くの和太鼓を所有している。しかし4日間の集中講義でもあり、和太鼓については締太鼓を中心にして、岩手大学と同様の太鼓音楽づくりに取り組ませた。したがって学生が用意してくれた三つの締太鼓に限定して、後は授業を行った大教室の楽器庫に保管してあった楽器を活用して太鼓音楽づくりを行った。岩手大学同様に、2部または3部構成の音楽づくりであり、時間も中里七ツ舞に関する最初の講義や音楽遊びを含めて2単位時間に限定した太鼓音楽づくりであった。

宮城教育大学における太鼓音楽づくりの三つのグループ作品の概略は、次のようなものであった。

### ○Aグループ：曲名「志村太鼓」(6名)

フロアータムと締太鼓のトレモロを前奏にして、「ソレ！」のかけ声でⅠに入る。締太鼓・ボンゴ・鈴に2本の笛が交互に即興演奏を行う。鈴がタンブリンに持ち替えてピアノが加わった後、笛(C-D-A)と鍵盤ハーモニカ(A-C-G)のメロディー楽器が3音のみのデュオでアのリズムを刻む。手拍子でリズム型をキープしながら、Ⅱの部分に突入する。木琴が低音のA音でイのリズムを刻む中、鍵盤ハーモニカ、笛、ピアノ加わり、テンポが早くなり、一気に盛り上がり、

最後は「ジャン！」と衝撃的なシンバル音で終わる。

○Bグループ：曲名「無太鼓」（7名）

大きなゴング（銅鑼）が始まりを告げると、ティンパニー・締太鼓・タンブリン・笛（2）・トライアングルがⅠの部分を日本的な音楽で満たす。締太鼓がアのリズムを打ち出すと鉄琴や2本の笛が美しいメロディーを奏でる。トライアングルとタンブリンが加わりⅡの部分が終わると、きれいな音色のウィンドチャイムがⅢにつなぐ。ティンパニーと締太鼓がイのリズムでエネルギーにスピードを上げていくと最後に笛が能管のように強い高音を一吹きして、最後を告げるゴングの音で終わる。

○Cグループ：曲名「熊太鼓」（6名）

締太鼓・マラカス・コンガが強烈なトレモロを演奏してスタートする。ゆったりしたⅠの部分では締太鼓がアのリズムを打ち込み、これにウッドブロック・コンガ・木琴・笛（2）が加わる。ドラムのようにセットした締太鼓がイのリズムで次第にテンポを上げていくと、これに合わせて、笛・ウッドブロック・タンブリン・鈴が熊祭りのダンスのように、締太鼓の周りを音を鳴らしながら円を描いて踊る。締太鼓が次第にテンポを上げて猛烈な速さまで盛り上がると、締太鼓を演奏していた学生はさっと別の学生に席を譲りⅠのゆったりした音楽に戻っていく。締太鼓とコンガがリズムの掛け合いを行ってから終了する。

以上の三つのグループの作品は、いずれも短時間で創り上げたとは思えないほどさまざまなアイデアに満ちた作品であった。特にAグループが、笛と鍵盤ハーモニカというメロディー楽器によって、アのリズムをミニマル・ミュージックのように表現したことやCグループの締太鼓をバス・ドラムを使ってドラム・セットのように組み立てて使うなど、限られた楽器を駆使して見事に創り上げた太鼓音楽であった。

宮城教育大学の素材発展型の音楽づくりにおいて、中里七ツ舞のアとイの二つリズムがどのように活用されたのかについては、（表2）に示したとおりである。

岩手大学および宮城教育大学のいずれの実践においても、素材発展型の音楽づくりは、学校における時間的・経済的な制約や楽器や備品などの制約を、学び手の独創性やアイデアによって克服できる良さを実証してくれた。またできあがった作品はもとより、さまざまに試行錯誤しながら新しい音楽を創りあげていくプロセスの中に存在する各個人の目に見えない学びに、大きな価値を認めることができるのである。そして何よりも、日本の音楽に関する経験のない学生たちが、本物の中里七ツ舞のリズムを自分たちの作品の中に取り込んだことによって、民俗芸能との何らかのつながりをもてたことに喜びを感じたり、中里七ツ舞そのものに対する関心が広がったのも確かである。音楽活動の良さは自ら楽しむこと以外の何者でもない。

本稿の最後に、学生たちの声を授業のアンケートから中里七ツ舞に関する部分だけを取り出して、（表3）にまとめておこう。

(表2) 宮城教育大学における素材発展型の例

Aグループ：6名 曲名「志村太鼓」(日本+ラテン風でアとイを旋律楽器が担当)	
ア	Iの部分は、締太鼓、ボンゴ、鈴の順に入り、鍵盤ハーモニカと縦笛が交互に日本風の旋律を奏で、それにピアノが重なる。途中から縦笛がC-D-Aの音で、続いて鍵盤ハーモニカがA-C-Gの音でアを表現する。
イ	IIの冒頭から木琴が鋭く速くA音のみでイを打ち続け、これに他の楽器が加わる。
Bグループ：7名 曲名「無太鼓」(全体的に音色の効果を追求)	
ア	Iの部分からゴングとティンパニーでIIの部分につないだ後、すぐに2台の締太鼓がアのリズムを表現する。鉄琴と縦笛が旋律を重ねたところで、トライアングルとタンブリンがリズムを刻む。
イ	IIIの部分でティンパニーのリズムに重ねて締太鼓が速いテンポでイを表現し、他の楽器も速いテンポで加わり、最後のゴングの音が鳴るまでエネルギッシュに演奏する。
Cグループ：6名 曲名「熊太鼓」(熊祭りのようなダンス入り)	
ア	Iの部分で締太鼓がアのリズムを表現し、ウッドブロック、コンガ、木琴、縦笛の順に加わる。IIIの部分でも締太鼓がIと同じように表現する。
イ	IIの部分で締太鼓とバスドラムのセットと木琴が驚くほど速いテンポでイのリズムを表現し、笛、ウッドブロック、タンブリン、鈴が楽器を鳴らしながら周囲を踊り回る。

著者からの依頼により製本時ここにあった文章の掲載を見合わせております。

(表3) 岩手大学の素材発展型「太鼓音楽づくり」の授業における学生の感想

(・実施時期: 2005 年 7 月 21 日 ・回答者: 全 16 名)

(1) 太鼓音楽づくりをして

①楽しかった (16 人) ②どちらでもない (0 人) ③つまらなかった (0 人)

＜理由＞

- ・太鼓だけでなく沖縄の音楽やサンバを織り交ぜたのが楽しかった。
- ・太鼓をたたく機会がないので、良い経験になった。
- ・さりげなくリズムに乗ることができた。
- ・和太鼓の音色を様々な音楽につなげることで音楽の観点が変わった。
- ・途中で和太鼓とは違う感じの音楽を取り入れたが、すごく合うのがおもしろかった。
- ・自分たちのアイディアでどんな風にも創れたから。
- ・太鼓は力強いイメージしかなかったが、繊細なものだと思った。
- ・今まで学校で太鼓音楽をやったことがなかったので新鮮だった。
- ・和楽器に他の楽器をどう合わせるか考えながら創るのが楽しかった。
- ・実際に和太鼓にさわられて良かった。
- ・太鼓が体験できて良かったし、伝統的な音楽に興味があるから。
- ・リズムパターンのアレンジは誰にでも取り組みやすい。
- ・お祭りのような気分になった。

(2) 中里七ツ舞の二つのリズムを入れるために工夫した点

- ・アのリズムを勢いのあるⅠに入れ、イをゆったりとした沖縄風のⅡに入れた。またリズムを崩してほぼアドリブで入れたこと。
  - ・サンバのリズムと融合させてⅠからⅡにうまくつなぐよう工夫した。
  - ・曲の感じと中里七ツ舞のリズムがそれぞれ生きるように工夫した。
  - ・音楽の自然な流れやつながりを考えながら太鼓音楽づくりを行った。
  - ・中里七ツ舞のリズムが引き立つように他の楽器のリズムや音を工夫した。
  - ・つながりが自然になるように、また太鼓以外の楽器を使うことで全体的に自然な流れになった。
  - ・アとイのリズムが生きるように、またリズムが重ならないように工夫した。
  - ・中里七ツ舞のリズムを強調するために、初め締太鼓だけで演奏して徐々に楽器を加えた。
  - ・サンバのリズムとうまく合うように全体のテンポを工夫した。
  - ・他のリズムでかき消されないように気をつけた。
  - ・意外とすんなりとリズムが合ったのに驚いた。
  - ・初めはなかなか進まなかったが、仕上げることでよかった。
  - ・リズムの雰囲気に合わせてテンポを変えた。
  - ・アとイのリズムで雰囲気が変わるようにした。
  - ・音の重なりとバランスに気をつけた。
  - ・いろいろな楽器で二つのリズムを入れたこと。
- (3) 実際の民俗芸能のリズムを加えて新しい太鼓音楽を創ったことについて
- ・共通のリズムを使ったが、2グループが違う曲に驚いた。サンバと中里のリズムが合っていた。
  - ・伝統的なリズムを取り入れたことで、日本の文化を体験し、創造的に伝統を認識できた気がする。
  - ・太鼓は入れようによって、いろいろな曲に合うような感じがした。
  - ・サンバや沖縄風音楽がとても良く合うことに感動した。
  - ・少しでもいいから、もっといろんな伝統芸能を味わいたいと思った。
  - ・日本の楽器にふれる機会が無かったが、日本にも素晴らしい伝統楽器があることを知った。
  - ・自分たちで創った太鼓音楽に愛着がもてて、本当に楽しかった。伝統のリズムを基にして新しい音楽を創る楽しみを味わえた。
  - ・和楽器と西洋楽器を合わせて演奏したのがおもしろかった。また伝統楽器が身近になった。
  - ・伝統のリズムに自分たちの新しいリズムを考えて入れるのは難しかった。
  - ・民俗芸能のリズムを加えた方が日本らしさが残って良い。
  - ・意外と簡単に伝統芸能っぽくなるということがわかった。
  - ・最終的には自分たちの音楽として創ることができて楽しかった。
  - ・伝統芸能のリズムはほとんど知らなかったの、知ることができて良かった。

(4) その他の感想 (自由に)

- ・自由に創れて楽しかった。
- ・リズムによって音楽ができるプロセスがおもしろかった。リズムに焦点化する新しい視点がもてた。
- ・このような授業を小・中学校で取り入れれば、幅広い世代へ興味・関心をもたせられると思う。
- ・沖縄の音楽やサンバを取り入れてアンバランスではなかったのがすごかった。
- ・みんなで協力して、白紙の状態から創り上げるのはとても楽しかった。
- ・もともと太鼓の音が好きだったのでうれしかった。もっと本格的に練習してみたい。
- ・サンバを太鼓音楽にいかしたり沖縄風にしたり、グループでテーマを決めてそれぞれの作品を仕上げていくことが楽しかった。
- ・2つのグループのどちらもまとまっていて良かった。
- ・太鼓のリズムを工夫するのに時間がかかり、難しかった。
- ・勇気を出して大太鼓にも挑戦してみればよかった。もったいないことをした。
- ・一定のリズムに乗ることができると楽しい。
- ・複数の人とリズムを重ね合わせる楽しさや、和楽器の音の味わいを感じることができた。
- ・お祭りのようで楽しかった。

【注および参考文献】

- 1) 創造的音楽学習については、拙稿「創造的音楽学習」（河口道朗監修『音楽教育史論叢第Ⅲ巻（下）音楽教育の内容と方法』開成出版、2005年、pp.609-630）を参照されたい。
- 2) 「おはやしゲーム」については、拙著『音楽づくりで楽しもう！』（日本書籍、1993年、pp.216-219）を参照されたい。
- 3) 2部構成の太鼓音楽の場合は、「初め－Ⅰ－Ⅱ－終わり」、3部構成の場合は、「初め－Ⅰ－Ⅱ－つなぎ－Ⅲ－終わり」の構成にするとまとまりやすいというアドバイスをを行うが、基本的に形式は自由である。しかし3部構成の場合、A－B－A'の3部形式にまとめるグループが多い。

## 9. 「七つ物」と剣舞

### 1. 「七つ物」と剣舞

これまで述べてきたように、「七つ物」は神楽をその源流としている。しかし僅少ではあるが、剣舞にもこれまで述べてきた七頭舞や七ツ舞に類似した「七つ物」や剣舞と組み合わせて踊られる「七つ物」が存在することがわかった。

剣舞は、岩手県を中心に青森県や宮城県にも分布している念仏踊りの一種である。剣舞には、大念仏剣舞・念仏剣舞・脱垂剣舞・高館剣舞・鎧剣舞・鬼剣舞・雛子剣舞などの種類があり、岩手県内では132団体（中断を含む）が全県下にくまなく伝承されている<sup>1)</sup>。また剣舞の起源については、<sup>えんのぎょうじゃ</sup>役行者が念仏を広めるために踊った、平泉で滅亡した義経主従の亡魂を慰めるための踊り等々、各地域で様々な伝説が残っている。また剣舞の名称については、反問（へんばい）という悪魔を踏み鎮める呪術の訛ったもの、剣で舞うから剣舞、宮廷の御神楽の勧盃（けんばい）<sup>2)</sup>に関連するなど、これもまた様々な諸説が残っており確かなことはわかっていない<sup>3)</sup>。

「七つ物」と関係の深いのは念仏剣舞であり、必ず「南無阿弥陀仏」の念仏が入っている。剣舞の系の「七つ物」は必ずしも七つの道具を使っているとは限らないが、複数の道具を用いて舞うことから、筆者はこれらを「七つ物」に位置づけることが可能と考えている。

民俗芸能は互いに影響し合いながら伝承されてきており、神楽が様々な芸能に影響を与えていてもおかしくない。剣舞系の「七つ物」は、風流化された神楽系の「七つ物」よりは全体にテンポが遅いという特徴がある。この剣舞系の「七つ物」の存在はこれまであまり認識されていないようである。そもそも「七つ物」自体が、中野七頭舞のように個別に関心を集めて研究されている以外は、これまでほとんど研究対象として取り上げられてきていない。神楽と剣舞のそれぞれに関係の深い「七つ物」に関して、筆者は神楽系の「七つ物」と剣舞系の「七つ物」と名付け、2種類に分類している。しかし剣舞に関係する「七つ物」は、神楽の「七つ物」とは根本的なところで性格が異なっている。

本報告書の最初の項目「1. 民俗芸能の分類と『七つ物』」で既に述べたように、剣舞系の「七つ物」は、主に盆に先祖供養を行うために舞うものである。つまり仏様に奉納するのであり、これに対して神楽系の「七つ物」は神様に奉納する。つまり剣舞系と神楽系では祈祷の対象が全く違うのである。剣舞系の「七つ物」は供養のために舞うため、一般的には、供養踊りまたは念仏踊りに分類される。剣舞系の「七つ物」は、神楽系の「七つ物」とは舞のタイプにも相違がある。

しかしながら群舞であること、舞い手が使う道具、衣装、そして音楽のリズムの一部が著しく似通っているものがあるなどの共通項を考えると、いずれのタイプの舞であっても、「七つ物」に括ることが可能と考えられる。

実際に「七つ物」が含まれる剣舞、または剣舞と組み合わせて舞う「七つ物」には、(表1) ような舞がある。

(表 1) 剣舞系の「七つ物」

地域		「七つ物」が含まれる剣舞名
県北地方	九戸郡山形村	霜畑念仏剣舞 関念仏剣舞
北沿岸地方	下閉伊郡田野畑村	菅窪剣舞（田野畑念仏剣舞）
	下閉伊郡宮古市	田代念仏剣舞 牛伏剣舞

## 2. 剣舞系の「七つ物」

神楽系と剣舞系の「七つ物」を比べて、最も顕著な相違点は、中野七頭舞や中里七ツ舞などの神楽系の「七つ物」が、いくつかの演目をもっているのに対して、剣舞系の「七つ物」の場合は、剣舞の中のいくつかの演目の一つとして「七つ物」が含まれている場合が多いことである。また特に「七つ踊り」という名称がついていなくても、踊りそのものが「七つ物」と近似しているものもある。（表 1）に挙げた剣舞系の「七つ物」についてはほとんど資料がないが、ここでは筆者が把握できたことを報告しておきたい。

### (1) 霜畑念仏剣舞

九戸郡山形村霜畑に伝わる剣舞で、霜畑では現在でもお盆になると、霜畑に 2 カ所あるお墓の前で踊る。先祖の霊を慰めるために踊ったのが始まりであるといわれている剣舞である。現在なお「霜畑念仏剣舞」には、五穀豊穡、悪霊退散などの願いが込められている。かつては 12 種類の踊りがあったが、現在は 7 種類のみ残っており、霜畑小学校で伝承している。

男性は烏帽子をかぶり、腰にシカと称する大口袴のようなものを付ける。女性は袴ではなく、着物の裾を動きやすく短めに着る。

#### ① 「やっぱらい」

この名称は「七つ物」の「谷地払い」の仲間と思われる。手には長い薙刀をもって踊る。入場は薙刀を上下にもち回転させながら踊る。片足で跳びながら薙刀を回す所作はきわめて印象的である。全体的にゆっくりなテンポであるが、「ダンツコツコツコ ダンツコダン」という「七つ物」特有の「ちらし」のリズムが出てくると、いくらかテンポが速くなる。

#### ② 「一つあや」

道具はあや棒である。入場は長刀同様に上下に半回転させながらゆっくり歩いて入る。それぞれが 1 本のあや棒をもって優雅に舞う。「南無阿弥陀仏」などと唱える歌が入ってくると、頭を上げて、左右に体を揺する。ゆっくりから次第に早くなり、テンポは一定ではない。全体に頭を下げ気味に踊るのが特徴的である。



### ③「七つ踊り」

これは本来、神楽系の「七つ物」同様に、7・8種類の道具をもって踊るものであるが、子どもが伝承していることから、現在は扇のみで踊っている。他の踊りと同様にゆっくりと始まり次第にテンポを上げていくが、全体的に他の踊りよりはテンポが早い。輪踊りで回転が多く、体を上下にひねりながら扇を捌き、片足で跳びながら「ダンツコツコツコ ダンツコダン」とちらしのリズムで舞うのが印象的である。

なお平成16年11月の九戸市の広報誌『やまがた』の表紙には、10月31日の霜畑中学校の文化祭で、生徒たちがこれまで地域の人をお願いしていた笛、太鼓、鉦にも挑戦して「霜畑念仏剣舞」を披露したという文章と共に、大きく生徒の舞い姿の写真が掲載されている<sup>4)</sup>。霜畑地域の学校における伝承活動もますます盛んになっているといえよう。

#### (2) 関念仏剣舞

九戸郡山形村の霜畑地区のお隣の関地区に伝わる剣舞である。印象としては、霜畑念仏剣舞よりも一層優雅な感じの舞である。男女それぞれの衣装は、霜畑念仏剣舞とほぼ同じである。

##### ①「やっばらい」

霜畑念仏剣舞と同様に、薙刀を上下に回転させながら入場する。片足で跳びながら長刀を回す振りが印象的である。全体的にゆっくりなテンポであるが、やはり「ダンツコツコツコ ダンツコダン」という「七つ物」特有のちらしのリズムが出てくるとテンポがアップする。

##### ②「七つ踊り」

関念仏剣舞でも、本来は7・8種類の道具で踊るこの「七つ踊り」を、今は扇だけで舞っている。「南無阿弥陀仏」がゆっくりと唱えられ、舞い手は、時々、立ったまま頭を下げ、体を左右に揺らしながらこの唱歌に耳を傾ける。ゆっくりしたテンポで始まり、ところどころテンポが早くなる部分がある。全体的に神楽系の「七つ物」のような躍動感はないが、「ダンツコツコツコ ダンツコダン」のちらしのリズムは確実に聴き取ることができる。

##### ③「一つあや」

これも歌が入る。霜畑念仏剣舞ではあや棒を各人が一つもって踊っていたが、この関念仏剣舞では、両手に2本のあや棒をもって、鮮やかにあや棒を操りながら舞う。

##### ④「やっばらい」

薙刀をもって、初めの入場と同じ踊りを舞う。

#### (3) 菅窪<sup>すげのくぼし</sup>鹿踊・<sup>おどり</sup>剣舞<sup>けんぱい</sup>（田野畑念仏剣舞）

菅窪鹿踊・剣舞の最大の特徴は、鹿踊りと剣舞を一緒に組み合わせて早替わりで演じられるきわめて希有な芸能ということであり、現在は岩手県指定無形民俗文化財になっている。岩手県下閉伊郡田野畑村に伝承されており、保存会には、菅窪地区の全世帯（120世帯）が加入し、地域ぐるみで保存・伝承活動を行っている。以前は田野畑念仏剣舞とも言われた時期もあったようである。統合されている二つの芸能のうち、剣舞の「大念仏」の口上には、吉田少将維房卿の御曹司が殺された供養のために舞われたのが初めとされており、この事件を題材にした「隅田川」の梅若丸物語が江戸時代に全国的に流行し、これが田野畑村にも形を変えて入ってきたと考えられ

ているs)。

菅窪鹿踊・剣舞には、鹿踊にかかわる演目としては、「4本がかり」「ほらがえし」「花踊り」「組花踊り」「七つぎり」「突き入れ」「膝立て」「網がかり」「雌鹿狂い」「かかし」「足上げ突き入れ」などがある。一方、剣舞にかかわる演目には、「大念仏」「港入れ」「花傘音頭」「十三拍子」「高館入り」「銭太鼓踊り」「万作踊り」「綾踊り」「二十三拍子」「四十三拍子」「五十三拍子」など多くの演目がある。この中で「七つ物」と関係が深いのが、「大念仏」である。

菅窪鹿踊・剣舞の「大念仏」踊りは、初めは「南無阿弥陀仏」の唱え声に合わせながら、ゆったりと舞う。途中から「七つ物」のリズムや笛の旋律が聴こえてくるとテンポも早くなる。太鼓演奏については、神楽系の七頭舞や七ツ舞のような杵打ちは使わず、全て皮打ちで演奏しているのが特徴的である。

菅窪剣舞は、伝承活動に取り組んでいる岩泉高校田野畑校は、文部大臣奨励賞を何度も獲得しており、1995（平成7）年には全国高校総合文化祭の郷土芸能部門で日本一に選ばれるという快挙を成し遂げている。

#### (4) 田代念仏剣舞

その昔、飢饉で多くの餓死者が出たときに、代官所の前で田代の人々が剣舞を踊って供養したのが始まりといわれている。田代念仏剣舞は、どこから伝承されたのか明確ではないが、1910（明治43）年頃から田代地区で剣舞が踊られるようになったようである。岩泉町の尼<sup>あまぶたい</sup>額または花輪の大野から教わったという二つの説がある。もし前者であれば、岩泉地区は、まさに「七つ物」が伝承されている中心地域である。現在、尼<sup>あまぶたい</sup>額の「七つ物」がなくとも、近くの岩泉地区に伝わる「七つ物」の影響を受けた「剣舞」が踊られていた可能性は高い。したがって自ずと田代地区に伝えられた剣舞に「七つ物」の要素が入っていてもおかしくない。

実際、剣舞系の「七つ物」の中で、最も神楽系の「七つ物」に似ている踊りを舞っているのが、この田代念仏剣舞である。剣舞の中に、七頭舞・七ツ舞がすっぽり入り込んでいるような形になっているのがきわめて興味深い。

剣舞の舞い手は、ヤツハライ（長棒2人）、長刀（2人）、太刀（2人）、コトリ（弓ともいう、2人）の8人で構成される。この道具が、神楽系の「七つ物」と大変良く似ているのである。

お囃子は太鼓（2人）、手平鉦（2人）、笛（1人）の5人の囃子方による。また讃かけという歌唄いが別に参加することもあるが、多くは太鼓打ちの胴取りが讃かけを兼ねることが多いようである。

田代念仏剣舞の演目には、大念仏、高太刀、綾踊り、棒剣舞、湊入り、城廻しなどがある。それぞれの舞には、「デハ」（出番）、「中踊り」「ヒキハ」の踊りがあり、18曲の踊りになる。

田代地区では、これらの剣舞の他に、20年くらい前から神楽系の「七つ物」も伝承しているが、剣舞とは別の芸能として8人の踊り手が2人組で、棒、薙刀、太刀、キギ（杵のこと）が鎧無しで踊るものである。曲名は、1曲だが、その中に「デハ」「中踊り」「ヒッコミ（ヒキハ）」がある。剣舞中の「七つ物」とは違うけれども、踊りに使う4つの道具は、神楽の「七つ物」でも使われているようなものである。

## (5) 牛伏剣舞

牛伏剣舞は、剣舞の演目の中に七つ踊り（「七つ物」）を組み合わせで演じることが多い。この剣舞の起源は、その昔、閉伊頼基の父とその家来と閉伊家の人々の霊を慰めるために始められたと言われており、現在、残存している根城の館に関する記録（「篤焉家訓卷十三」）によると、文化年間から天保年間にかけて、牛伏地区では既にこの剣舞が舞われていたことが記されている。

剣舞を舞う時に、新起（しんぱち）によって読み上げられた口上「新起牛伏大念仏剣舞踊由来記」（昭和 26 年 8 月吉日）には、「新起亦剣舞踊りの其の数を くわしくして見ますれば、由来なぐさみに非ず あや踊り 幽霊 高館 湊入り 七つ踊りに城廻し～」と続き、古くから七つ踊りも踊られていたことがわかる 8)。

演目は、本来 48 曲あったようだが、現在は 6 曲のみ伝承されている。この 6 曲とは、「高太刀」「スレゴ」「綾踊り」「ヒムクリ」「城廻し」「太刀踊り」であり、「大念仏」も今では伝えられていない。通常は、「大念仏」の中に「七つ物」が含まれていることが多いようであるが、現在では既に忘れ去られ伝承されていない。しかしながら、牛伏剣舞に牛伏七つ物（牛伏七つ踊りともいう）が組み合わされて演じられることが多い。したがって牛伏剣舞に牛伏七つ踊りが含まれていると考えられている。牛伏七つ踊りを神楽系に位置づけるという見解もあるが、新起によって読み上げられる口上からも剣舞系の「七つ物」と考えた方が自然である。

牛伏七つ踊りでは、高太刀（長刀）、鎌、斧（まさかり）、杵、棒、弓、太刀の 7 つの道具を使って華麗に舞う。牛伏七つ踊りについては、次項において宮古西中学校の実践報告を紹介する中で、幾分、触れることにしたい。

以上見てきたこれらの剣舞系「七つ物」には、神楽系の「七つ物」と比較して、次のような特徴が見られる。

- ① 牛伏七つ踊りは別として、他の剣舞系の「七つ物」は男性の舞である。
- ② 「南無阿弥陀仏」の唱えことばや歌が含まれている。
- ③ シャがんだ動作からすぐに立ち上げて舞う動作が多い。
- ④ 神楽系の「七つ物」はテンポが一定だが、剣舞系は 1 演目の中でもテンポが変化する。

また神楽系よりも全体的にお囃子のテンポが遅い。

剣舞系「七つ物」と神楽系の「七つ物」とを比較するならば、上記のような特徴をもってはい。しかし剣舞系の「七つ物」には、入場の時の所作、2 人組になって腰を降ろし、背中合わせに左右に移動する所作などは、黒森神楽の御堂入りの所作に見つけることができる。どんな芸能も廻り神楽であちこち移動している黒森神楽の影響を受けていたに違いない。

剣舞系の「七つ物」にも、神楽系の「七つ物」のちらしのリズムが含まれており、両者の「七つ物」は、やはり親戚縁者といえるほどに関連が深いといえよう。

【注および参考文献】

- 1) 北上・みちのく芸能まつり実行委員会『炎の伝承』、1999 年、83~92 頁参照。
- 2) 勧盃(けんばい)とは、お酒を勧めることである。宮廷の御神楽などでは採物の歌あたりまでは儀式として神事が行われるが、興が進むと酒宴の芸まわしのように 1 曲ごとにお酒が勧められるのが日本の饗宴のパターンであったようである。
- 3) 剣舞の起源や名称については、仲井幸二郎他編集『民俗芸能辞典』（東京堂出版、1981 年、175 頁）を参照されたい。
- 4) 平成 16 年 11 月の九戸市の広報誌『やまがた』の表紙は、以下の H P でも見ることができる。  
[http://orange.webdos.net/~kunohe/koho\\_yamagata/1611/y1611\\_01.pdf](http://orange.webdos.net/~kunohe/koho_yamagata/1611/y1611_01.pdf)（2006 年 3 月現在）
- 5) 菅窪鹿踊・剣舞の由来については、2004 年の「宮古下閉伊郡郷土芸能まつり」プログラム（75 頁）の解説を参照されたい。
- 6) 菅窪鹿踊・剣舞の演目については、青木松太郎著『たのはた風土記』（杜陵印刷、1979 年、101 頁参照）に詳しい。
- 7) 前掲 5) のプログラム、8 頁。
- 8) 宮古市教育委員会編『宮古市（民俗編）下巻』1994 年、99 頁。

## 10. 宮古西中学校の歌舞劇における牛伏七つ踊り

岩手県の宮古市立宮古西中学校は、その名前の通り宮古市の西部に位置する中学校で、1988（昭和 58）年に近内中学校と千徳中学校が統合されて改称された学校である。2005 年度現在で教職員数 21 名、9 学級数で生徒数 296 名という規模の学校である。

最近の話題では、2006（平成 18）年 1 月 29 日に開催された第 15 回合唱小アンサンブルコンテストにおいて、銀賞を受賞しており、ここで報告する音楽劇に代表されるように、岩手県における音楽活動の盛んな中学校の一つである<sup>1)</sup>。

同校では地域の民俗芸能を取り込んだ歌舞劇と称する新しい音楽劇の実践に長年取り組んでいる。宮古西中学校の歌舞劇の素晴らしさは、本校で創作した新しい歌舞劇の中に民俗芸能の牛伏七つ踊りおよび牛伏剣舞が組み込まれていることである。学校教育における剣舞系の「七つ物」の代表として、宮古西中学校における歌舞劇の取り組みについて述べたい<sup>2)</sup>。

### 1. 歌舞劇の歩みと総合的な学習

宮古西中学校では、年度当初の 4 月から 10 月後半に行われる文化祭に向けて文化祭企画委員会を立ち上げて、歌舞劇に取り組んでいる。この歌舞劇が最初に実施されたのは宮古西中学校の前身である千徳中学校の時代に、牛伏剣舞に共感した社会科と音楽科の両方を担当していた 1 学年の担任が、1982（昭和 57）年に自分の学級の男子全員に文化祭の取り組みとして牛伏剣舞に挑戦させたことが端緒になっている。宮古西中学校に改称した翌昭和 58 年度には生徒が牛伏剣舞をもとにした物語を創作して合唱組曲「牛伏偽話」が誕生した。つまり学級レベルから学年レベルの取り組みになると共に、民俗芸能のみの取り組みから剣舞を含む合唱中心の音楽劇の形式に発展した。現在の西が丘の新校舎が完成した昭和 59 年には、新校舎のこけら落としを兼ねた文化祭で初めて「さよの泉」が上演された。この「さよの泉」、「村が消えた」（昭和 60 年度）から全校の取り組みとなり、歌舞劇と称するようになった。昭和 63 年度の「梨の花」の発表後、歌舞劇脚本委員会が脚本「道」を完成し、器楽合唱部の生徒がこの脚本を基に作曲して上演された。平成元年以降はいくつかの演目に固定され、手直しを重ねながら上演されてきている。

- |                    |                  |                   |
|--------------------|------------------|-------------------|
| ・平成元年度「道」          | ・平成 2 年度「幼い夏」    | ・平成 3 年度「さよの泉」    |
| ・平成 4 年度「道」        | ・平成 5 年度「梨の花」    | ・平成 6 年度「北の大地を」   |
| ・平成 7 年度「道」        | ・平成 8 年度「幼い夏」    | ・平成 9 年度「北の大地を」   |
| ・平成 10 年度「さよの泉」    | ・平成 11 年度「道」     | ・平成 12 年度「幼い夏」    |
| ・平成 13 年度「新・北の大地を」 | ・平成 14 年度「さよの泉」  | ・平成 15 年度「道」      |
| ・平成 16 年度「幼い夏」     | ・平成 17 年度「北の大地を」 | （*「新」は付していないが改訂版） |

現在では、学校行事の文化祭を総合的な学習の成果の発表の場として位置付けている。

宮古西中学校では、総合的な学習の時間を「大樹学習」と命名して次のような三つのねらいおよび学年別のねらいを定めている。

#### <大樹学習のねらい>

- ・主体的に学習に取り組む力を高める。
- ・思いやりの心を持ち、他と関わりあう力を高める。
- ・豊かな感性や創造性を高める。

#### <学年別のねらい>

- 1年生：学びの基本の姿勢をつくり、自分をみつめることができる。
- 2年生：与えられた課題にむけて、工夫しながら追究でき、自分の可能性を広げようとする。
- 3年生：協調しながら自分の課題を追究し、自己の生き方を考えることができ、自分の夢へ向かって挑戦する。

これらのねらいにそって大樹学習では、新入生を迎える会、修学旅行、体育祭、テーマ学習、音楽祭、文化祭、福祉年賀状の作成、3年生を送る会など学校行事とも関連されたさまざまな取り組みがなされている。この中で、文化祭についてのねらいは次のとおりである。

#### <文化祭でのねらい>

歌舞劇に全校で取り組む活動を通して、主体的・創造的な学習を進め、感想を共有し、本校に所属することの喜びと誇りを持つことにより、次の学習に対して自信と意欲を持つ。

- ・国語、音楽、美術、技術・家庭、選択教科の教科を中心に横断的・総合的に学習を進める。
- ・実行委員会中心に脚本、演出、オーディション、計画、反省を生徒主体に進める。
- ・地域の方の教えを受けながら郷土芸能や手話の学習に取り組み日頃の学習環境とは異なる体験を行う。
- ・福祉施設や地域の方を招待し、本校の学習活動を表現する場とする。
- ・これまでの各教科や行事等で取り組んできた学習成果を展示し、紹介する場とする。

文化祭のねらいの冒頭部分でわかるように、宮古西中学校では、歌舞劇を単なる民俗芸能の発表の場ではなく、主体的・創造的な学習の場として位置づけ、独自の表現形態を創り上げている。

歌舞劇の中で舞う牛伏剣舞と牛伏七つ踊りは、忠実に民俗芸能の伝承を追究する伝統継承型の活動である。地域の民俗芸能を学内伝承しながら、その一方でオリジナルの合唱や劇やアンサンブルなどによって独自に構成した歌舞劇の全体構成は、大規模な素材発展型の活動になっているのが極めて独創的といえよう<sup>3)</sup>。

## 2. 歌舞劇の取り組み

宮古西中学校では、毎年、歌舞劇に向けて年度当初の4月に文化祭企画（案）が作成され、6月の体育祭が終了すると全校的に歌舞劇への取り組みが開始される。

教師組織の文化祭企画委員会と生徒組織の文化祭実行委員会が結成されて進行していくが、この二つの組織のメンバーと仕事内容は、以下のとおりである 4)。

---

### <文化祭企画委員会（教師組織）>

①メンバー：教頭、教務主任、指導部長、学年主任、生徒会担当、3学年委員会担当、  
国語科、音楽科、美術科

②役割と分担 \*（ ）内は担当者

- ・文化祭企画委員会の企画、推進、評価（教務、教頭、指導部長、各学年長）
- ・展示に関する企画、推進、評価、体育館（1学年長、管理部長、生徒会、各教科）
- ・歌舞劇に関する企画、推進、評価（3学年長、3学年職員、音楽科、国語科）
- ・会場設営全般の企画、推進、評価（2学年長、2学年職員）

### <文化祭実行委員会（生徒組織）>

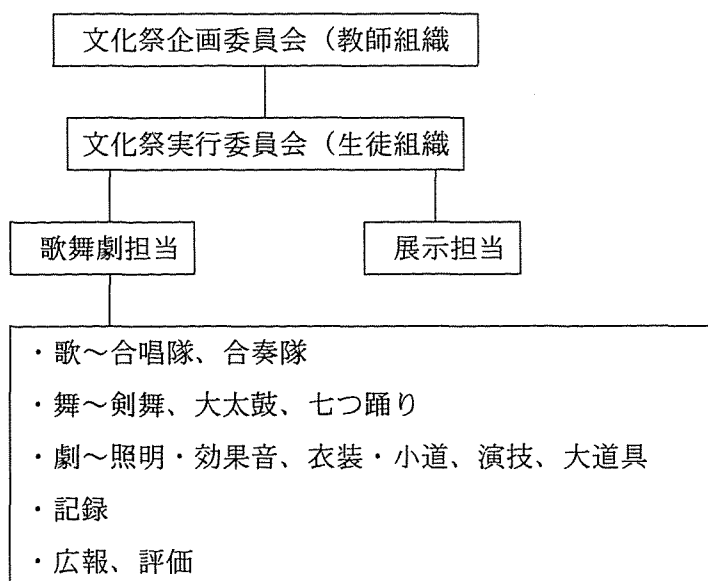
①メンバー：生徒会執行部（9名）、各学年委員会（3名）、決定後監督、助監督、指揮者  
計 22 名

\*このうち歌舞劇担当者は、執行部（3名）、3学年委員会（3名）、監督、助監督、指揮者

②文化祭企画委員会の決定を受けて、文化祭全体の企画、推進、調整、評価にあたる。

③オーディションの企画、配役の決定、通信の発行

### <文化祭の組織図 5)>



上記の組織と仕事内容からわかるように、生徒側の組織である文化祭実行委員会は、基本的には教師側の組織である文化祭企画委員会の方針を受けて、文化祭全体の企画、推進、調整、評価を行う実働部隊である。歌舞劇は、全校生徒を巻き込んだ大がかりな舞台表現であり、文化祭の華でもあることから、文化祭実行委員会による緻密な計画に基づいて 10 月の文化祭に向けた取り組みが行われる。

#### (1) 脚本と役割分担

歌舞劇の脚本は、1990（平成 2）年までは、新しい作品づくりが行われていたが、平成 3 年以降は、それまでに蓄積した財産である 5 本の脚本をベースに、毎年、修正を加えながら実施されてきた。5 本の脚本とは、すなわち「さよの泉」、「梨の花」、「道」、「幼い夏」、「北の大地を」である。平成 17 年度は、NHK の大河ドラマでも行われていた源義経の義経北行伝説にちなんで「北の大地を」を取り上げている。かつては生徒も脚本の修正にかかわっていたようであるが、現在は国語科の教師が手を入れている<sup>5)</sup>。8 月の末から 9 月にかけて昼休みや放課後を活用して、オーディションによって歌舞劇のキャストやスタッフなどが決定される。このオーディションでは主に生徒の役への情熱と責任感の強さに着目して各役割が決定される。

#### (2) 音楽関係

音楽関係では、音楽科を中心にオリジナルな脚本に作曲・編曲が行われる。但し、これらの 5 本の作品のために、既にかつて器楽合唱部が創った作品を尊重して、これに効果音などを工夫して加えて演奏している。生徒による音楽づくりの可能性を追求する立場からは、全ての楽曲でなくとも、毎回、一つは新たな楽曲が誕生するような試みが行われても良さそうであるが、学校という時間的な制約の多い中では生徒に委ねる余裕がなくなっているのであろう。

歌舞劇の劇中歌は基本的に混声四部合唱であり、演技と演技をつなぎ、それぞれの場面や心境を映し出す効果が期待できる重要なものである。この合唱のいくつかの曲には、手話をしながら歌う場面が含まれている。合唱に手話を取り入れる試みは、宮古西中学校で、難聴の生徒のための「きこえの学級」が設置されていた時期があり、その頃からの宮古西中学校の伝統である。

### 3. 牛伏剣舞と牛伏七つ踊り

「1. 歌舞劇の歩みと総合的な学習」で前述したように、そもそも宮古西中学校の歌舞劇は、24 年前に文化祭の取り組みとして取り上げた地元の牛伏剣舞<sup>6)</sup>に合唱や演技を加え、さらに発展させて新しい表現形態を創り出したものであり、その根底には牛伏剣舞への揺るがない誇りと憧憬がある。宮古西中学校の教務主任の坂下正典教諭によると、歌舞劇の中心は牛伏剣舞と七つ踊りであり、歌舞劇はこれらの民俗芸能を伝承するために工夫されたということであった。

地域の民俗芸能の牛伏剣舞と牛伏七つ踊り、およびこれらを舞うために絶対必要なお囃子の指導は、これを中学校に導入した当初から一貫して牛伏剣舞保存会が担っている。

歌舞劇における演技や合唱は見ていて楽しいものだが、伝統の技の味わいをもつ牛伏剣舞や牛伏七つ踊りが演じられる場面では、他の場面以上に観客を引きつける確かなパワーが感じられる。



平成 17 年度の「北の大地を」は、宮古西中学校の学区である千徳地域（台本には泉徳の字が使われている）に残されている「義経北行伝説」をもとにした物語である。第 2 場面につながる夏祭りを表現するものとして、7 人の踊りも太鼓も女子だけで牛伏七つ踊りが演じられている。また義経が命がけて自分のために人質になった村の娘を救いに行く第 7 場面に入るところで牛伏剣舞が 8 人の男子によって舞われる。剣舞のお囃子は男女混合で編成されている。このように剣舞は男子、七つ踊りは女子というように男女で踊りを分担しているのが興味深い。確かに牛伏剣舞は、保存会でも女子は踊らず、男性だけの勇壮な踊りになっている。

歌舞劇の中の牛伏剣舞では、鎧姿に白いハチマキ姿の男子が、高太刀、扇の舞、太刀踊りの 3 演目を舞うが、長刀や扇や太刀といった道具の捌き方が見事である。斬り合う所作の部分も実際に長刀がぶつかり合う音が効果的に響きわたる。太刀踊りは、本来、扇で入場して、太刀にもちかえるのだが、全校生徒が集う体育館で行われるため、本来、牛伏剣舞に見られる入退場の演出はカットされている。牛伏七つ踊りだけではなく、牛伏剣舞の中にも、「七つ物」の「ちらし」のリズムがゆっくりしたテンポで表れるのがわかる。

保存会でも牛伏剣舞とセットにして舞われることが多い牛伏七つ踊りは、本来、高太刀（長刀）、鎌、斧（まさかり）、杵、棒、弓、太刀の 7 つの道具を使って舞うものである。「七つ物」は二人一組で同じ道具をもって舞うことが多いが、牛伏七つ踊りの場合は、特に二人一組で舞うという約束はない。宮古西中学校では、女子七人が一人ずつ高太刀（長刀）、鎌、斧（まさかり）、杵、棒、弓、太刀の 7 つの道具を使って踊る。またコトリは本来も弓と扇を持つものであるが、宮古西中学校のコトリは扇は持たずに弓だけをもって踊る。テンポはゆっくりだが、やはり「七つ物」の「ちらし」のリズムが部分的に見え隠れしていて共通項が認められ、性格は違っても「七つ物」であることに違いない。なお女子だけで踊られる牛伏七つ踊りの衣装は、紺色の袴に烏帽子なしで白いハチマキを頭に巻く。脱垂<sup>8)</sup>にしないで、手には白い手っ甲を付けて舞う。

総合的な学習の時間が創設されてから、日本全国の小・中学校において地元の民俗芸能への取り組みが増加した。しかしながら民俗芸能をオリジナルな形で伝承しながら、全体的には新しい表現構成を生み出している事例は僅少である。宮古西中学校の歌舞劇は、剣舞系の「七つ物」の事例としてだけではなく、学校教育がどのように地域の民俗芸能とかかわっていくとよいのかを考える時、一つの示唆を与えてくれている。宮古西中学校の歌舞劇ほどの大規模な表現形態でなくとも、学校独自の表現形態や取り組みを開発していける可能性を示しているといえよう。

資料として平成 17 年度歌舞劇日程表（資料 1）や台本「北の大地を」の一部（資料 2）を資料として掲げておくことにしよう。

## (資料1) 平成17年度歌舞劇日程表

## 平成17年度歌舞劇日程表(案)

日	曜	行 事	全 体	劇	合 唱	劇 舞	劇舞太鼓	七つ踊り	七つ踊り太鼓	演 奏	大道具	小道具	衣 装	効果音	記 録	図 画	明	その他
29	月	生徒集会	オーディション監督・助監督・指揮者															
30	火																	
31	水		監督・助監督・指揮者決定															
9月1日	木		オーディション主役A															
2	金	地区陸上大会																
3	土																	
4	日																	
5	月	生徒集会																
6	火		主役A決定															
7	水		主役Bオーディション							オーディション								
8	木																	
9	金		主役B決定							決定								
10	土																	
11	日																	
12	月	生徒集会	村人・子供オーディション			オーディション	オーディション											
13	火							オーディション	オーディション		オーディション	オーディション						
14	水	前期期末テスト	村人・子供決定										オーディション	オーディション	オーディション	オーディション		
15	木			オーディション							決定	決定						
16	金					決定	決定	決定	決定				決定	決定	決定	決定		
17	土																	
18	日																	
19	月	敬老の日																
20	火	生徒集会			決定													
21	水																	
22	木																	
23	金	地区新人大会																
24	土	地区新人大会																
25	日	地区新人大会																
26	月	代 休																
27	火	代 休																
28	水																	
29	木		全体顔合わせ	予備日、監督・助監督・指揮者打ち合わせ（顔合わせ準備含む） キャスト・スタッフ顔合わせ・読み合わせ！														

日	曜	行 事	全 体	劇	合 唱	劇 舞	劇舞太鼓	七つ踊り	七つ踊り太鼓	演 奏	大道具	小道具	衣 装	効果音	記 録	図 画	明	その他
30	金		各係会議	紹介準備	係分担・紹介準備	紹介準備	紹介準備	紹介準備	紹介準備	係分担・紹介準備	係分担・紹介準備	係分担・紹介準備	係分担・紹介準備	係分担・紹介準備	係分担・紹介準備	係分担・紹介準備	係分担・紹介準備	
9月1日	土																	
2	日																	
3	月	生徒集会	全校に紹介	読み合わせ2	パート練習(組団)	年休19:00	年休19:00	自己練習	自己練習	ピアノフルート	道具整理(ビナ)	道具整理(ビナ)	衣装の確認	音決め	撮影作業	原案作成		
4	火			台詞練習(場面毎)	パート練習(組団)	年休19:00	年休19:00	自己練習	自己練習	作成作業	かつら合わせ	衣装の確認	音決め	撮影作業	原案作成			
5	水			立ち稽古(場面毎)1	手話練習会リーダー	年休19:00	年休19:00	自己練習	自己練習	必要物作成	キャストA決め	衣装の確認	音決め	撮影作業	原案作成			
6	木			立ち稽古(場面毎)2	パート練習(全体)	年休19:00	年休19:00	自己練習	自己練習	必要物作成	キャストB決め	衣装の確認	音決め	撮影作業	原案作成			
7	金			立ち稽古(場面毎)3	全体練習	年休19:00	年休19:00	自己練習	自己練習	必要物作成	キャストC決め	衣装の確認	音決め	撮影作業	原案作成			
8	土	県中駅伝																
9	日																	
10	月	体育の日																
11	火	生徒集会	手話	ステージ通し練習1	全体・手話練習	自己練習	自己練習	年休19:00	年休19:00	↓	↓	↓	手直し	↓	録り・手話撮影	合わせ練習		
12	水		手話	ステージ通し練習2	全体・手話練習	自己練習	自己練習	年休19:00	年休19:00	↓	↓	↓	完成	↓	手話・音決め	↓		
13	木		隊形移動	ステージ通し練習3	パート・全体・隊形	自己練習	自己練習	年休19:00	年休19:00	曲のチェック	完成	完成	最終チェック	音完成	撮影作業	↓		
14	金	県中新人前期	隊形移動	ステージ通し練習4	パート・全体・隊形	昼・放課後	昼・放課後	昼・放課後	昼・放課後	完成	手直し	手直し	着付け	チェック	↓	↓		
15	土	県中新人前期																
16	日	県中新人前期																
17	月	生徒集会	リハーサル1	ステージ通し練習5	全体・隊形・リハ	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	リハーサル1	
18	火		合唱と劇	ステージ通し練習6	全体・隊形	昼・放課後・全体	昼・放課後・全体	昼・放課後・全体	昼・放課後・全体	全体練習	全体練習	全体練習	着付けの調整	全体練習	個人撮影	全体練習		
19	水		合唱と劇	ステージ通し練習7	全体・隊形	↓	↓	↓	↓	全体練習	全体練習	全体練習	着付け	全体練習	全体練習	全体練習		
20	木		合唱隊に見せる	ステージ通し練習8	全体練習	↓	↓	↓	↓	全体練習	全体練習	全体練習	着付けの調整	全体練習	全体練習	全体練習		
21	金		総合練習	ステージ通し練習9	全体練習	↓	↓	↓	↓	全体練習	全体練習	全体練習	着付け	全体練習	全体練習	全体練習		
22	土		リハーサル2	ステージ通し練習10	全体練習・リハ	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	リハーサル2	
23	日	文化祭当日	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	リハーサル3	
24	月	振替休日																
25	火	振替休日																
26	水	生徒集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	ふり回り集会	
27	木																	
28	金																	
29	土																	
30	日																	
31	月																	

(資料2) 台本「北の大地を」の一部

宮古西中学校歌舞劇『新・北の大地を』台本  
「プロローグ」平泉、高館義経堂

秀衡 「(声だけ) 九郎殿、我ら藤原の一族もはやこれまでよ。もうお守りすることはできぬ。だが、九郎殿、北を目指されよ。海を渡り、北の大陸に新たな國を打ちたてよ。真の北方の雄として……。北へ…北へ向かうのじゃー」

合唱1 「義経の首」

一人も逃がすな 切り捨てよ  
ねらいはひとつ 義経の首  
たとえ血を分けた兄弟でも  
野心のためなら命をねらう  
それが時代の掟なり

「フロア」曲は続いたまま、義経、弁慶フロア中央で奮戦

秦之助、兼昌、下手より駆け寄る

兼昌・秦之助 「義経様ーっ、義経様ーっ…弁慶殿(無事か?)」

弁慶 「兼昌、秦之助、ほかの皆は？」

兼昌 「殆どやられもうした、が、どうもおかしい、どうやら見方内に裏切り者がいるようです。」

弁慶 「何、裏切り者とな？それはまことか。」

義経 「今さらもうよい。弁慶、兼昌、秦之助、今までよく仕えてくれた。だが最早ここまでの。私はあの高館の中に自害致す…」

弁慶 「何を申される、あなたは生き延びるのです。生きて、お館様の夢、北の大地に…」

(矢が飛んでくる音。受けながら、払いながら)

ええい、兼昌、秦之助、其の方らは義経様を北の大地へとお連れしろ！俺はここを時間を稼ぐ。

義経様、必ずや生き延びるのですぞ。俺の死をむだにはなさるな。」

義経 「何を言う、私もここに共に…」

弁慶 「ええい、早う行け」 (3人を突き飛ばす) おおおおおお

(雨のような矢の音の中、薙刀を振り回して大往生)

義経 「二人にひきずられながら後方へ」 弁慶

ねらいはひとつ 義経の首  
たとえ血を分けた兄弟でも  
野心のためなら命をねらう  
それが時代の掟なり

1

平氏を追って 源氏を興す  
やつと見つけたこの土地も

秀衡の命とともに燃え尽き崩れ消し去りし

【第一場面】フロア

ナレーター (三郎・六郎) ステージ上手と下手。  
話していないときに歩み寄りながら。

三郎 「こうして義経は、平泉の高館義経堂で最後を迎えたと言われています。かねてより奥州藤原氏に脅威を感じていた頼朝は、これを口実に、平泉に三代百年の栄華を誇った黄金文化を攻め滅ぼしました。」

六郎 「さらに、残党狩りと称して、実り豊かで金銀もある近隣の村々を傘下に入れていったのです。また、残党狩りの名を借りた略奪も、多く行われたと言います。」

三郎 「ただ、平泉で義経に死が確認された事実が残されておらず、生きて平泉をひそかに抜け出し北を旅した形跡もここに残っています。何を隠そう、この泉徳にも。」

六郎 「ところがこの義経様、平泉での宴の後は気力も失せてまさに生ける屍。数人の家来の力でなんとか追つ手を交わしながらここまでたどり着いたのです。ま、無理もないことですが。」

三郎 「残った家来はこの六郎と私三郎、そして一足先に村に向かった秦之助。」

六郎 「そして、白髪頭のあの兼昌…。」

兼昌、下手より中央に出てくる。間をおいて義経、とぼとぼと。

兼昌 「おおお、三郎、六郎、どこに行ったかと思えばこんなところにおったか。随分探したぞ。」

三郎 「ああこれは兼昌殿、申し訳(づ)らん。」

兼昌 「だれかおるのか、話をしておったようだが？」

三郎・六郎、びっくりして顔を見合す。

六郎 「な、何も話してはいないよ。兼昌殿こそ年を取ってもうろくしちまったのかい？空耳だよ、空耳。」

兼昌 「なんと失敬な、まだもうろくなどしとらんわい。かげではわしをじい、じいと呼んでおるもの(の耳でちゃんと聞いているんだ、耳が遠くなるなど…)」 (ステージ点灯)

三郎 「ああ、じいつ。じやなかった兼昌殿、村、村が見えますが…」

兼昌 「遠くを見て」 ほお、ほほ、泉徳の村じゃ、まっこと義経様、あれは泉徳村でいいいます。」

義経、(前に出て) 感慨深げに見渡し、

義経 「おお、この景色は、平泉高館からの眺めによく似ておる。北上川、金鶏山(きんけいざん)、…」

2

秦之助、下手より小走りで登場。

子供達「おかえりなさい。」

秦之助「おおお、皆変わりはないかい。」

口々に「うん」「秦之助様こそ」「お春ちゃんがねえ」「夏祭りです」「(一気に喋る)

秦之助「あ、すまない、今は時間がないんだ。お静様とお春ちゃんを探しているんだけど、子供、それなら、まもなく、ほら。」

お春と静、上手より歩いて来る。二人、秦之助を見とめて立ち止まる。

春「秦之助さま……」

秦之助「お春ちゃん、……戻った。」

春「(秦之助の目の前までかけより肩を震わす)……うわあーん(振り返るとひどい泣き顔)」

静「秦之助殿、よくぞ(無事で……)平泉陥落の噂で、正直、半ばあきらめておりました。」

秦之助「運がよかつたのでございます。ところでお静様、お力添えをいただきました。」

静「私の、力を？」

秦之助「ええ。兼昌殿がいま大事なお方お連れします。」

春「(しゃくり上げながら)おじいさま、お戻りなの？」

秦之助「うん、(静に向き直り)その方にぜひ会っていただきたいのです。」

静「……(何か察した様子で)分かりました。すぐに参りましょう。さ、(二人をいざなうように)。」

秦之助「事情は道々お話します。村長様もそろそろ着くはずですよ。いそぎましょう。」

二人、足早に下手へ去る。

トモ「お春ちゃんったら子供よねえ、……私だったら(声色を変えて)秦之助様、生キテ帰ッテ来テクダサッテワタシ嬉シイワア。」

アキ「(トモの声色に応じて男の声を真似)

「ソオカ、ソレホドワタシマッテイテクレタノカ。」

二人の世界に…… 子供たち静かにだんだん近づく

トモ「ソレハモウ、ズーッとズーッと、オマチシイマシタワアン。」

アキ「オオ、オハル」

トモ「秦之助サマア。」

子供たち、二人を囲んで驚かすように

秀衡公の音がするようじや。秀衡様は申された、九郎殿、北を目指されよ、海を渡り北の大陸に新たな國を打ち立てよ、真の北方の雄として……」

三郎「ここまで来たとなれば海から船も出せましょうぞ。」

義経「うむ。兼昌殿、あの村がそなたと秦之助の生國とは聞き申したが、どなたがこの辺りを治めておられるか？」

兼昌「ハ、代々(領主と呼ばれる)熊谷様が、この藤原の世まで村を治めてまいりました。古く安倍の一族の流れ汲、みますゆえ、藤原氏とはそもそも同胞(はらから)、それゆえ平泉との親交もあったのでございます。奥徳村は安倍の隠れ里、飢饉のたびに平泉のお館様はわざわざ種籾を送ってくださってな。そのような関係から私や秦之助は平泉でお務めをいただいたのでございます。」

六郎「うーむ、そのようなつながりがあるのであれば、我々にも手を貸してくれるのではござりませぬか。」

兼昌「そうだとありがたいのですが、ひと足速く向かった秦之助が様子を見て、(領主様の動向も次期にわかるでしょう。さあ、この峠を降りるとまもなくです。急ぎましょう。」

義経「うむ。(歩きかけて立ち止まる)……おや、……太鼓の音が聞こえる。」

兼昌「……これは……七つ踊りじゃ。もうすぐ夏祭りじゃからのう……」

「七つ踊り」フロア

「第二場面」ステージ(田んぼ、あるいは畑の農道が通じる小さな空き地のような場所)

トモ、アキ、子供達、七つ踊りをじっと見入っている(ストップモーショ)。

一斉に動き出す。

子供達(全員で)「おーっ」「(口々に)格好いいね」「秦殿だね」

トモ「いよいよ夏祭りね」「(口々に)夏祭り?」「夏祭りー」

合唱2「夏祭り」

隣の村で夏祭り みんなで遊びにきたいな

風鈴 水飴 金魚すくい きれいな浴衣に帯締めて

向かいのあの子と行きたいな

お宮の石段ひとつずつ 数えてのぼる星の夜

大きな鳥居くぐり抜け 願いを込めて鈴鳴らす

今日は楽しい夏祭り 今日は楽しい夏祭り

秦之助(声だけ)「おーい。」

子供達「……あれ?秦之助様かなあ……」「まさか。でも……」「秦之助様……?」

子供達「秦之助様だ。」「秦之助様。」

【注および参考文献】

- 1) 2006 年の岩手県の音楽コンクールについての記録は、次に示すホームページに掲載されている。  
<http://www.net-search.co.jp/gasyou/renmei/re-7.html>
- 2) 宮古西中学校における歌舞劇の取り組みについては、同校の教務主任、坂下正典教諭に多くの情報を提供していただいた。
- 3) 素材発展型の活動については、8 の「創造的な学習への活用～素材発展型の学びの追究」を参照されたい。
- 4) これらの組織等については、2005 年 4 月 28 日の「文化祭企画（案）」のプリント中に示されている。宮古西中学校では、10 月の文化祭に向けて、毎年、年度当初に計画をスタートさせているのである。
- 5) 宮古西中学校の文化祭の組織図は、坂下正典教諭から入手した資料のプリントをわかりやくくまとめたものである。
- 6) 五つの演目が固定するまでは、教師だけではなく生徒も台本づくりや音楽づくりに参加していた時期があった。しかし膨大な時間がかかることや優れた作品が財産として蓄積されたことから、現在では、生徒が台本や音楽づくりからかかわる必要がなくなったようである。
- 7) 牛伏剣舞については、前項を参照されたい。
- 8) 脱垂は着物の肩を脱いで垂らす着方である。神楽系の「七つ物」では長襦袢を脱垂する。

## 11. 学校教育と民俗芸能 ～研究を振り返って～

### 1. 本研究の成果

フィールドワークを含む今回の研究では、「七つ物」に焦点を当てながら10項目にわたって今回の研究内容を報告した。各項目から得られた研究成果をここで振り返ってみたい。

#### (1) 民俗芸能における「七つ物」の位置づけ

民俗芸能の用語についての検討と民俗芸能に関するいくつかの分類法から、「七つ物」の位置づけを検討した。「七つ物」自体が岩手県の県北および沿岸地方だけにある珍しい芸能であり、そのほとんどが神楽をその源流とする神楽系の「七つ物」である。しかし僅少ではあるが剣舞系の「七つ物」も存在していることがわかった。神楽や剣舞の中に位置づいている「七つ物」もあるが、神楽系および剣舞系の「七つ物」のいずれにしても、七頭舞、七ツ舞、七つ踊りなどの名称で洗練された舞として独自の芸能を確立している。したがってこの種の「七つ物」を風流に位置づけた。なお神楽系の「七つ物」および剣舞系の「七つ物」という呼称は、便宜上、筆者が独自に用いている用語である。

#### (2) 岩手県の学校教育における民俗芸能の実施状況と「七つ物」を伝承している学校

毎年、岩手県教育委員会が小・中学校を対象に全県レベルで実施している地域の伝統芸能と伝統工芸に関する2005年度の調査結果から、民俗芸能を7種に区分した市町村別の民俗芸能の資料を作成した。これによると民俗芸能の伝承活動では、小・中学校共に神楽を伝承している学校が一番多い。「七つ物」の項目がないため、これを神楽に位置づけている学校も多い。数量的には見えてこない「七つ物」の実態については、学校で伝承している伝統芸能に関する教育委員会の記述式調査の結果から小・中学校の実態把握に努めた。

#### (3) 黒森神楽と「七つ物」

沿岸地域の「七つ物」と関係が深いのが黒森神楽である。現在では岩手県の沿岸地域にのみ残っている廻り神楽の伝統をもつ黒森神楽について、「七つ物」関連の事項を中心に、その由来や種類等について調べた。神楽の巡行中、神楽宿に入る時に舞うシットギ獅子の中には「七つ物」が含まれており、これを基に中野七頭舞を初めとする神楽系の「七つ物」が誕生したといわれている。さらに1998年に文化庁の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定された鵜鳥神楽と黒森神楽の記録撮影の中で、50年以上もの歳月を経て復活された黒森神楽の御堂入りは、シットギ獅子や田代七ツ踊の原型になったものである。剣舞系の「七つ物」の所作にも類似するところがあることから、黒森神楽は神楽系および剣舞系の両者の「七つ物」の主な源泉であるという独自の見解をもつことができた。

#### (4) 小本小学校の努力と四つの七つ物

岩手県下閉伊郡岩泉町立小本小学校で伝承している中野七頭舞・中島七ツ舞・中里七ツ舞の三

つの「七つ物」に大牛内分校の大牛内七ツ舞を加えた四つの七頭舞・七ツ舞について、フィールドワークによってそれぞれの舞の由来や実態把握に努めた。また小本小学校教諭へのアンケート調査や中野・中里・中島の3地域の子どもたちへのインタビューを実施することができた。これによると小本小学校の子どもたちは、それぞれ自分の地域の七頭舞・七ツ舞に対する強い憧憬と誇りをもちながらも他地域の舞に対しても共感していることがわかった。一方、学校という制約の多い組織の中で、公平に三つの七頭舞・七ツ舞を伝承している小本小学校の教員集団の絶え間ない陰の努力が推察された。小本小学校の長年の地道な取り組みは、上学年が下学年に中野七頭舞を指導して伝えるという学内伝承が確立している成功例の一つである。中里七ツ舞や中島七ツ舞についても、人数が少ないだけに中野七頭舞よりも一層、切実な思いを抱きながら上学年が下学年に伝えている。小本小学校では複数の「七つ物」の伝承に関わるという難しさを抱えながらも、お互いの踊りに刺激を受けて切磋琢磨するという望ましい伝承スタイルが確立している。

#### (5) 中野七頭舞とその広がり

中野七頭舞の由来や復活、小本小学校へ中野七頭舞の導入や小本小学校における七頭舞発表会の歴史、中野七頭舞の道具や役割など中野七頭舞そのものについて研究すると共に、中野七頭舞の全国的な広がりの中から、地元の小本中学校と東京の国立音楽大学という学校への広がりには焦点化して、その実態を把握することができた。本研究に着手した時点では、神楽系の「七つ物」の代表格である中野七頭舞に焦点を当てた研究を行う予定であった。しかしながら研究の進捗に伴って、過去に民俗芸能学会や日本民俗音楽学会でも研究対象に取り上げ、既に全国的に有名で研究的な蓄積もみられる中野七頭舞から、全国レベルではほとんど知られていない中里七ツ舞の研究に焦点化するという方向転換を行った。しかし中野七頭舞は、稽古用のビデオや小本地区で毎年夏に行われる夏期講習会の人気からわかるように、確かに全国的に普及するに足るだけの優れた教育プログラムをもつ魅力ある民俗芸能である。

#### (6) 中里七ツ舞に関する基礎的な研究

平成 15 年に小本小学校にフィールドワークに出かけた時に初めて出会って以来、魅了されたのが中里七ツ舞である。小本小学校で伝承している複数の「七つ物」の中で、筆者が最も凜とした強いエネルギーを感じた七ツ舞であり、本研究では結果的に中里七ツ舞に焦点を当てることになった。これまで研究対象に取り上げられたことのない中里七ツ舞に関する文献資料等は全くなかった。しかしその由来と伝承などについては、主に保存会の武田会長から情報を得ることができた。この中里七ツ舞の音楽研究では、太鼓のリズム構成の把握と口唱歌づくりが最も重要であった。中断した時期があったため、現在、中里七ツ舞には太鼓のリズムの口唱歌は消滅している。そこで筆者はリズム譜を完成させた後で、武田会長の意見を取り入れながら新たに中里七ツ舞の口唱歌を創り上げた。この口唱歌および太鼓譜の作成は本研究の大きな成果の一つであった。

#### (7) 中里七ツ舞の岩手大学への継承

これまで学校教育における民俗芸能の学びの方法には、伝統継承型と素材発展型の二つのタイプがあると主張してきた。本研究では中里七ツ舞による両者の学びの実践的研究を行った。前者の学びとして岩手大学における中里七ツ舞の継承に取り組んだが、本研究報告の中心的な研究と

なった。体験重視の第1次伝統継承型実践を通じて、短期間の体験でも民俗芸能への関心を喚起できることがわかった。また第2次伝統継承型実践では、岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」によって中里七ツ舞の継承に成功した。岩手大学で中里七ツ舞を継承できたのは、筆者の実践的研究の方向と武田会長の中里七ツ舞を伝えたいという意志とが一致して実現した最も重要な研究成果である。2005年の夏の合宿では、中里地区の人々と「ばっけ」の学生たちとの交流会が行われ、今後も交流を続けながら「ばっけ」の中里七ツ舞は、より洗練されていくものと思われる。

#### (8) 創造的な音楽学習への活用～素材発展型の学びの追究～

小・中学校での民俗芸能の学びでは、一般的に地域の保存会などの協力を得て伝統継承型の学びが行われている。小本小学校のように学内伝承を行っている場合もあるが、総合的な学習の時間に特定の学年で一時的に体験させるだけというケースも少なくない。一時的な体験でも学習の効果は得られるが、時間的制約が多い学校の中で地域の民俗芸能に関心をもたせたい時、また子どもの創造性を高めるという教育的・音楽的なねらいの達成をめざす時に、対象芸能の音楽的要素を発展させて音楽づくりを行う素材発展型の学びが効果的であると主張したい。本研究では、岩手大学と宮城教育大学（音楽科教育法の集中講義）において実践した太鼓音楽づくりの事例を挙げた。本物の伝統芸能の継承活動ではないが、中里七ツ舞の二つの主なりズム型を挿入した創作活動は、地域の民俗芸能への関心を高める上で効果的であった。この素材発展型の学びは、筆者の研究対象である創造的な音楽学習に新たな可能性を拓くものであった。

#### (9) 剣舞系の「七つ物」

本研究の当初の関心事の一つが、黒森神楽を源流にしている神楽系の「七つ物」の以外に、剣舞系の「七つ物」が在るのか否かを確かめることであった。これまで剣舞系の「七つ物」についてはほとんど言及されることがなく、「七つ物」とは別物と考えられてきた。もちろん神楽系の「七つ物」とは違って、一連の剣舞の演目の中に「七つ物」が入っていたり、剣舞とセットで「七つ物」（七つ踊り）が舞われたり、その有り様は一様ではない。しかし本研究によって、剣舞系の「七つ物」の存在が把握できると共に、神楽系の「七つ物」と比較して、剣舞系の「七つ物」の特徴を明確にすることができた。

#### (10) 宮古西中学校の牛伏七つ踊り

剣舞系の「七つ物」を伝承している学校として、宮古西中学校の歌舞劇を取り上げた。既に20年を越える学校の伝統行事である宮古西中学校の歌舞劇は、牛伏七つ踊りと牛伏剣舞という地域の民俗芸能を伝統継承型で学内伝承しながら、全体構成については大合唱を中心とした大規模なオリジナル作品という素材発展型の独創的な表現形態になっている。現在は台本も音楽も以前に創り上げたものを手直ししながら活用しているが、毎年、ローテーションさせながら取り上げている五つの作品は、かつて生徒たちの創意工夫によって誕生したオリジナル作品である。つまり創造的な全体構成の中に伝統が生きる独自の歌舞劇は、学校教育における民俗芸能の取り上げ方に対する一つの示唆を与えてくれるものであり、研究対象としてさらに追究すべき価値と魅力がある活動といえよう。

以上のように、10項目にまとめた研究内容から得られた成果は少なくない。



## 2. 岩手県の民俗芸能と学校教育について

質的にも量的にも豊かな民俗芸能を有する岩手県では、他の地域に比較して市町村単位の民俗芸能祭が多く実施されており、また学校教育にも民俗芸能が積極的に導入されている。しかし芸能県であるがゆえに見え隠れする問題もある。

### (1) 学校の教育活動と地域との連携

岩手県は、学校教育に総合的な学習の時間が導入される以前から、地域や学校でそれぞれの地域で民俗芸能を取り上げていた。学校が地域の民俗芸能を取り上げることは、伝承者の育成につながるため、保存会のメンバーは期待をもって全面的に学校に協力する様子が伺える。

小本小学校では、毎年、地域の人々を招いて行う七頭舞発表会を目標にして子どもたちは自分の踊りを磨く。そしてそれがまた地域と学校の強い絆にもなっている。地域における文化的な教育の一環として民俗芸能のもつ力は大きく、教育人類学の中心概念である文化化（enculturation 個人が自分の生まれた社会の文化を習得する過程を意味する概念）に民俗芸能はきわめて効果的に機能し、貢献できるものと考えられる。しかしその一方で、学校には年間単位で必ずこなさなければならない教育活動がある。場合によっては民俗芸能の継続的な伝承が負担になったとしても、一度導入したならば地域との関係もあり、地域の期待を裏切って簡単に止めることはできない。また地域の伝承システムに学校が介在することで、地域だけで行っていた伝承システムに影響を与えることになる。日本中のどの地域においても、安易な気持ちで民俗芸能を導入することも、それを止めることも避けなければならない。また芸能を心から愛し育んできた保存会などの人々が、喜びと奉仕の気持ちから熱心に時間と労力を学校に提供してくれるからといって、謝金も払わずに甘えるだけで良いのかという現実的な問題も気になるところである。

### (2) 学校の統廃合と伝承者

現代社会においては、どこの地域でも深刻なのが伝承者の問題である。学校が地域と連携して民俗芸能に取り組んでも、少子化や過疎化の中で子供が減少して学校の統廃合が行われ、伝承者を失った民俗芸能は中断や消滅を余儀なくされるケースが少なくない。

岩手県においては、平成7年から平成16年までの10年間に、小学校だけでも83校が36校に統合され、分校も含めると47校が廃校になっている。このような状況において、廃校になった学校が伝承していた民俗芸能もまた伝承者を失い中断・消滅してしまう。

例えば、平成8年に岩泉小学校に統合された岩泉月出分校は月出七ツ舞を伝承していたが、統合と共に伝承していた月出七ツ舞は途絶えてしまった。子どもたちが運動会で美しい月出七ツ舞を見事に舞う映像を見ながら非常に残念に思われた。また本研究の項目2（岩手県の学校教育に於ける民俗芸能と「七つ物」）でも紹介したとおり、第一中学校に統合された亀岳中学校の田代神楽（七つ物）も伝承者不足は深刻であり、今後の状況は決して楽観できない。小本小学校のように統合後も各地域の七ツ舞を尊重して、一校で複数の同種芸能を伝承するケースは珍しい。芸能県の岩手県は芸能が豊富であるが故に、子どもの減少や過疎化が今後にもたらす地域の民族芸能への深刻な影響は計り知れないものがある。

### 3. これからの民俗芸能の学びに向けて

学校で民俗芸能を取り上げることは、同時にそれに付随する諸問題を抱えることになる。しかしそれでもなお教科や総合的な時間などで民俗芸能を取り込む意味があるという認識は、今や共通のものになりつつある。本研究を振り返りながら、最後に学校の教育活動に民俗芸能を位置づける上で大切と思われるいくつかの視点を挙げておきたい。

#### (1) 民俗芸能の総合的な性格と文化としての民俗芸能の導入

それぞれの地域の民俗芸能は、自然・風土・歴史・宗教・交通・産業などさまざまな社会的・文化的なかかわりの中ではなくまれ大切に伝承されてきたものである。時間的な事情などで音楽や踊りのみを切り取って学ぶ場合であっても、文化の文脈でその芸能の全体像を捉えながら可能な限り個々の芸能がもつ本質を見失わないように扱いたいものである。

#### (2) 地域の民俗芸能から視野を広げる学び

地域の民俗芸能から出発して、他地域の芸能、および他の国の踊りや音楽に広げることは、身近な文化の学びから次第に学びの範囲を広げることでもある。それはまた世界のどんな地域からの音楽文化でも受容できるような柔軟な感性を磨き育てることにもつながる。自分が暮らす地域の先にとてつもなく多様で広い文化の世界があることを認識しながら、地域の共同体と民俗芸能の関わりについても教師自らが学ぶ姿勢が必要と思われる。

#### (3) 学校教育における民俗芸能の学び方

本研究で触れたように民俗芸能の学びには伝統継承型と素材発展型がある。総合的な学習の時間の創設以来、地域の保存会などに依頼して行う本物志向の伝統継承型の学びの実践例はかなり増えてきている。伝統継承型に取り組む場合は、長期的な展望をもって学内伝承をめざす意気込みが必要と思われる。しかし学校における取り組みの期間や活動のねらいなどとの関係で、民俗芸能の音楽的な要素を発展させる素材発展型の実践が有効な場合もある。様々な条件を勘案して、学校の実態に適した無理のない民俗芸能の学びを追究するべきであろう。

#### (4) 民俗芸能に取り組む意味と教師の役割

総合的な学習の時間が創設されて以来、地域の民俗芸能への関心が高まったことは喜ばしいことである。しかしながら十分な検討もせず、単純に民俗芸能は良いものだとして学校教育に拙速に地域の民俗芸能を取り上げるのは危険である。まずは地域の民俗芸能に取り組む意味や価値を学び手と共に考え、取り組む意欲を引き出すことが最初に必要なことである。学び手が主体的になればなるほど学びの質が高まるものである。そのための支援こそが教師の役割といえよう。保存会に丸投げの安易な取り組みでは、学び手にその芸能の良さを伝えることは難しい。

#### (5) 民俗芸能への憧憬とそれを伝承する誇り

純粋に踊りが好きな保存会の人々から指導を受けることは、民俗芸能に対する学び手の興味関心を喚起する。生の芸能の素晴らしさがストレートに伝わることで、子どもや若者にその芸能への憧れとそれを受け継ぐことができるという誇りを抱かせることができる。対象芸能への憧れこそが、その芸能を継承するための強い原動力になるからである。

### Ⅲ． 発表論文等（再録）

#### 1． 中里七ツ舞に魅せられて＜研究ノート＞

『日本民俗音楽学会会報』 第 23 号 2005 年 6 月 30 日発行 pp.5-7.

#### 2． 大学における民俗芸能の継承と発展

—— 岩手県岩泉町の中里七ツ舞に関する教育実践 ——

The Passing Down and Development of Folkloric Performing Arts in University

～ Practical Education about *Nakasatonanatsumai* in Iwaizumi Village, Iwate Prefecture ～

『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』 pp.39-51.

第 5 号 2006 年 3 月

p143-144に掲載されておりました以下の論文は、著作権法上、本文掲載を見合わせております。

中里七ツ舞に魅せられて<研究ノート>

『日本民俗音楽学会会報』第23号2005年6月30日発行pp.5-7.

## 大学における民俗芸能の継承と発展 ー岩手県岩泉町の中里七ツ舞に関する教育実践ー

島崎篤子\*

(2006年2月6日受理)

Atsuko SHIMAZAKI

The Passing Down and Development of Folkloric Performing Arts in University  
～Practical Education about *Nakasatonanatsumai* in Iwaizumi Village, Iwate Prefecture～

### はじめに

岩手県の北沿岸地域や県北地域で伝承している民俗芸能「七つ物」は、五穀豊穡を祈って七つの踊りを舞う芸能である。その多くが廻り神楽の黒森神楽を源流としており、神楽宿への舞い込む時の演目「シットギジシ」を基に創作されたといわれている<sup>1)</sup>。研究対象の中里七ツ舞は、岩泉町に伝わるこの「七つ物」の一種である。岩泉町では、昭和50年代より「七ツ舞」の名称を使うようになったという<sup>2)</sup>、この地区には有名な中野七頭舞があり、呼称は一樣ではない。

近年、地域の教育力の低下や総合的な学習の導入によって、学校が地域の民俗芸能の伝承に関与するケースが増えている。しかし少子化による統合や廃校によって、学校で伝承していた芸能が中断したり、一つの学校で複数の地区の芸能を伝承せざるを得ない現実も見られる。

海の幸に恵まれた陸中海岸国立公園に面した小本地区にある小本小学校では、昭和54年2月の第1回七頭舞発表会で中野七頭舞が発表されて以来、本年度で28回目を迎える。この間、1996年には中島分校、2003年には中里分校が統合されたため、毎年2月に行われる七頭舞発表会では、中野七頭

舞の他に、中島七ツ舞、中里七ツ舞そして大牛内分校の大牛内七ツ舞も加わって4種の舞が披露される。現在、中里七ツ舞は、中里地区の保存会と小本小学校で伝承されているのである。

本研究は、中里七ツ舞に関する基礎的な研究および大学で取り組んだ二つのタイプの学びに関する実践的研究である。第一に中里七ツ舞について述べ、第二に伝統継承型と素材発展型の学びに関する実践的研究について述べる。そして最後に、本実践を振り返ることにより、視点を広げて学校教育における民俗芸能の取り上げ方についても触れることにしたい。

### 1. 中里七ツ舞の由来と伝承

中里地区は小本川の下流の平坦地に古くから開けた集落の一つで、のどかな田園風景が広がる46戸の集落である。主な産業には農業の他に林業や酪農がある。農業では、稲作中心にダイコンやニンジンなどの野菜や椎茸栽培なども行っている。近年、若者が外に出て行くようになったため、地域住民の高齢化が進み、子どもも減少している。このため中里小学校は小本小学校に統合されたが、前述したように、中里七ツ舞は、現在、小本小学

\* 岩手大学教育学部

校に通う中里地区の子供によって伝承されている。

#### (1) 中里七ツ舞の由来と変遷

中里七ツ舞は、岩泉町で既に全国的に知られている中野七頭舞と同様、天保年間（1830～1843）から岩泉町中里地区に伝わる七ツ舞である。中里神楽の継承者で神楽太夫と呼ばれた踊り上手な武田新九郎が中里地区で創始した踊りである。新九郎はまた、大牛内地区に入植してから大牛内七ツ舞も創始している。したがって中里七ツ舞と大牛内七ツ舞は、振りは違うが、創始者が同じ兄弟舞である。中里地区では、この中里七ツ舞が誕生した頃、飢饉のために村人は困窮していた。しかし中里七ツ舞を踊り始めてから5年間豊作が続き、村人はこれを中里七ツ舞の御利益と考えて100年以上踊り続けたといわれている。

その後の変遷は定かではないが、30年位前には、まだ中里青年会でこの舞いを踊っていた。この頃25歳だった現保存会会長の武田由起子は、お祭りのアトラクションで中里七ツ舞を初めて見て、涙が出るほどの感動を覚えたという。青年会による七ツ舞が途絶えた後、しばらくして中里小学校の千田次郎校長の熱意で中里小学校で中里七ツ舞が復活した。この時、太鼓は竹花実（猿沢地区）と武田久志の二人が中心に指導し、踊りは加藤格造が指導した。父親が中里七ツ舞の指導者だった格造は、若い頃、中里七ツ舞の踊り上手が舞う先打ちを踊っていた。しかし中里小学校での復活は千田校長在任期間の3年間のみで、その後、少なくとも十数年のブランクが続いたが、1988年に武田由起子の手によって再復活された。

武田が再復活に取り組み始めた頃、中野七頭舞の元保存会会長の山本恒喜と竹花実に学んだ当時小学生だった工藤雄宇（現在27歳）が中里七ツ舞の太鼓をたたいていた。もともと中野七頭舞の太鼓打ちだった工藤の太鼓は竹花実とは違ってテンポが早く、この影響を受けた中里七ツ舞は、現在のような早いテンポの舞に様変わりした。

武田は、すり切れるほどビデオを見て踊りの振りを起こし、ほぼ形が整ってから、青年会で踊り

を教えていた加藤格造と太鼓奏者の竹花実に振りの確認をしてもらい、中里七ツ舞の伝承者としての許可を得ることが出来た。これによって中里七ツ舞は再復活を果たし、今年で17年目を迎えているのである<sup>3)</sup>。

#### (2) 中里七ツ舞の保存会と小本小学校での練習

中里七ツ舞の保存会は、会長の武田由起子（現在51歳）を中心に、名簿には小・中・高等学校の生徒とその保護者で総勢62人位の名前が記されている<sup>4)</sup>。名簿によると大きな組織のようだが、現在、中里地区から離れている者や名前だけの協力者会員も含まれており、実際に積極的に踊っているのは小学生である。しかしこの実働部隊の小学生は、年々減少している。既に中里地区だけでは人数不足になっており、保存会には近隣の宮本地区と日向地区の子どもが加わり、何とか中里七ツ舞に必要な人数を確保している。現在、青年部は存在していないため、民俗芸能祭などの公演依頼がある時には、中学生以上の都合のつく若者たちが小学生と一緒に参加している。

保存会の練習は、通常、夜の7時から8時、または7時半から8時半の約1時間を週複数回行っているが、公演のある時には、每晚、集中練習を行っている。夏休みには、週6日間練習日を設定しており、プールの帰りに子どもたちは自由練習に参加している。中里七ツ舞保存会の子どもたちは、岩泉の芸能祭（8月）、氏神の八幡様の祭り（9月）、小本小学校の運動会（5月）や七頭舞発表会（2月）で踊るのを楽しみにしている。

中里地区の子供たちが通う小本小学校では、11月から2月の「七頭舞発表会」に向けて、分校で練習している大牛内七ツ舞以外の3地域3種類の舞が、次の時間枠で練習されている<sup>5)</sup>。

○月・水・金の昼休み 13:00～13:25

○各学年の「浜っ子タイム」（総合的な学習の時間）

○クラブ（水）15:00～15:50

練習計画は、学校側が行事等を勘案して各舞の練習枠を設定し、これを各地域の保存会に連絡し、

保存会の会長やメンバーは都合がつく時に学校での指導を引き受けている。

### (3) 中里七ツ舞の構成と道具

中里七ツ舞には、その名前の通り7種類の踊りがある。「道具取り舞」「横ばね」「組ちらし」「ちらし」「鳥居がかり」「五方の矢」「道具納め」の7つである。しかし現在は、「五方の矢」は途絶えてしまい、6つの舞のみを伝承している。6つの舞は、踊りと踊りの間を「ちらし」で舞いつな

ぐため、全体的に一連のつながりをなし、ほとんど止まることなく流麗に舞われる。舞い始めたら最後まで舞い続けるという体力的に消耗する舞のため、子どもか若者でない限り踊り切るのは難しい。

中里七ツ舞は天照皇大御神が天から降りてくる際の道案内や行路障害をかたどったものと伝えられており<sup>6)</sup>、それぞれ6つの踊りには、次に示すような特徴がある。舞い手はこれを理解して自分の振りに反映させながら舞うことになる。

〈中里七ツ舞の構成〉 \*入場、退場、各舞の間に「ちらし」が舞われる。

道具取り舞	最初に神社に奉納されている7つの道具をいただき、境内で踊る舞である。1回目は道具を持たずに踊り、2回目はそれぞれの道具を持って踊る。
ちらし	舞台に出る時や舞と舞の間に入れるもので、疲労回復や呼吸調整のための動作。実際には楽な動きではなく、次の踊りのための心の準備のためと考えられる。ちらし舞では7種の道具の特徴的な道具さばきが際立って見られる。
横跳ね	全ての始まりと開拓のための人材を揃える意味をもっている。このため先打ちを先頭に仲間が揃ってから舞い始める。3回繰り返し、「ちらし」を挟んでまた3回繰り返す。
組ちらし	他の七ツ舞では「戦い」となっている場合もある。田畑を開拓する際に妨げになる物や獣などとの戦いを意味する。この他、戦いの舞の中には、チームを乱すものや自分自身の怠け心に対する戦いも意味しているといわれている。
鳥居がかり &全体三足	他の七ツ舞では「三足（みあし）」ともいう。神様に豊作の感謝を表すために神社の鳥居の前で踊る。ほぼ「道具取り舞」と同じだが、見ている者は、より派手な動きに魅せられる。先打ちがソロで踊った後、2人ずつ向かい合ってリズムカルに踊る。2人ずつの踊りに続けて全員同じ振りで舞う。これを「全体三足」と言っている。
道具納め舞	「道具取り舞」と同じ踊りである。七ツ舞を踊り終えてから、再び神社に道具を納める時に踊る。通常の公演では省略されることが多い。省略する場合、「全体三足」の後、「ちらし」でステージを去り、消える前に各人が丁寧にお辞儀をする。このお辞儀が非常に美しく、中里七ツ舞の神聖なイメージを高めている。

中里七ツ舞には7つの役割があり、本来は先打ちが一人、その他は二人組の総勢13名で舞う。

〈中里七ツ舞の道具と役割〉

先打ち	神に捧げる御幣束のようなものを棒の先端につけた道具。先頭に立って、進む方向を決断し、行く方向を指し示しながら前に進む。
谷地払い	先打ちよりも長い棒で両端に飾りが付いた道具。先打ちの指示に続いて、獣や悪霊などを払いのけ、みんなが歩きやすくする。
薙刀	柄の両端に飾りが付いた薙刀。藪を切り、獣を倒しながら力強く動く。
太刀	文字通り刀で、柄のところに飾りを付けたもの。みんなの田畑が荒らされないように太刀をもって見張りをする。
杵	餅つきの杵を踊り用に洗練した道具。餅をついて行路の無事をお祝いする。

扇 子 <sup>7)</sup>	他の七ツ舞では「小鳥」ともいう。右手に弓、左手に紫の扇をもつ。この扇の色は各七ツ舞で違う。鳥を弓で射り、ご馳走をつくって豊作の喜びを祝う。
おかめ & ひょとこ	おかめは、右手に扇、左手にへら（篋）をもって舞う。頭の左側におかめの面をつける。しっかりとひょとこをリードする妻の役目。ひょとこは、右手に扇、左手に稲をもって舞う。頭の左側にひょとこの面をつける。みんなに笑いを振りまきながら慰め、心が一つになるように面白おかしく踊る。

#### (4) 中里七ツ舞のお囃子と舞

中里七ツ舞のお囃子は、何と言っても太鼓が中心であり、太鼓だけで踊ることができる。

鉦は太鼓と同じリズムを担当している。通常、踊りの振りとメロディーが密接な関係をもっているケースが多いが、中里七ツ舞の笛は飾りの意味しかもっていない。中里地区では、これまで笛奏者が育たず、公演のたびに黒森神楽保存会に依頼して即興演奏を担当してもらっている。通常の練習が太鼓だけで行われるため、舞い手は公演の時に初めて鳴り響く笛の即興演奏に惑わされずに、太鼓に全神経を集中して、ひたすら太鼓のリズムと合図を聴き取って舞うことになる。

このように太鼓が要の中里七ツ舞では、太鼓奏者は、常に踊りの様子を見ながら、踊り手の準備ができるまで「ちらし」のリズムを打ち続け、当意即妙に次の踊りに移行する。リーダー的な存在の先打ちが重要視されるのは、こうした一種の即興性を秘めた一連の舞の中で、太鼓のリズムの変化を確実に聴き取りながら先頭で踊り抜いていく強靱な精神力が必要とされるからである。

## 2. 岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」による中里七ツ舞の伝統継承

便宜上、筆者は、学校教育における民俗芸能の二つの学び方に伝統継承型および素材発展型と命名した。これを指導する側から言い換えると、二つの指導方法ともいえる。

伝統継承型は、保存会やその芸能の担い手や関係者の協力を得て、伝承されている芸能をできるだけ忠実に継承しようとするものである。通常、学校教育で地域の民俗芸能を取り上げる際には、

この伝統継承型で取り組むことが多い。限られた教育課程の中では、単なる体験学習程度で終わらざるを得ない場合が少なくないが、それでもある程度の教育的効果は得られる。しかし諸事情が許すならば学校内における伝承の可能性を追求することが取り上げた民俗芸能の将来にとっても望ましいに違いない。

筆者は岩手大学における中里七ツ舞に関する伝統継承型の教育実践として、体験重視の第1次実践と本格的な継承を目指した第2次実践を試みた。

#### (1) 中里七ツ舞の体験を重視した第1次伝統継承型実践

伝統継承型の最初の実践は、2004年12月から1月にかけての3回、武田会長に直接指導を依頼し、「保育内容（音楽）」の授業の履修者を対象に実施したものである。履修学生は音楽科の3名以外は全て教育学部の他科の学生であり、これに農・工・人文社会・教育の全4学部が活動する岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」のメンバー数名が有志として参加した。

武田は、見た目に派手な「横跳ね」よりも、習得するのは大変であるが、中里七ツ舞で最も大切にしている精神性の高い「道具取り舞」の指導を希望した。この「保育内容（音楽）」の授業における第1次伝統継承型実践は、科目の性格上、完璧に踊れることよりも本物の民俗芸能体験を重視すること、今回の体験を通して自分の地域の民俗芸能に対する関心を広げること、初めて触れる民俗芸能の学習体験によって幼児が初めての体験する時の気持ちを理解すること、などをねらいとしたものである。

第一次伝統継承型実践は、中里七ツ舞の由来と



特徴および実物による中里七ツ舞の道具の説明、道具を持たない「道具取り舞」の練習で全3回が終了した。結果的には、初めて踊る学生にとって「道具取り舞」は難しかったようであるが、授業後のアンケートでは17名中16名が民俗芸能への関心が高まったと回答しており、また学生の感想からは中里七ツ舞を体験した新鮮な感動が読み取れる。しかし体験中心の実践では、この舞に対する中里の人々の心を伝えるには限界があった。したがって2005年には中里七ツ舞に魅せられた「ばっけ」の有志を対象に、大学内伝承の可能性を求めて伝統継承型第2次実践を計画した。

## (2) 中里七ツ舞の岩手大学への継承をめざした第2次伝統継承型実践

約60名の部員が所属している岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」は、これまで三本柳さんさ踊り、大森御神楽、沢目獅子踊り、ソーラン節、おてもやん、寺崎はね子踊りの6種類の芸能を継承している。4学部の学生が混在している「ばっけ」の有志を核とする第2次伝統継承型実践では、同時に練習することが難しいため、時間差を置いて参加できるように、昼休みを挟んだ前後30分という自由参加の変則的な時間枠を設定した。音楽科の学生・院生の有志も練習に参加して、お囃子やビデオ撮影に協力した。

第二次伝統継承型実践では、平成17年度の5月から7月までの3ヶ月の間に武田会長から8回の指導を得た。

全8回の練習内容は、次の通りである。

### ①第1回目（5月10日）

中里七ツ舞の由来と特徴および実物による道具の説明

### ②第2回目（5月27日）

練習用の約40センチメートルの棒を使った「道具取り舞」の練習

（\*会長に依頼していた岩手大学用の中里七ツ舞の道具を受け取った。）

### ③第3回目（6月3日）

各道具の回転のさせ方、ちらしのステップ、

「鳥居がかり」の練習

### ④第4回目（6月10日）

「鳥居がかり」、「全体3足」、「横跳ね」の練習

### ⑤第5回目（6月17日）

「横跳ね」と「組ちらし」の練習

（\*筆者が太鼓のリズム譜を作成した。）

### ⑥第6回目（7月1日）

「横跳ね」と「組ちらし」の練習、全体の通し練習

### ⑦第7回目（7月8日）

「鳥居がかり」、「組ちらし」の練習と全体の通し練習、役割毎の道具さばきの練習

（\*「ばっけ」の太鼓奏者が決定したため、ここからは島崎と一緒に太鼓演奏を行った。）

### ⑧第8回目（7月15日）

通し練習、衣装の着付け、お面の付け方、烏帽子や手っ甲の話など

この第2次実践の第1回目の練習時には、第1次実践に参加した「ばっけ」の有志の指導で、既に「道具取り舞」は練習済みであった。第2次実践では、常に交替で7・8名の「ばっけ」の有志が参加して、この時間以外にもサークルの練習日に自習練習を重ねていた。そして最終的には、中里七ツ舞の踊り手9名とお囃子（太鼓2名、鉦1名、笛2名）の5名の14名による中里七ツ舞グループが結成された。この中里七ツ舞グループは、2005年9月22日から25日の4日間、14名全員が自ら希望して、中里地区の中里交流会館にて合宿を行い、踊りやお囃子の練習に励んだ。本実践における武田と学生たちの努力の成果は、2005年10月22日の学園祭や11月6日の「ばっけ」の定期公演における中里七ツ舞の公演という形で結実した。すなわち初めて地元の保存会以外のメンバーによって中里七ツ舞の公開公演が実現したのである。

## (3) 中里七ツ舞の伝統継承型実践の難しさと成果

### ①全体の構成と唱歌のない太鼓の把握

中里七ツ舞を学ぶ上で最も困難な課題が、太鼓の伝承であった。舞い手である武田に太鼓の指導

や説明を求めることはできなかった、また中里七ツ舞の中心的な太鼓奏者は中・高校生であり、遠方の岩手大学に呼ぶのは不可能であった。加えて中里七ツ舞には太鼓の唱歌がなく、唱歌による通常の伝統的な手法での学習は成立しなかった。そのため太鼓のリズムや全体の構成および太鼓と踊りのすり合わせは困難を極めたが、以下の手順によって太鼓のリズムおよび全体の構成を把握することができた。

- ア) 平成15年のビデオ撮影時に小学生だった穂高淳(現在中1)の太鼓演奏を手がかりにする。
- イ) 穂高淳に太鼓のリズムを自分で考えているリズム言葉(創作唱歌)で自由に表してもらう。
- ウ) 中野七頭舞の元会長山本恒喜が作成した中里七ツ舞の唱歌を頼りに全体構成を把握する。  
(※なおこの唱歌は、武田会長以下、中里七ツ舞の保存会の人々には解読できない。)
- エ) 武田の踊りの唱歌(一部分のみ)と穂高淳の創作唱歌を基に、筆者が中里七ツ舞らしい唱歌を創る。

この結果、イ)の穂高の創作唱歌から「ダンタカ」「タツタカタ」という西洋音楽的唱歌と共に、中里七ツ舞らしい唱歌が把握できた。これと太鼓演奏のビデオ、ウ)の山本の唱歌の三者を突き合わせることで太鼓譜を作成し、踊りと合わせながら修正を加えた。最終的には合宿時に穂高の指導を受けて太鼓の唱歌と演奏の完成をみた。

直接指導を受けることが難しい今回の場合は、芸能の伝承で問題視される楽譜が有効であった。また楽譜化により今後は太鼓リズムの消滅が避けられると思われる。すでに筆者は全曲の採譜を終えているが、本稿では中里七ツ舞で最も重視されている「道具取り舞」の太鼓譜のみを(譜例1, 47頁)に提示する。

## ②本物の衣装や道具の調達と学生の意識

本格的な伝統の継承を志す場合、衣装、それぞれの役割の道具、おかめやひょっとこの面、中里七ツ舞用の太鼓、鉦など、全て本物を入手する必要がある。幸いにも道具や面や楽器は、地元の人々の協力を得て本物を揃えることができた。しかし

舞うと美しく裾が揺れる中里七ツ舞の袴以外の烏帽子や衣装は、学生自身が慣れない手つきで、一針一針合宿で保存会のメンバーから教わったとおりに作り上げた。学生たちが自分の衣装を自分で作るプロセスは、彼らの舞に対する情熱が強化されていくプロセスであり、また伝統の重さを認識させられるプロセスでもあった。

## ③非合理的な型の学び体験の良さ

夏期講習会を開くほど指導法が確立している中野七頭舞とは違って、初めて外部で指導する武田は、経験的に体に染みこんでいる中里七ツ舞の分析的な説明や太鼓と舞の合わせ方の説明は当然不慣れであった。その結果、合理的な学びというよりも、ゆるやかに時間が流れる練習過程となった。時折、練習中に混乱を来すこともあったが、会長、学生、筆者の三者で話し合いながら練習するプロセスは、中断した芸能を復活させた人々と近似の追体験ができたと思われる。時間をかけて模倣する学び体験自体が、民俗芸能の本来の学びの有り様といえよう。まさに「型の習得の過程は、まねることから入って、盗む認識力が育っていくプロセス」<sup>8)</sup>であり、「わざの習得において厳密な意味での順序性や段階性はない」<sup>9)</sup>ということを実感させられた。

以上の第2次伝承継承型実践で、中里七ツ舞は心からこの七ツ舞が好きな「ばっけ」の学生に継承された。(資料1)のアンケート結果によると、今後、「ばっけ」内伝承も期待できそうである。

## 3. 大学の授業における中里七ツ舞の素材発展型による音楽づくりの試み

### (1) 素材発展型の意味

素材発展型は、その芸能を特徴づけている要素(リズム、メロディー、楽器、舞いなど)を基に音楽を創る創造的な学びである。これについては、正当な伝統の追求だけに価値を求める立場からは認めにくいであろう。しかし時間的・予算的な制約のある学校教育においては、必ずしも本来の伝統継承型の学びではなく、一時的な体験学習で終

わる場合が少なくない。もっとも、一時的な体験学習にもそれなりの成果は期待できる。しかし、短時間の取り組みしかできない制約の中で地域の民俗芸能への憧れを喚起したいと願う時、また子どもの創造性を開くという教育的・音楽的なねらいの達成を志す時、短時間でも表現可能な素材発展型のアプローチに価値を認めることができる。

この素材発展型における発展とは、芸能そのものの発展を意味するものではなく、あくまでもそこに使われているリズムやメロディーなどの素材を発展させて新しい表現を創り出すことに価値をおくものである。自由な発想による即興的な表現や多様な創作活動は、平成元年の第6次学習指導要領に導入されて以来、次第に実践されるようになってきている。音楽づくりは、子どもが主役の学びによる「確かな学力」の育成との関連でも強調されている分野でもある<sup>10)</sup>。

次項では、素材発展型の取り組みとして、岩手大学と宮城教育大学の実践を例示する。

## (2) 岩手大学と宮城教育大学における素材発展型の実践とその成果

筆者の「合奏」の授業では、通常、学生が2単位時間(180分)を使って、経験創作で自由に2ないし3部構成でオリジナルの太鼓音楽づくりを行う。平成17年度は、中里七ツ舞による素材発展型の実践を試みた。民俗芸能による素材発展型に

は、さまざまなタイプの学習活動が考えられる。

例えば、代替楽器を使って可能な範囲で本物のお囃子に近づける活動、太鼓のリズムに自由に旋律やリズムを重ねる活動、特徴的なリズムをテーマにした Rond 形式の音楽づくり、特徴的なリズムを生かした自由な音楽づくりなど、多様な活動を展開することが可能である。

中里七ツ舞による素材発展型の実践では、(譜例2)に示す「道具取り舞」で特徴的なアと「ちらし」で特徴的なイの二つのリズムを3部構成(I-Ⅱ-Ⅲ)に含む太鼓音楽づくりの活動を行った。

岩手大学における太鼓音楽づくりでは、中里七ツ舞の二つリズムは、(資料2)の(1)のように表現された。特にBグループのサンバと中里七ツ舞のリズムを重ねる試みには意表をつかれた。

受講生の半数が音楽科以外の学生による宮城教育大学での集中講義(17年度)における同様の活動では、自由な太鼓音楽づくりの中でアとイのリズムは、(資料2)の(2)のように表現された。

紙幅の関係で授業後の学生のアンケート結果を掲載することはできないが、中里七ツ舞の生きたリズムを使ったことで、本物の中里七ツ舞への興味・関心の高揚、自由な表現の中に本物とつながる要素があることへの自信、どんな素材でもアイデアで表現を広げていけるという音楽表現活動の広がりへの認識、音楽づくりの活動そのものへの関心等を読み取ることができる。

### (譜例2)

#### 「道具取り舞」のリズム



#### 「ちらし」のリズム



中里七ツ舞による素材発展型の太鼓音楽づくりでは、本物のリズムやメロディーを全く違う形で再生させる創造的な活動によって、創造的な表現力を高めると同時に、本物の芸能への興味関心を喚起するという教育的な意味を発見することができた。

おわりに～学校教育における民俗芸能の取り上げ方に触れて

研究対象の中里七ツ舞に関して、大学における2種類の実践的研究について述べた。最後に本実践を振り返りながら、小・中学校で民俗芸能の取り上げる際に考慮すべきことについて触れておきたい。

#### ①民俗芸能に取り組む意味と教師の役割

本実践では学生自身が本気にならなければ中里七ツ舞を継承することはできなかった。子供の場合でも、学ぶ意味と対象の価値を自ら納得できた時に、初めて本当の学びが成立する。したがって民俗芸能を伝承する良さを自明の理とせず、子どもと共に芸能に取り組む意味や価値を考え、取り組みへの意欲を慎重に引き出すことが大切である。芸能と学び手の橋渡しとして教育的に重要な部分を担えるのは、保存会ではなく教師なのである。

#### ②伝承への影響の自覚

学校が地域の民俗芸能を取り上げる場合には、学校がその芸能の伝承システムに何らかの影響を及ぼすという自覚と覚悟が不可欠である。すなわち地域や保存会は学校内伝承を期待するであろうし、学校はその期待を受けとめざるを得なくなる可能性があるということである。明確なねらいや将来的な見通しをもたずに安易な気持ちで学校に導入することは避けなければならない。

#### ③学校内伝承の可能性の探求

本研究における第1次伝統継承型実践で明らかのように、伝統継承型による一時的な体験であっても、それなりの教育的効果を求めることができる。しかし地域の民俗芸能を大切に育み、宝のように尊重している伝承者の心を伝えるためには、

できれば学校内伝承の可能性を追求することがのぞましいと思われる。

#### ④素材発展型の学びに発見できる良さ

素材発展型の学びは、それ自体が伝承にかかわることはない。時間的な制約や学校で一部の地域の芸能を取り上げるのが難しい場合など、素材発展型の学びが生きてくる。柔軟かつ創造的な学びによって、対象芸能への興味や関心を喚起し、その後は個々の子どもの自由な意思に委ねてはどうだろうか。地域の民俗芸能に魅せられた子どもは、自ら進んで保存会の門をたたき可能性もあるであろう。

学校教育において民俗芸能を取り上げる際には、その目的や校内伝承の可能性などによって、それぞれの学校の実態や実践のねらいに適した学びの方法を吟味する必要がある。伝統継承型と素材発展型の二つの性格の違う学びには、それぞれの良さはもとより、両方で補完し合える良さもあることを付言しておきたい。

中里地区は少子化が進み、地域での伝承が今後どのように変化していくのかが予測できない状況である。本研究によって、岩手県の美しい中里七ツ舞が、地元の岩手大学で生き続ける可能性が生まれたことは何よりも大きな成果である。今後、末永く大学内伝承が続くことを祈念している。

## 島崎篤子採譜

- 153 -

## 【註および参考文献】

- 1) 北上・みちのく芸能祭り実行委員会『炎の伝承』（1999年，117～118頁）参照。
- 2) 岩泉町教育委員会『岩泉地方史』1980年，533頁参照。  
なおこの書によると，セツ舞の踊りの順序は，天孫降臨の際の道案内または神武天皇の東征の途に上る際の行路障害破棄と道案内をかたどったものとも伝えられている。  
同書534頁参照。
- 3) 中里セツ舞の由来等については，保存会会長の武田由起子に伺ったものである。
- 4) 筆者が入手した中里セツ舞の保存会名簿は，武田の手書きの名簿である。
- 5) 小本小学校では，複数の芸能を平等に扱うために，練習時間の配分に気を配っている。
- 6) 小本小学校「第27回七頭舞発表会」のプログラム中の中里セツ舞の紹介文参照。
- 7) 現在では美しい扇を使っているが，昔は無地の扇子しか使えなかったため扇子の呼称が残っている。
- 8) 斉藤孝『子どもに伝えたいく三つの力』日本放送出版協会，2001年，116頁。
- 9) 生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会，1987年，162頁。
- 10) 音楽づくりと「確かな学力」との関係については，高須一連載（『ONKAN』音楽鑑賞教育振興会2005年10月号6～9頁）に詳しい。

## 〔付記〕

本稿は、日本学術振興会科学研究補助金（基盤研究C）  
「岩手県の民俗芸能と学校教育～中野七頭舞と剣舞を中心として～」(課題番号：15530561) の助成による研究成果の一部である。

\* 以下の資料は再録から省略している。

- ・ 紀要 48～49 頁の（資料 1）は、本報告書の 106～197 頁と同じ。
- ・ 紀要 50 頁の（資料 2）は、本報告書 117 頁の（表 1）と 119 頁の（表 2）と同じ。

## おわりに

最後に多文化共生社会においては、自文化・異文化の二元論を越えた多元的な価値を見いだす必要がある。自国の身近な地域の芸能に良さを発見できる人は、他地域や他国・他民族の文化に対しても、自分たちと同じように人々が大切にしている豊かな文化があることを追体験できるであろう。

民俗芸能の研究についても、全体的な傾向を把握する調査研究とは性格の違う本研究によって、実際に地元の人々の中に入ってみなければ見えないものがあることを認識させられた。今回のフィールドワークによる研究は、34年前に国立音楽大学の学生であった筆者が卒業論文のために北海道民謡の江差追分とソーラン節に関するフィールドワークを行って以来の体験であった。

大学教官という立場によって協力が得られる場合もある一方、大学教官であるが故に警戒されるという貴重な経験もした。フィールドワークは人と人との関係が大きく左右する。さまざまな事情から新たな方向に計画を転換しながら、当初の研究対象であった中野七頭舞を見つめ続けた研究であった。またこの研究によって中里七ツ舞を守る人々との貴重な出会いも生まれた。そして民俗芸能研究は期間限定のものではなく、地元の人々との人間関係を築くことから本当の研究がスタートするという当たり前のことの大切さを再認識させられた。

さまざまな思いを胸に今回の研究に一区切りをつけるが、実際には岩手大学に中里七ツ舞が伝承され続けるであろうし、その火付け役である私の責任は思い。現在、岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」のメンバーのために袴の調達に奔走している。京都の生地屋に白地の布から中里七ツ舞のトレードマークである矢羽根柄の布を染めてもらい、それを中里地区のお年寄りに七ツ舞用の袴に仕立てていただく予定である。今は私が贈る袴を身につけて華麗に舞う学生の姿を見るのを楽しみにしている。

本研究では、中里七ツ舞に焦点を当てた研究を行ったが、剣舞系の「七つ物」についてのフィールドワークやあらゆる「七つ物」に関する研究をさらに深める必要性を感じており、この報告書で「七つ物」研究が完了したとはいえない。今回の研究成果を振り返りながら、今後の民俗芸能研究に役立てたいと決意を新たにしている。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金なしでは行えなかった。十分な成果を上げることができたとはいいいがたいが、本研究への援助に対して心から感謝申し上げる次第である。

2006年春